# 湯の奥遺跡
# 登安寺遺跡
# 湯　後遺跡
# 土井・砂遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書12

2001年3月

路公団中国支社
県教育委員会

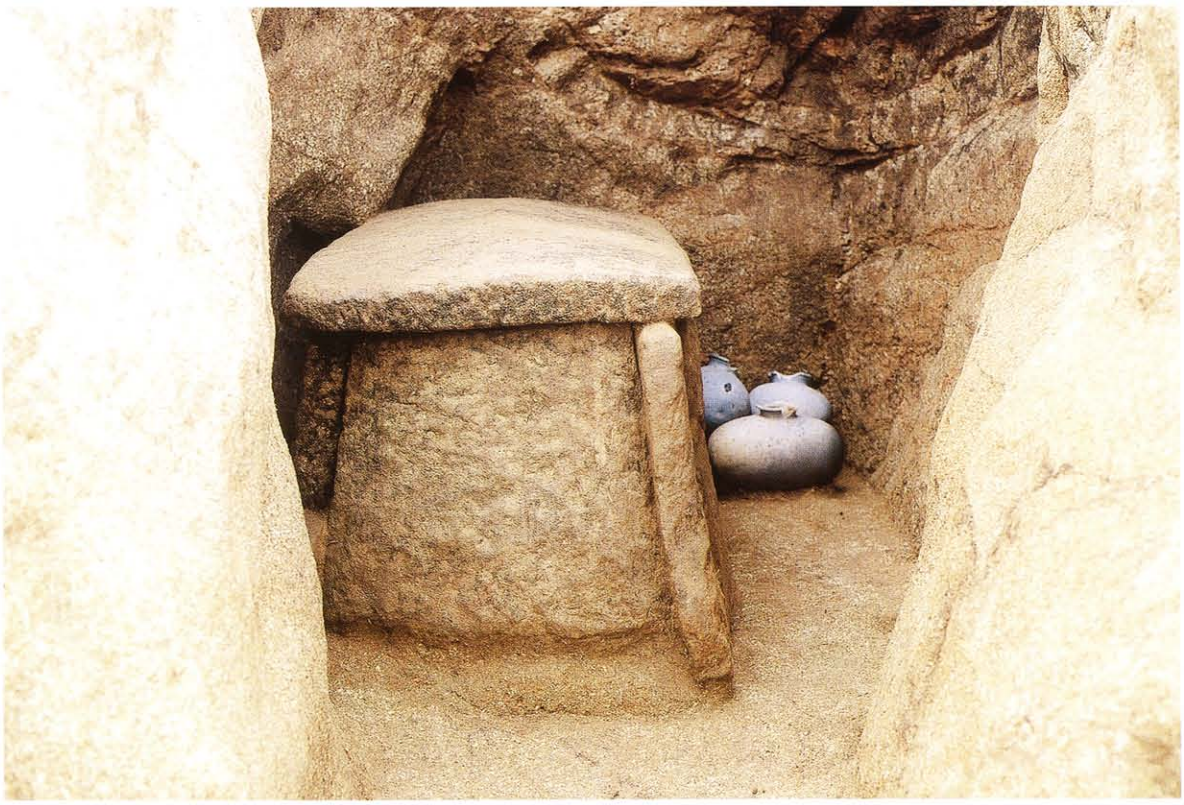
# 湯の奥遺跡
# 登安寺遺跡
# 湯　後遺跡
# 土井・砂遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書12

2001年3月

日本道路公団中国支社
島根県教育委員会

土井・砂遺跡　1号墳第2主体部出土破鏡



湯後遺跡　2号横穴墓家形石棺

# 序

中国横断自動車道尾道・松江線は、「国土開発幹線自動車道法」に基づいて、均衡ある国土の発展に寄与する高速道路の一環として計画が進められ、このうち三刀屋～松江間につきましては、平成９年３月から鋭意建設を進めてまいりました。その過程で路線敷地内にある遺跡について島根県教育委員会と協議し、記録保存のための発掘調査を進めてまいりました。本書は松江工事事務所担当区域である加茂町における湯後遺跡などの貴重な遺跡の発掘調査の記録であります。

この記録調査が、はるかな過去に生きた先祖の生活や文化様式を時代を超えて現代に蘇らせ、また、現代に生きる私どもの未来への道しるべとなるとともに今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は島根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる誠意を表すものであります。

平成13年３月

日本道路公団中国支社松江工事事務所

所　長　**村　田　一　廣**

# 序

島根県教育委員会では、日本道路公団中国支社の委託を受けて、平成８年度より中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内にある埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

本報告書は、平成11年度に調査した大原郡加茂町内にある湯の奥遺跡、登安寺遺跡、湯後遺跡、土井・砂遺跡の調査結果をまとめたものです。

加茂町は、銅鐸が多数発見されて話題となった加茂岩倉遺跡や、「景初三年」銘のある「三角縁神獣鏡」が出土した神原神社古墳があり、古代史上重要な遺跡のある所です。

今回の調査で確認された古墳時代前期の古墳群や同後期の横穴墓群は、この地の歴史をさぐる上で有力な手がかりを与えてくれるものです。

本報告書が地域の歴史を解明する一助となり、さらに埋蔵文化財への関心を高めるのに役立てば幸いです。

なお、発掘調査及び本書の刊行にご協力いただきました地元の皆様をはじめ日本道路公団中国支社、加茂町教育委員会ならびに関係の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 13 年３月

島　根　県　教　育　委　員　会

教育長　**山　﨑　悠　雄**

# 例　　言

1　本書は、日本道路公団中国支社から委託を受けて、島根県教育委員会が平成11年度に実施した中国横断自動車道尾道松江線の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2　本書に掲載した遺跡及び調査期間は次のとおりである。

| | | |
|---|---|---|
| 湯の奥遺跡 | 大原郡加茂町延野761－2 | （5月17日～6月30日） |
| 登安寺遺跡 | 大原郡加茂町延野761－3 | （5月17日～11月4日） |
| 湯後遺跡 | 大原郡加茂町延野762 | （5月31日～11月22日） |
| 土井・砂遺跡 | 大原郡加茂町神原1806外 | （4月15日～11月5日） |

3　調査組織は次のとおりである。

調査主体　　島根県教育委員会

（平成11年度）　現地調査

〔事務局〕宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）、秋山　実（総務課長）
松本岩雄（調査課長）、今岡　宏（総務係長）、渡邊紀子（主任主事）
川崎　崇（主事）

〔調査員〕田原淳史（埋蔵文化財調査センター主事）、仁木　聡（同主事）
安達和隆（同教諭兼文化財保護主事）、和田康宏（同教諭兼主事）
沙魚川聡子（臨時職員）、岡本育子（臨時職員）、池淵　茂（臨時職員）

（平成12年度）　報告書作成

〔事務局〕宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）、内田　融（総務課長）
松本岩雄（調査課長）、今岡　宏（総務係長）、渡邊紀子（主任主事）
川崎　崇（主事）

〔調査員〕田原淳史（埋蔵文化財調査センター主事）、仁木　聡（同主事）
和田康宏（同教諭兼文化財保護主事）、沙魚川聡子（臨時職員）

〔整理作業員〕
野中洋子、羽島ひとみ、西　郁子、土谷美鈴、木谷久美子、広野節子、河野真由美
吉田典子、田中路子

4　発掘調査（発掘作業員雇用、重機借上げ、発掘用具調達、測量発注）については、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会島根支部

〔現場担当〕布村幹夫（現場事務所長）、大野紀昭（技術員）

〔事務担当〕飯塚春美

5　発掘調査、並びに報告書作成にあたっては、次の方々から有益な指導・助言をいただいた。記して謝意を表したい。（敬称略）

渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）　　広瀬和雄（奈良女子大学教授）
蓮岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）　　森下章司（京都大学博物館）
大谷晃二（松江北高等学校教諭）　　岡村秀典（京都大学人文科学研究所）
井上晃孝（鳥取大学医学部教授）

6　本報告書に掲載した遺物の実測は主として調査員が行い、以下の者の協力を得た。

林　健亮、中川　寧、古藤浩夫、田中強志、西　郁子

7　本書の執筆，編集は、調査員が協議分担して行った。文責は目次に明示した。

8　本書に掲載した写真撮影は、調査員が行った。

9　土井・砂遺跡検出の古墳、横穴墓の名称を下記のように変更した。

〈古墳〉　２号墳→４号墳　３号墳→６号墳　４号墳→５号墳　５号墳→２号墳
６号墳→３号墳

〈横穴墓〉１号横穴墓→５号横穴墓　２号横穴墓→６号横穴墓　３号横穴墓→７号横穴墓
４号横穴墓→１号横穴墓　５号横穴墓→２号横穴墓　６号横穴墓→３号横穴墓
７号横穴墓→４号横穴墓

なお、旧遺構名は、島根県教育委員会2000年「埋蔵文化財調査年報Ⅷ」の収録である。

10　報告書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。

11　挿図中の方位は測量法による第Ⅲ座標系Ｘ軸の方向を指す。従って磁北より７°15′、真北より０°25′東の方向を示す。

12　挿図の縮尺は図中に明示した。

13　出土遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会（埋蔵文化財調査センター）で保管している。

# 本　文　目　次


第１章　調査に至る経緯……（和田）……　1

第２章　位置と環境……（和田）……　3

第３章　湯の奥遺跡……（田原）……　9
　第１節　調査の概要……　9
　第２節　調査の結果……　9
　第３節　まとめ……　13

第４章　登安寺遺跡……（田原）……　15
　第１節　調査の概要……　15
　第２節　調査の結果……　15

第５章　湯後遺跡……（田原）……　17
　第１節　遺跡の位置と概要……　17
　第２節　調査の経過と概要……　17
　第３節　調査の結果……　19
　第４節　まとめ……　86

第６章　土井・砂遺跡……（仁木）……　89
　第１節　遺跡の位置と概要……　89
　第２節　調査の経過と概要……　90
　第３節　調査の結果……　90
　第４節　小結……　156

第７章　加茂町湯後遺跡横穴群出土人骨……（井上）……　165

第８章　土井・砂古墳群の位置付け……（仁木）……　171

# 挿　図　目　次


第１図　尾道松江線（三刀屋～玉湯間）ルート上の遺跡　（Ｓ＝1/150,000）…… 2
第２図　加茂町の位置…… 5
第３図　周辺の遺跡　（Ｓ＝1/50,000）…… 7
第４図　湯の奥遺跡、登安寺遺跡、湯後遺跡位置図　（Ｓ＝1/2,000）…… 8

**湯の奥遺跡**

第５図　湯の奥遺跡遺構配置図　（Ｓ＝1/150）…… 9
第６図　加工段１実測図　（Ｓ＝1/40）…… 10
第７図　加工段２実測図　（Ｓ＝1/40）…… 11
第８図　土坑１～４実測図　（Ｓ＝1/40）…… 11
第９図　湯の奥遺跡出土遺物実測図　（Ｓ＝1/3、４・５はＳ＝1/1）…… 12

**登安寺遺跡**

第10図　登安寺遺跡位置図　（Ｓ＝1/2,000）…… 15
第11図　古墳地形測量図（調査後）　（Ｓ＝1/200）…… 16
第12図　古墳土層図　（Ｓ＝1/120）…… 16

**湯後遺跡**

第13図　湯後遺跡トレンチ位置図　（Ｓ＝1/800）…… 17
第14図　湯後遺跡調査後地形測量図・遺構配置図　（Ｓ＝1/400）…… 19
第15図　１号横穴墓実測図　（Ｓ＝1/60）…… 20
第16図　１号横穴墓出土銭貨拓影　（Ｓ＝1/1）…… 21
第17図　２号横穴墓実測図（１）　（Ｓ＝1/60）…… 22
第18図　２号横穴墓実測図（２）　（Ｓ＝1/60）…… 23
第19図　２号横穴墓石棺実測図（１）　（Ｓ＝1/30）…… 24
第20図　２号横穴墓石棺実測図（２）　（Ｓ＝1/30）…… 25
第21図　石棺各部名称図…… 26
第22図　２号横穴墓玄室内遺物・人骨状況図　（Ｓ＝1/30）…… 26
第23図　２号横穴墓実測図（３）遺物出土状況　（Ｓ＝1/60）…… 27、28
第24図　２号横穴墓出土遺物実測図（１）　（Ｓ＝1/3）…… 29
第25図　２号横穴墓出土遺物実測図（２）　（Ｓ＝1/3）…… 30
第26図　２号横穴墓出土遺物実測図（３）　（Ｓ＝1/3）…… 31
第27図　２号横穴墓出土遺物実測図（４）　（Ｓ＝1/3）…… 32
第28図　２号横穴墓出土遺物実測図（５）　（Ｓ＝1/4）…… 32
第29図　２号横穴墓出土遺物実測図（６）　（Ｓ＝1/3）…… 33
第30図　３号横穴墓実測図（１）土層　（Ｓ＝1/60）…… 34
第31図　３号横穴墓実測図（２）　（Ｓ＝1/60）…… 35
第32図　３号横穴墓実測図（３）遺物出土状況　（Ｓ＝1/30）…… 36

第33図　３号横穴墓出土遺物実測図（１）　（Ｓ＝1/3）…… 36
第34図　３号横穴墓出土遺物実測図（２）　（Ｓ＝1/3）…… 37
第35図　４号横穴墓実測図（１）　（Ｓ＝1/60）…… 38
第36図　４号横穴墓実測図（２）　（Ｓ＝1/60）…… 39
第37図　４号横穴墓石棺実測図　（Ｓ＝1/30）…… 41
第38図　４号横穴墓実測図（３）遺物出土状況　（Ｓ＝1/30）…… 42
第39図　４号横穴墓出土遺物実測図（１）　（Ｓ＝1/3、13はＳ＝1/6）…… 43
第40図　４号横穴墓出土遺物実測図（２）　（Ｓ＝1/3）…… 44
第41図　４号横穴墓出土遺物実測図（３）　（Ｓ＝1/3）…… 45
第42図　５号横穴墓実測図　（Ｓ＝1/60）…… 46
第43図　６号横穴墓実測図（１）　（Ｓ＝1/60）…… 47
第44図　６号横穴墓実測図（２）遺物出土状況　（Ｓ＝1/30）…… 48
第45図　６号横穴墓出土遺物実測図（１）　（Ｓ＝1/3）…… 49
第46図　６号横穴墓出土遺物実測図（２）　（Ｓ＝1/3）…… 50
第47図　６号横穴墓出土銭貨拓影　（Ｓ＝1/1）…… 51
第48図　７号横穴墓実測図　（Ｓ＝1/60）…… 53
第49図　７号横穴墓玄室内遺物出土状況実測図　（Ｓ＝1/30）…… 54
第50図　７号横穴墓出土遺物実測図　（Ｓ＝1/3）…… 55
第51図　８号横穴墓出土遺物実測図　（Ｓ＝1/3）…… 56
第52図　８号横穴墓実測図　（Ｓ＝1/60）…… 56
第53図　溝状遺構１出土遺物実測図　（Ｓ＝1/3）…… 62
第54図　溝状遺構１実測図　遺物出土状況　（Ｓ＝1/60）…… 63
第55図　溝状遺構２実測図　（Ｓ＝1/40）…… 64
第56図　溝状遺構２出土遺物実測図　（Ｓ＝1/3）…… 64
第57図　ＳＫ０４出土遺物実測図　（Ｓ＝1/3）…… 65
第58図　ＳＫ０５出土遺物実測図　（Ｓ＝1/3）…… 65
第59図　ＳＫ０６・ＳＫ０７出土遺物実測図　（Ｓ＝1/3、４はＳ＝2/3）…… 65
第60図　ＳＫ０１・ＳＫ０２・ＳＫ０４実測図　（Ｓ＝1/40）…… 66
第61図　ＳＫ０３・ＳＫ０５・ＳＫ０６・ＳＫ０７実測図　（Ｓ＝1/40）…… 67
第62図　湯後遺跡出土遺物実測図（１）土師器　（Ｓ＝1/3）…… 71
第63図　湯後遺跡出土遺物実測図（２）土師器　（Ｓ＝1/3）…… 72
第64図　湯後遺跡出土遺物実測図（３）土製支脚　（Ｓ＝1/3）…… 73
第65図　湯後遺跡出土遺物実測図（４）須恵器　（Ｓ＝1/3）…… 74
第66図　湯後遺跡出土遺物実測図（５）須恵器　（Ｓ＝1/3）…… 75
第67図　湯後遺跡出土遺物実測図（６）中世土器　（Ｓ＝1/3）…… 76
第68図　湯後遺跡出土遺物実測図（７）中世土器　（Ｓ＝1/3）…… 77
第69図　湯後遺跡出土遺物実測図（８）中世土器ほか　（Ｓ＝1/3）…… 78
第70図　湯後遺跡出土遺物実測図（９）鉄器、石器　（Ｓ＝1/3）…… 79

第71図　湯後遺跡出土銭貨拓影（S＝1/1）…… 80

**土井・砂遺跡**

第72図　土井・砂遺跡調査前測量図　（S＝1/2,000）…… 89
第73図　土井・砂遺跡遺構配置図　（S＝1/400）…… 91、92
第74図　1号墳周辺調査前測量図　（S＝1/200）…… 93
第75図　1・2・3号墳墳丘測量図　（S＝1/200）…… 94
第76図　1・2号墳墳丘土層図　（S＝1/60）…… 95
第77図　1号墳第1・2主体部実測図　（S＝1/40）…… 96
第78図　1号墳第2主体部破鏡出土状況図　（S＝1/20）…… 98
第79図　1号墳第2主体部直上土器出土状況図　（S＝1/16）…… 99
第80図　1号墳北裾周溝及び土器棺実測図　（S＝1/40）…… 100
第81図　1号墳第2主体部直上検出土器実測図　（S＝1/3）…… 101
第82図　1号墳北裾出土土器棺実測図　（S＝1/4）…… 101
第83図　2号墳主体部実測図　（S＝1/40）…… 102
第84図　1・2号墳出土遺物実測図　（S＝1/3）…… 104
第85図　3号墳墳丘土層図　（S＝1/60）…… 105
第86図　3号墳主体部実測図　（S＝1/40）…… 106
第87図　3号墳西側周溝内土器蓋石棺実測図　（S＝1/10）…… 107
第88図　3号墳西側周溝内土器蓋石棺直下検出土師器出土状況図　（S＝1/10）…… 108
第89図　3号墳西側周溝内土器蓋石棺（蓋）実測図　（S＝1/4）…… 109
第90図　4・5号墳調査前測量図　（S＝1/200）…… 110
第91図　4・5号墳墳丘測量図　（S＝1/200）…… 111
第92図　4・5号墳墳丘土層図（1）　（S＝1/60）…… 112
第93図　4・5号墳墳丘土層図（2）　（S＝1/60）…… 113
第94図　4号墳主体部実測図　（S＝1/40）…… 114
第95図　4号墳主体部直上遺物出土状況図　（S＝1/10、1/40）…… 115
第96図　5号墳第1主体部実測図　（S＝ 1/40）…… 117
第97図　5号墳第2主体部実測図　（S＝1/40）…… 118
第98図　5号墳北西裾土器棺出土状況図　（S＝1/8）…… 119
第99図　5号墳北西裾出土土器棺実測図　（S＝1/3）…… 119
第100図　3・4・5号墳出土遺物実測図　（S＝1/3）…… 120
第101図　6号墳測量図及び6号墳周溝内遺物出土状況図　（S＝1/200、1/20）…… 121
第102図　6号墳墳丘土層図　（S＝1/40）…… 122
第103図　6号墳主体部実測図　（S＝1/40）…… 123
第104図　6号墳西裾土器出土状況図　（S＝1/4）…… 124
第105図　6号墳出土遺物実測図　（S＝1/3）…… 125
第106図　1・4・5・6号墳主体部出土金属器実測図　（S＝1/2）…… 126
第107図　1号横穴墓実測図　（S＝1/60）…… 129

第108図　１号横穴墓遺物出土状況図　（Ｓ＝1/20）…… 130
第109図　１号横穴墓出土遺物実測図　（Ｓ＝1/3）…… 131
第110図　２号横穴墓実測図　（Ｓ＝1/60）…… 131
第111図　２号横穴墓遺物出土状況図　（Ｓ＝1/20）…… 132
第112図　２号横穴墓出土遺物実測図　（Ｓ＝1/3）…… 133
第113図　３号横穴墓実測図　（Ｓ＝1/60）…… 135
第114図　３号横穴墓遺物出土状況図　（Ｓ＝1/20）…… 136
第115図　４号横穴墓実測図　（Ｓ＝1/60）…… 137
第116図　４号横穴墓遺物出土状況図　（Ｓ＝1/20）…… 138
第117図　３・４号横穴墓出土遺物実測図　（Ｓ＝1/3）…… 139
第118図　５号横穴墓実測図　（Ｓ＝1/60）…… 140
第119図　５号横穴墓前庭土層図　（Ｓ＝1/60）…… 141
第120図　５号横穴墓遺物出土状況図　（Ｓ＝1/20）…… 142
第121図　６号横穴墓実測図　（Ｓ＝1/60）…… 143
第122図　６号横穴墓土層図　（Ｓ＝1/60）…… 144
第123図　５・６号横穴墓出土遺物実測図　（Ｓ＝1/3）…… 145
第124図　７号横穴墓実測図　（Ｓ＝1/60、1/10）…… 147
第125図　７号横穴墓土層図　（Ｓ＝1/60）…… 148
第126図　７号横穴墓遺物出土状況図　（Ｓ＝1/20）…… 149
第127図　７号横穴墓出土遺物実測図　（Ｓ＝1/3）…… 150
第128図　ＳＸ０１実測図　（Ｓ＝1/40）…… 151
第129図　その他の遺構及び遺構外出土遺物実測図　（Ｓ＝1/3）…… 153
第130図　表採遺物実測図（１）　（Ｓ＝1/3、2/3）…… 154
第131図　表採遺物実測図（２）　（Ｓ＝1/4、５は原寸）…… 155

# 表目次

第１表　周辺の遺跡一覧…… 6
第２表　湯の奥遺跡出土遺物観察表（１）…… 13
第３表　湯の奥遺跡出土遺物観察表（２）…… 13
第４表　１号横穴墓出土銭貨計測表…… 21
第５表　６号横穴墓出土銭貨計測表…… 52
第６表　２号横穴墓出土遺物観察表…… 57
第７表　３号横穴墓出土遺物観察表…… 57～59
第８表　４号横穴墓出土遺物観察表（１）…… 59、60
第９表　４号横穴墓出土遺物観察表（２）…… 60
第10表　６号横穴墓出土遺物観察表…… 60、61

第11表　７号横穴墓出土遺物観察表（１）…… 61
第12表　７号横穴墓出土遺物観察表（２）…… 61
第13表　８号横穴墓出土遺物観察表…… 61
第14表　ＳＤ０１出土遺物観察表…… 68
第15表　ＳＤ０２出土遺物観察表…… 68
第16表　ＳＫ０４出土遺物観察表…… 68
第17表　ＳＫ０５出土遺物観察表（１）…… 68
第18表　ＳＫ０５出土遺物観察表（２）…… 69
第19表　ＳＫ０６出土遺物観察表（１）…… 69
第20表　ＳＫ０６出土遺物観察表（２）…… 69
第21表　遺構に伴わない出土銭貨計測表…… 80
第22表　遺構に伴わない出土遺物観察表（１）…… 80、81
第23表　遺構に伴わない出土遺物観察表（２）…… 81
第24表　遺構に伴わない出土遺物観察表（３）…… 81～83
第25表　遺構に伴わない出土遺物観察表（４）…… 83～85
第26表　遺構に伴わない出土遺物観察表（５）…… 85
第27表　遺構に伴わない出土遺物観察表（６）…… 85
第28表　土井・砂古墳群主体部出土金属器計測表…… 158
第29表　土井・砂遺跡出土五輪塔計測表…… 158
第30表　土器観察表…… 159～164
第31表　土井・砂古墳群墳丘規模一覧表…… 176
第32表　土井・砂古墳群主体部計測表…… 177
付　表　加茂町湯後遺跡横穴群出土人骨一覧…… 169
付　表　湯後遺跡、土井・砂遺跡横穴墓一覧表…… 178

# 写真図版目次

**巻頭カラー写真図版**

図版上　土井・砂遺跡１号墳第２主体部出土破鏡
　　下　湯後遺跡２号横穴墓家形石棺

**巻末写真図版**

図版１　　湯後遺跡とその周辺（西上空から）
図版２上　遺跡遠景（東上空から）
　　下　遺跡遠景（南上空から）
図版３上　湯の奥遺跡 加工段１・２（東から）
　　下　湯の奥遺跡 加工段１（南西から）

図版４上　湯の奥遺跡 土坑１
　　中　湯の奥遺跡 土坑３
　　下　湯の奥遺跡 土坑４
図版５上　湯の奥遺跡 加工段２
　　中　湯の奥遺跡 土坑２
　　下　湯の奥遺跡 土坑２断面
図版６　　湯の奥遺跡　出土遺物
図版７上　登安寺遺跡 古墳（調査前）
　　中　登安寺遺跡 古墳溝
　　下　登安寺遺跡 古墳全景
図版８上　遺跡周辺の風景（土井・砂遺跡から）
　　下　遺跡周辺の風景（湯後遺跡から）
図版９上　湯後遺跡調査前の状況（北東から）
　　下　湯後遺跡全景（西上空から）
図版10上　湯後遺跡調査後（南西から）
　　下　湯後遺跡北側斜面調査後（南から）
図版11上　湯後遺跡東側斜面調査後（西から）
　　下　湯後遺跡東側斜面調査後（北から）
図版12上　湯後遺跡北側斜面横穴墓検出状況（南から）
　　下　１号横穴墓
図版13上　２号横穴墓　前庭部遺物出土状況
　　下　２号横穴墓　前庭部土層
図版14上　２号横穴墓　石棺遺物出土状況（１）
　　下　２号横穴墓　石棺遺物出土状況（２）
図版15上　２号横穴墓　石棺（１）
　　下　２号横穴墓　石棺（２）
図版16上　２号横穴墓　石棺内人骨出土状況（１）
　　下　２号横穴墓　石棺内人骨出土状況（２）
図版17上　２号横穴墓　家形石棺（内面）
　　下　２号横穴墓　家形石棺（床石）
図版18上　２号横穴墓　家形石棺（側石）
　　下　２号横穴墓　家形石棺（奥石）
図版19上　２号横穴墓　石棺搬出後
　　下　２号横穴墓　玄室
図版20上　２号横穴墓　石棺　天井石・前石・床石・側石
　　下　２号横穴墓　玄室から見た赤川と周辺
図版21上　３号横穴墓　前庭部
　　下　３号横穴墓（正面から）

図版22上　３号横穴墓　前庭部遺物出土状況（１）
　　下　３号横穴墓　前庭部遺物出土状況（２）
図版23上　４号横穴墓（正面から）
　　下　４号横穴墓　土層
図版24上　４号横穴墓　石棺・遺物出土状況（上から）
　　下　４号横穴墓　石棺・遺物出土状況（正面から）
図版25上　４号横穴墓　石棺（１）（上から）
　　下　４号横穴墓　石棺（２）（正面から）
図版26上　４号横穴墓　石棺内人骨出土状況
　　下　４号横穴墓　石棺（３）蓋石取りはずし後
図版27上　４号横穴墓　石棺（４）
　　下　４号横穴墓　石棺（５）玄門側小口石取りはずし後
図版28上　４号横穴墓　遺物出土状況
　　下　４号横穴墓　大刀出土状況
図版29上　５号横穴墓
　　下　６号横穴墓・ＳＫ０４
図版30上　６号横穴墓　遺物出土状況（１）
　　下　６号横穴墓　遺物出土状況（２）
図版31上　７号横穴墓
　　下　７号横穴墓　遺物出土状況
図版32上　８号横穴墓
　　下　８号横穴墓　近・現代墓
図版33上　溝状遺構１
　　下　溝状遺構１　遺物出土状況
図版34　２号横穴墓　出土遺物（１）
図版35　２号横穴墓　出土遺物（２）
図版36　３号横穴墓　出土遺物（１）
図版37　３号横穴墓　出土遺物（２）
図版38　４号横穴墓　出土遺物（１）
図版39　４号横穴墓　出土遺物（２）
図版40　６号横穴墓　出土遺物
図版41　７号横穴墓　出土遺物
図版42　ＳＫ０６・ＳＫ０７　出土遺物
図版43　遺構に伴わない遺物（土師器）
図版44　遺構に伴わない遺物（土製支脚）
図版45　遺構に伴わない遺物（須恵器）
図版46　遺構に伴わない遺物（須恵器）
図版47　遺構に伴わない遺物（須恵器）

図版48　遺構に伴わない遺物（中世土器）
図版49　遺構に伴わない遺物（中世土器）
図版50　遺構に伴わない遺物（その他）
図版51上　土井・砂遺跡遠景（南から）　赤川南岸の低丘陵に立地
下　土井・砂遺跡近景（東から）
図版52上　１・２・３号墳発掘調査前（西から）
下　３・４・５号墳発掘調査前（東から）
図版53上　１号墳主体部検出状況（西から）
下　１号墳西側周溝埋土堆積状況（北から）
図版54上　１号墳第１主体部墓壙底溝検出・第２主体部赤色顔料検出状況（南から）
下　１号墳第１主体部内破鏡検出状況（南から）
図版55上　１号墳主体部横断面（南から）
下　１号墳完掘状況（西から）
図版56上　１号墳北裾土器棺出土状況（北から）
下　２号墳主体部完掘状況（南から）
図版57上　３号墳西側周溝埋土堆積状況（北から）
下　３号墳東側周溝埋土堆積状況（北から）
図版58上　３号墳西側周溝内土器蓋石棺出土状況（北東から）
下　同、土器蓋石棺及び埋土取り上げ後（西から）
図版59上　３号墳西側周溝内土器蓋石棺直下土器出土状況（南から）
下　３号墳主体部横断土層堆積状況（北から）
図版60上　３号墳主体部完掘状況（北から）
下　１・２・３号墳完掘状況（西から）
図版61上　４・５号墳表土除去後（西から）
下　４・５号墳間周溝埋土堆積状況（北から）
図版62上　４号墳主体部横断土層堆積状況（南から）
下　４号墳主体部完掘状況（南から）
図版63上　５号墳第１主体部横断土層堆積状況（南から）
下　５号墳第１主体部完掘状況（南から）
図版64上　５号墳第２主体部横断土層堆積状況（南から）
下　５号墳第２主体部完掘状況（南から）
図版65上　５号墳完掘状況（西から）
下　５号墳北西裾土器棺出土状況（北から）
図版66上　６号墳主体部検出状況（南から）
下　６号墳主体部完掘状況（東から）
図版67上　６号墳西裾土器出土状況（西から）
下　ＳＸ０１検出状況（東から）

図版68上　１号横穴墓玄室入口（東から）
　　下　１号横穴墓完掘状況（東から）
図版69上　２号横穴墓玄室内遺物出土状況（東から）
　　下　２号横穴墓完掘状況（東から）
図版70上　３号横穴墓玄室入口（東から）
　　下　３号横穴墓完掘状況（東から）
図版71上　４号横穴墓玄室入口（東から）
　　下　１～４号横穴墓検出北東斜面（東から）
図版72上　５号横穴墓横断面土層堆積状況（西から）
　　下　５号横穴墓完掘及び玄室内遺物出土状況（西から）
図版73上　６号横穴墓横断面土層堆積及び前庭部遺物出土状況（西から）
　　下　６号横穴墓完掘状況（西から）
図版74上　７号横穴墓横断面土層堆積状況（西から）
　　下　７号横穴墓完掘及び玄室内遺物出土状況（西から）
図版75　　１・２号墳　出土遺物
図版76　　１～５号墳　出土遺物
図版77上　１号墳第２主体部直上出土土器
　　下　１号墳北裾出土土器棺
図版78　　３号墳西側周溝内土器蓋石棺
図版79　　３・４・５号墳　出土遺物
図版80上　図版78俯瞰写真
　　下　５号墳北西裾土器棺
図版81　　６号墳　出土遺物
図版82　　１号横穴墓および２号横穴墓　出土遺物
図版83　　２号横穴墓　出土遺物
図版84　　３号横穴墓　出土遺物
図版85　　５・６号横穴墓　出土遺物
図版86上　５・６号横穴墓　出土遺物
　　下　１～７号横穴墓　出土遺物
図版87上　７号横穴墓　出土遺物
　　下　土井・砂古墳群　出土金属器
図版88　　ヘラ記号および調整　俯瞰写真
図版89　　その他の遺構　出土遺物
図版90　　その他の遺構および遺構外　出土遺物
図版91上　その他の遺構および遺構外　出土遺物
　　下　表採遺物
図版92　　表採遺物　五輪塔（火輪）

# 第１章　調査に至る経緯

中国横断自動車道尾道・松江線の建設は、松江都市圏と山陽地方を結び、また中国自動車道と接続することによって、沿線地域の産業振興や観光開発を促進し、地域経済の発展と活性化を図ることを目的に計画された。

この計画にともなう埋蔵文化財の調査については、平成４年１月に建設省道路局長から日本道路公団に松江・三刀屋間について調査開始の指示があり、同年４月に島根県教育委員会に対して埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。しかし、調査体制が整わないため分布調査が実施できない状態が続いていた。

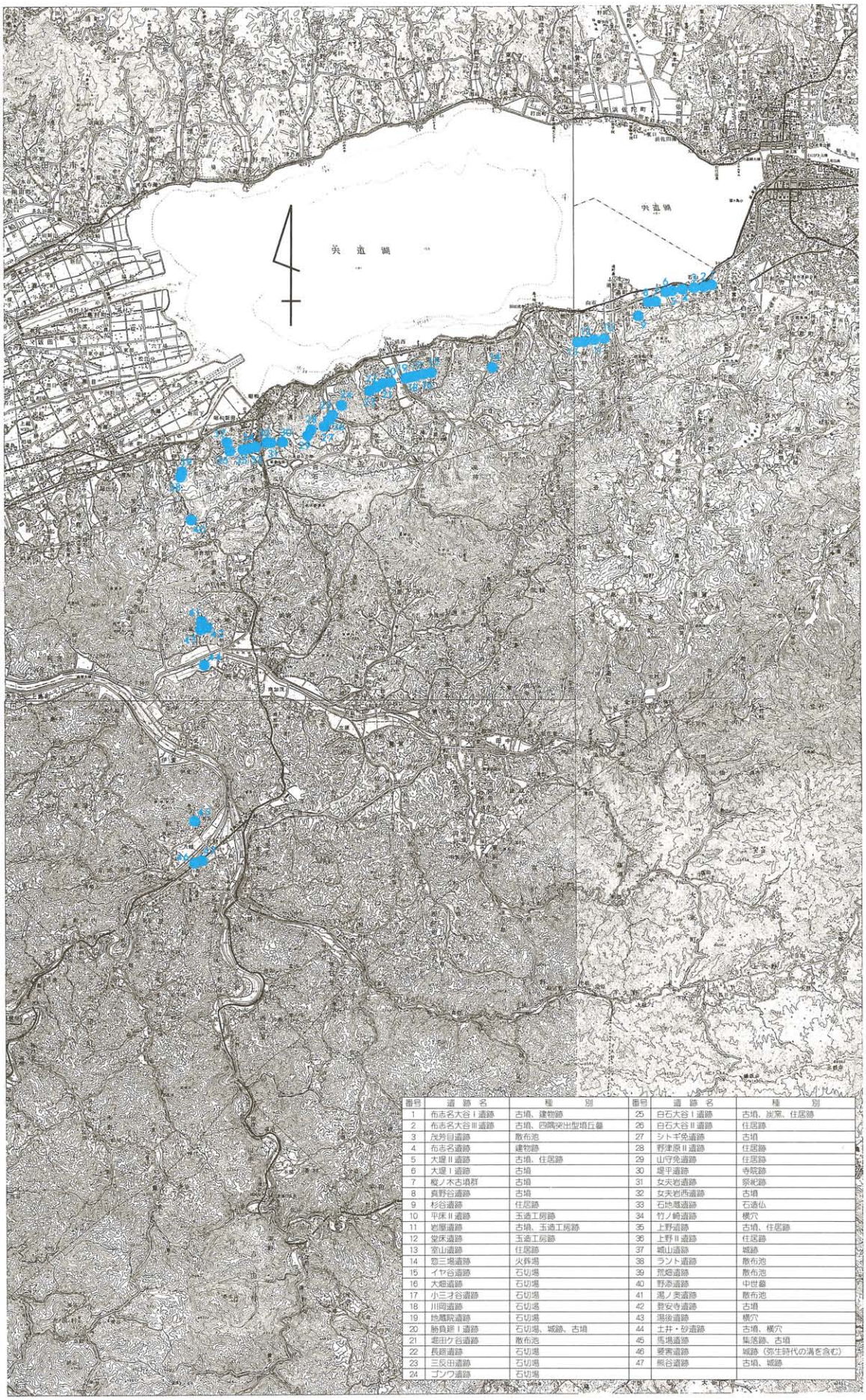
そうした中で平成５年９月には工事実施計画が認可された。このような状況を受け、県教委では平成６年３月に分布調査を実施した。これらの調査結果をもとに同年６月と８月に道路公団と調査の打合せを行った。この打合せで今回の分布調査が500m幅を対象に踏査しているので、ルート確定後再度調査対象地を把握する必要があることや、調査事業の円滑化を図るために用地買収、立木伐採等環境整備の充実を要望した。ルート確定後再分布調査を平成７年６月に完了し、結果を公団へ回答した。

その後、日本道路公団、県教育委員会、県土木部からなる埋蔵文化財調査連絡会が発足し、同年８月に第１回の連絡会を開催した。この会議では平成８年度から発掘調査に入ることを前提に用地買収や立木伐採、侵入路、排土排水処理等の調査環境整備について協議を行った。その後２回の連絡会で調整し、平成８年度から調査を実施することが決定した。

これを受けて、調査を円滑に進めるため、作業員の確保、発掘現場における物件の確保、測量、掘削工事などの調査補助業務を社団法人中国建設弘済会島根県支部に委託するため、日本道路公団、社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者による埋蔵文化財発掘調査覚書書を平成８年３月26日に交わし、本格的に調査に入ることになった。

これを受け、平成８年度から平成10年度にかけて玉湯町、宍道町内の54遺跡を調査し、平成11年度には宍道町内と、加茂町、三刀屋町内の15遺跡の調査を行った。

加茂町の遺跡については４月から調査に入った。高麻神社跡、槇ヶ廻、奥田の３遺跡は遺構等は検出されなかったので試掘までの調査に留めた。本調査は本書で報告する４遺跡で行い、11月に終了した。




| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 番号 | 遺跡名 | 種別 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 布志名大谷Ⅰ遺跡 | 古墳、建物跡 | 25 | 白石大谷Ⅰ遺跡 | 古墳、炭窯、住居跡 |
| 2 | 布志名大谷Ⅲ遺跡 | 古墳、四隅突出型墳丘墓 | 26 | 白石大谷Ⅱ遺跡 | 住居跡 |
| 3 | 茂芳目遺跡 | 散布池 | 27 | シトギ免遺跡 | 古墳 |
| 4 | 布志名遺跡 | 建物跡 | 28 | 野津原Ⅱ遺跡 | 住居跡 |
| 5 | 大堤Ⅱ遺跡 | 古墳、住居跡 | 29 | 山守免遺跡 | 住居跡 |
| 6 | 大堤Ⅰ遺跡 | 古墳 | 30 | 堤平遺跡 | 寺院跡 |
| 7 | 樫ノ木古墳群 | 古墳 | 31 | 女夫岩遺跡 | 祭祀跡 |
| 8 | 真野谷遺跡 | 古墳 | 32 | 女夫岩西遺跡 | 古墳 |
| 9 | 杉谷遺跡 | 住居跡 | 33 | 石地蔵遺跡 | 石造仏 |
| 10 | 平床Ⅱ遺跡 | 玉造工房跡 | 34 | 竹ノ崎遺跡 | 横穴 |
| 11 | 岩原遺跡 | 古墳、玉造工房跡 | 35 | 上野遺跡 | 古墳、住居跡 |
| 12 | 堂床遺跡 | 玉造工房跡 | 36 | 上野Ⅱ遺跡 | 住居跡 |
| 13 | 室山遺跡 | 住居跡 | 37 | 城山遺跡 | 城跡 |
| 14 | 窓三場遺跡 | 火葬場 | 38 | ラント遺跡 | 散布池 |
| 15 | イヤ谷遺跡 | 石切場 | 39 | 荒畑遺跡 | 散布池 |
| 16 | 大畑遺跡 | 石切場 | 40 | 野添遺跡 | 中世墓 |
| 17 | 小三才谷遺跡 | 石切場 | 41 | 湯ノ奥遺跡 | 散布池 |
| 18 | 川岡遺跡 | 石切場 | 42 | 教安寺遺跡 | 古墳 |
| 19 | 地蔵院遺跡 | 石切場 | 43 | 湯後遺跡 | 横穴 |
| 20 | 勝負細Ⅰ遺跡 | 石切場、城跡、古墳 | 44 | 土井・砂遺跡 | 古墳、横穴 |
| 21 | 堀田ケ谷遺跡 | 散布池 | 45 | 馬場遺跡 | 集落跡、古墳 |
| 22 | 長廻遺跡 | 石切場 | 46 | 要害遺跡 | 城跡（弥生時代の溝を含む） |
| 23 | 三反田遺跡 | 石切場 | 47 | 熊谷遺跡 | 古墳、城跡 |
| 24 | ゴンワ遺跡 | 石切場 | | | |

第１図　尾道松江線（三刀屋～玉湯間）ルート上の遺跡　（S＝1/150, 000）

# 第２章　位置と環境

湯の奥遺跡、登安寺遺跡、湯後遺跡、土井・砂遺跡は大原郡加茂町に所在する。加茂町は、宍道湖西南端から南におよそ７kmの所に位置し、北から時計回りに宍道町、大東町　木次町、三刀屋町、出雲市、斐川町に接している。町の大半は標高が100m前後の低丘陵で占められており、平野が認められるのは町内を西流する赤川周辺などわずかである。

今回報告する遺跡はこうした赤川周辺の平野を臨む低丘陵上に展開している。このうち、湯の奥遺跡・登安寺遺跡・湯後遺跡の３遺跡は赤川より北側の標高約40m～80mの丘陵上に、土井・砂遺跡は南側の標高約65m～75mの丘陵上に位置している。

以下、時代ごとに周辺の主要な遺跡についてふれておきたい。

### 旧石器・縄文時代の遺跡

加茂町内では旧石器・縄文時代の遺跡は確認されていない。周辺地域では、前期～後期にかけての縄文土器や石器が多量に出土した仁多町下鴨倉の下鴨倉遺跡や、縄文時代後期の倒立埋甕が発見された同町三成の暮地遺跡・三刀屋町多久和の宮田遺跡などが知られている[1]。

これらの遺跡は河岸段丘上を中心に確認されており、同様な地形が認められる加茂町においてもこの時代の遺跡が発見される可能性は十分にあると思われる。

### 弥生時代の遺跡

これまでのところ前期の遺跡は確認されていない。中期以降になると断片的ながらもいくつか知られている。

大字神原の神原正面北遺跡は[2]は、箱形石棺や箱形木棺を納めたと考えられる土壙が40基以上確認された遺跡である。まだ確認はされていないものの、既に周辺にある程度の規模の集落が形成されていたことが想定される。

また、大字岩倉の加茂岩倉遺跡[3]は、一度に39個もの銅鐸が出土した遺跡である。これまでの調査で他地域のものと同笵関係にあるものがあることが明らかとなっており、今後の研究が期待される。

周辺地域においてもいくつかの遺跡が知られており、中でも木次町平田の平田遺跡[4]は鍛冶炉を伴う大型の竪穴建物跡等を確認しており、この時期の鉄器生産を考えるうえで貴重な遺跡である。

### 古墳時代の遺跡

前期の遺跡としては神原神社古墳[5]や神原正面遺跡群[6]がある。

大字神原の神原神社古墳は、竪穴式石室をもつ方墳で、「景初三年」銘の三角縁神獣鏡を副葬するなど、前期を考えるうえで欠かすことのできない重要な古墳である。また、同じく大字神原の神原正面遺跡群からは、丘陵上に数基の方墳が確認されており、小豪族の墓が代々続いた場所と考えられている。両遺跡は距離的に近く、また時間的にも近いところに位置づけられることから、なんらかの関係があるものと考えられている。

周辺地域においても斐伊中山古墳群（木次町）[7]や松本古墳群（三刀屋町）[8]などが確認されている。なかでも三刀屋町給下の松本１号墳・３号墳は、ともに全長が50mをこえる大型の前方後方墳であり、相当の勢力が存在したことを示すものとして注目される。

こうした前期の様相とは対照的に、中期に特定される古墳は周辺地域をふくめてもほとんど確認されていない。

後期では、大字三代の三代古墳[9]が知られている。詳細は明らかでないが、横穴式石室をもつ円墳とされ、金銅装の環頭大刀等多数の副葬品が出土している。

後期後半から終末期にかけて赤川沿いの丘陵地から横穴墓群が多数発見されている。このうち玉尾谷尻横穴群は７穴以上あり、赤色塗彩の土師器の高坏や刃渡り5.5cmの幅広く短い刀子が出土している。また垣ノ内横穴群は数穴あったとされ、鍍金の残る耳環１対が残っていた。ほかにも穴ノ前横穴群、寺廻横穴群、星野横穴群、平田横穴群、叶廻横穴群等多数あるが、消滅したため詳しいことはわからない[10]。

### 奈良・平安時代の遺跡

この時代の遺跡はまだ少ない。出雲国風土記[11]によると、幹線官道の「山陰道」には支線として玉造から分かれて大原郡に入る道があったが、加茂は通っていなかったようである。しかし大原郡家から本町地区を縦断して宍道方面に向かう道や斐伊川岸方面から赤川上流に向かう道があったようで人々の往来も見られたであろう。

### 鎌倉・室町時代の遺跡

鎌倉時代に特定される遺跡は少ない。

室町時代には戦乱の時代を反映して城砦が多数確認されている。猪尾城跡・奥垣内砦跡[12]は宍道氏の居館と考えられ、南北に長い稜線上約150mにわたって縄張りがある。やはり宍道氏に由来する大谷山城跡は出城的なものと考えられ、裾にある旧路は山を越して斐川町へ至る。また尼子十旗に挙げられる高麻城跡[13]は山頂に主部を設け、支郭群や物見曲輪を配置し、支尾根には出城である小門谷砦を設けてある。さらに小丸子山城跡、尾添上砦跡、加茂中大首砦跡といった高麻城と関係する城跡、砦跡も確認されている[14]。また近松城跡[15]は立原氏の永禄年中の居城と伝えられ、頂部にほぼ正方形をなす主郭を置きこれを囲むように６郭と掘が巡らせてある。

そのほかに古墓・社寺跡も確認されていて、光明寺、神宮寺上、奥ノ上、才明寺、結宗寺等には五輪塔や宝篋印塔がある。また当町内の山野には散乱した五輪塔やその破片が見られるが、この地は陰陽の要路であり、尼子、毛利両氏の交戦圏であることから、記録にはない衝突があったためとも考えられている[16]。

### 近世の遺跡

近世の遺跡はあまり多くない。赤川周辺は近世になると何度も水害を受けている。洪水の最大の原因は斐伊川、赤川流域で砂鉄をとるためのいわゆる「鉄穴流し」が盛んに行われたため、砂流が大量に川へ流れ込むようになった事である。江戸中期には川の合流点付近において、斐伊川の河床が赤川の河床より約2.5mも高くなり、増水時には斐伊川の河水が天井川となっていた赤川へ逆流す

るようになった。そこで水害防止のためや新田開発のために川違いや土手が作られた。古川跡（赤川跡）は宝永３年(1706)からの新田開発の記録と一致している[17]。

［参考文献］


（１）『加茂町誌』　加茂町誌編纂会　昭和53年

（２）『加茂町の遺跡』－赤川以南－　加茂町教育委員会　平成２年

（３）「埋蔵文化財調査センター年報Ⅶ」平成10年度　島根県教育委員会　1999

「埋蔵文化財調査センター年報Ⅷ」平成11年度　島根県教育委員会　2000

『神々の源流－出雲：石見・隠岐の弥生文化－』　大阪府立弥生文化博物館　平成12年

（４）『平田遺跡第Ⅲ調査区』　島根県木次町教育委員会　2000

（５）『松本古墳群－斐伊川流域の前期古墳をめぐって－』　出雲考古学研究会　1991

（６）註（５）に同じ

（７）『斐伊中山古墳群－西支群－』　木次町教育委員会　1993

（８）註（５）に同じ

（９）註（１）、（２）に同じ

(10) 註（２）に同じ

(11) 加藤義成　『修訂出雲国風土記参究』（改訂四版）　平成４年

(12) 『加茂町の遺跡－赤川以北－』　加茂町教育委員会　平成３年

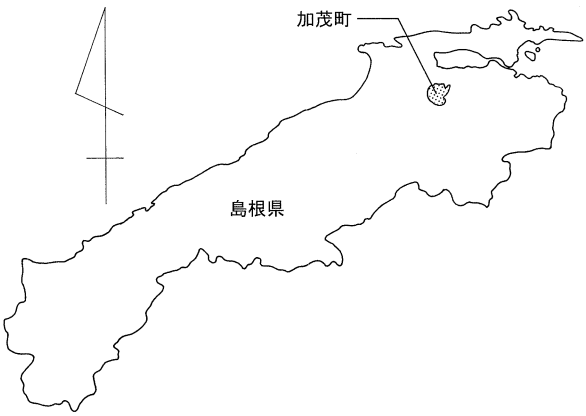
(13) 註（２）に同じ

(14) 註（12）に同じ

(15) 註（１）に同じ

(16) 註（１）に同じ

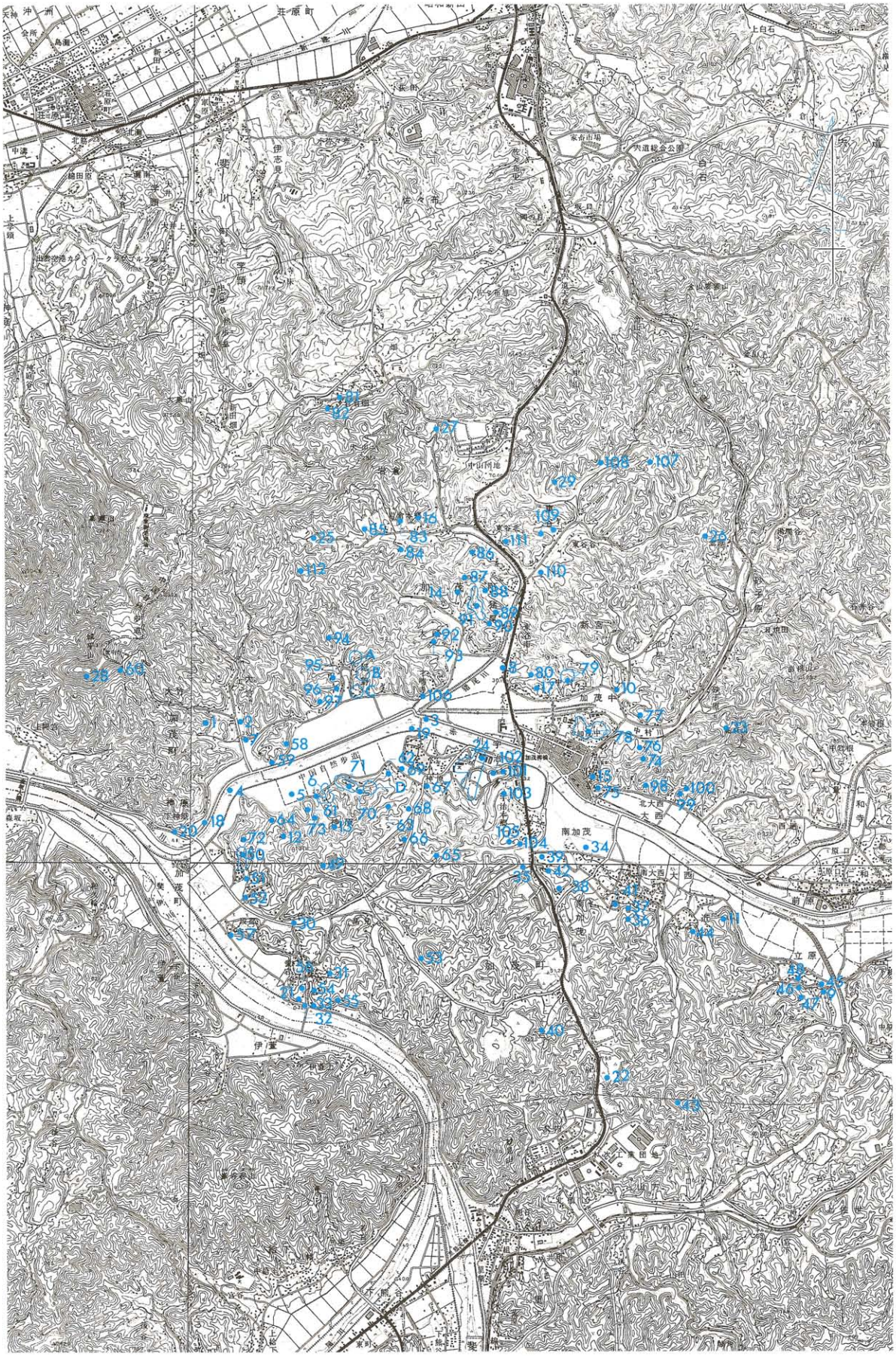
(17) 註（１）に同じ

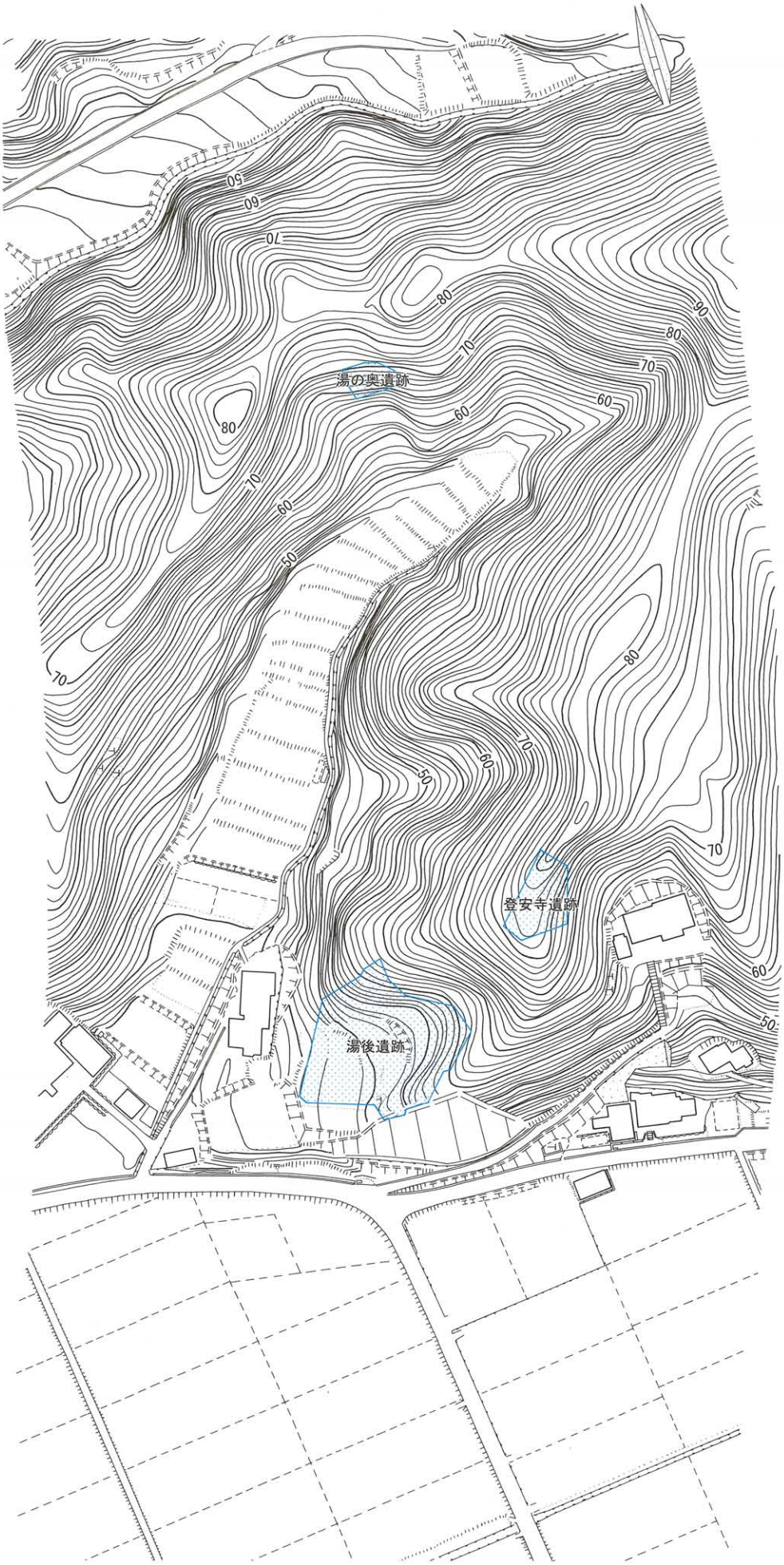

第２図　加茂町の位置

| 地図番号 | 遺　跡　名 | 種　別 | 地図番号 | 遺　跡　名 | 種　別 | 地図番号 | 遺　跡　名 | 種　別 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A | 湯の奥遺跡 | 建物跡 | 34 | 南加茂瓦窯跡 | 窯　跡 | 74 | 尾添上砦跡 | 城　跡 |
| B | 登安寺遺跡 | 古　墳 | 35 | 高畦の五輪塔 | 古　墳 | 75 | 大首砦跡 | 城　跡 |
| C | 湯後遺跡 | 横　穴 | 36 | 会下居館跡 | 居館跡 | 76 | 尾添の宝篋印塔 | 古　墓 |
| D | 土井・砂遺跡 | 横穴、古墳 | 37 | 上笹古墳 | 古　墳 | 77 | 中村古城の五輪塔 | 古　墓 |
| 1 | 玉尾谷尻横穴群 | 横　穴 | 38 | 三本松古墳群 | 古　墳 | 78 | 宝蔵寺跡 | 寺院跡 |
| 2 | 猫里古墳 | 古　墳 | 39 | 小谷砦跡 | 城　跡 | 79 | 蔵福寺跡 | 寺院跡 |
| 3 | 神原神社古墳 | 古　墳 | 40 | 小宮谷製鉄跡 | 製鉄遺跡 | 80 | 金丸五輪塔 | 古　墓 |
| 4 | 菅代横穴群 | 横　穴 | 41 | 下笹遺跡 | 散布地 | 81 | 経塚 | 経　塚 |
| 5 | 土器廻横穴群 | 横　穴 | 42 | 南加茂宮下遺跡 | 散布地 | 82 | 結宗寺の宝篋印塔 | 古　墓 |
| 6 | 川子谷古墳群 | 古　墳 | 43 | 八ツ畦古戦場跡 | 古戦場 | 83 | 浄久寺跡 | 寺院跡 |
| 7 | 穴の前横穴群 | 横　穴 | 44 | 宮山砦跡 | 城　跡 | 84 | 家守神社 | 神社跡 |
| 8 | 星野横穴群 | 横　穴 | 45 | 荒神廻古墳群 | 古　墳 | 85 | 坊ノ奥経塚 | 経　塚 |
| 9 | 平山横穴群 | 横　穴 | 46 | 寺ノ上砦跡 | 城　跡 | 86 | 猪尾社跡 | 神社跡 |
| 10 | 小丸子山城跡 | 城　跡 | 47 | 伝立原館跡 | 居館跡 | 87 | 奥垣内砦跡 | 城　跡 |
| 11 | 近松城跡 | 城　跡 | 48 | 寺ノ上古墓 | 古　墳 | 88 | 三室鍛冶跡 | 製鉄遺跡 |
| 12 | 大茶臼山城跡 | 城　跡 | 49 | 夕目谷古墳 | 古　墳 | 89 | 三室横穴 | 横　穴 |
| 13 | 後ノ廻経塚 | 経　塚 | 50 | 岡上砦跡 | 城　跡 | 90 | 蔵本古墓群 | 古　墓 |
| 14 | 板屋横穴群 | 横　穴 | 51 | 大上横古墓 | 古　墳 | 91 | 猪尾城跡 | 城　跡 |
| 15 | 立石横穴群 | 横　穴 | 52 | 高畦古墳 | 古　墳 | 92 | 寺廻寺院跡 | 寺院跡 |
| 16 | 平田横穴群 | 横　穴 | 53 | 高麻神社跡 | 神社跡 | 93 | 寺廻横穴群 | 横　穴 |
| 17 | 叶迫横穴群 | 横　穴 | 54 | 長谷寺古墓 | 古　墓 | 94 | 鉄クソ鈩跡 | 製鉄遺跡 |
| 18 | 神原五輪塔遺跡 | 古　墳 | 55 | 長谷寺上へ砦跡 | 城　跡 | 95 | 布須社和鏡出土地 | 祭祀遺跡 |
| 19 | 宿米塚古墳 | 古　墳 | 56 | 矢ノ尻古墓 | 古　墓 | 96 | 奥ノ上の五輪塔 | 古　墓 |
| 20 | 草枕古墳 | 古　墳 | 57 | 本岡田墓地の石塔 | 古　墓 | 97 | 神宮寺上の五輪塔 | 古　墓 |
| 21 | 三代古墳 | 古　墳 | 58 | 大田山崎寺院跡 | 寺院跡 | 98 | 伝乗光寺跡 | 寺院跡 |
| 22 | 清水ケ谷遺跡 | 古道跡 | 59 | 垣ノ内横穴群 | 横　穴 | 99 | 小門谷の五輪塔 | 古　墓 |
| 23 | 高麻山城跡 | 城　跡 | 60 | 光明寺の古墓 | 古　墓 | 100 | 小門谷砦跡 | 城　跡 |
| 24 | 神原正面遺跡群 | 古墳他 | 61 | 土器廻古墳 | 古　墓 | 101 | 亀山石積跡 | 経　塚 |
| 24-1 | 正面南古墳群 | 古　墳 | 62 | 深田和鏡出土地 | 古　墓 | 102 | 神原正面砦跡 | 城　跡 |
| 24-2 | 正面北遺跡 | 墳墓他 | 63 | 相保廻鏡出土地 | 古　墓 | 103 | 宇治寺ノ上古墳群 | 古　墓 |
| 24-3 | 南正面古墳群 | 古　墳 | 64 | 沢平横穴群 | 横　穴 | 104 | 焼荒神の五輪塔 | 古　墓 |
| 25 | 岩倉大谷山城跡 | 城　跡 | 65 | 高城城跡 | 城　跡 | 105 | 焼荒神古墳群 | 古　墓 |
| 26 | 大蛇子遺跡 | 祭祀遺跡 | 66 | 乗越遺跡 | 散布地 | 106 | 才明寺の五輪塔 | 古　墓 |
| 27 | 伊志見谷城跡 | 城　跡 | 67 | 桜古墓 | 古　墓 | 107 | 蛇喰谷砦跡 | 城　跡 |
| 28 | 城平山城跡 | 城　跡 | 68 | 竹之内古墓 | 古　墓 | 108 | 滝谷尻鈩跡 | 製鉄遺跡 |
| 29 | 東谷谷横穴 | 横　穴 | 69 | 砂遺跡 | 散布地 | 109 | 正福寺の古石塔 | 古　墓 |
| 30 | 楓垣窯跡 | 窯　跡 | 70 | 出古墓 | 古　墓 | 110 | 鍋谷の五輪塔 | 古　墓 |
| 31 | 杉原窯跡 | 窯　跡 | 71 | 土居城跡 | 城　跡 | 111 | 松賀和鏡出土地 | 古　墓 |
| 32 | 御代窯跡 | 窯　跡 | 72 | 下神原西岡古墳群 | 古　墳 | 112 | 加茂岩倉遺跡 | 銅鐸埋納地 |
| 33 | 御代赤瓦組合窯跡 | 窯　跡 | 73 | 松ノ木遺跡 | 散布地 | | | |

第１表　周辺の遺跡一覧




第３図　周辺の遺跡（Ｓ＝1/50, 000）




第４図　湯の奥遺跡、登安寺遺跡、湯後遺跡位置図　（S＝1/2, 000）

# 第３章　湯の奥遺跡

## 第１節　調査の概要

湯の奥遺跡は加茂町大字延野に所在する。遺跡は、赤川の北側にある低丘陵に向かってはいる細長い谷に面した緩斜面に展開している。標高は約66～84mで、そこからは南にわずかに赤川を見通すことができる。

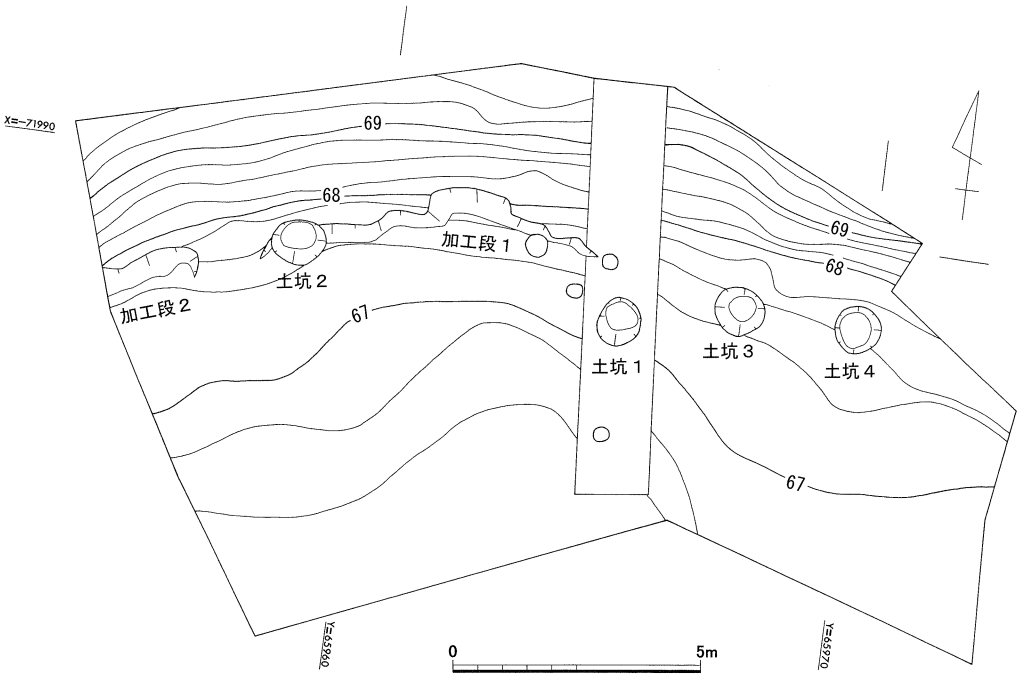
本遺跡は平成６年度に行われた分布調査の際に確認されたもので、当初は古墳の存在が想定されていた。

現地調査は平成11年４月28日より開始した。まず、古墳が存在する可能性の考えられた尾根頂上部分の地形測量を行い、その後その部分と南北両斜面にトレンチを設定して遺構等の有無を確認した。その結果、尾根部分・北側斜面では数点の土器片以外に遺物や遺構は確認されなかったため、調査対象地から除外した。しかし、南側斜面からは遺物のほか遺構も認められたことから、この区域の本調査を行うこととなった。この付近は南側が既に重機道が造られており現況をとどめていなかったがわずかながら平坦な面が残っている状況であった。

本調査は諸条件を整え５月28日より開始した。調査はすべて人力で行い、加工段や土坑などを検出して６月25日に調査を終了した。

## 第２節　調査の結果

調査の結果、加工段２基、土坑４基のほかピット等を確認した。これらはすべて、斜面が平坦面となる付近に位置している。以下、遺構ごとに報告する。



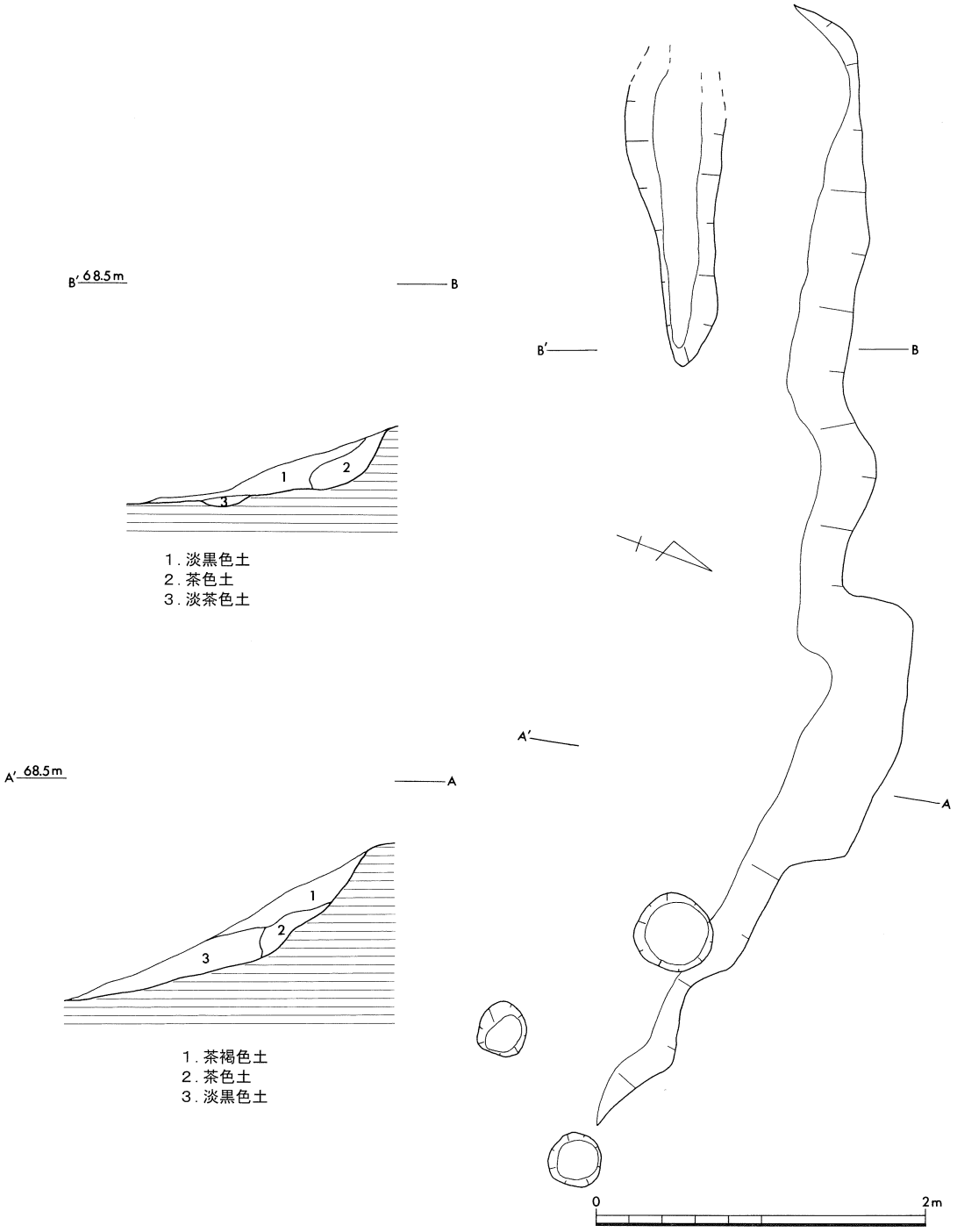

第５図　湯の奥遺跡遺構配置図　（Ｓ＝1/150）

### 加工段１（第６図）

調査区のほぼ中央、標高68m付近に位置している。長さを約７m、幅は広い所で約0.5mを掘り込むことによって平坦面を造りだしている。掘り込みは浅いもので、中央部より東では北側に入り込んでおりやや不整形な形をしている。また西側では浅い溝状の掘り込みも認められた。

建物跡の存在を考えピットの抽出に努めたが、浅いものがわずかに認められる程度であり、それを確認するには至らなかった。

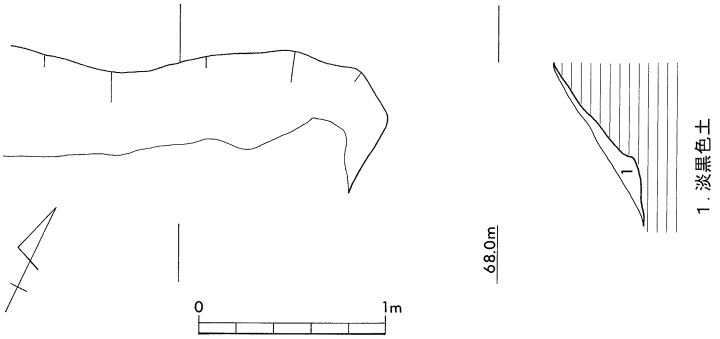
遺物は土師器や須恵器などが出土したが、いずれも小片で図化できるものはなかった。




第６図　加工段１実測図（S＝１／40）

**加工段２（第７図）**

加工段１のすぐ西側に位置しており、ほぼ同じレベルにある。西側は調査区域外に伸びており全容は不明である。検出した部分の長さは２ｍ、幅は東に行くほど広くなっており調査区との境付近では0.6ｍを測る。




第７図　加工段２実測図（Ｓ＝１／40）

遺物はわずかに出土しているがいずれも小片であった。このうち図化が可能であったのは、第９図の１のみである。ただし覆土中からの出土であり、遺構に直接伴うものかどうかは不明である。

１は甕の口縁部である。口縁端部をつまみ上げ、外面には波状紋を２段にわたって施している。

**土坑１（第８図）**

加工段１の東端から南へ約１ｍの所にある。平面形は円形で、規模は100cm×80cm、深さ60cmを測る。

遺物は土器の小片がわずかに出土したが、図化はできなかった。

**土坑２（第８図）**

加工段１の西端に重なっている。平面形は円形で、規模は約110cm×90cm、深さは25cmを測る。床面はわずかに赤変し、その上に炭を多く含んだ土が堆積していた。

遺物は土師器の小片が出土したが図化はできなかった。

**土坑３（第８図）**

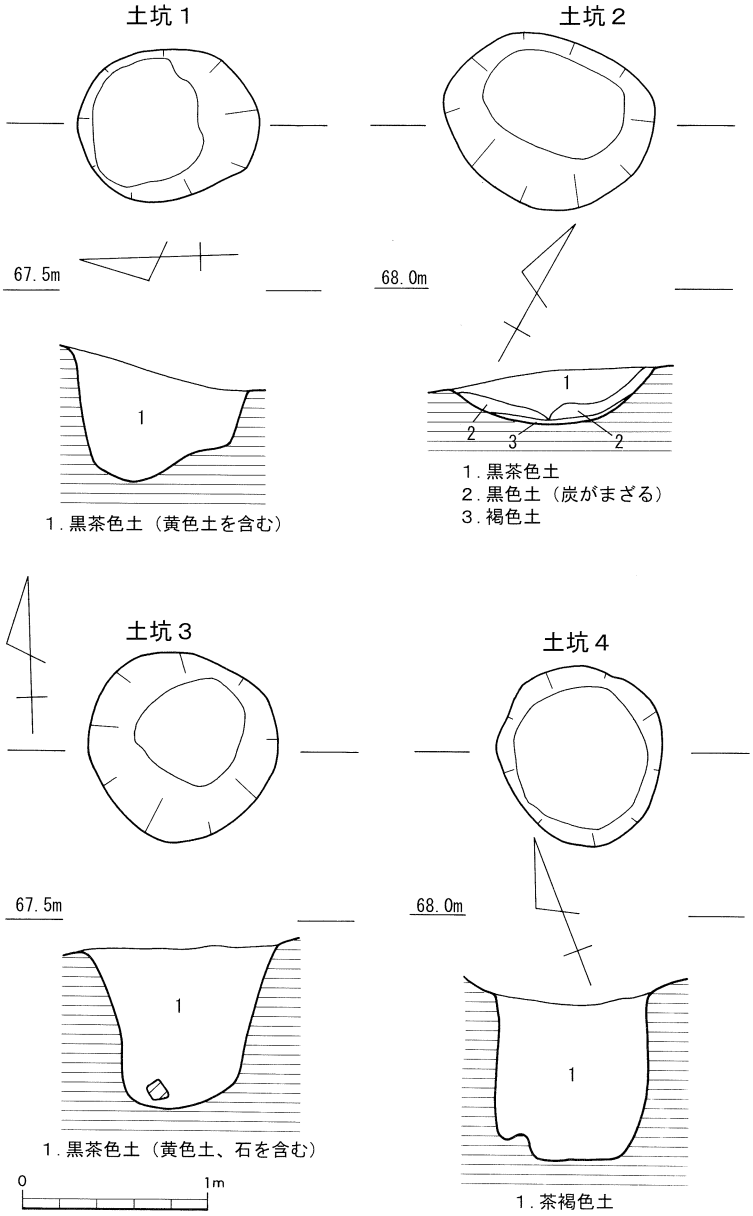
土坑１の約1.5ｍ東に存在している。平面形は円形で、規模はほぼ100cm×100cm、深さ80cmを測る。

遺物は出土していない。

**土坑４（第８図）**

土坑３の1.5ｍ東に存在している。大きさは100cm×80cm、深さ90cmを測る。

遺物は出土していない。

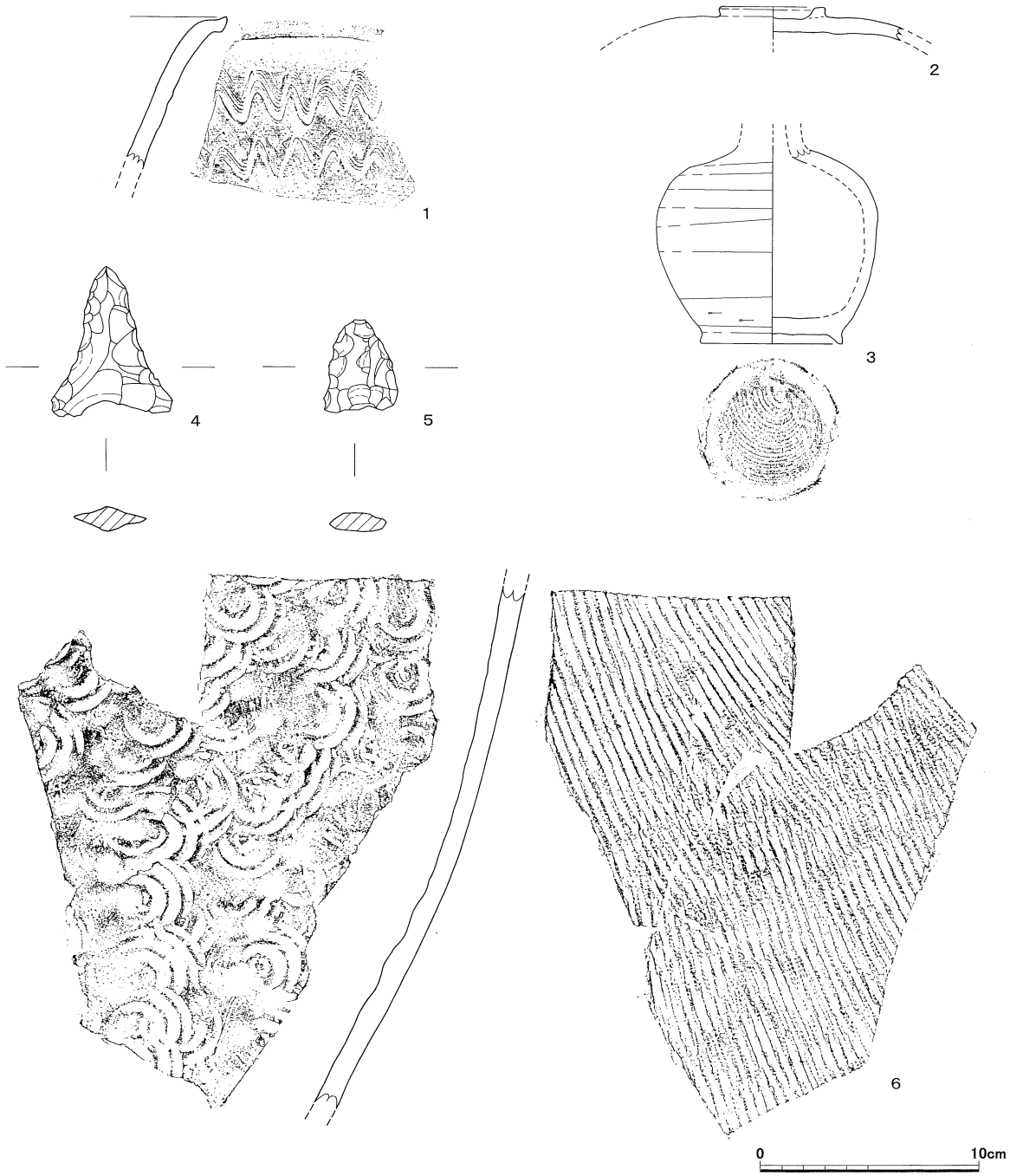



第８図　土坑１～４実測図（Ｓ＝１／40）

### 遺構に伴わない遺物（第９図、第２・３表）

遺構に伴わない遺物としては須恵器や土師器のほか石器も出土している。土器はいずれも小片で図化できたのは、第９図に掲載したものである。詳細については第２・３表に記載した。

これらの内６は、加工段２の覆土中より出土した１の甕口縁と同一個体の甕の胴部と考えられるものである。




第９図　湯の奥遺跡出土遺物実測図　（S＝1/3、4・5はS＝1／1）

第２表　湯の奥遺跡出土遺物観察表（１）（第９図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種　別 | 法量（cm） | 手法の特徴 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 6 | 加工段 | 甕（須恵器） | | 外面：回転ナデ、波状紋<br>内面：回転ナデ、ナデ | １㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 外面：青灰色<br>内面：淡灰色 | 外面に２段のヘラ書き波状紋 |
| 2 | 6 | 包含層 | 坏蓋（須恵器） | | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | １㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 輪状つまみ |
| 3 | 6 | 包含層 | 壺（須恵器） | 底径6.6cm | 外面：回転ヘラケズリ、回転ナデ、回転糸切リナデ | １～の砂粒を含む２㎜程度 | 良好 | 淡青灰色 | 回転糸切リ |
| 6 | 6 | 包含層 | 甕（須恵器） | | 外面：タタキ<br>内面：当て具痕 | １～３㎜程度の砂粒を含 | 良好 | 淡青灰色 | |

第３表　湯の奥遺跡出土遺物観察表（２）（第９図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種別 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 重量(g) | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 6 | 包含層 | 石鏃 | 2.2 | 1.8 | 0.83 | 安山岩　凹基式 |
| 5 | 6 | 包含層 | 石鏃 | 1.4 | 1.1 | 0.41 | 黒曜石　平基式？ |

## 第３節　まとめ

今回の調査では加工段２基と土坑４基を確認した。以下若干これらに触れてまとめとしたい。

土坑は全部で４基を確認した。それらのうち土坑１、３、４はほぼ等間隔で並んでいるほか、規模や覆土などに共通性が認められることから、ほぼ同様の性格をもった遺構と考えられる。遺物などが出土していないため断言できないが近世の墓である可能性が高いと思われる。

また土坑２はこれらとは様相を異にしている。床面が焼けていることと覆土中に炭化物が含まれていることから考えて、小炭窯や炉などの可能性が考えられるが明らかでない。これも時期などが不明であるが、切りあいから判断して加工段に伴うものではないと思われる。

加工段は２基とも浅く掘り込んだ程度で、平面形が不整形なのものである。建物が伴っていたものと想定されるが、検出はできなかった。時期については、直接遺構に伴う遺物が少なくはっきりとしないが、周辺から出土する土器の多くが奈良～平安時代にかけてのものと考えられる(註1)ことから、ほぼ同時期のものである可能性が高い。この時期の加工段は、平面形が不整形であったり床面と壁面の境が不明瞭なものが見られるようであり(註2)、今回検出したものもそうした例に近いと言えよう。

また加工段の１つは、調査区の外側に認められる平坦面に向かって伸びており、この時期の遺構がさらに存在することも想定される。周辺では同時期の遺構はほとんど知られていないことから、この時代の地域を考える上での一つの手がかりになるものと思われる。

註１　土器の年代については、足立克巳、丹羽野裕『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会　1984、『宍道町埋蔵文化財調査報告書３小松古窯跡群範囲確認調査報告書』宍道町教育委員会　1983を参考にしている。

註２　椿　真治、林　健亮『渋山池遺跡・原ノ前遺跡』島根県教育委員会　1997

# 第４章　登安寺遺跡

## 第１節　調査の概要

登安寺遺跡は赤川の北側にある丘陵上に位置する。標高は約80mを測り、遺跡からは加茂町内を西流する赤川とそれに沿った平野を一望することができる。

調査は平成11年４月28日より開始した。まず地形測量よりおこない、続けてトレンチ調査もおこなった。その結果古墳が一基あるものと判断されたため、土層観察用のベルトを残しながら調査を進めていった。調査はすべて人力でおこない、何度かの長期の中断をはさみながら、11月２日にすべての調査を終了した。

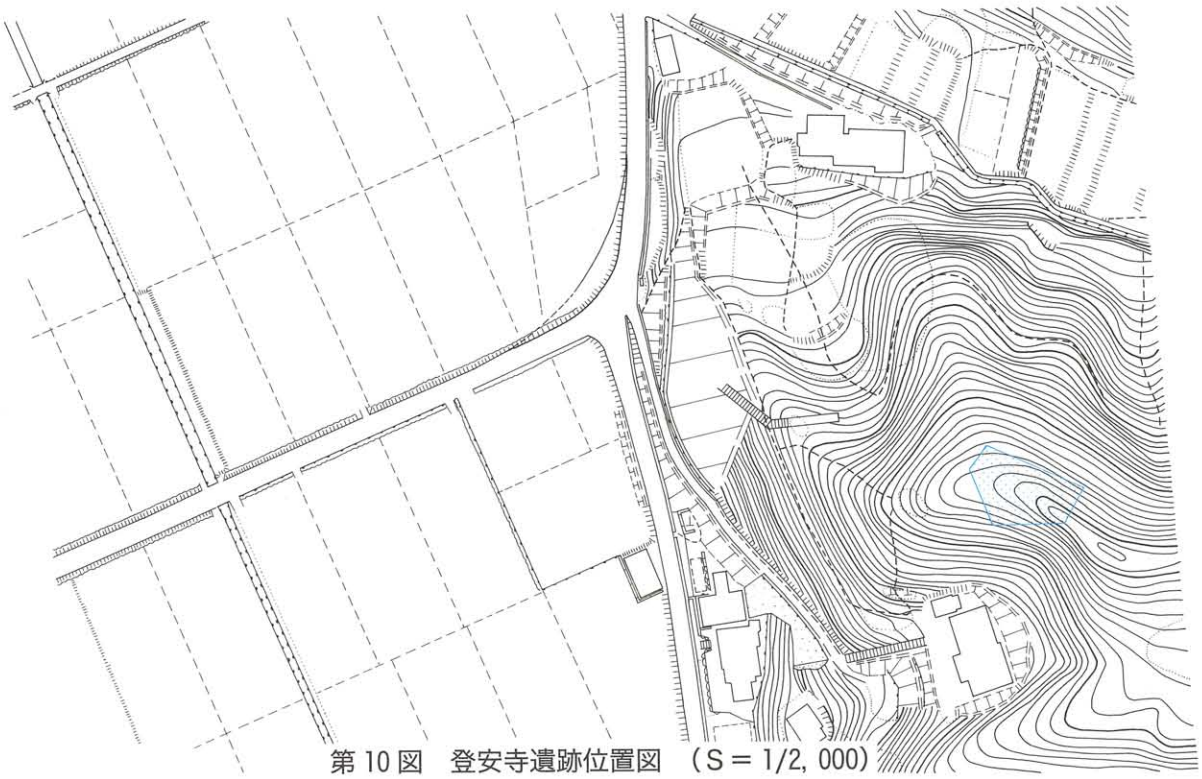
## 第２節　調査の結果

調査の結果、古墳を一基確認した。古墳は尾根の先端部に築かれている。前述のようにそこから赤川と平野が一望でき、それを意識して築造されたことが推測される。

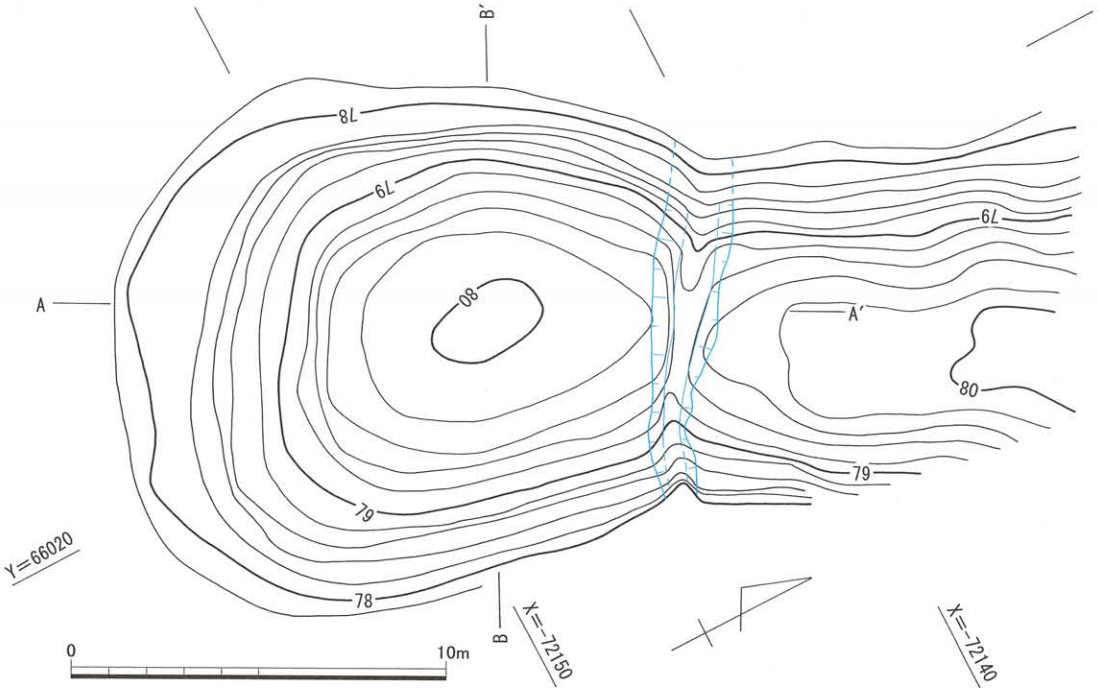
墳丘は北側を幅約0.8m～１m程度の浅い溝を尾根筋と直交するように掘って区切り、そのほかは地山を削り出すことによって築かれたものと考えられる。古墳は、その規模が一辺約12mの方墳と考えられるものであるが、地山自体が軟弱な土質であり流出や後世の地形改変を受けているようではっきりしない。また南側には調査前から小規模な道が存在おり、そのためかわずかに張り出していてややいびつな形態をしている。盛土は本来施されていたものと推測されるが、調査時にはほとんど確認できなかった。

埋葬施設は確認されなかったが、これも流出などによる結果であろう。

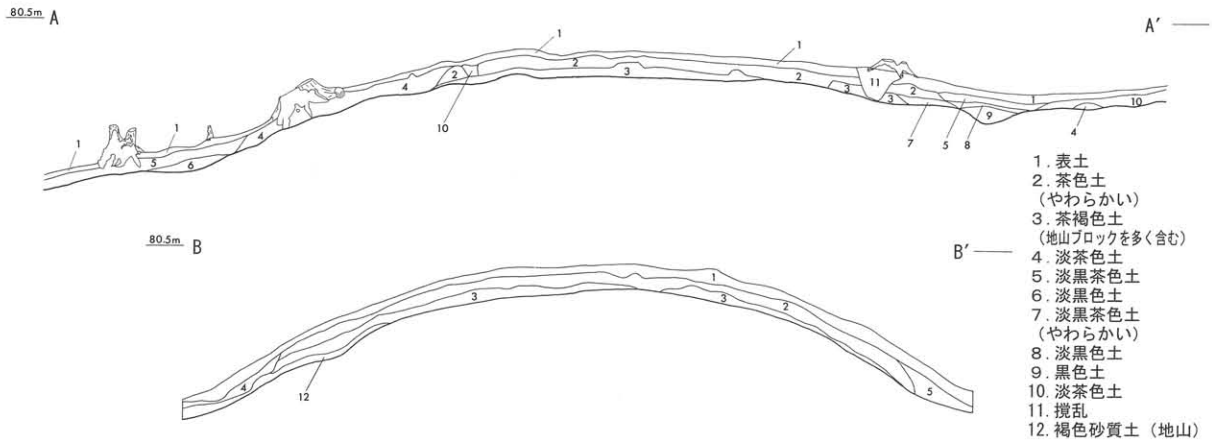
遺物は土師器などの細片が数点出土したが、図化はできなかった。よって時期は不明である。



第10図　登安寺遺跡位置図　（S＝1/2,000）




第 11 図　古墳地形測量図（調査後）（S＝1/200）




第 12 図　古墳土層図（S＝1/120）

# 第５章　湯後遺跡

## 第１節　遺跡の位置と概要

湯後遺跡は大原郡加茂町大字延野に所在する。延野は現在の加茂町中心部より約２kmほど西に行ったところにある地区で、加茂町内を西流して斐伊川に合流する赤川の北側に位置している。

遺跡は、そこに広がる丘陵の南西に向かって開けた緩斜面、標高約39m～52m付近に展開している。遺跡からは、南西方向に赤川とその周辺に広がる平野を、また南東方向には神原地区の集落やその周囲に広がる平野を見通すことができる。遺跡のすぐ西にはこの丘陵に向かって入る小さな谷があり、そのためかわずかに平野に突きだしているような印象も受ける位置にあるといえる。

周辺の遺跡については第２章を参照して頂きたいが、赤川周辺の平野・丘陵には比較的多くの遺跡が認められており、中には南東800mのところに位置している神原神社古墳など古墳時代前期を考えるうえで欠かすことのできない遺跡も存在している。

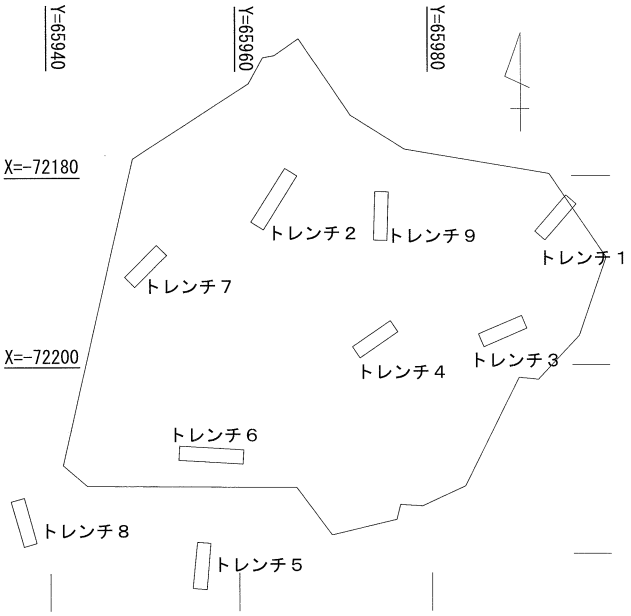
湯後遺跡は古墳時代後期から江戸時代にかけての複合遺跡である。遺跡付近は最近まで畑地や墓地としての利用がなされていた。遺跡の中心となる時期は古墳時代後期～終末期かけてと平安時代後期～鎌倉時代にかけての二つの時期である。古墳時代後期～終末期にかけての遺構としては横穴墓があり、中には当地域では初見の家形石棺を納めたものも確認された。また平安時代後期～鎌倉時代にかけての時期には特筆すべき遺構は確認されなかったものの、多くの当該期の遺物が出土している。遺跡の詳細については第３節以降で報告することにしたいが、いずれにせよ当地域の歴史を明らかにしていく上での貴重な遺跡であると言うことができる。

## 第２節　調査の経過と概要

湯後遺跡は平成６年度に行われた分布調査において確認された遺跡であり、当初は緩斜面が広がる付近に集落跡の存在を考えていた所である。

現地での調査は平成11年５月13日より開始した。まず、遺跡の範囲を確認するためのトレンチを平坦地と緩斜面を中心に７カ所、北側斜面に２カ所の、計９箇所に設定して確認調査を行った。（第13図）その結果、緩斜面に設定したトレンチから須恵器や土師器などの遺物が出土したほか、北側斜面のものからも須恵器が多く出土したため、この部分も含めて本調査を行うこととした。

調査は北側斜面を人力で、緩斜面を重機でそれぞれ表土を剥ぐことからはじめた。また開始時には、遺跡に隣接して民家が存在したことに加えて廃土捨て場もなく、また持ち出しなども不可能であったため、土捨て場の確保・整備と土砂の流出を防ぐための防護柵作りを並行して行った。




第 13 図　湯後遺跡トレンチ位置図（S＝1/800）

調査を開始後まもなく、北側斜面に横穴墓が存在することが明かとなった。地形の様子などから他にも数基存在することが考えられたため、それに続く東側斜面にも範囲を拡大して調査を行った。その結果、北側斜面に３基、東側斜面に５基の計８基の横穴墓が存在するすることが判明した。

その後横穴墓の調査に取りかかったが、このあたり一帯の地質は花崗閃緑岩で風化が進んでおり非常に崩れやすい状態であったために、ほとんどのものは既に天井部分が崩落し、原形を留めてはいなかった。また中には天井部分がかろうじて残っているものもあったが、雨が降るたびに崩落していくような状況でもあり非常に危険だったため、安全確保の点からそうした箇所は除去して調査をおこなった。

調査も中盤にさしかかった頃、２基の横穴墓に石棺が納められていることがわかり、その内の一つは、当地域での初例となる家形石棺であることが明かとなった。

横穴墓の調査と並行して緩斜面部分の調査も順次進めていき、溝状遺構などのほか多くの遺物を検出した。

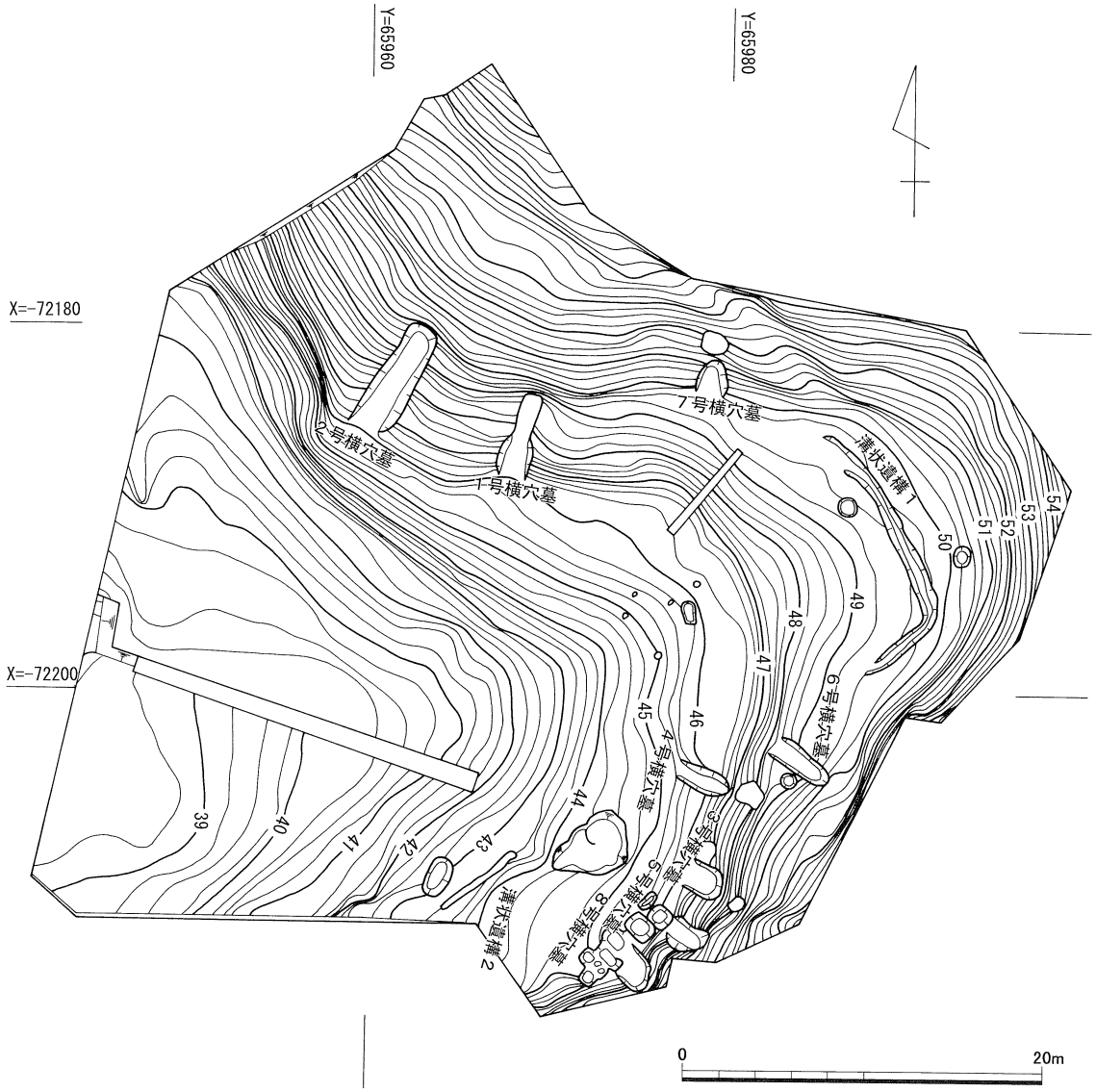
調査中には適時調査指導を受けたほか、多くの方から助言をいただいた。10月２日には調査の成果を公表するための現地説明会を開催し、地元の方々を中心に120人近い方の参加を得た。さらに10月28日には大東町立海潮中学校の生徒による調査現場での発掘体験も行った。

その後調査を進め、石棺などの石材を運び出して残りの部分を調査した後、航空写真撮影や測量を実施し、平成11年11月19日に全ての調査を終了した。

**登安寺遺跡・湯後遺跡全景（西上空から）**

## 第３節　調査の結果

湯後遺跡では横穴墓８基、溝状遺構２基、土壙６基などの遺構のほか多数の遺物も検出した。以下、これらについて報告する。なお各遺構はその発見順に名称をつけ調査を行った。




第 14 図　湯後遺跡調査後地形測量図・遺構配置図　（S＝1/400）

### １．横穴墓の調査

横穴墓は全部で８基確認している。前述のとおり、いずれのものも検出した段階で既に原形を留めておらず、残存状況が良いものではない。横穴墓には北側斜面に存在するものや東側斜面に存在するもの、規模の比較的大きなものやその反対に規模の小さなものなどがあり、その様相はさまざまである。また中には、玄室内に石棺を内包するものも見られたが、そのうちの一つは当地域においては初めての確認となる家形石棺であった。以下、各横穴墓について報告する。

**１号横穴墓（第15図）**

天井部分は既に崩落していたほか、壁面もかなり崩れておりあまり原形を留めてはいなかった。平面形では玄室と玄門部との境が不明瞭な横穴墓である。調査前は埋没していた。

**（立地）**　北側斜面に位置する。床面での標高は約46.5mを測り、主軸はN－18°－Wである。

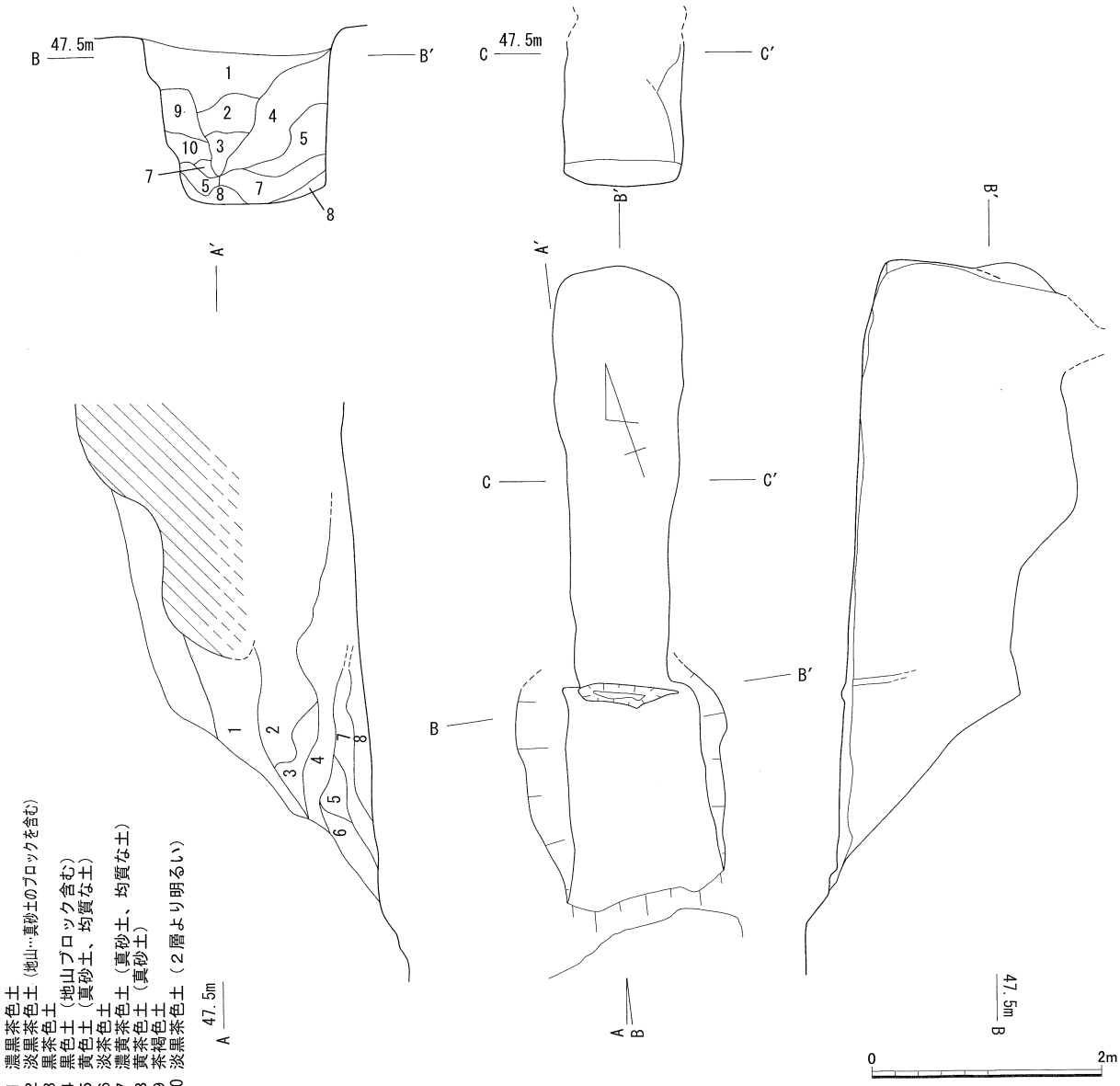
**（規模・形態）**

**前庭部**　地山を深いところで約1.2m掘削しており、検出段階での規模は長さ1.7m、前側幅1.3m、奥側幅1.1mを測る。

**閉塞施設**　玄門部・玄室と前庭部との境付近の床面では、閉塞の痕跡を示すものと考えられる浅い溝が認められた。石材などは確認されていないことから、木製の板などによるものであったと思われる。

**玄門部・玄室**　玄門部と玄室はその境が不明瞭ではっきりとしていない。平面形は、前庭部側よりも玄室奥側がわずかに広くなってはいるものの、寸胴形といえる形態を呈している。規模は長さ3.6m、幅は前庭部側で0.8m、奥側では約1.1mを測る。断面形は、調査時既に天井部分が崩落していたため詳細は不明である。但し、わずかに残っている奥壁と側壁の線の様子から、斜辺がわずかに膨らみをもつ三角形、または半円形になるものと思われる。床面は玄室奥側から前庭部にかけてわずかに傾斜していた。

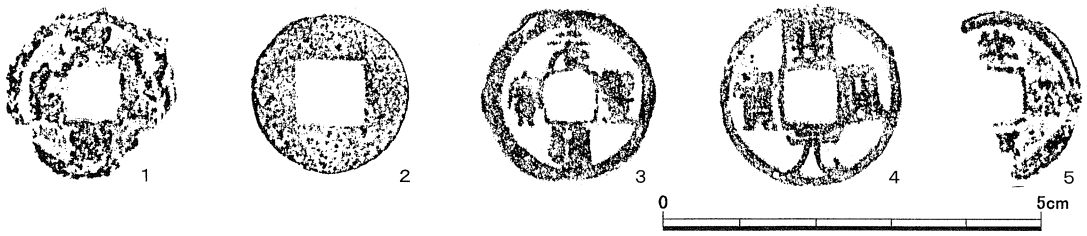
**（土層状況）**　崩落土や流入土が多く堆積していた。７、８層は閉塞付近までの堆積で埋葬後の埋土の可能性がある。また第４層は後世の侵入面ないし流入土の可能性が考えられる。




第15図　１号横穴墓実測図　（S＝1/60）

**（遺物出土状況）** 前庭部および玄門部・玄室とも床面からの遺物の出土はなかった。覆土中からは甕片数点と古銭が出土している。出土した古銭については第16図に掲載し、詳細については第４表に記載した。

**（時期）** 時期を判断する遺物がなく不明である。




第16図　１号横穴墓出土銭貨拓影　（S＝1/1）

第４表　１号横穴墓出土銭貨計測表（第16図）

| No. | 出土地 | 名　称 | 初鋳年 | 銭径(A)/銭径(B)(mm) | 内径(C)/内径(D)(mm) | 銭　厚(mm) | 量　目(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | １号横穴墓 | ＊ | ＊ | ＊　＊ | ＊　＊ | ＊　～　＊ | 1.40 |
| 2 | １号横穴墓 | ＊ | ＊ | 21.29　21.05 | ＊　＊ | ＊　～　＊ | 1.32 |
| 3 | １号横穴墓 | 元豊通寶 | 1078年 | 23.35　23.70 | 20.42　19.30 | 0.72　～　1.00 | 1.86 |
| 4 | １号横穴墓 | 開元通寶 | 621年 | 24.52　24.52 | 22.41　22.55 | 0.92　～　1.19 | 2.61 |
| 5 | １号横穴墓 | ＊ | ＊ | ＊　＊ | ＊　＊ | ＊　～　＊ | 1.04 |

**参考文献**　永井久美男『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』兵庫埋蔵銭調査会　1994

**２号横穴墓（第17図～第29図）**

今回調査した横穴墓の中では規模が最大のものである。また玄室内には家形石棺が納められていたほか、多くの遺物も出土した。調査前は埋没しており、１号横穴墓と同様に既に玄室天井部分は崩落し原形はとどめていない。

**（立地）** 北側斜面に位置している。１号横穴墓からは西に８ｍほど行ったところにあり、床面での標高は46.2ｍを測る。主軸はN—34°—Wである。

**（規模・形態）**（第17図）

**前庭部**　長さ約４ｍ、幅は前側で2.0ｍ、奥側で1.3ｍを測る大きなものである。地山を深い所で約2.0ｍ掘削して造り出しており、断面形は逆台形を呈している。

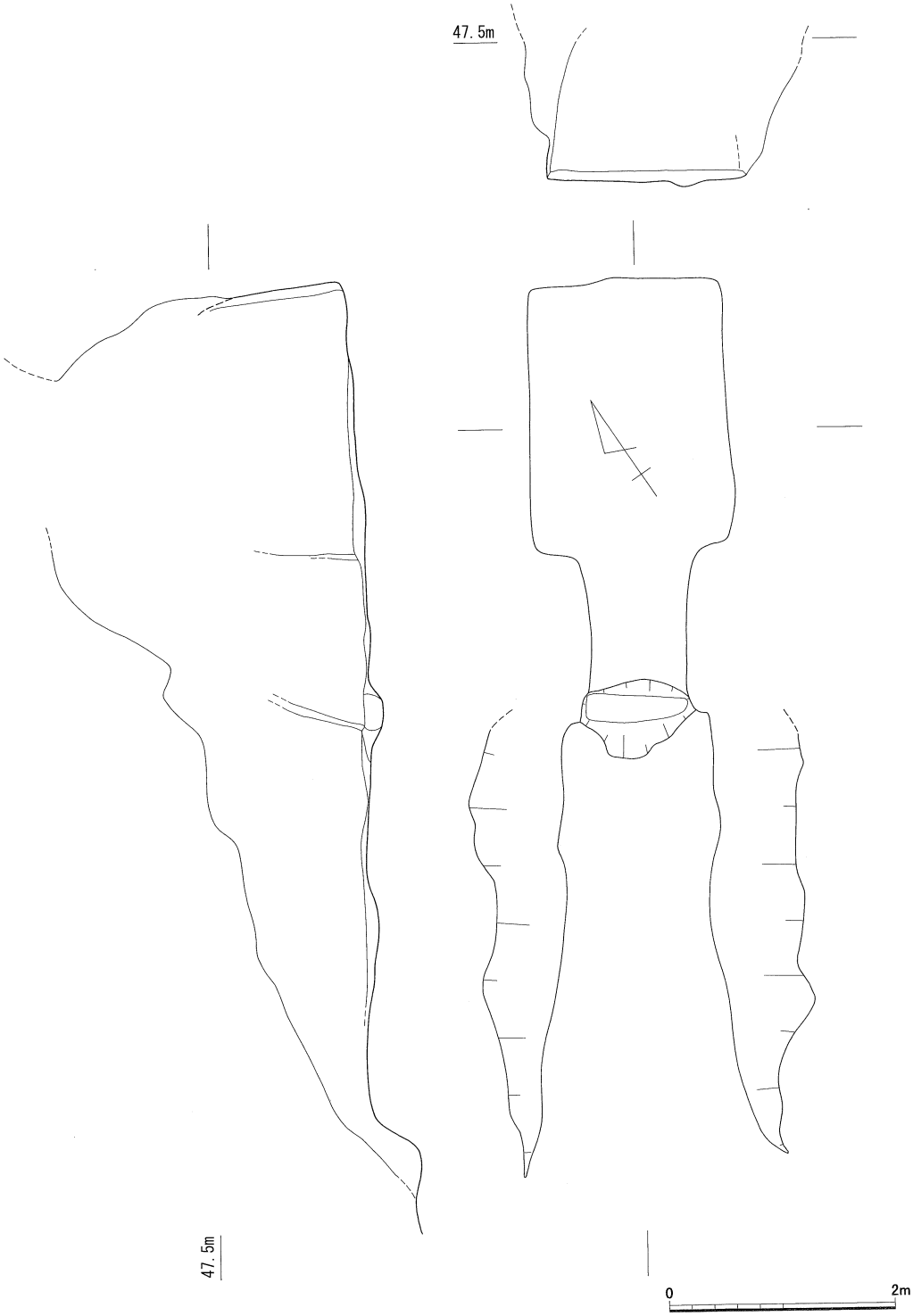
**閉塞施設**　前庭部と玄門部の境に閉塞の痕跡と考えられる、長さ0.9ｍ、幅0.5ｍ程度の浅い溝が認められた。調査時に石材等は確認していないことから、これも木製の板などによって閉塞がなされていたものと推測される。

**玄門部**　長さ1.1ｍ、幅0.9ｍを測り、玄室側が僅かに広くなっている。天井部分や壁面などは既に崩れていたため、断面形は不明である。

**玄室**　平面形は長方形を呈しており、規模は長さ2.4ｍ、幅1.7ｍを測る。断面形は天井部分が既に崩落していたほか、壁面も一部しか元々の状態を保ってないため詳細は不明である。ただし、一部残存している奥壁と側壁との界線の様子から、斜辺がやや膨らみをもった三角形になるものと思わ

れる。また、奥壁はやや内傾するものの垂直気味に立ち上がる状況がうかがえた。床面はほとんど水平であった。

**（土層状況）**（第18図）　玄室内は天井部分の崩落により、その土砂（地山土である花崗閃緑岩の風化土、真砂）で埋まっていたが、前庭部から玄門部にかけては黒色系の土と褐色系の土（真砂）が交互に堆積している状況がうかがえた。黒色系の土は大きく分けて３面（16層、12層、７・９・10層）に、また褐色系の土は大きく分けて２面　（15層、11・13・14層）と崩落に伴う層とに分けることが可能と考えられる。それらの層は、最下層の16層及び15層が閉塞部分までの堆積であるの

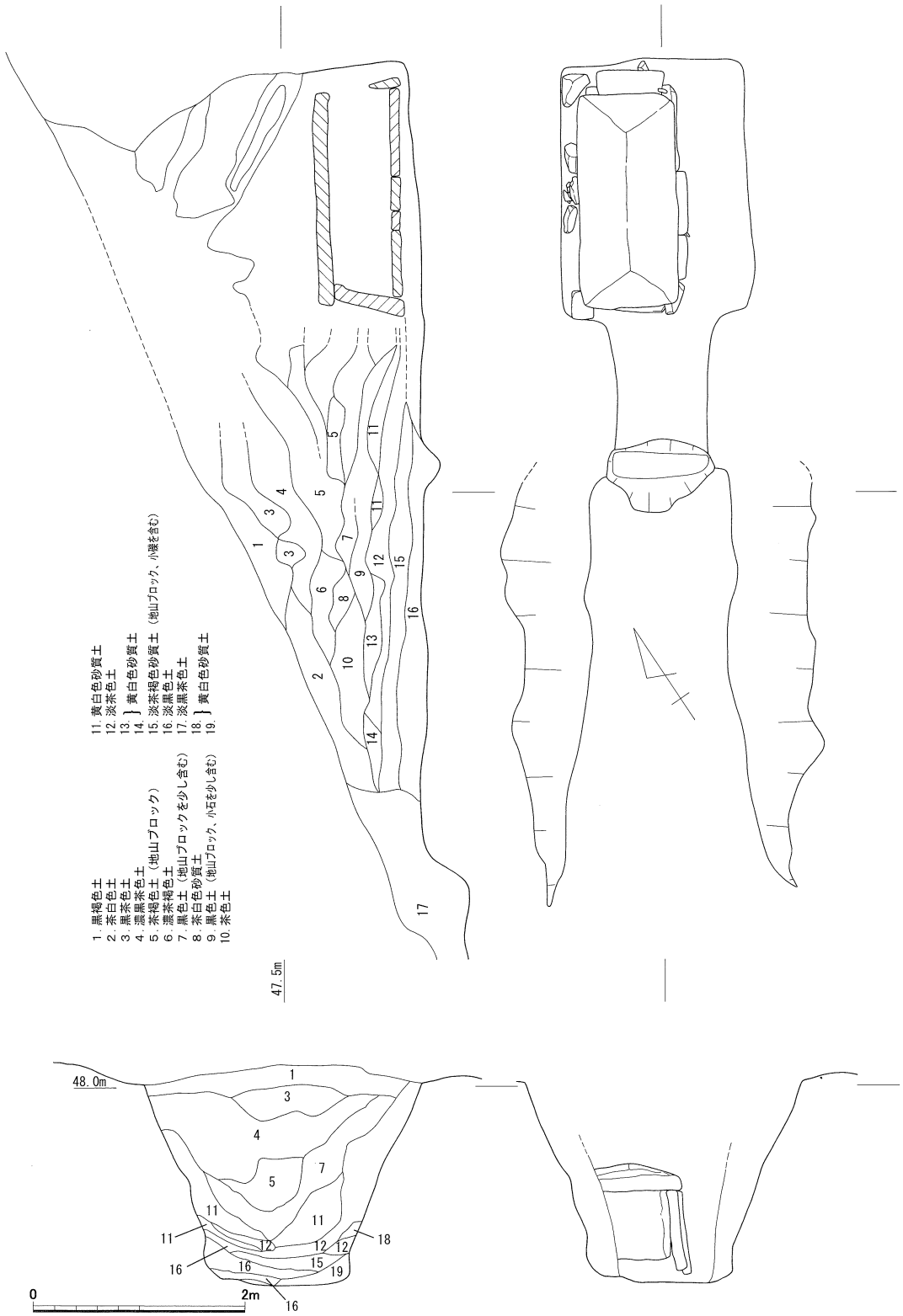



第17図　２号横穴墓実測図（１）（S＝1/60）

に対して、それよりも上の層では傾斜をもって玄室近くまで堆積している。

こうした点などから推測して15・16層が第１次埋葬後、11～14層が第２次埋葬または侵入後、７～10層が第３次埋葬または侵入後の埋土・堆積土になるものと考えられ、第１次埋葬後少なくとも２回以上の追葬など侵入行為があったものと想定される。

**（石棺）**（第19・20図）　組み合わせ式の家形石棺で、玄室の左側壁に並行して置かれていた。規




第18図　２号横穴墓実測図（２）（S＝1/60）

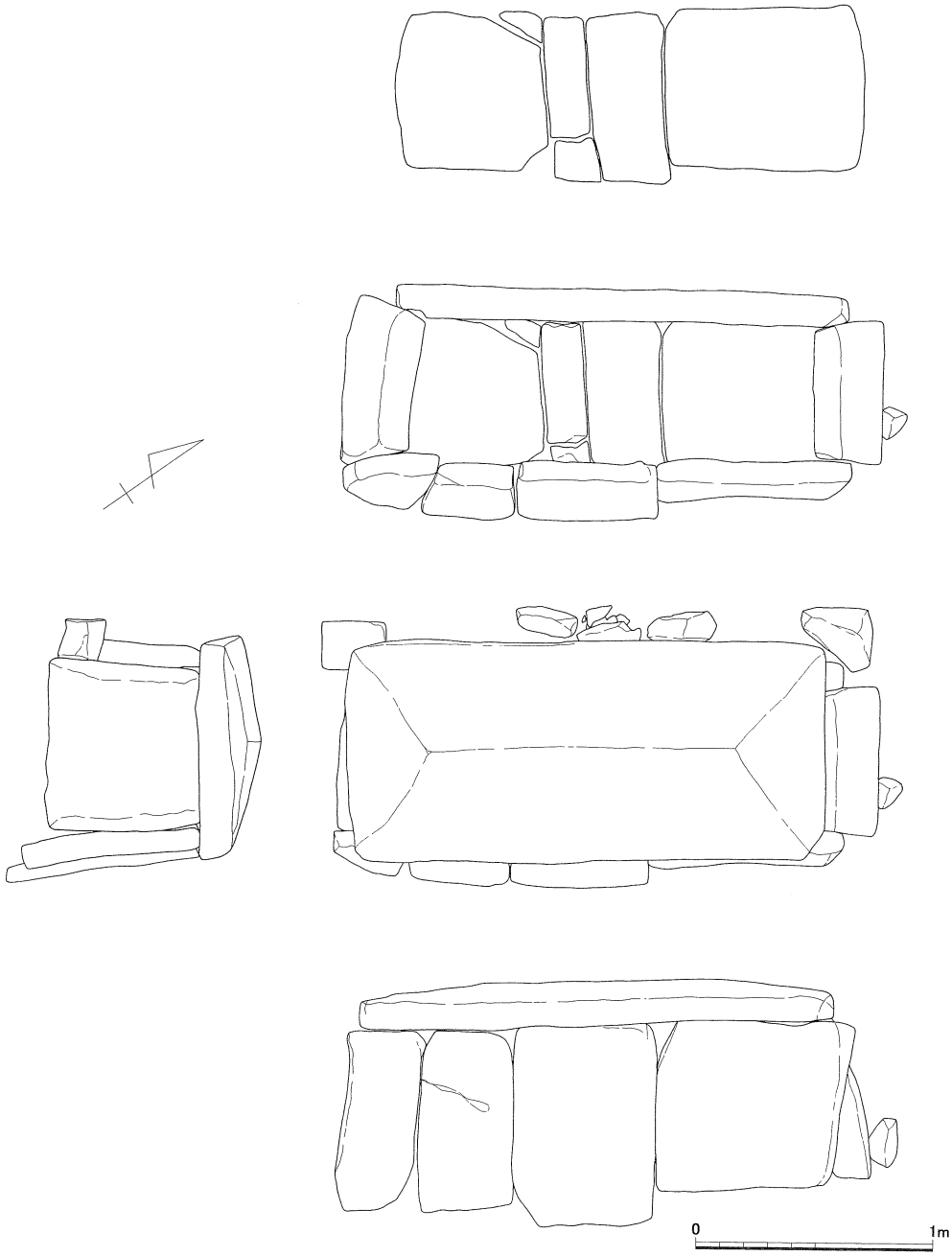
模は内法で長さ190cm、幅70cmを測るものである。石棺は床石まで含めて全部で12枚の切石で構成されている。石材は凝灰質砂岩で、来待石の可能性が高い。

石棺各部の概要は次のとおりである。なお、石棺各部の名称は第21図のものとする。

**天井石**　天井石は長さ200cm、幅90cm、厚さ20cmを測るほぼ長方形の一枚石である。外面には僅かに稜線が削り出され、それによって棟線が表現されてはいるが、扁平なものである。また、内面は刳り込み等の加工はなく平坦な面となっていた。

**奥　石**　奥石は長さ190cm、幅（高さ）85cm、厚さ15cmを測る厚みをもった石で、これも１枚石である。奥石の外面と内面では、外面が粗く削ったままの状態で粗雑なのに対して、内面はほぼ全面に加工痕が認められるものの平坦な面となっていて、仕上がりの状態に極端な差が認められる。

また奥石の左右両側は側石と噛み合わせるために、長さ10cm、幅３cm程度Ｌ字形に刳り込まれていた。



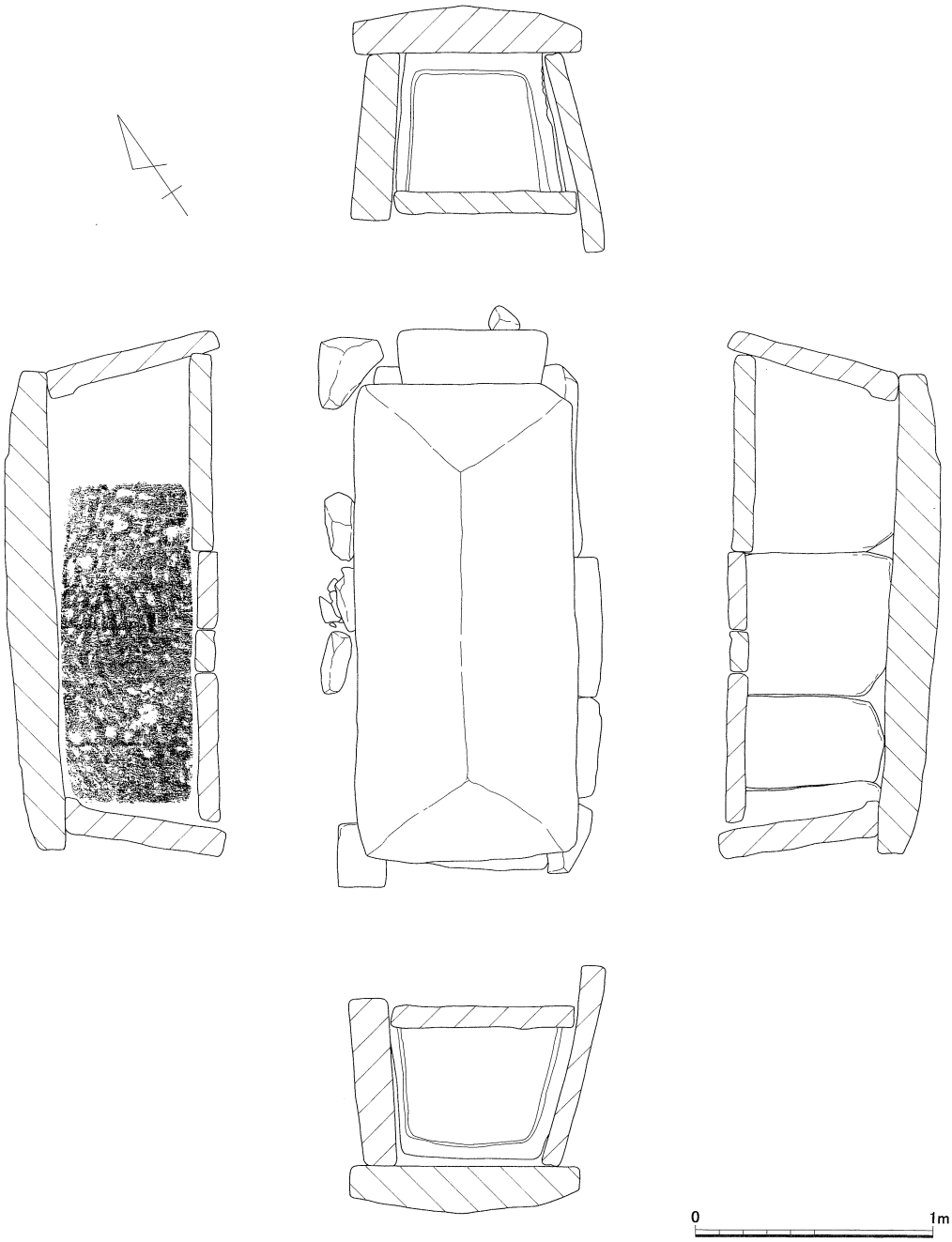

第19図　２号横穴墓石棺実測図（１）（S＝1/30）

**側　石**　側石は左右それぞれ１枚ずつの、高さ65cm、幅65～70cmを測る台形状のやや厚みをもった石で構成される。両側石も奥石と同様に外面と内面の仕上がり状態には極端な差があり、外面は粗雑な状態なのに対して、内面は加工痕が認められるものの平らな造りとなっている。特徴的な点もみられ、内面が「冂」形に２～３cm程度刳り込まれている。

**前　石**　前石は４枚の板石で構成される。４枚とも内外面は平らで特別な加工は見られない。それぞれの石は大きさに違いが見られ、右側石側（玄室奥側）の石が大きめとなっている。規模は右側の石から、約70×75cm、80×60cm、75×40cm、75×30cmを測る。

**床　石**　床石は若干割れが見られるが、基本的に４枚の板石で構成される。前石と同様、大きさに違いが見られ、規模は奥壁側から約85×70cm、30×70cm、18×70cm、60×65cmである。

以上のように各石にはそれぞれに異なった加工がされているが、厚さにも違いが見られ、奥石と

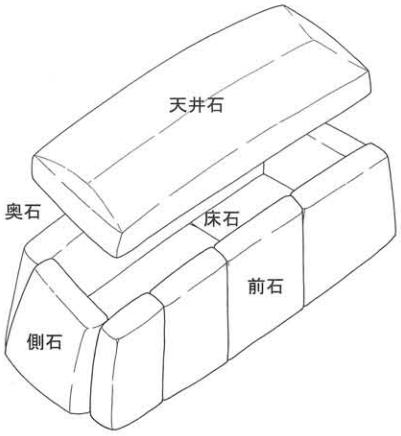



第20図　２号横穴墓石棺実測図（２）（S＝1/30）

両側石は前石に比べて厚めとなっていた。

石棺と玄室左側壁・奥壁との間には、石棺を安定させるためのものと思われる石が詰められており、玄門部側の奥石と側石、玄室側壁との間には角柱状の石がかまされていた。

また石棺周辺、特に左側壁と石棺奥石の間では棺に使用されている石の破片が散在していた。（第22図）




第21図　石棺各部名称図

**（遺物出土状況）**（第23図）　遺物は玄室内や前庭部から多く出土した。

**前庭部**　前庭部では須恵器や土師器の破片が多く出土しており、中には侵入行為のあった段階で玄室内から掻き出された状況を示しているものも見られた。また閉塞部分の近くの床面では平瓶がほぼ完形で出土したが、これはほぼ原位置を保っているものと思われる。

**玄　室**　玄室内では横瓶、壺、高坏、瑳などが奥壁側でまとまった状況で出土した。高坏の中にはその破片が前庭部で出土したものもあった。

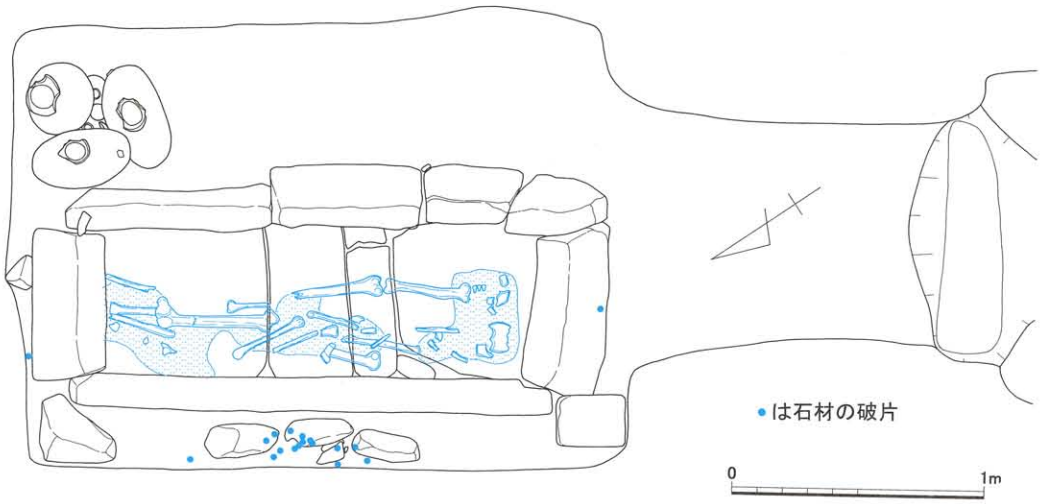
**周　辺**　玄室の上の斜面とさらに上方の斜面を中心に横穴墓の主軸上にあたる部分では、多くの甕片が出土した。玄室内の破片と接合するものもみられることから、埋葬に伴うなんらかの祭祀的行為が行われたものと考えられる。

**石　棺**　遺物は出土しなかったが男女２体分の人骨が出土した。人骨は攪乱状態を呈しており、遺残性は良くないものであった。これについては第７章に譲る。

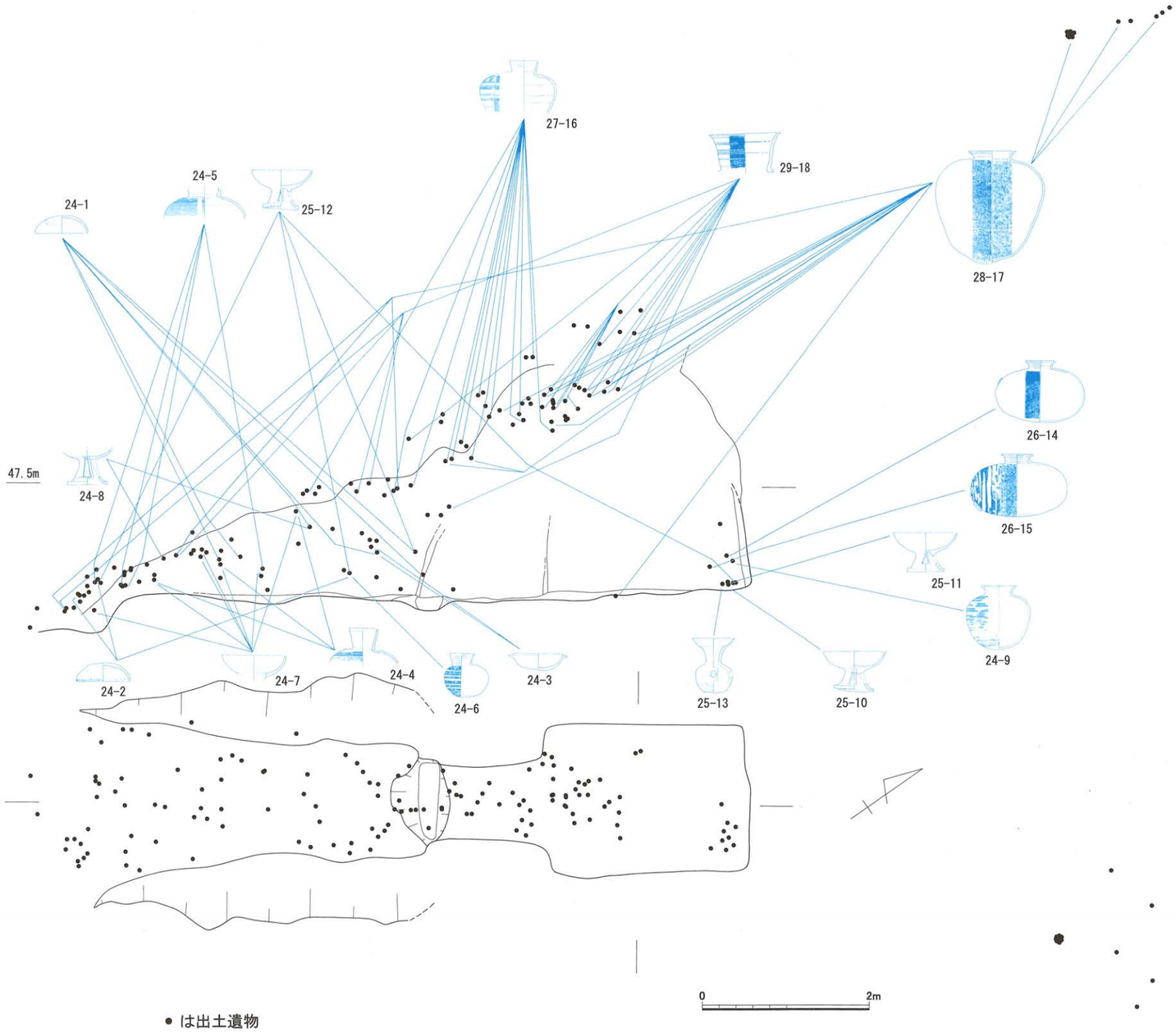
**（出土遺物）**（第24～29図、第６表）　出土した遺物は第24～29図掲載のもので、詳細は第６表に記載した。また図示はしていないものの土師器や中世土器の破片も出土した。

１～８が前庭部、９～15が玄室内、16～18が周辺からの出土である。蓋坏はすべてナデによる調整が施されておりヘラケズリは見られない。高坏は２方透かしのもので、25-11のように１方が切れ目となるものも見られる。

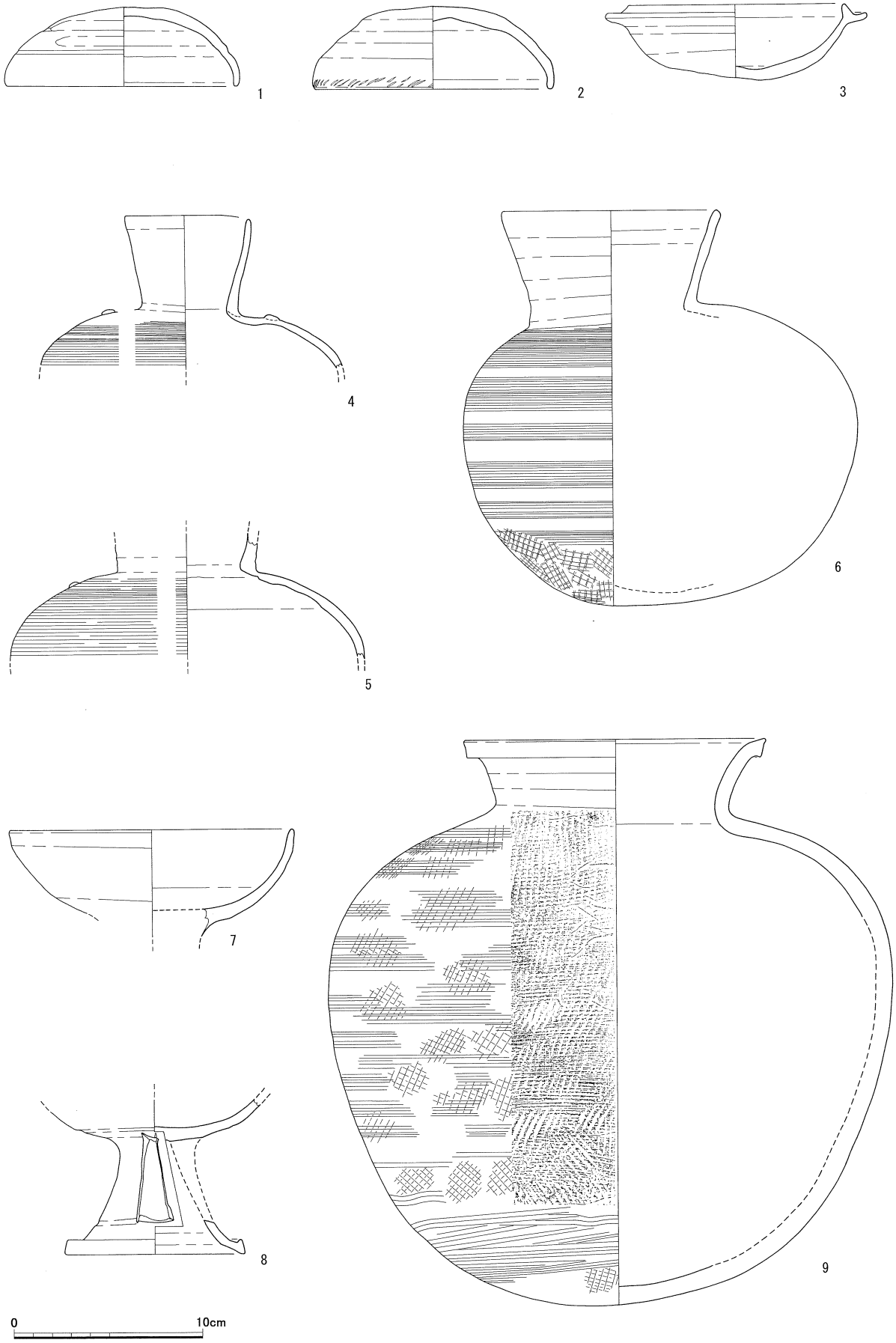
**（時期）**出土した須恵器は、若干時期の新しいものが見られるものの、ほぼ出雲５期[註1]の範疇に収まるものと考えられる。従って出雲５期を考えておきたい。



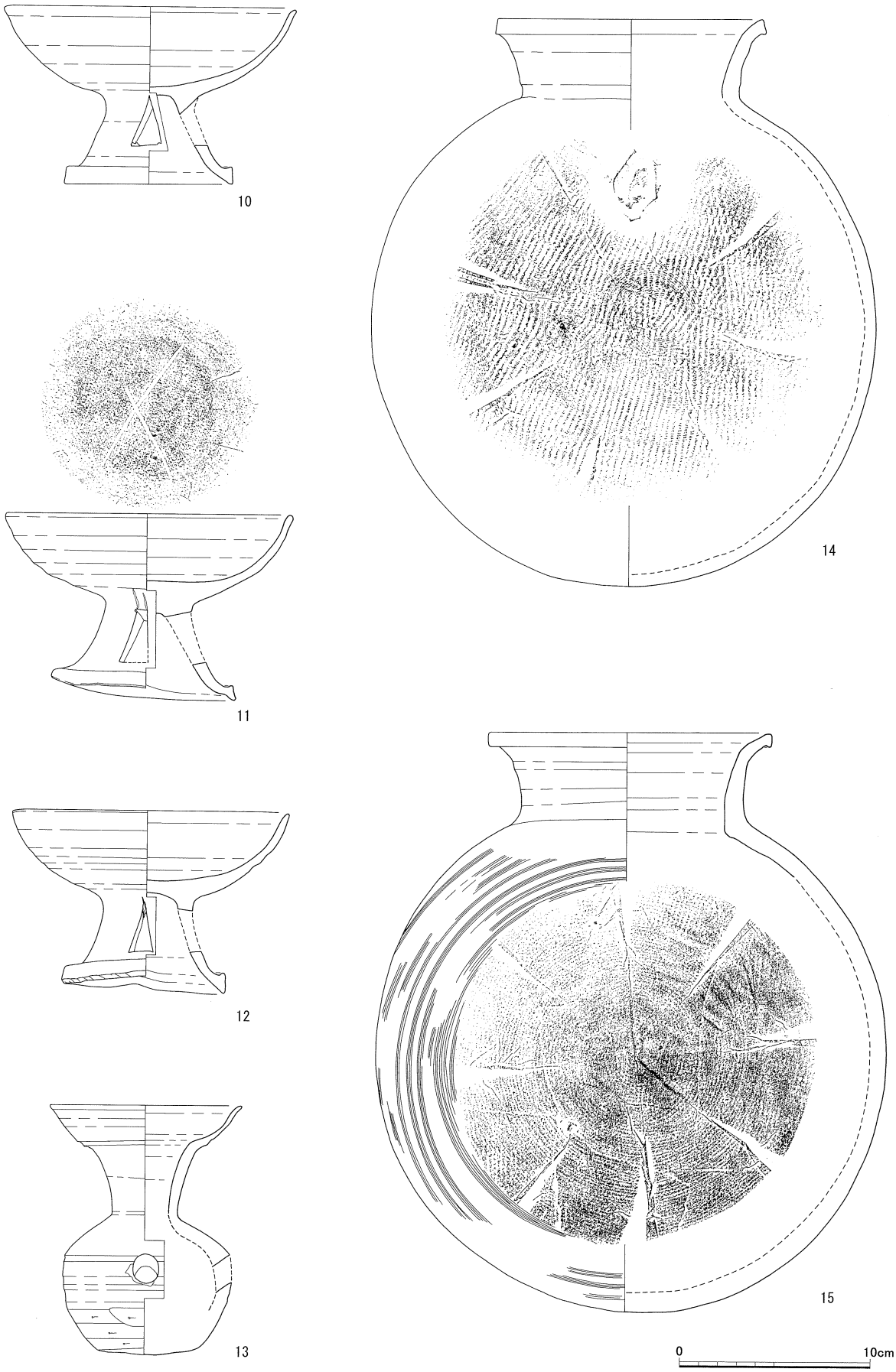

第22図　２号横穴墓玄室内遺物・人骨状況図　（S＝1/30）



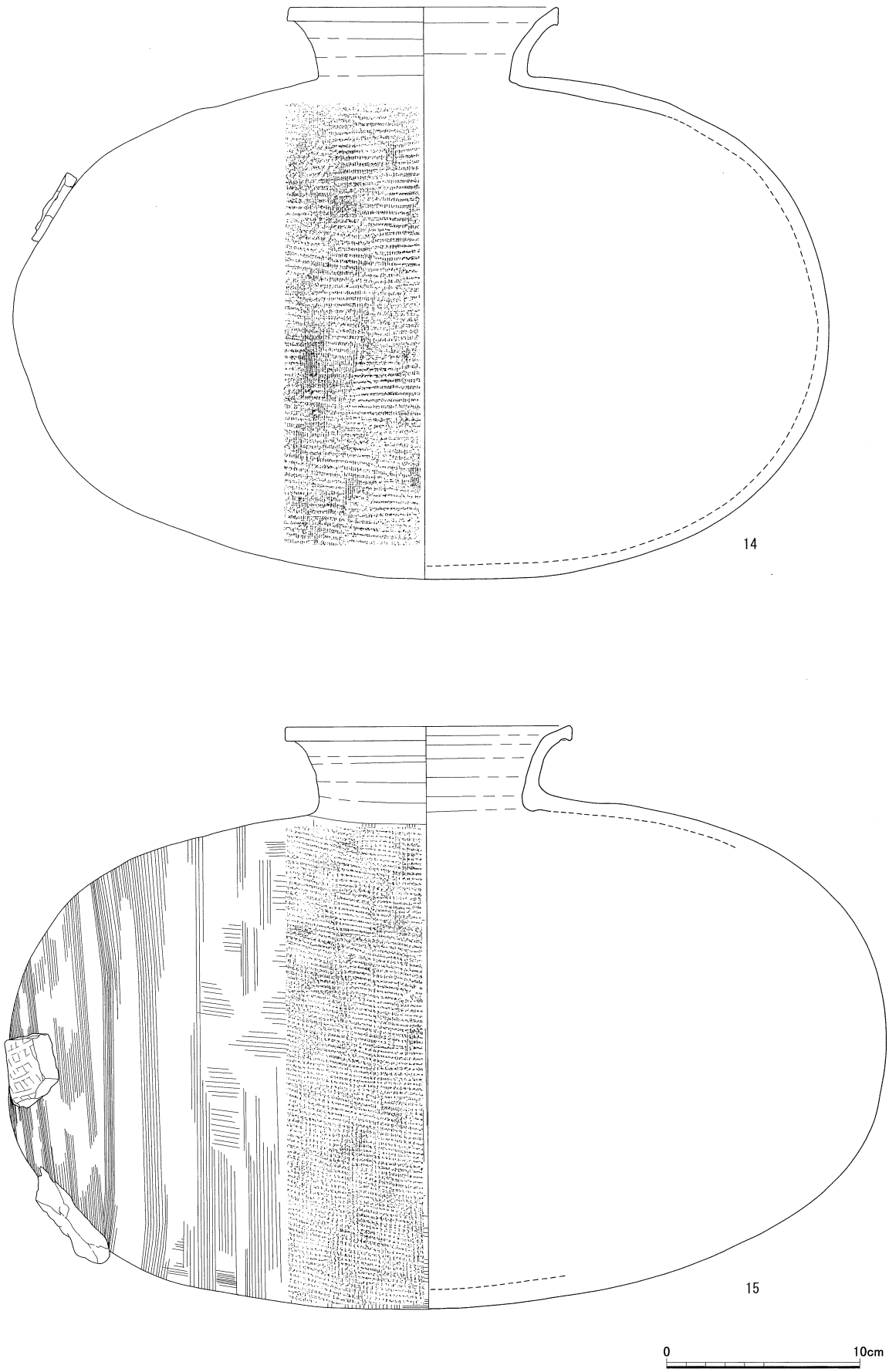

第 23 図　２号横穴墓実測図（３）遺物出土状況　（S＝1/60）



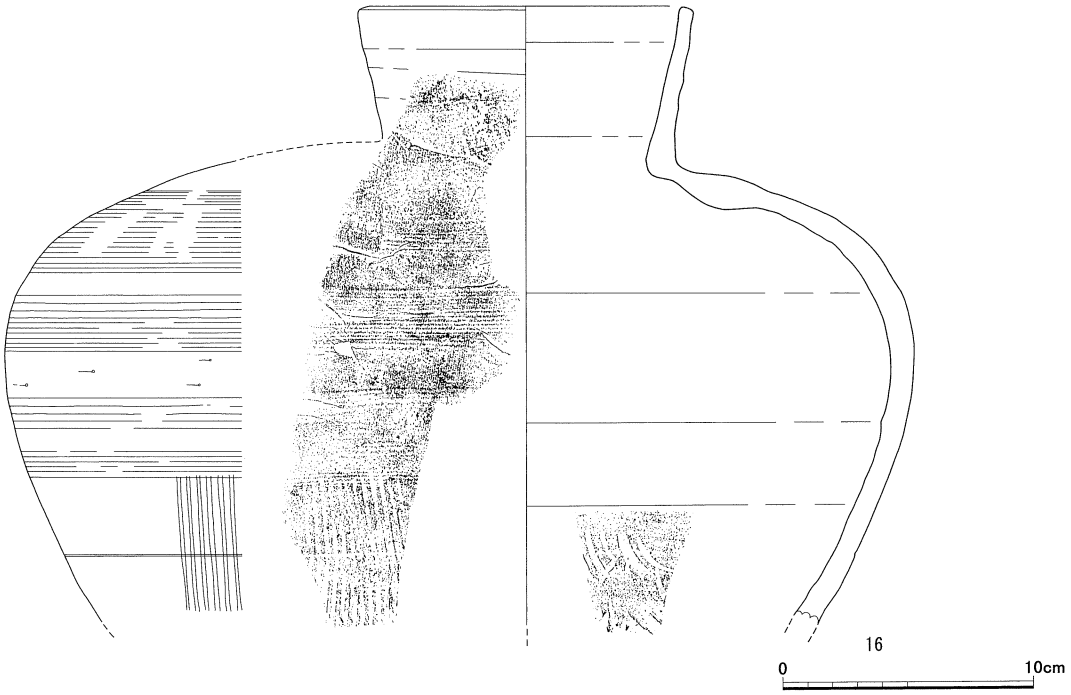

第 24 図　２号横穴墓出土遺物実測図（１）（S＝1/3）



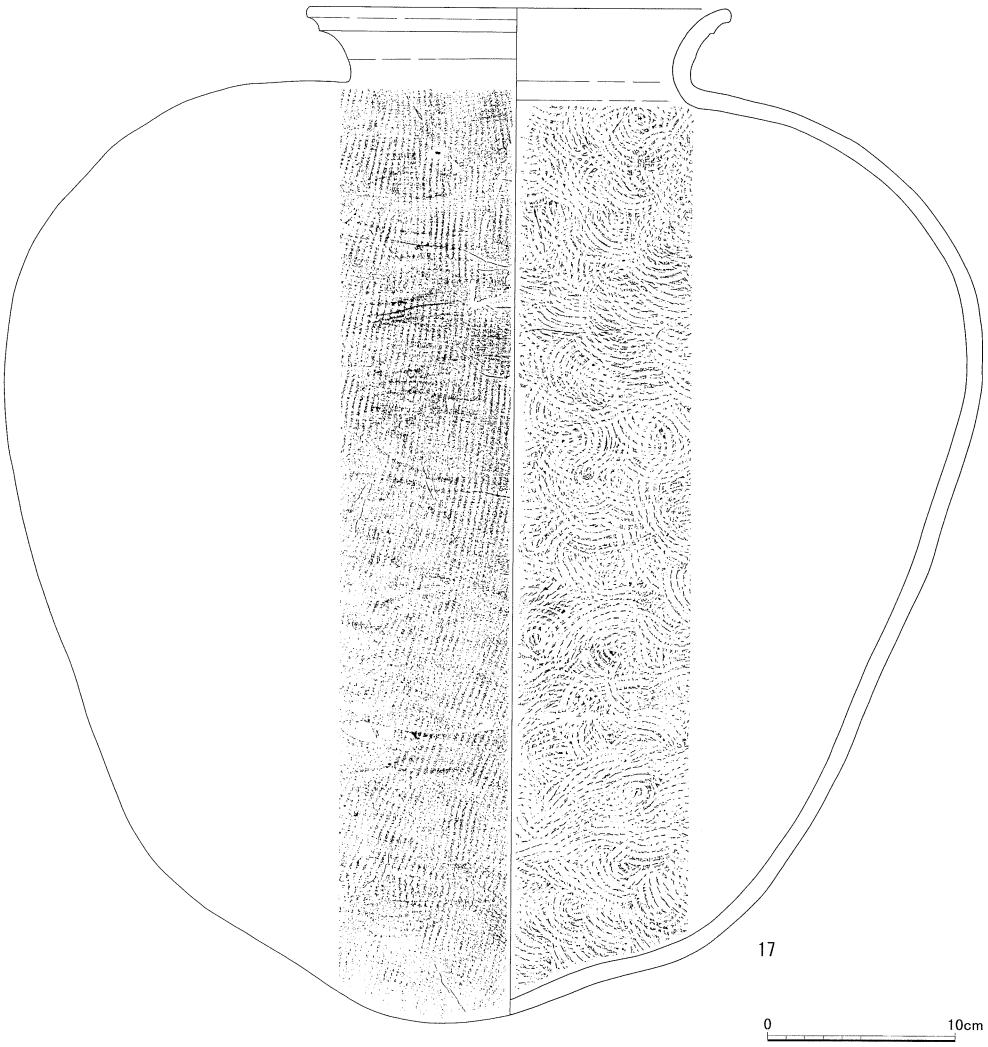

第 25 図　２号横穴墓出土遺物実測図（２）（S＝1/3）



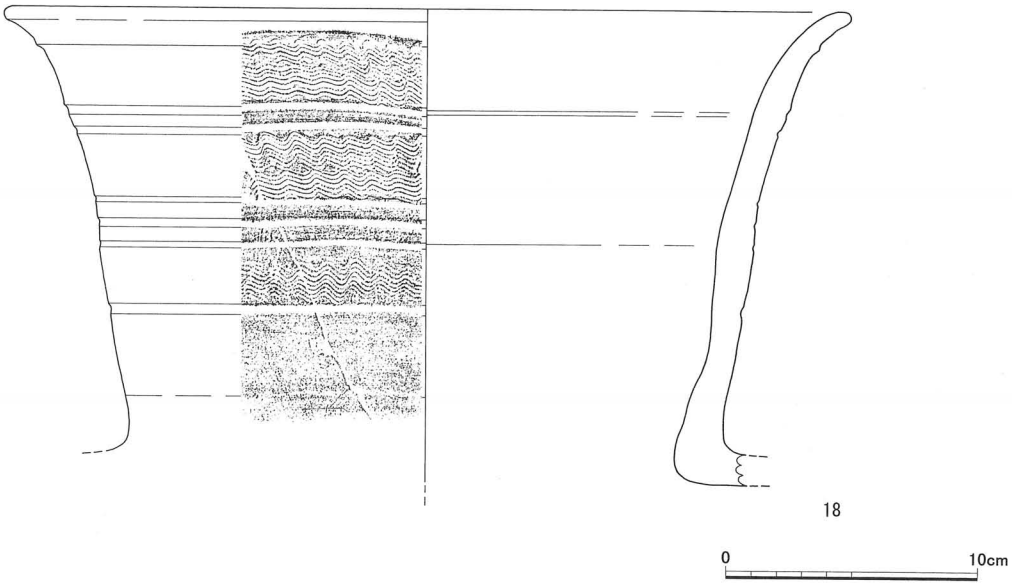

第 26 図　２号横穴墓出土遺物実測図（３）（S＝1/3）




第 27 図　２号横穴墓出土遺物実測図（４）（S＝1/3）




第 28 図　２号横穴墓出土遺物実測図（５）（S＝1/4）




第29図　2号横穴墓出土遺物実測図（6）（S＝1/3）

2号横穴墓出土遺物

### ３号横穴墓（第30図～第34図）

前庭部と玄門部・玄室との間に段差が認められる横穴墓である。検出段階までは、玄室が比較的残っていたものと思われるが、検出後すぐ天井部分が大きく崩落したため全体の様子は明かでない。この横穴墓からは中世の遺物も出土しており、一時期開口していたことがうかがえるが、調査前は埋没していた。

**（立地）** 東側斜面に位置している。床面での標高は46.5mを測り、主軸はN—37°—Nである。

**（規模・形態）**（第30・31図）

**前庭部**　現状で長さ約2.0m、幅は1.25mを測るものである。東側斜面は後世の墓地の造成などで掘削されており、その際に一部破壊されたことも考えられる。壁面は垂直気味に立ち上がる。

また、前庭部北側には1.2m×0.8mほどの平坦な面が造り出されていた。埋葬に伴う祭祀行為が行われていた場所である可能性もあるが、現状では不明である。

**閉塞施設**　閉塞がされたと思われる部分は、他のものと異なり溝状ではなく段状となっている。

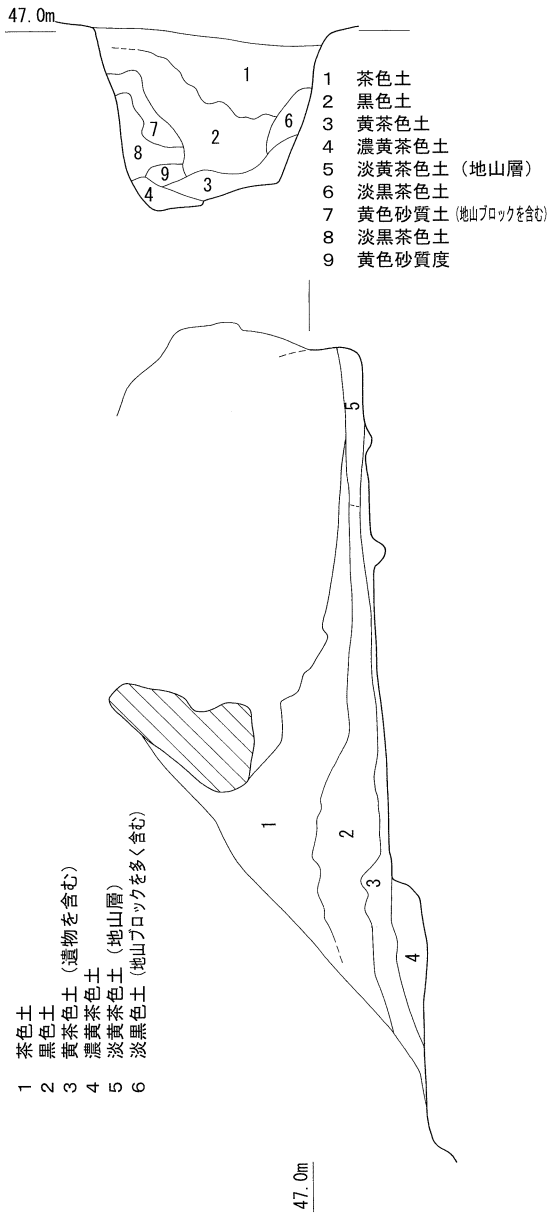
**玄門部**　前述のとおり、前庭部より一段高くなっている。長さ1.6m、幅は前庭部側で0.8m、玄室側で1.0mを測り、玄室側がやや広くなっている。玄室天井が崩落した際に玄門部も一部崩れたほか、調査中にも崩れていったため残存状況は良くなく、その詳細は明らかでない。但し、壁面が垂直に立ち上がっていることや検出時すぐの状況から判断して、断面形は方形になるものと思われる。

**玄　室**　平面形は長方形を呈しており、規模は長さ2.4m、幅1.3mを測る。断面形は前述のとおり天井部分と壁が崩落しているので不明である。ただし奥壁と側壁の残存部分の様子からは、斜辺が膨らみをもつ三角形になるものと思われる。奥壁も垂直気味に立ち上がっていたものと思われる。

玄室内床面では４カ所に窪みが確認された。これらは玄室中央よりも右側で確認されており、その配置状況からは何らかの施設があったことが想定されるが詳しいことは不明である。

床面は玄室から玄門部にかけてわずかに傾斜していた。

**（土層状況）**（第30図）　前庭部から玄室内に向かって土砂が流入している状況が観察された（１層、２層）。また３層は多くの土器を含んでいる層である。ほぼ水平に堆積しているものの、前庭部側が玄門部・玄室側に比べて厚めとなっている。




第30図　３号横穴墓実測図（１）土層　（S＝1/60）

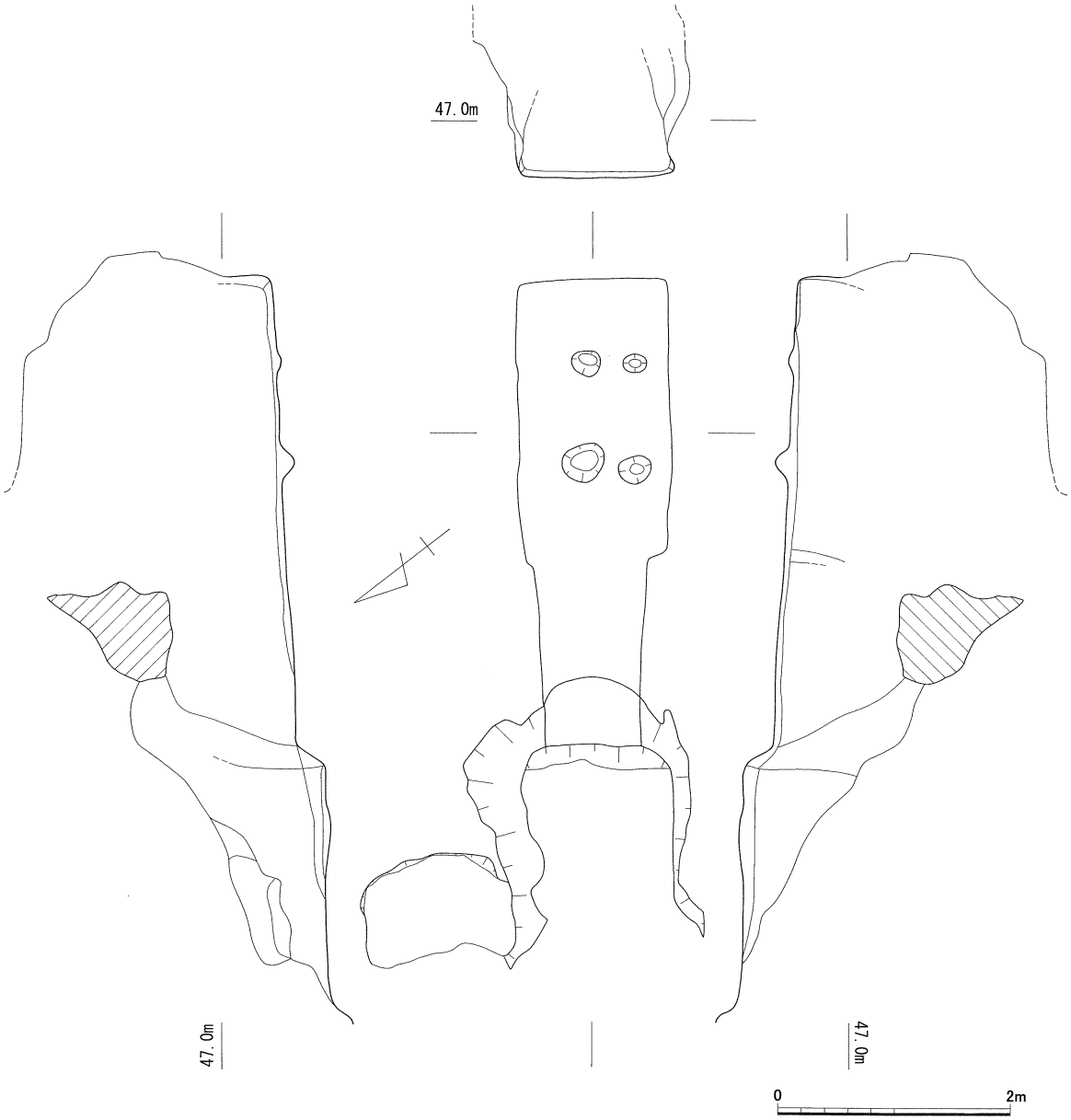
土層の状況と後述する出土遺物から、３層の段

階でこの横穴墓は開口しており、その後しだいに玄室内に土砂が流入していったことが考えられる。それ以前の追葬や侵入といったことは明らかにできなかった。

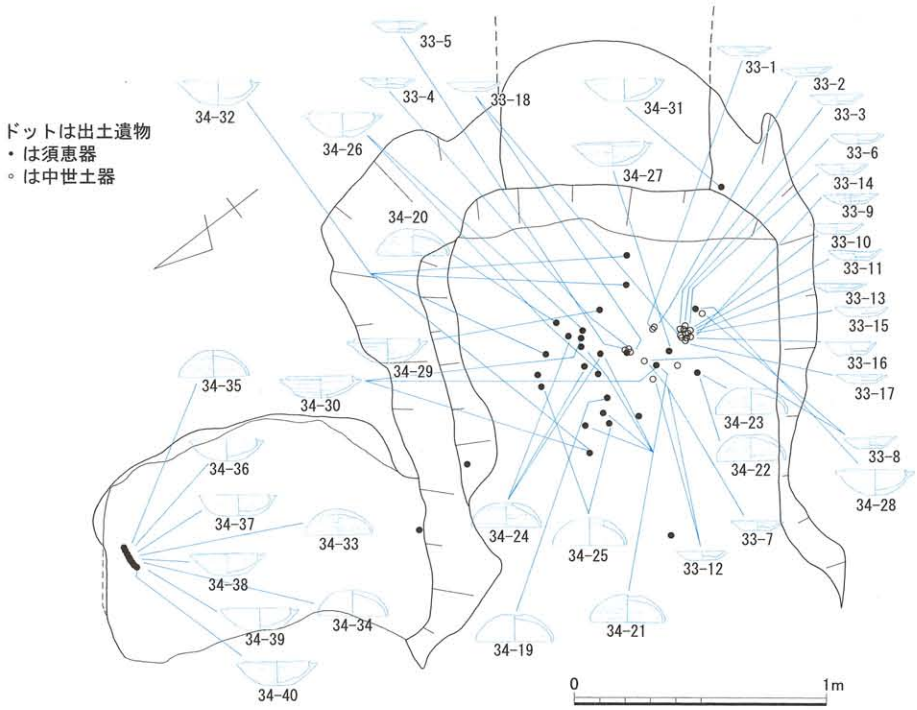
**（遺物出土状況）**（第32図）　前庭部で須恵器と中世の土器など多くの土器が出土したほか、その横の平坦な面からは須恵器の蓋坏がまとまって出土している。須恵器と中世の土器はほぼ３層の範囲内にあり、また全てが前庭部からの出土で、玄門部・玄室からの出土はなかった。須恵器は本来の位置にあるとは考えにくい状態であったことと、中世の土器と一緒に出土していることから考えて、３層の段階（中世土器の段階）に玄室内から掻き出されたものである可能性が高い。

**（出土遺物）**（第33・34図、第７表）　出土した遺物は第33・34図に掲載したもので、詳細については第７表に記載している。須恵器はほとんどが蓋坏で、ほかに図化はしていないが甕片が数点出土したのみである。蓋坏はいずれのものも回転ナデによる調整を施している。また中世の土器はすべて皿である。中には33－４のように煤が付着しているものも見られた。

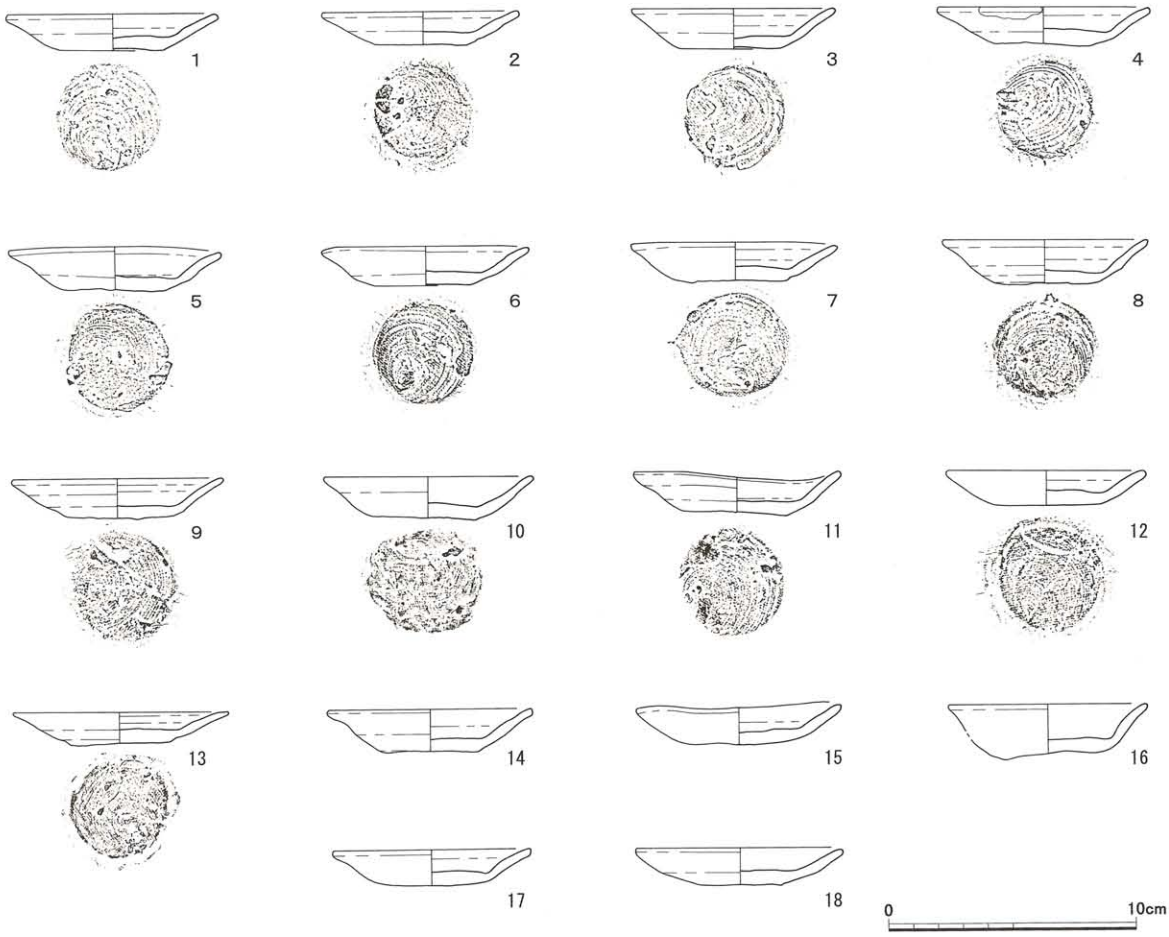
**（時期）**元位置での出土がほとんどないため断言はできないものの、出土した須恵器はすべて出雲５期の範疇に収まると考えられることから、出雲５期を考えておきたい。



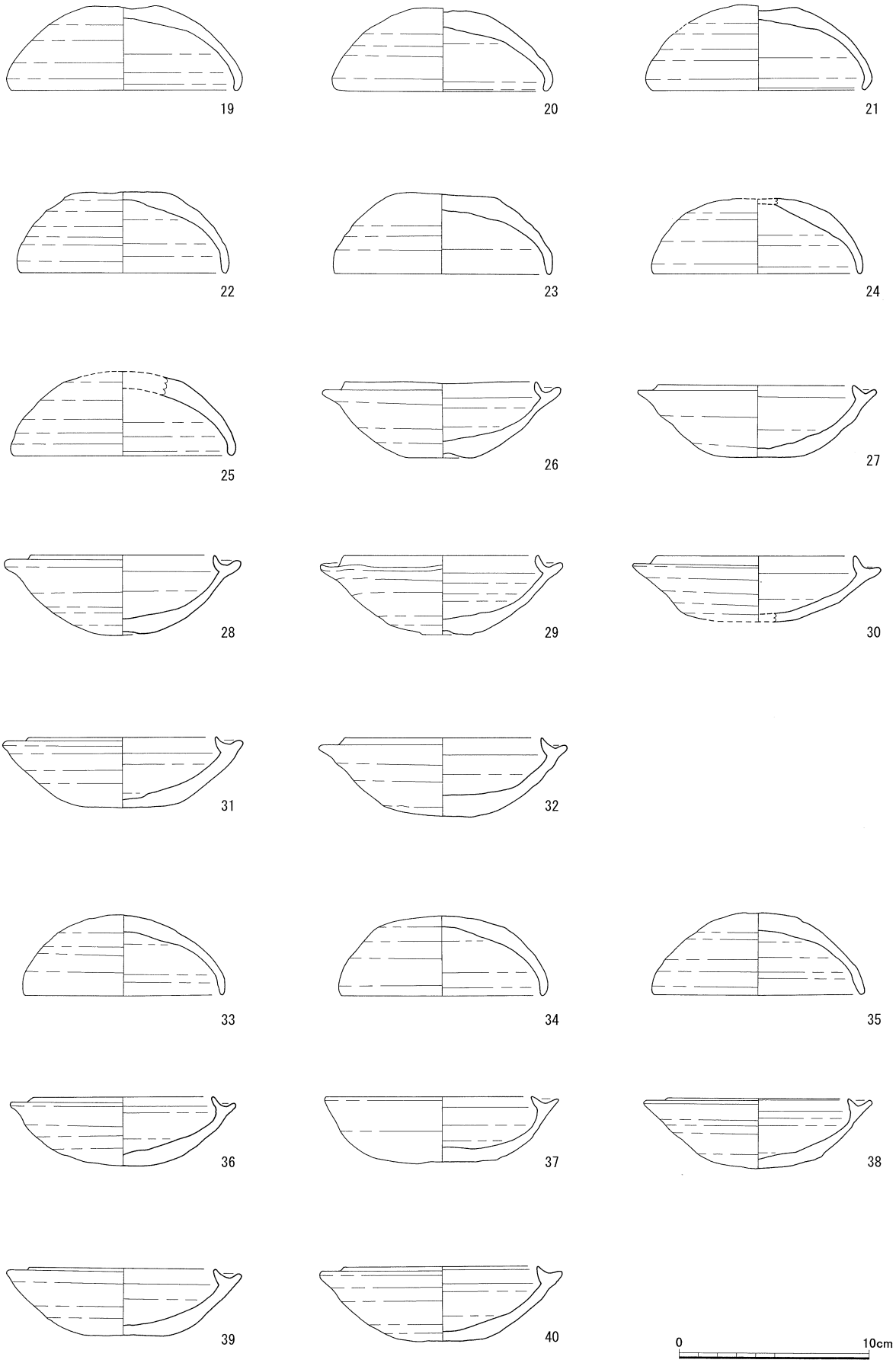

第31図　３号横穴墓実測図（２）（S＝1/60）




第 32 図　３号横穴墓実測図（３）遺物出土状況　（S＝1/30）




第 33 図　３号横穴墓出土遺物実測図（１）（S＝1/3）




第 34 図　3 号横穴墓出土遺物実測図（2）（S＝1/3）

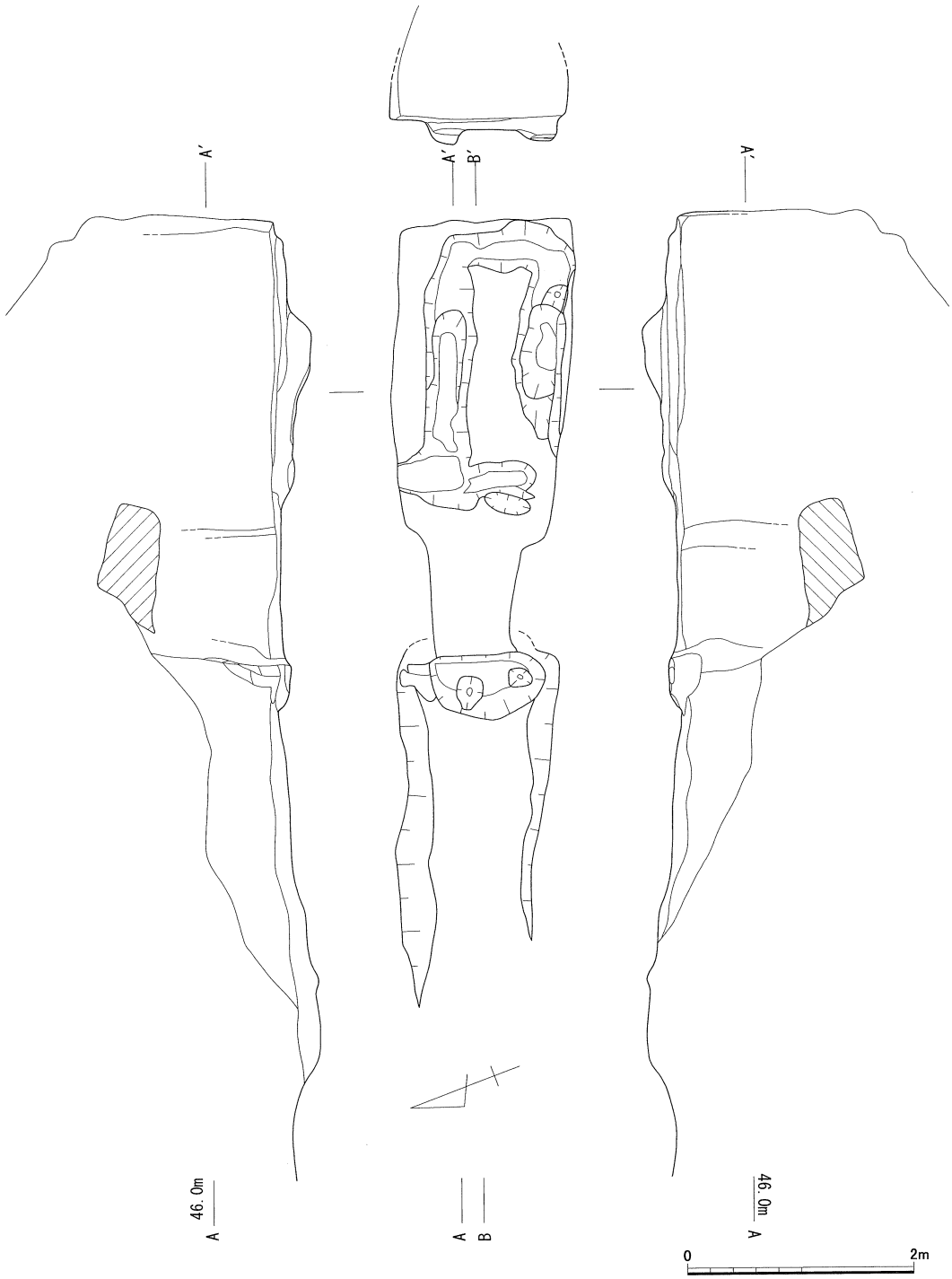
### ４号横穴墓（第35図～第41図）

玄室内に箱形石棺を内包する横穴墓である。調査時点ですでに天井部分は崩落し原形を留めていないが、遺物などの残りは良いものである。調査前は埋没していた。

**（立地）** 東側斜面に位置している。３号横穴墓からは北に５ｍのところにあたり、床面での標高は45.5ｍを測る。主軸はW―22°―Nである。

**（規模・形態）**（第35図）

**前庭部**　３号横穴墓同様に後世の掘削や墓地造成に伴って、一部失われているところがあるものと思われるが、検出時は長さ2.8ｍ、幅0.85ｍを測る。他の横穴墓と比較してやや狭いものである。

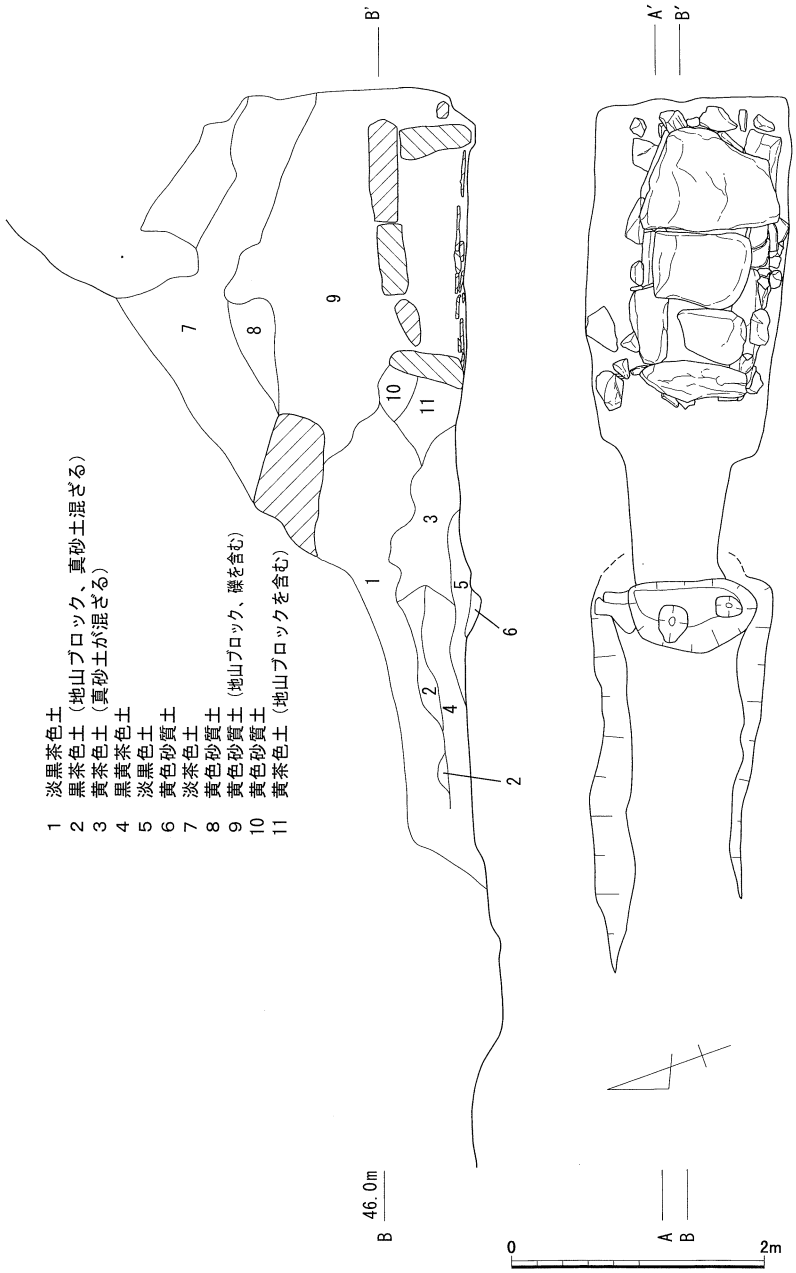



第 35 図　4号横穴墓実測図（1）（S＝ 1/60）

**閉塞施設**　前庭部と玄門部の境には、閉塞の痕跡と考えられる長さ1.0m、幅0.5mの浅い溝が認められた。この付近ではわずかに板状の石が確認されているが、これは玄室内の石棺に伴うものと考えられ、閉塞には木製の板などが用いられたものと思われる。

**玄門部**　長さ1.1m、幅は前庭部側で0.7m、玄室側では0.85mを測り、玄室側にむかって広がっている。断面形は崩落により不明である。

**玄　室**　平面形は基本的には長方形を呈しているが、右袖と左袖の位置がずれているうえ右壁がわずかに内側に入って、やや不整形である。規模は長さが右壁で2.8m、左壁では2.6m、幅は奥壁側で1.5m、玄門部側では1.2mを測る。この横穴墓も調査時点で既に天井が崩落しており断面形は不明であるが、残存している奥壁と側壁の一部の様子から、斜辺が膨らみをもつ三角形になるものと思われる。奥壁は垂直気味に立ち上がる。




第36図　４号横穴墓実測図（２）（S＝1/60）

**（土層状況）**（第36図）　前庭部から玄室まで土砂が堆積していた。前庭部の２層と４層は閉塞がなされていたと考えられる付近までで、そこから玄門部にかけては３層が堆積していた。玄室内には天井崩落土と考えられる９～11層が堆積していた。また１層は自然堆積と考えられる層で玄門部にも流入していた。

以上の状況から、第１次埋葬が行われた後の埋土または堆積土が２・３・４層、その後の天井崩落土が10・11層であるものと考えられる。その段階で玄室内はある程度土砂で埋まっていたことが推測される。そしてその後１層が流入し、再び天井が崩落したものと思われる。

**（石棺）**（第37図）　組み合わせ式の箱形石棺で、玄室右壁に沿って設置されていた。石棺は規模が内法で測って長さ1.65m、幅0.5mのもので、比較的大きな重量感のある割石で構成されている。また、２種類の石材が使用されており、蓋石・棺身と床石とでは異なっている。

石棺各部の概要は次のとおりである。

**蓋　石**　蓋石は３枚の石で構成される。石は奥壁側に配されたのが最大のもので、長さ約80cm、幅約100cmを測り、厚みと重量をもっている。それに対し玄門部側のものはその半分程度の大きさしかない。玄室奥壁側から玄門部側に行くにつれ使用される石が小さくなっており、配石状況は異なる。

**棺　身**　棺身は８枚の石で構成され、各石は玄室床面を10～20cm程度掘り込んで据えられていた。奥壁側では小口石を側石で挟み、玄門側では逆に側石が挟まれる構造となっている。石は大きさに違いが見られ、小口石では蓋石とは逆に玄門側のものが奥壁側のものに対して大きなものとなっている。玄門側小口石は棺身を構成している石の中でも最大のもので、その上面はそれに接する側石の上面よりも高くなっている。このため玄門部からみると重厚かつ大きく見える。また側石は６枚の石からなるが、小口石に接する部分の石に大きめの石が用いられていた。

**棺　床**　床面には全面的に板状の石が敷かれていた。石は大小さまざまあるが厚さが３cm前後のものである。前述のとおり棺を構成する石とは異なった石が用いられている。

**（遺物出土状況）**（第38図）　遺物は前庭部及び玄室内から出土している。

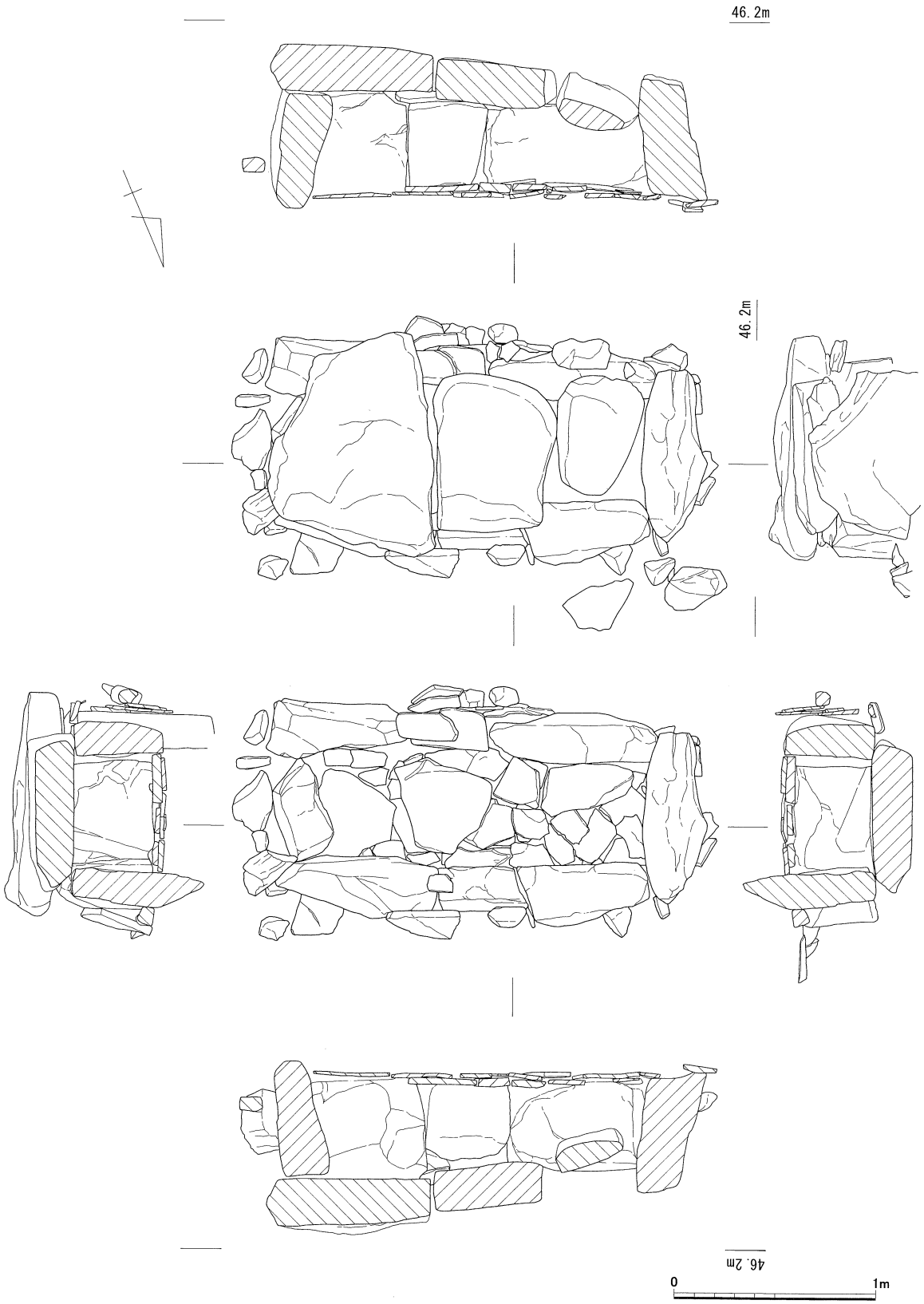
**前庭部**　閉塞付近で瑯の口縁部や刀子が出土したほか、須恵器坏が床面に近いところで出土した。

**玄　室**　石棺周辺で壺や蓋坏などの須恵器、大刀などが出土した。壺は石棺を取り囲むように３カ所に置かれていた。石棺左側のものは検出時既に壊れていたが、これは天井が崩落した際になったもので、本来は他の２つのものと同様に完形のまま置かれていたものと考えられる。その他の遺物は、石棺左側に置かれていた須恵器坏１点と瑯１点以外すべて玄室右側壁と石棺との隙間から出土した。特に中央付近では投げ込まれたかのような状況であった。大刀は左壁沿いに、切先を奥側に向けて置かれていた。

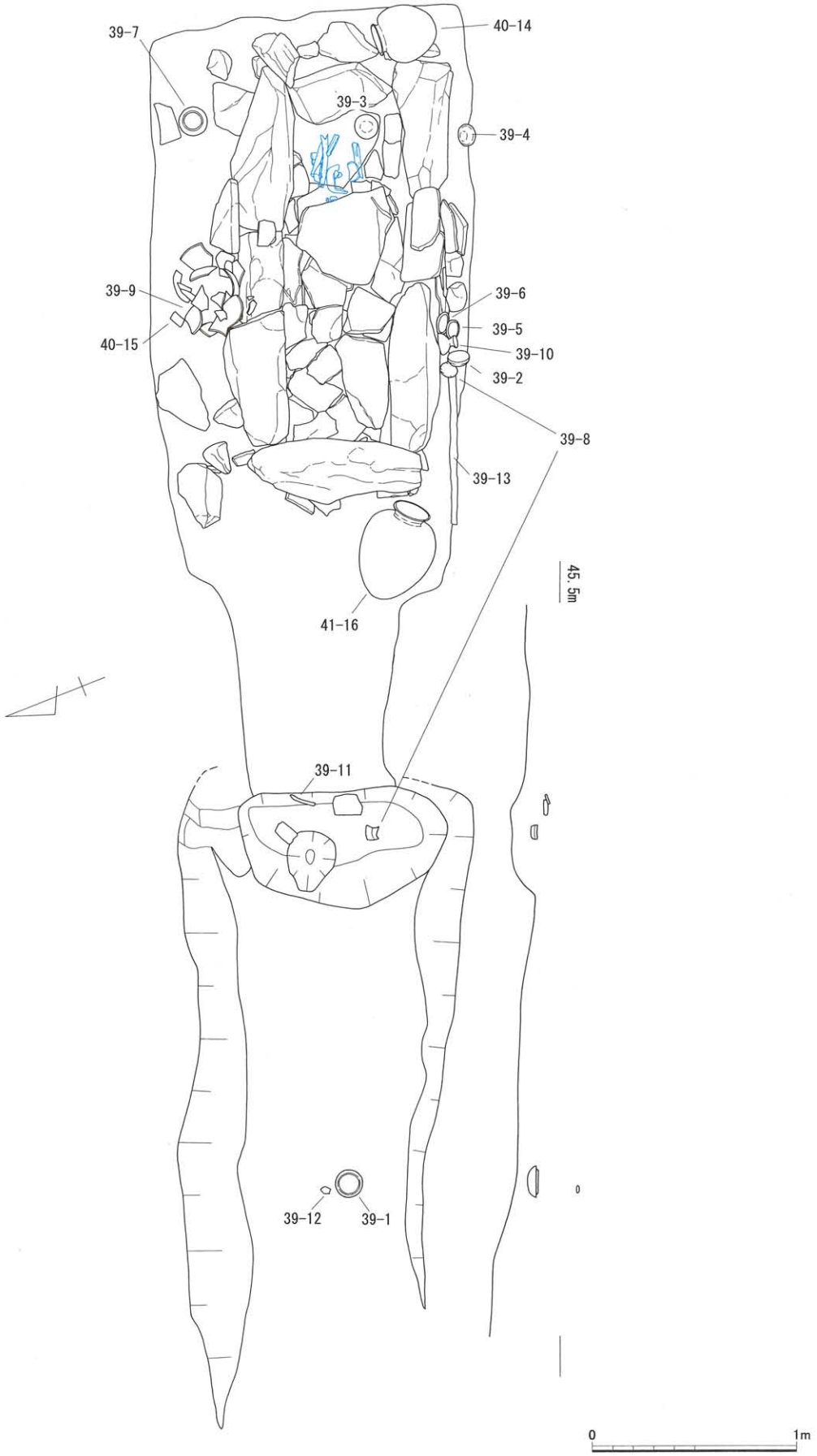
**石棺内**　石棺内では須恵器蓋が置かれていた。その近くでは人骨が集骨状態で出土しており、枕を意識したものと考えられる。なお人骨の概要については第７章に譲る。

**（出土遺物）**（第39～41、第８・９表）　出土した遺物は第39～41図に掲載したもので、詳細については第８・９表に記載している。須恵器のほか鉄器も出土した。須恵器の１と８の一部、鉄器の11と12が前庭部で出土したほかは全て玄室内からの出土である。須恵器の蓋坏はすべてナデによる調整が施されている。10の高坏は２方透かしであるが、１方は切れ目となっている。瑯は体部に刺突文の見られないものである。また、13は鉄製の大刀で長さ87.5cmを測るものである。両関で目釘も確認できる。

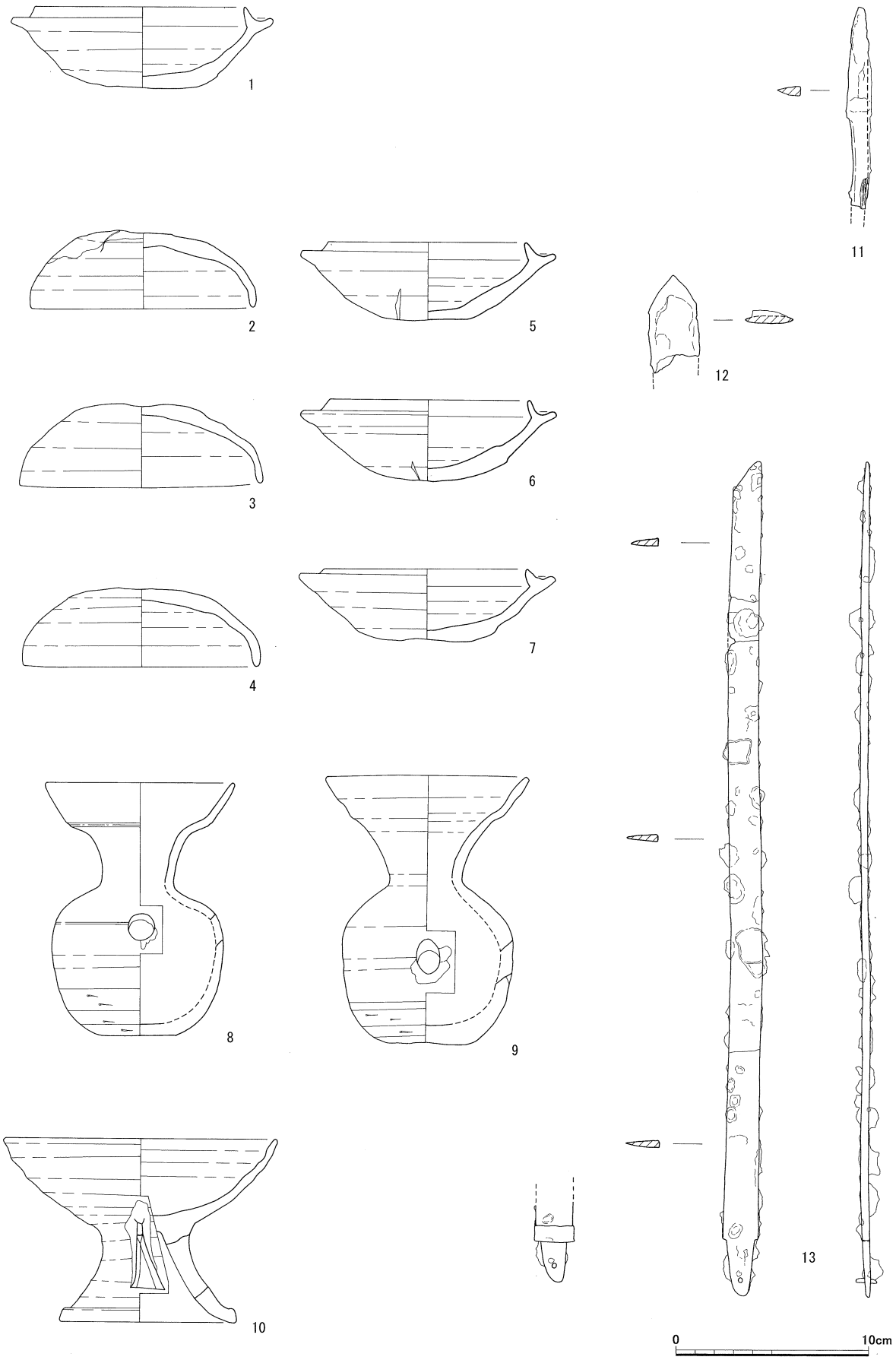
**（時期）** 高坏や甕のように若干時期の新しい要素をもつものも見られるが、出土した須恵器はほぼ５期の範疇に収まるものと考えられる。したがって出雲５期を中心とした時期が考えられる。



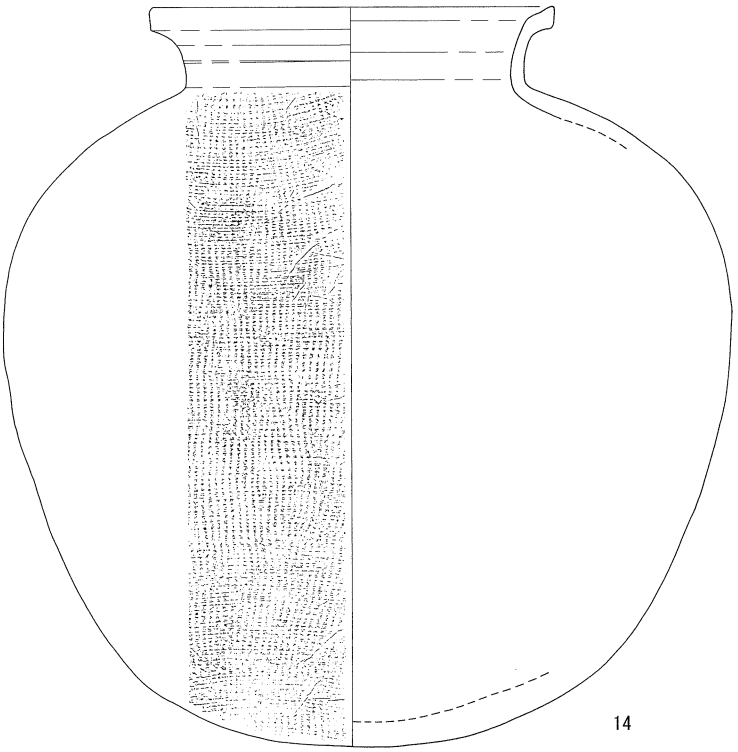

第 37 図　４号横穴墓石棺実測図　（S＝1/30）

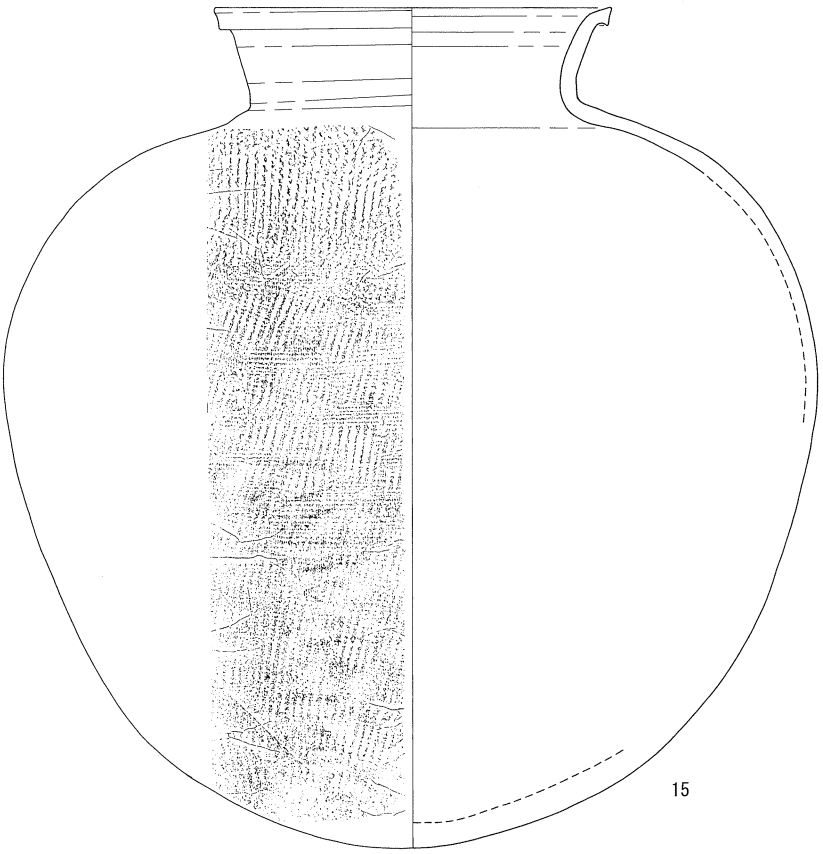



第38図　4号横穴墓実測図（3）遺物出土状況　（S＝1/30）



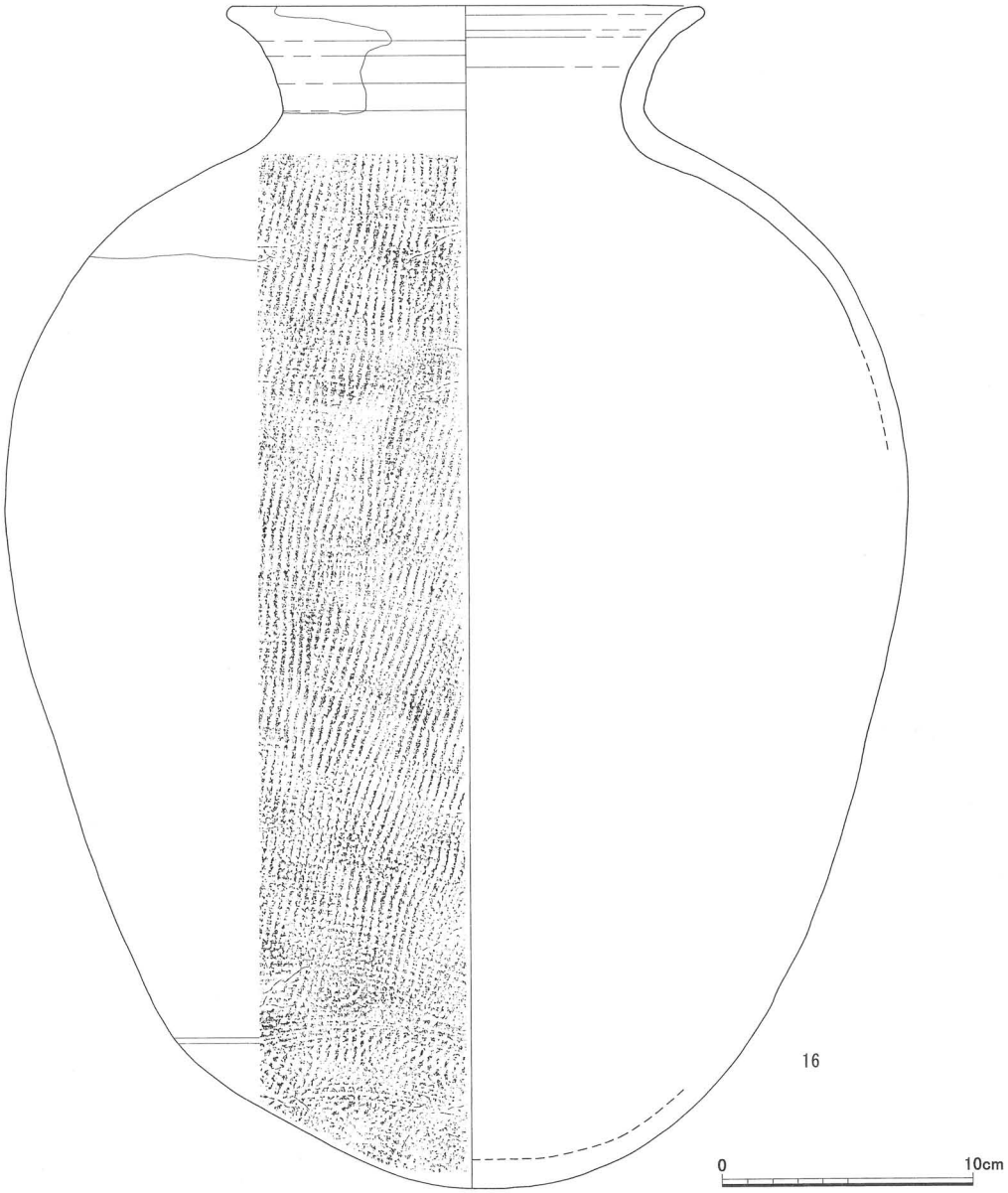

第 39 図　４号横穴墓出土遺物実測図（１）（S＝1/3、13 は S＝1/6）




0　10cm

第 40 図　4 号横穴墓出土遺物実測図（2）（S = 1/3）




第41図　4号横穴墓出土遺物実測図（3）（S＝1/3）

4号横穴墓出土遺物

### ５号横穴墓（第42図）

玄室と玄門部との境が不明瞭で、また前庭部と玄門部・玄室の間に段差がある小型の横穴墓である。天井や壁面は既に崩落しているうえ、後世に墓も造られていて残存状況は良くない。調査前は埋没していた。

**（立地）** 東側斜面に位置している。３号横穴墓の南すぐのところにあり、床面での標高は46.5mを測る。主軸はW—30°—Nである。

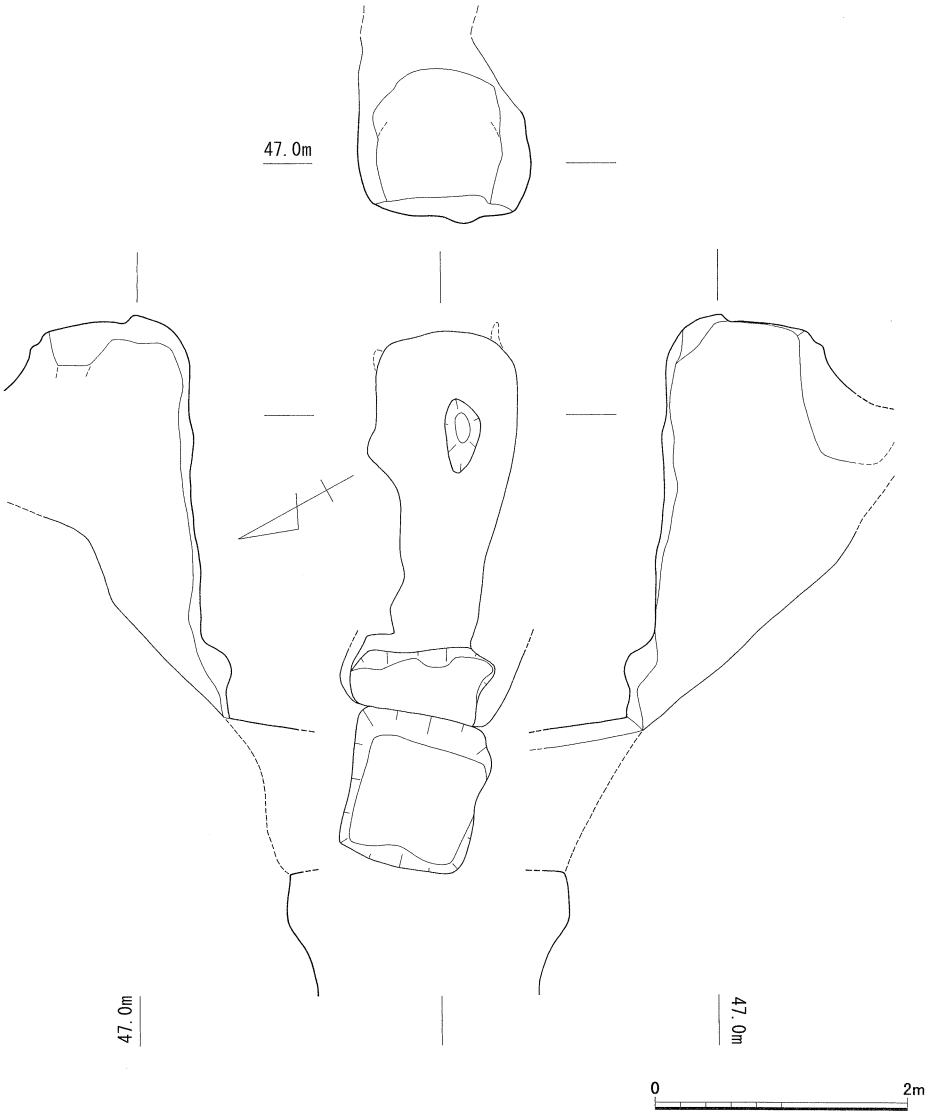
**（規模・形態）**

**前庭部**　後世の墓に切られており概要はほとんど不明である。規模は残存部分で測って幅約１m、長さは0.4mである。

**玄門部・玄室**　玄門部と玄室の境は不明瞭である。規模は長さ2.5m、幅が奥壁側で1.1m、前庭部側で0.6mを測る。天井部分は崩落しておりはっきりとしたことは不明であるが、奥壁の様子からは断面は半円状であったと想定される。床面では１カ所窪みが確認されたが、その性格については明らかにできなかった。

**（遺物出土状況）** 遺物は出土しなかった。

**（時期）** 時期を判断する材料がなく不明である。




第42図　５号横穴墓実測図　（S＝1/60）

### ６号横穴墓（第43図～第47図）

玄門部と玄室との境が不明瞭で小型の横穴墓である。天井部分は一部崩落しているものの、比較的残りは良い。調査前は埋没していた。

**（立地）** 東側斜面に位置する。東側斜面に造られるほかの横穴墓よりやや高いところにあり、床面での標高は48.5mを測る。主軸はW—34°—Nである。

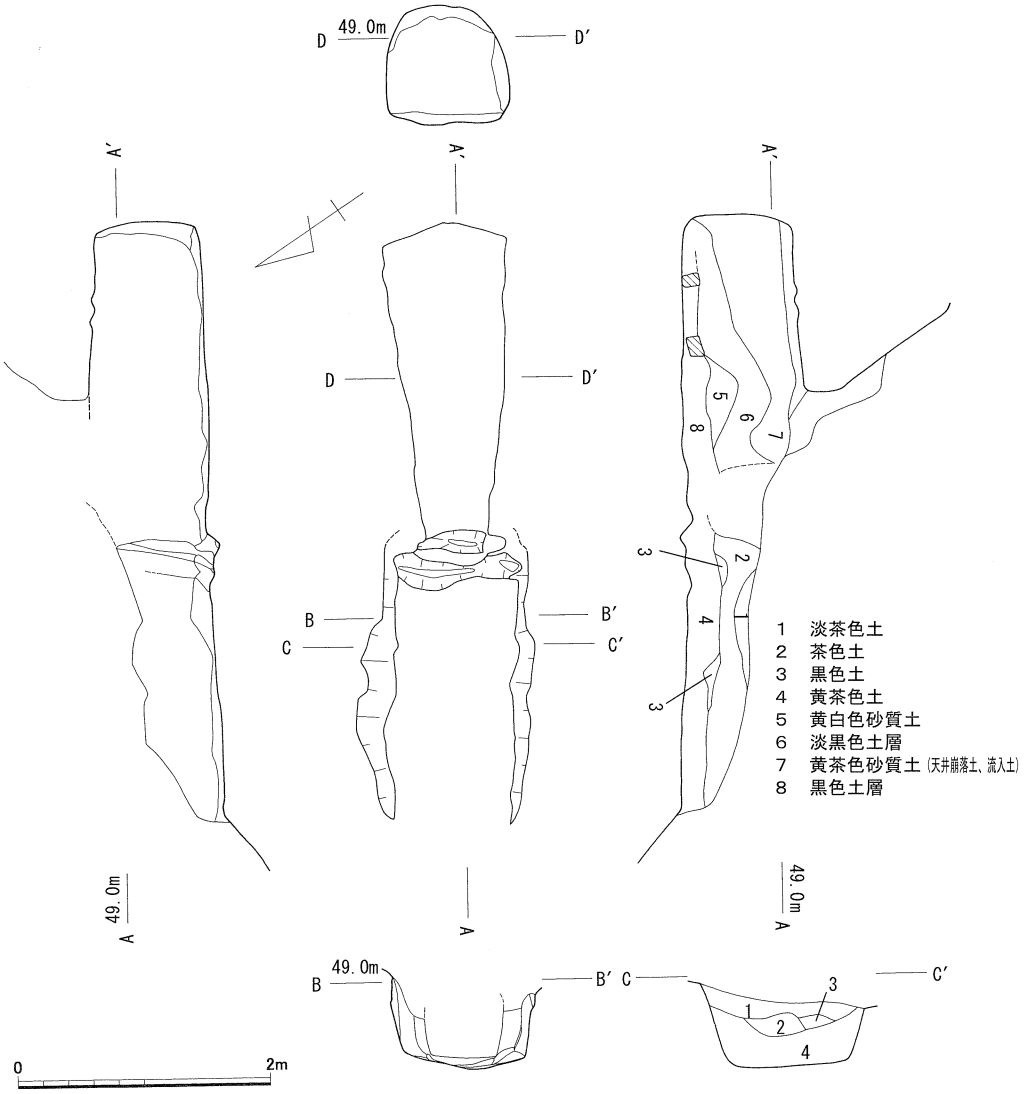
**（規模・形態）**（第43図）

**前庭部**　長さ約2.2m、幅約0.9mを測る。４号横穴墓と同様にやや狭い前庭部である。

**閉塞施設**　前庭部と玄門部・玄室の境付近の床面では、閉塞の痕跡と考えられる２つの浅い溝が確認された。石などは出土していないことから、木製の板などによる閉塞が行われていたものと想定される。

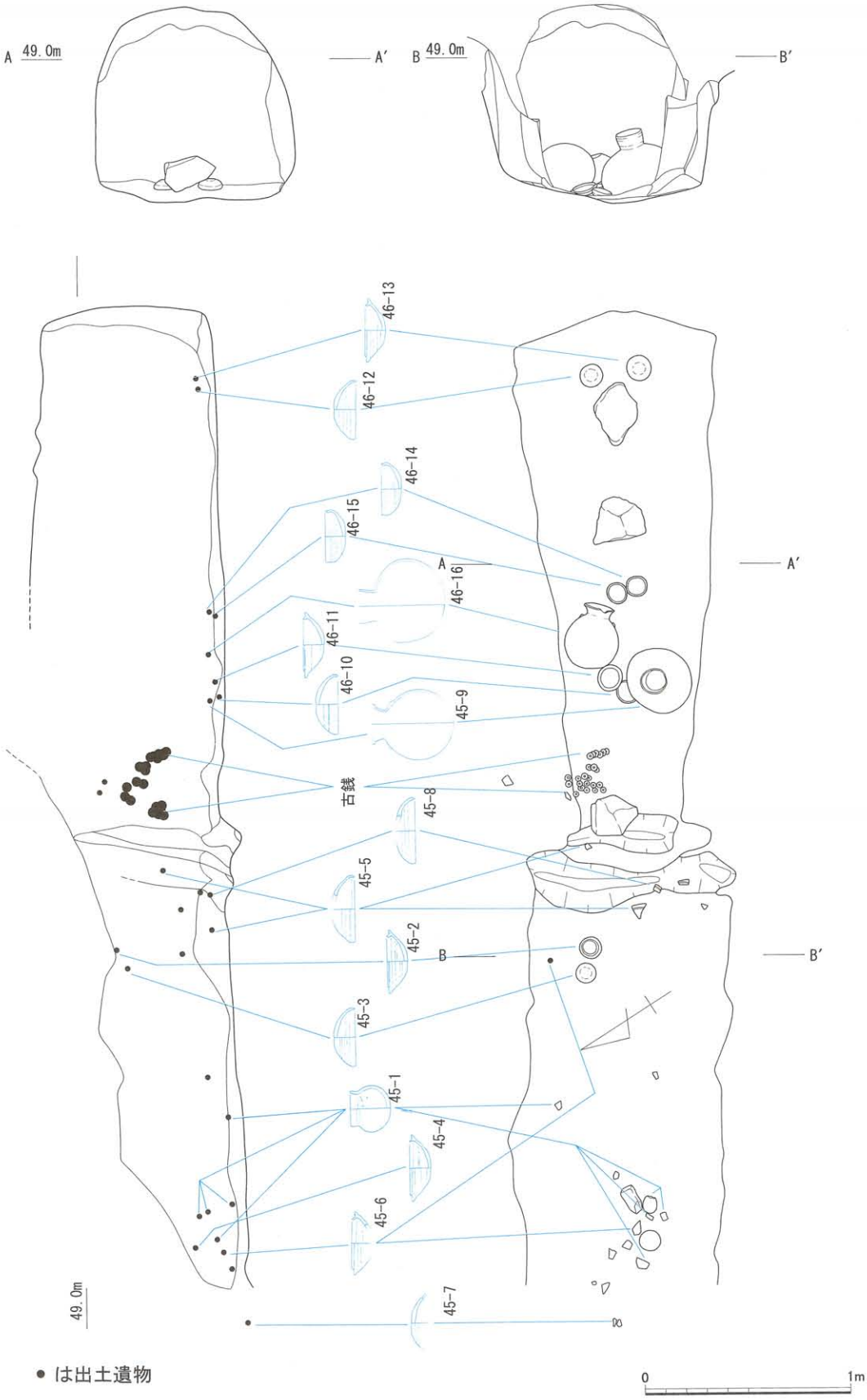
**玄門部・玄室**　玄門部と玄室との境は不明瞭である。規模は長さ2.6m、幅が前庭部側で0.5m、玄室奥壁側で1.0m、高さが0.8mで、非常に狭い空間となっている。平面形は縦長の台形状を、また断面形は半円形を呈しており、奥壁は垂直に立ち上がる。

また玄室内では20～30cmを測る石が２つ認められた。遺体を安置する施設を固定するための石またはそれの土台石と考えられる。



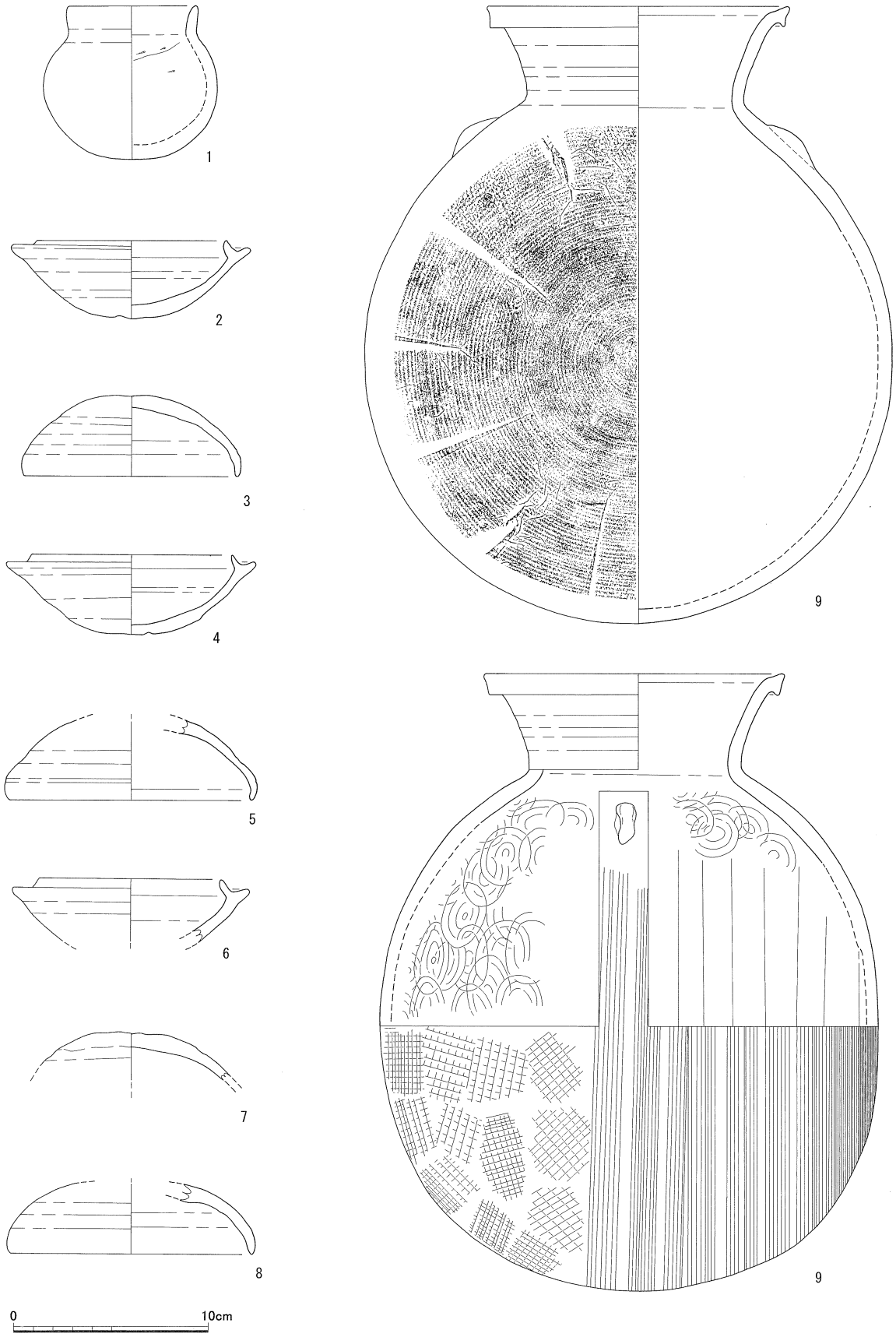

第43図　６号横穴墓実測図（１）（S＝1/60）

**（土層状況）**（第43図）　前庭部から玄室内まで土砂が堆積していた。平面では確認できなかったが閉塞部付近には中世の遺構が存在していたようで、このため一部不明確な所があるものの、２～４層、８層が埋葬に伴うものでその他の５～７層は天井崩落土や流入土になると考えられる。閉塞




第44図　６号横穴墓実測図（２）遺物出土状況　（S＝1/30）

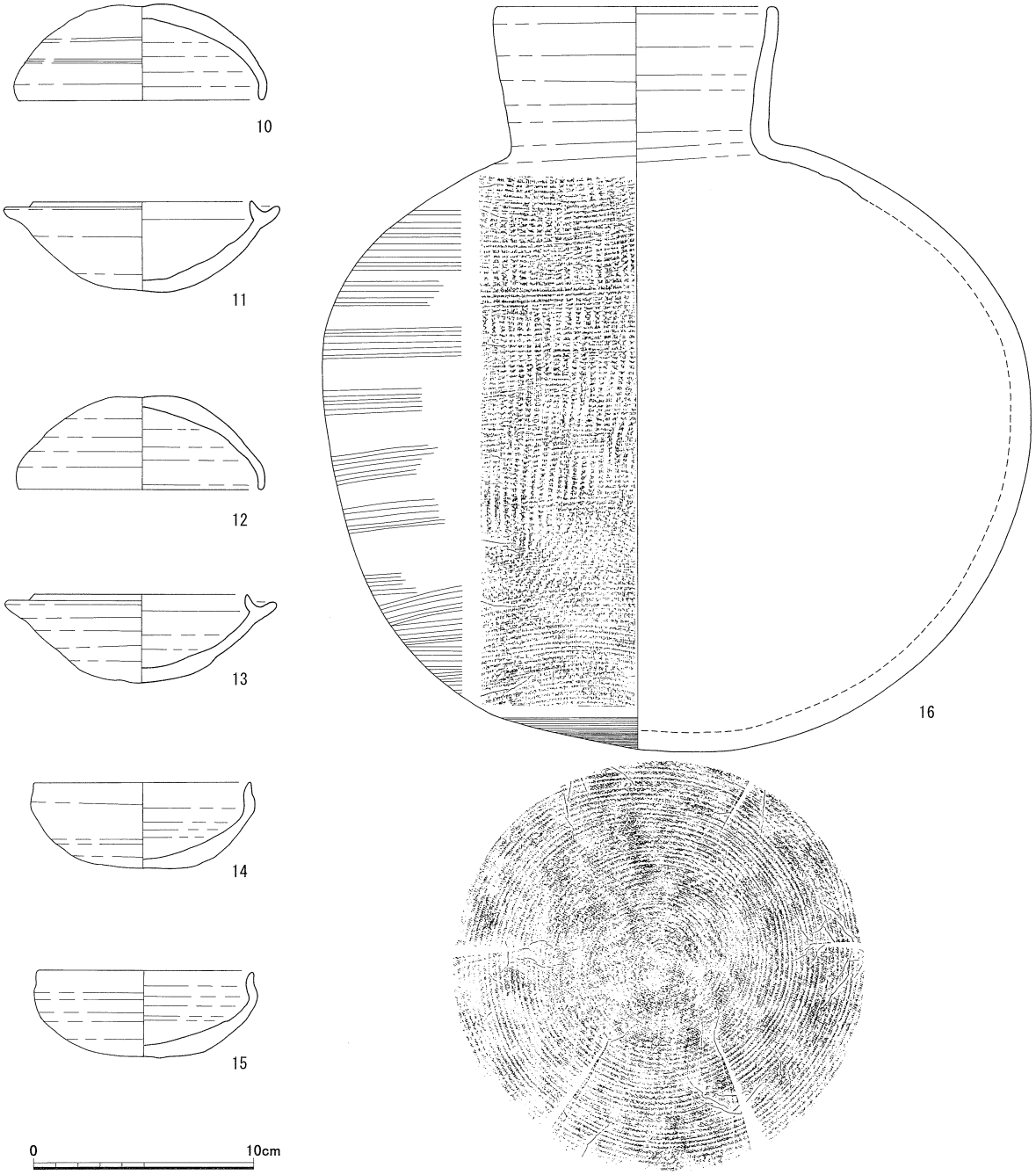
部と出土遺物の状況からは一度追葬のあったことが考えられるが、土層からは追葬や侵入の有無は分からなかった。




第45図　6号横穴墓出土遺物実測図(1)　(S＝1/3)

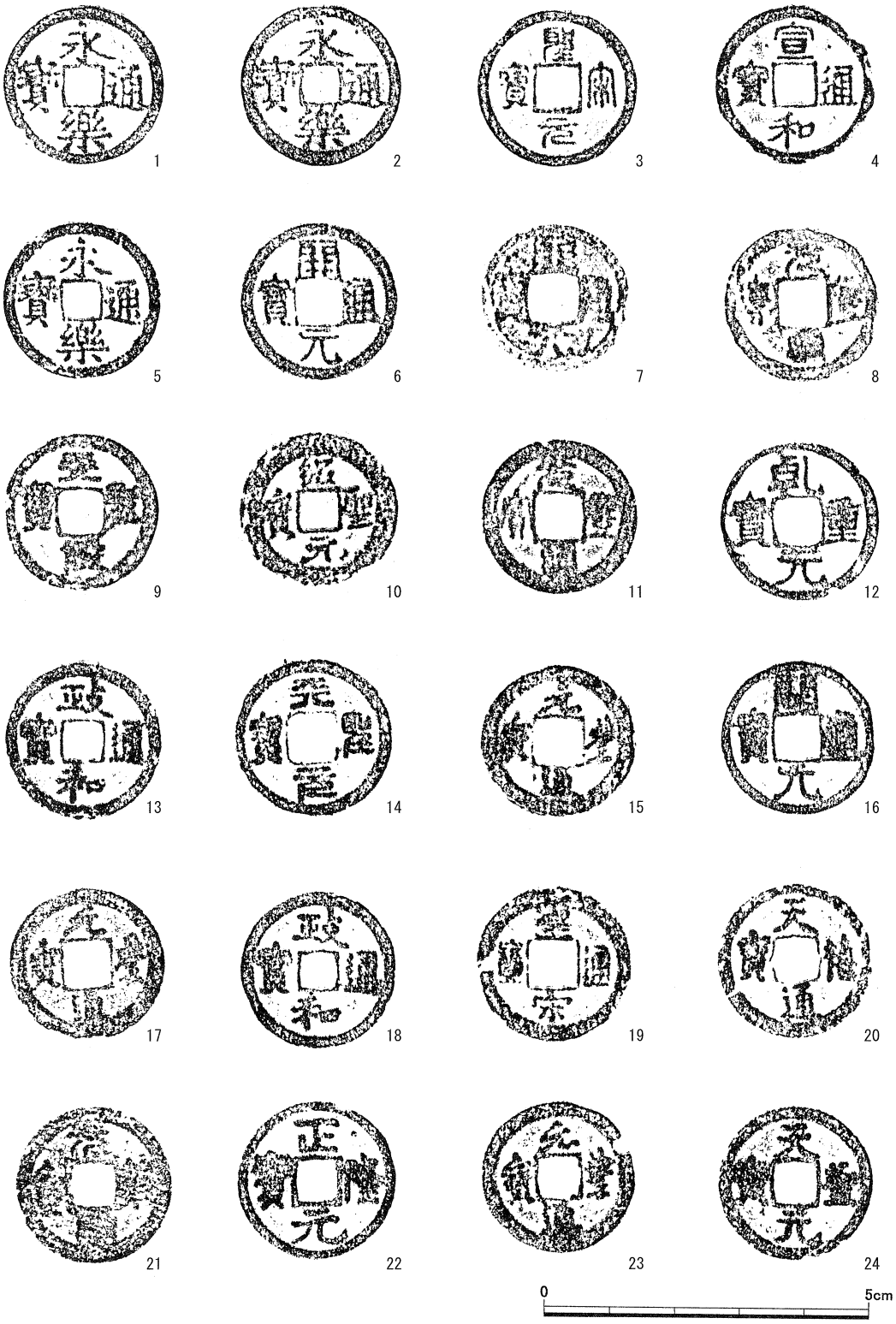
**（遺物出土状況）**（第44図）　前庭部、玄室ともに多くの遺物が出土している。玄室内床面では奥側に坏蓋２つが、前庭部側では坏身２つと提瓶・壺がそれぞれ置かれていた。また玄室中央付近にも坏が置かれていた。前庭部では主に床面付近と２層付近から出土しており、その多くは破片である。また前述のとおり閉塞部付近では中世の遺物も出土している。

**（出土遺物）**（第45～49図、第10表）　出土した遺物は第45・46図に掲載したもので、詳細については第10表に記載した。１～８が前庭部、９～16が玄室内出土のものである。また、第47図は古銭である。ほかにも中世の土器の破片などが出土したが図化はできなかった。須恵器の蓋坏はいずれのものもナデによる調整が施されている。このうち玄室内出土の14、15は他のものと若干時期を異にするものと思われる。図では坏身としているが、坏蓋である可能性もある。また９の提瓶は把手が痕跡化している。１は小型壺で、表面は赤色顔料が塗られている。




第46図　６号横穴墓出土遺物実測図（２）（S＝1/3）

（時期）出土した遺物は基本的に出雲５期と考えられるが、玄室内出土の２点は新しい時期のものと思われる。したがって出雲５期～出雲６期にかけて使用されたものと考えられる。




第 47 図　６号横穴墓出土銭貨拓影　（S＝1/1）

第５表　６号横穴墓出土銭貨計測表（第 47 図）

| No. | 出土地 | 名　称 | 初鋳年 | 銭径(A)/銭径(B) (mm) | | 内径(C)/内径(D) (mm) | | 銭　厚 (mm) | 量　目 (g) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 6号横穴墓 | 永楽通寶 | 1408年 | 24.70 | 24.79 | 22.05 | 22.05 | 1.08～1.20 | 2.85 |
| 2 | 6号横穴墓 | 永楽通寶 | 1408年 | 24.95 | 24.90 | 21.85 | 21.60 | 0.79～1.09 | 3.22 |
| 3 | 6号横穴墓 | 聖宋元寶 | 1101年 | 24.50 | 24.60 | 21.42 | 21.63 | 0.88～1.05 | 2.37 |
| 4 | 6号横穴墓 | 宣和通寶 | 1119年 | 24.70 | 24.70 | 21.11 | 21.40 | 1.09～1.32 | 3.45 |
| 5 | 6号横穴墓 | 永楽通寶 | 1408年 | 24.50 | 24.45 | 21.79 | 21.20 | 1.09～1.25 | 2.91 |
| 6 | 6号横穴墓 | 開元通寶 | 621年 | 24.40 | 24.45 | 21.15 | 21.15 | 0.95～1.10 | 2.30 |
| 7 | 6号横穴墓 | 開元通寶 | 621年 | 23.00 | 22.75 | * | * | 0.35～0.58 | 1.52 |
| 8 | 6号横穴墓 | 元豊通寶 | 1078年 | 23.84 | 24.12 | 20.30 | 20.29 | 0.83～1.13 | 3.46 |
| 9 | 6号横穴墓 | 元豊通寶 | 1078年 | 24.41 | 24.12 | 20.95 | 20.68 | 1.00～1.21 | 3.57 |
| 10 | 6号横穴墓 | 紹聖元寶 | 1094年 | 24.11 | 24.60 | 18.35 | 18.25 | 0.92～1.12 | 3.62 |
| 11 | 6号横穴墓 | 元豊通寶 | 1078年 | 24.15 | 24.20 | 19.20 | 19.82 | 0.70～0.80 | 2.52 |
| 12 | 6号横穴墓 | 乾元重寶 | 758年 | 24.80 | 24.89 | 22.02 | 22.20 | * ～ * | 5.44 |
| 13 | 6号横穴墓 | 政和通寶 | 1111年 | 24.22 | 24.20 | 21.00 | 20.70 | 1.00～1.21 | 3.22 |
| 14 | 6号横穴墓 | 天聖元寶 | 1023年 | 24.61 | 24.70 | 21.64 | 21.65 | 0.90～1.09 | 2.63 |
| 15 | 6号横穴墓 | 元豊通寶 | 1078年 | 24.00 | 23.70 | 20.21 | 19.88 | 0.85～0.98 | 3.01 |
| 16 | 6号横穴墓 | 開元通寶 | 621年 | 24.20 | 24.10 | 21.22 | 21.70 | 0.72～1.00 | 2.54 |
| 17 | 6号横穴墓 | 元豊通寶 | 1078年 | 23.80 | 24.10 | 19.20 | 19.61 | 0.75～0.95 | 3.14 |
| 18 | 6号横穴墓 | 政和通寶 | 1111年 | 24.60 | 24.25 | 19.78 | 19.31 | 0.88～0.95 | 2.81 |
| 19 | 6号横穴墓 | 皇宋通寶 | 1038年 | 24.25 | 23.95 | 20.10 | 20.10 | 0.95～1.10 | 2.24 |
| 20 | 6号横穴墓 | 天禧通寶 | 1017年 | 23.84 | 23.91 | 20.72 | 20.48 | 0.75～0.95 | 2.52 |
| 21 | 6号横穴墓 | 元豊通寶？ | 1078年? | 24.32 | 24.21 | 20.62 | 20.42 | 0.58～0.82 | 2.80 |
| 22 | 6号横穴墓 | 正隆元寶 | 1157年 | 24.65 | 24.71 | 22.30 | 22.30 | 0.89～1.12 | 3.36 |
| 23 | 6号横穴墓 | 元豊通寶 | 1078年 | 23.69 | 23.81 | 19.91 | 19.92 | 0.74～1.14 | 3.17 |
| 24 | 6号横穴墓 | 天聖元寶 | 1023年 | 24.05 | 24.00 | 20.71 | 20.85 | 0.85～1.00 | 3.04 |

### ７号横穴墓（第48図～第50図）

玄室と玄門部との境ははっきりとしているが、やや片袖状の横穴墓である。立地・出土遺物ともほかの横穴墓と異なった様相をみせている。天井部分は一部を残して崩落していた。また調査前は埋没していた。

**（立地）** 北側斜面に位置している。標高約50mを測り、北側斜面にあるほかの横穴墓よりも一段高いところにある。主軸はN—14°—Wである。調査前は埋没していた。

**（規模・概要）**（第48図）

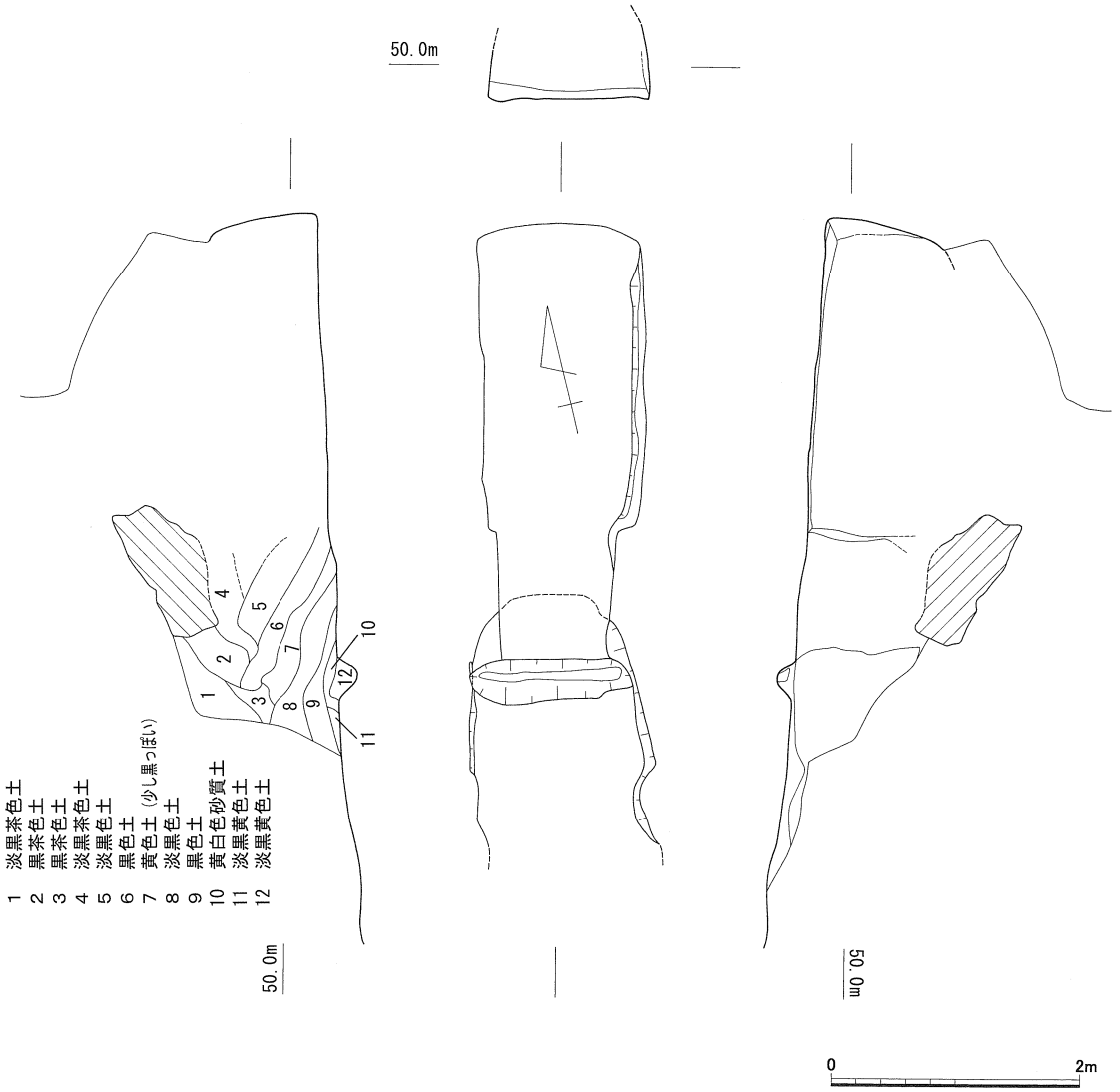
**前庭部**　前庭部はほとんど認められない。元々それほどの規模がなかったのか、後世に削り取られて残っていなかったのかは分からなかった。現状では長さ約１m、幅約1.2mを測る。

**閉塞施設**　前庭部と玄門部との間には閉塞の痕跡と考えられる浅い溝が認められた。ほかのものと同様に、木製の板などによる閉塞がなされていたものと考えられる。

**玄門部**　長さ１m、幅は前庭部側で0.85m、玄室側で１mを測り、玄室側がやや広くなっている。断面形は天井部分が一部しか残っていなかったため不明である。

**玄　室**　平面形は長方形を呈しており、規模は長さ2.4m、幅約1.2mを測る。玄門部が玄室に向かって左側寄りについているため片袖状となっている。断面形は天井部分が崩落しているため不明であるが、残っている壁面などから推測して斜辺が膨らみを持つ三角形になるものと思われる。奥壁は垂直気味に立ち上がる。

玄室床面右側では右壁に沿って上面で幅10cm程度を測る溝が掘られていた。この溝は一部玄門部にも伸びているが、奥壁側と左壁側では認められなかった。



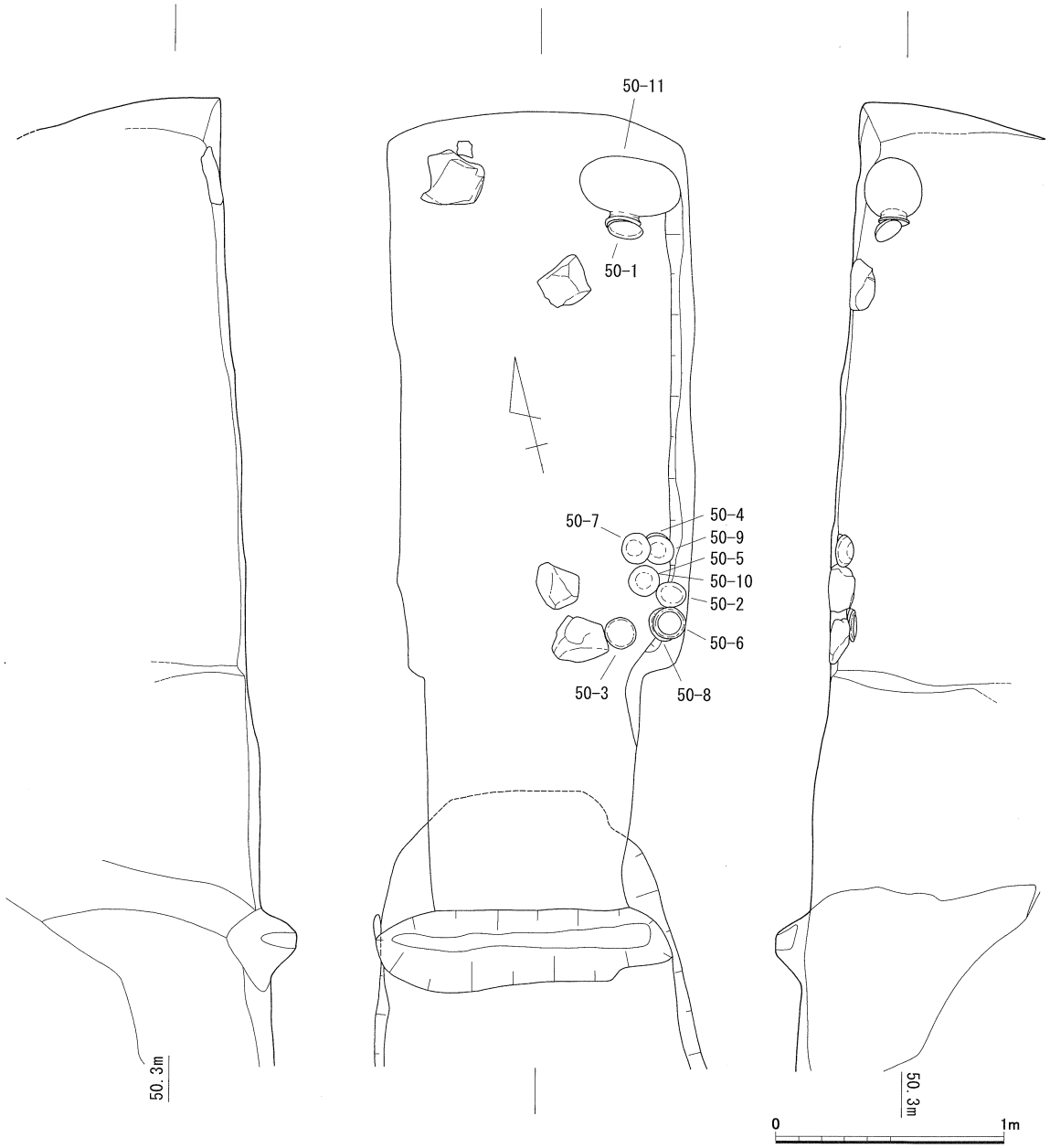

第48図　７号横穴墓実測図　（S＝1/60）

また玄室中央から左側にかけて４個の石が確認された。その状況から推測して棺または板を乗せる土台石の役割を持っていた石である思われる。

**（土層状況）**（第48図）　玄門部から玄室内にかけて土砂が堆積していた。玄室内に堆積したものは天井崩落土であるが、玄門部のものは一様に斜めに堆積していることから流入土であるものと思われる。

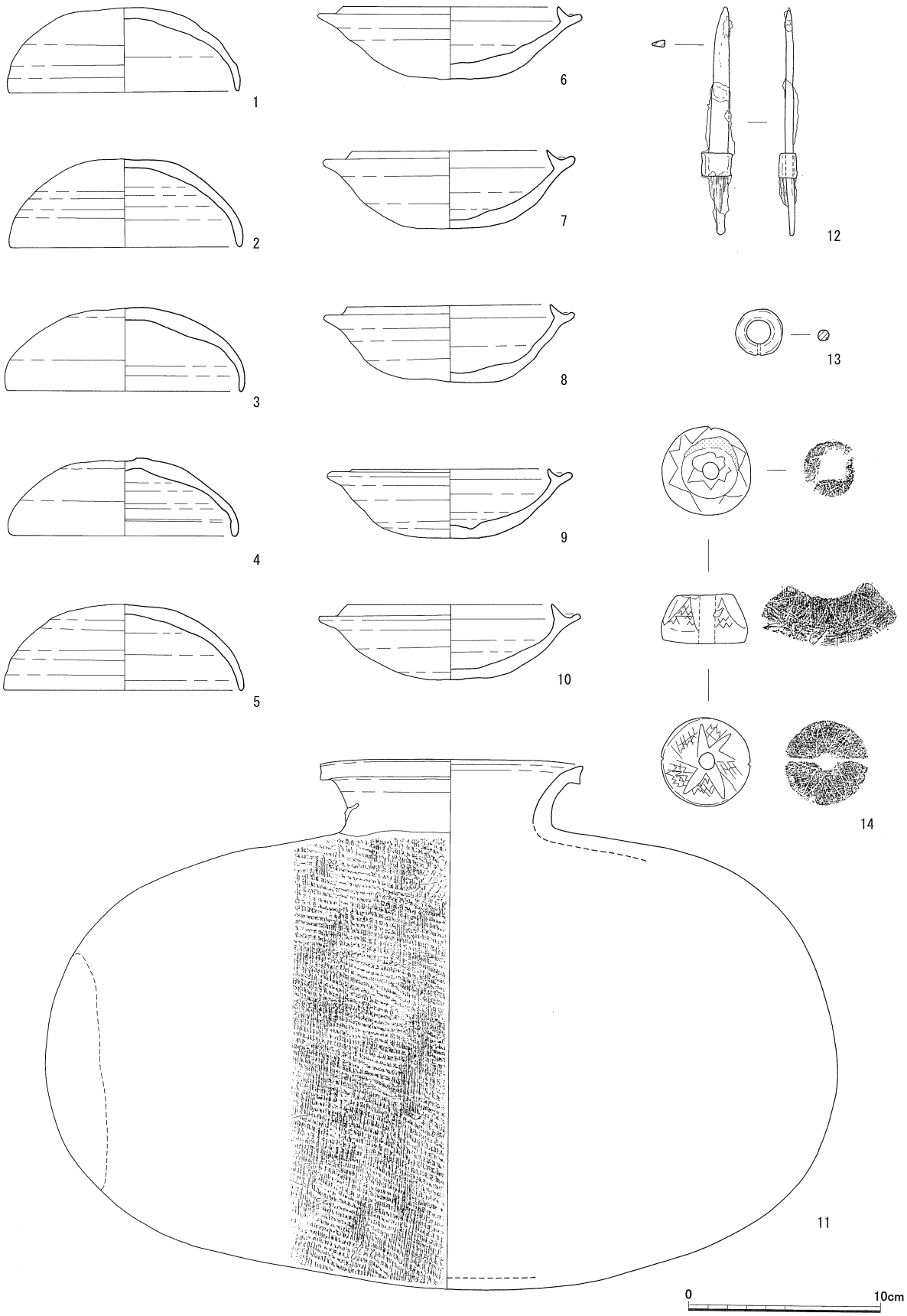
**（遺物出土状況）**（第49図）　遺物はすべて玄室内から出土した。蓋坏や横瓶など須恵器はすべて玄室右側に置かれており、石の内側に当たる中央から左側にかけては出土していない。なお、耳環や紡錘車も出土しているが、これらは土砂をふるいにかけた際の出土であり位置を特定できていない。

**（出土遺物）**（第50図、第11・12表）　出土した遺物は第50図に掲載したもので、詳細については第11・12表に記載した。13の耳環や14の紡錘車などほかの横穴墓からは出土していないものがある。また２号横穴墓以外では唯一、横瓶も出土している。蓋坏はいずれのものもナデによる調整を行うものである。




第 49 図　７号横穴墓玄室内遺物出土状況実測図　（S＝1/30）

**（時期）** 出土した須恵器は出雲５期の範疇に収まるものと考えられる。したがって出雲５期と考えられる。




第 50 図　7号横穴墓出土遺物実測図（S＝ 1/3）

## ８号横穴墓（第52図）

近・現代の墓によって切られており残存状況の良くない横穴墓である。玄室は詳細が不明ではっきりとしたことは言えないが、比較的大型のものになると思われる。調査前は埋没していた。

**（立地）** 東側斜面に位置している。５号横穴墓のすぐ南のあり、床面での標高は45.5mを測る。主軸はN―33°―Wである。調査区の南端付近にあたり、南に数m行くと崖になっている。

**（規模・概要）**

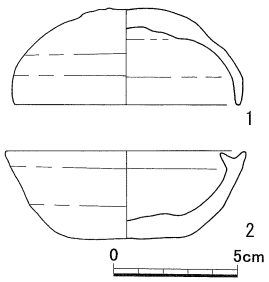
**前庭部・玄門部**　残っておらず不明である。

**玄　室**　わずかに残っている程度である。平面形は基本的には長方形のものと考えられるが、奥壁右側でさらに奥に掘り込まれており不整形となっている。現状での長さは左壁側で2.4mを測る。奥に掘り込まれた部分は約70cm程度を測ることから、中央で計測した場合３mを越える長さであったことも考えられる。断面形は天井部分、壁面ともほとんど残っていないため詳細は不明である。左壁のわずかな残存状況からすると、ほかの横穴墓同様に斜辺が膨らみを持つ三角形になるものと思われる。

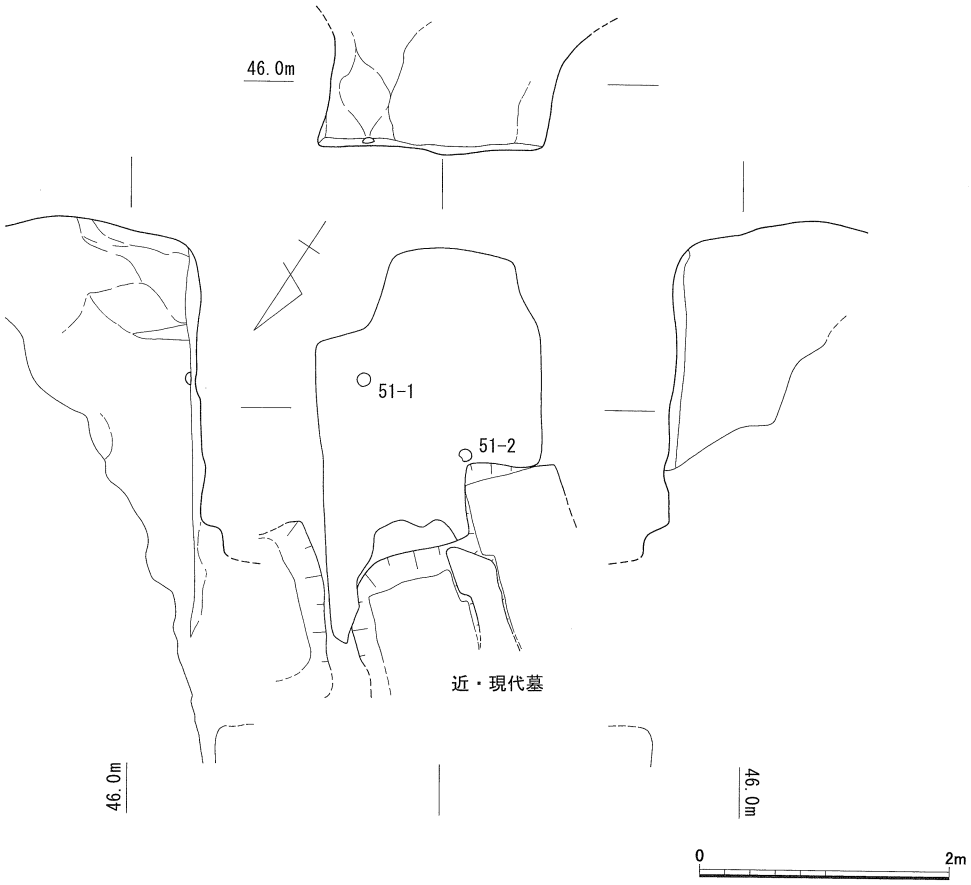
**（遺物出土状況）** 床面直上で須恵器の蓋坏が出土したが、それ以外は認められなかった。

**（出土遺物）** 出土した遺物は第51図に掲載し、詳細については第13表に記載した。蓋坏は口径が10cm未満の小型のものである。

**（時期）** 出土した２点の須恵器から判断して出雲６期が考えられる。




第51図
８号横穴墓出土遺物実測図
（S＝1/3）




第52図　８号横穴墓実測図　（S＝1/60）

## 第６表　２号横穴墓出土遺物観察表（第 24 ～ 29 図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種　別 | 法量（cm） | 手法の特徴 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 34 | ２号横穴墓（前庭部） | 坏蓋（須恵器） | 口径:12.2<br>器高:4.2 | 外面：回転ナデ、ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | １㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 2 | 34 | ２号横穴墓（前庭部） | 坏蓋（須恵器） | 口径:12.6<br>器高:4.4 | 外面：回転ナデ、ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | １㎜程度の砂粒を含む | やや不良 | 淡青灰色 | |
| 3 | 34 | ２号横穴墓（前庭部） | 坏蓋（須恵器） | 口径:11.5<br>最大径14.0<br>器高:3.9 | 外面：回転ナデ、ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | １㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | |
| 4 | | ２号横穴墓（前庭部） | 平瓶（須恵器） | 口径:6.6 | 外面：回転ナデ、カキメ<br>内面：回転ナデ | １㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色（自然釉がかかる） | 把手が痕跡化<br>胴部反転復元 |
| 5 | 34 | ２号横穴墓（前庭部） | 平瓶？（須恵器） | 口径:—<br>器高:— | 外面：回転ナデ、カキメ<br>内面：回転ナデ | １～２㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 反転復元 |
| 6 | 34 | ２号横穴墓（前庭部） | 平瓶（須恵器） | 口径:11.4<br>器高:21.0 | 外面：回転ナデ、カキメ<br>内面：回転ナデ | ２㎜大の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色 | |
| 7 | | ２号横穴墓（前庭部） | 高坏（須恵器） | 口径:15.0 | 外面：回転ナデ、ヘラケズリ後回転ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | １～２㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | 脚部欠損 |
| 8 | | ２号横穴墓（前庭部） | 高坏（須恵器） | 底径:9.5 | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | １㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色 | ２方透かし |
| 9 | 35 | ２号横穴墓（玄室内） | 壺（須恵器） | 口径:5.95<br>器高:30.0 | 外面：回転ナデ、タタキ後カキメ、カキメ<br>内面：回転ナデ、アテ具痕 | ２㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 10 | 34 | ２号横穴墓（玄室内、周辺） | 高坏（須恵器） | 口径:15.1<br>器高:9.25<br>底径:8.6 | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | １㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | ２方透かし |
| 11 | 34 | ２号横穴墓（玄室内） | 高坏（須恵器） | 口径:14.4<br>器高:9.6<br>底径:9.45? | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | １㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 坏部内面にヘラ記号<br>２方透かし<br>１方は切れ目 |
| 12 | 34 | ２号横穴墓（玄室内、前庭部） | 高坏（須恵器） | 口径:14.4<br>器高:9.2<br>底径:8.3 | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | １㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | ２方透かし<br>脚端部の一部を打ち欠く |
| 13 | 35 | ２号横穴墓（玄室内） | 甕（須恵器） | 口径:10.0<br>器高:12.9 | 外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ、沈線<br>内面：回転ナデ | １㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 14 | 35 | ２号横穴墓（玄室内） | 横瓶（須恵器） | 口径:13.8<br>器高:29.5<br>胴部最大値:42.2 | 外面：回転ナデ、平行タタキ後カキメ<br>内面：回転ナデ、アテ具痕 | １～２㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 外面に甕片付着 |
| 15 | 35 | ２号横穴墓（玄室内） | 横瓶（須恵器） | 口径:14.6<br>器高:30.0 | 外面：回転ナデ、タタキ後カキメ<br>内面：回転ナデ、アテ具痕 | １～２㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡黄灰色 | 口縁部反転復元<br>自然釉かかる |
| 16 | | ２号横穴墓（周辺） | 平瓶？（須恵器） | 口径:12.6 | 外面：回転ナデ、カキメ、ヘラケズリ、タタキ<br>内面：回転ナデ、アテ具痕 | １㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 自然釉かかる |
| 17 | 35 | ２号横穴墓（周辺） | 甕（須恵器） | 口径:22.4<br>器高:53.8 | 外面：回転ナデ、丁寧なタタキ<br>内面：回転ナデ、アテ具痕 | １～３㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | |
| 18 | 35 | ２号横穴墓（周辺） | 甕（須恵器） | 口径:(33.0) | 外面：回転ナデ、沈線、波状文<br>内面：回転ナデ、ナデ | １～２㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 暗青灰色 | 13～15条の波状文<br>口径推定復元 |

## 第７表　３号横穴墓出土遺物観察表（第 33・34 図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種　別 | 法量（cm） | 手法の特徴 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 37 | ３号横穴墓（前庭部） | 皿（中世土器） | 口径:8.4<br>器高:1.5<br>底径:4.2 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | １㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 2 | 37 | ３号横穴墓（前庭部） | 皿（中世土器） | 口径:8.0<br>器高:1.3<br>底径:3.8 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | １㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 3 | 37 | ３号横穴墓（前庭部） | 皿（中世土器） | 口径:8.2<br>器高:1.6<br>底径:4.0 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | １㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 37 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.5<br>器高:1.5 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | 口縁部に煤付着 |
| 5 | 37 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.5<br>器高:1.7 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 6 | 37 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.4<br>器高:1.6 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 7 | 37 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.2<br>器高:1.6 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | 全体的にゆがみ有り |
| 8 | | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.3<br>器高:1.8 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 9 | | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 皿<br>(中世土器) | 口径:(8.4)<br>器高:1.6 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | 口径反転復元 |
| 10 | 37 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.4<br>器高:1.7 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 11 | 37 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.2<br>器高:1.7 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | 焼きゆがみ有り |
| 12 | 37 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 皿<br>(中世土器) | 口径:7.8<br>器高:1.4 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 13 | | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 皿<br>(中世土器) | 口径:(8.6)<br>器高:1.25 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | 口径反転復元 |
| 14 | | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.2<br>器高:1.7 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 15 | | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 皿<br>(中世土器) | 口径:(8.2)<br>器高:1.5 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | 口径反転復元<br>ゆがみ有り |
| 16 | 37 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 皿<br>(中世土器) | 口径:(8.2)<br>器高:1.9 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | 口径反転復元 |
| 17 | | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 皿<br>(中世土器) | 口径:(8.0)<br>器高:1.4 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | 口径反転復元 |
| 18 | | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 皿<br>(中世土器) | 口径:(8.4)<br>器高:1.5 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | 口径反転復元 |
| 19 | 36 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:11.9<br>器高:4.3 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色 | |
| 20 | 36 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:11.1<br>器高:4.35 | 外面：回転ナデ<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色 | |
| 21 | 36 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:11.2<br>器高:4.2 | 外面：回転ナデ<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色 | 一部反転復元 |
| 22 | 36 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:10.8<br>器高:4.2 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色 | |
| 23 | 36 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:(11.2)<br>器高:4.05 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 口径反転復元 |
| 24 | 36 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:10.9<br>器高:3.9 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | |
| 25 | | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:(11.5) | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 口径反転復元 |
| 26 | 36 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:10.1<br>器高:4.0 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色 | |
| 27 | 36 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 坏身<br>(須恵器) | 口径最大径<br>:12.5<br>器高:3.8 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 28 | 36 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:9.6<br>器高:4.15 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1～5㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡黄灰色 | ヘラ跡？(底部) |
| 29 | 36 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:10.2<br>器高:4.1 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色 | |
| 30 | 36 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:10.5 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 31 | | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:9.9<br>器高:3.65 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色～<br>青灰色 | |
| 32 | 36 | 3号横穴墓<br>(前庭部) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:10.4<br>最大径13.0<br>器高:4.1 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1～3㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | |
| 33 | 37 | 3号横穴墓<br>(前庭北部) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:10.45<br>器高:4.2 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 34 | 37 | 3号横穴墓<br>(前庭北部) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:10.65<br>器高:4.15 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 35 | 37 | 3号横穴墓<br>(前庭北部) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:10.95<br>器高:4.25 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 36 | | 3号横穴墓<br>(前庭北部) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:9.4<br>器高:3.6 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | 自然釉がかかる |
| 37 | 37 | 3号横穴墓<br>(前庭北部) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:12.2<br>器高:3.4 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡黄青灰色 | |
| 38 | 37 | 3号横穴墓<br>(前庭北部) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:9.5<br>器高:3.65 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色 | |
| 39 | 37 | 3号横穴墓<br>(前庭北部) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:9.8<br>器高:3.45 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 40 | | 3号横穴墓<br>(前庭部北) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:10.2<br>器高:3.9 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |

## 第8表　4号横穴墓出土遺物観察表(1)(第39～41図)

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種　別 | 法量(cm) | 手法の特徴 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 38 | 4号横穴墓<br>(前庭部) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:11.0<br>最大径:13.8<br>器高:4.2 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 2 | 38 | 4号横穴墓<br>(玄室内) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:11.7<br>器高:3.95 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | やや不良 | 淡青灰色 | 油脂分？付着 |
| 3 | 38 | 4号横穴墓<br>(玄室内) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:12.65<br>器高:4.25 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色<br>～青灰色 | |
| 4 | 38 | 4号横穴墓<br>(玄室内) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:12.3<br>器高:4.05 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | |
| 5 | 38 | 4号横穴墓<br>(玄室内) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:10.4<br>器高:4.05 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色 | |
| 6 | 38 | 4号横穴墓<br>(玄室内) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:10.4<br>器高:4.2 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜大の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色 | |
| 7 | 38 | 4号横穴墓<br>(玄室内) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:10.5<br>器高:3.7 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラケズリ後回転ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 8 | 39 | 4号横穴墓<br>(玄室内) | 瓹<br>(須恵器) | 口径:(9.8)<br>器高:13.8<br>底径:3.9 | 外面：回転ナデ、沈線<br>ヘラケズリ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 9 | 38 | 4号横穴墓<br>(玄室内) | 瓹<br>(須恵器) | 口径:10.4<br>器高:14.0 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラケズリ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 10 | 38 | 4号横穴墓<br>(玄室内) | 高坏<br>(須恵器) | 口径:14.2<br>器高:9.6<br>底径:9.2 | 外面：強い回転ナデ、<br>回転ナデ<br>内面：強い回転ナデ、ナデ | 1～2㎜程度の<br>砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | 2方透かし<br>1方は切れ目 |
| 14 | 39 | 4号横穴墓<br>(玄室内) | 壺<br>(須恵器) | 口径:16.0<br>器高:29.4 | 外面：強い回転ナデ<br>回転ナデ<br>内面：強い回転ナデ、ナデ | 2㎜程度の砂粒<br>を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 15 | 39 | 4号横穴墓<br>(玄室内) | 壺<br>(須恵器) | 口径:15.8<br>器高:33.3 | 外面：回転ナデ、タタキ<br>後カキメ<br>内面：回転ナデ：アテ具痕 | 1～2㎜程度の<br>砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 16 | 39 | 4号横穴墓<br>(玄室内) | 壺<br>(須恵器) | 口径:18.7<br>器高:47.35 | 外面：回転ナデ、タタキ、<br>カキメ<br>内面：回転ナデ：アテ具痕 | 1～2㎜程度の<br>砂粒を含む | 良好 | 淡灰色 | 自然釉かかる |

## 第9表　4号横穴墓出土遺物観察表(2)（第39図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種別 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ(cm) | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 11 | 39 | 4号横穴墓<br>(前庭部) | 刀子<br>(鉄器) | 現存長:10.5<br>刃　部:5.8 | 1.1 | | |
| 12 | 39 | 4号横穴墓<br>(前庭部) | 鉄鏃<br>(鉄器) | 現存長:5.1 | 2.5 | | 全長不明<br>基部欠損 |
| 13 | 39 | 4号横穴墓<br>(玄室内) | 大刀<br>(鉄器) | 全　長:87.5 | 3.5 | | 両関 |

## 第10表　6号横穴墓出土遺物観察表　（第45・46図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種　別 | 法量（cm） | 手法の特徴 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 40 | 6号横穴墓<br>(前庭部) | 直口壺<br>(土師器) | 口径:6.55<br>器高:7.8 | 外面：ヨコナデ<br>内面：ヨコナデ、<br>ヘラケズリ、ナデ | 1～2㎜程度の<br>砂粒を含む | 良好 | 橙褐色 | |
| 2 | | 6号横穴墓<br>(前庭部) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:9.8<br>器高:4.0 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒<br>を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 3 | | 6号横穴墓<br>(前庭部) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:11.0<br>器高:4.1 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒<br>を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 4 | | 6号横穴墓<br>(前庭部) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:10.3<br>器高:4.05 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒<br>を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 5 | | 6号横穴墓<br>(前庭部) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:(12.6)<br>器高:不明 | 外面：回転ナデ、ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1～2㎜程度の<br>砂粒を含む | 良 | 淡青灰色 | 口径反転復元 |
| 6 | | 6号横穴墓<br>(前庭部) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:(9.4)<br>器高:不明<br>外径:(12.2)? | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | 1～2㎜程度の<br>砂粒を含む | 良 | 淡灰褐色 | 口径反転復元<br>自然釉あり |
| 7 | | 6号横穴墓<br>(前庭部) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:不明<br>器高:不明 | 外面：回転ナデ、ヘラ切リ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1～2㎜程度の<br>砂粒を含む | 良 | (外)青灰色<br>(内)淡青灰色 | 内面に赤色顔料 |
| 8 | | 6号横穴墓<br>(前庭部) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:(12.4)<br>器高:不明 | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒<br>を含む | 良好 | (外)淡青灰色<br>(内)青灰色 | |
| 9 | 40 | 6号横穴墓<br>(玄室内) | 堤瓶<br>(須恵器) | 口径:15.2<br>器高:31.55 | 外面：回転ナデ、<br>タタキ後カキメ<br>内面：回転ナデ、アテ具痕 | 1㎜以下の砂粒<br>を含む | 良好 | 青灰色 | |
| 10 | 40 | 6号横穴墓<br>(玄室内) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:11.1<br>器高:4.2 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒<br>を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 11 | 40 | 6号横穴墓<br>(玄室内) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:10.0<br>最大径12.4<br>器高:4.1 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒<br>を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 12 | 40 | 6号横穴墓<br>(玄室内) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:11.05<br>器高:4.15 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒<br>を含む | 良好 | 青灰色<br>淡黄灰色 | |
| 13 | 40 | 6号横穴墓<br>(玄室内) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:9.7<br>器高:4.0 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1～2㎜程度の<br>砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 内面に赤色顔料 |
| 14 | 40 | 6号横穴墓<br>(玄室内) | 坏<br>(須恵器) | 口径:9.85<br>器高:3.85 | 外面：回転ナデ、ヘラ切リ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1～2㎜程度の<br>砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 身、蓋どちらの可能性もある |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 15 | 40 | 6号横穴墓<br>(玄室内) | 坏<br>(須恵器) | 口径:9.7<br>器高:3.9 | 外面：回転ナデ、ヘラ切リ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 身、蓋どちらの可能性もある |
| 16 | 40 | 6号横穴墓<br>(玄室内) | 壺(平瓶？)<br>(須恵器) | 口径:12.6<br>器高:33.6 | 外面：回転ナデ、<br>タタキ後カキメ<br>内面：回転ナデ、アテ具痕 | 2㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | |

## 第11表　7号横穴墓出土遺物観察表(1)　(第50図)

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種　別 | 法量(cm) | 手法の特徴 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 41 | 7号横穴墓<br>(玄室内) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:12.0<br>器高:4.4 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ<br>内面：回転ナ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 2 | | 7号横穴墓<br>(玄室内) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:12.0<br>器高:4.55 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色 | |
| 3 | 41 | 7号横穴墓<br>(玄室内) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:12.3<br>器高:4.3 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 4 | 41 | 7号横穴墓<br>(玄室内) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:11.8<br>器高:3.85 | 外面：丁寧な回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ<br>内面：回転ナデ、細い沈線、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 5 | 41 | 7号横穴墓<br>(玄室内) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:12.4<br>器高:4.45 | 外面：丁寧な回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色 | |
| 6 | 41 | 7号横穴墓<br>(玄室内) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:11.2<br>最大径13.8<br>器高:3.8 | 外面：回転ナデ、<br>へ後ラ切リナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 7 | 41 | 7号横穴墓<br>(玄室内) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:10.2<br>最大径13.2<br>器高:4.0 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 8 | 41 | 7号横穴墓<br>(玄室内) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:10.6<br>器高:4.0 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 9 | | 7号横穴墓<br>(玄室内) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:10.3<br>器高:3.55 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色 | |
| 10 | 41 | 7号横穴墓<br>(玄室内) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:10.7<br>最大径13.5<br>器高:3.9 | 外面：回転ナデ、ヘラ切リ<br>後丁寧なナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色 | |

## 第12表　7号横穴墓出土遺物観察表(2)　(第50図)

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種別 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 11 | 41 | 7号横穴墓<br>(玄室内) | 刀子<br>(鉄器) | 全　長:11.9<br>刃　部:9.0 | 刃幅：0.8～<br>0.9 | 刃部厚：0.3 | 木質が若干残る |
| 12 | 41 | 7号横穴墓<br>(玄室内) | 耳環 | 最大径:2.4 | | 0.5 | 全体的に錆 |
| 13 | 41 | 7号横穴墓<br>(玄室内) | 紡錘車 | 4.5 | 4.5 | 2.5 | 石製<br>ほぼ前面に鋸歯文が施されるが全体的に摩滅している |

## 第13表　8号横穴墓出土遺物観察表　(第51図)

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種　別 | 法量(cm) | 手法の特徴 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 42 | 8号横穴墓<br>(玄室内) | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:9.2<br>器高:3.8 | 外面：回転ナデ、ヘラ切リ<br>内面：回転ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 青灰色～<br>淡青灰色 | |
| 2 | 42 | 8号横穴墓<br>(玄室内) | 坏身<br>(須恵器) | 口径:9.7<br>器高:3.5 | 外面：回転ナデ、ヘラ切リ？<br>内面：回転ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 外面に自然釉 |

## 2．その他の遺構の調査

湯後遺跡では横穴墓のほかにも数基の遺構を検出した。近世～現代にかけての墓が多く見られたが、中世のものと考えられる遺構も確認された。以下、これらの遺構について報告する。

**溝状遺構１（第54図）**

**（立地）** 調査区東側、標高49.5mのところに位置している。遺構が存在するところは南西に向かって開ける緩斜面であるが、その北側から東側にかけては急斜面となっている。

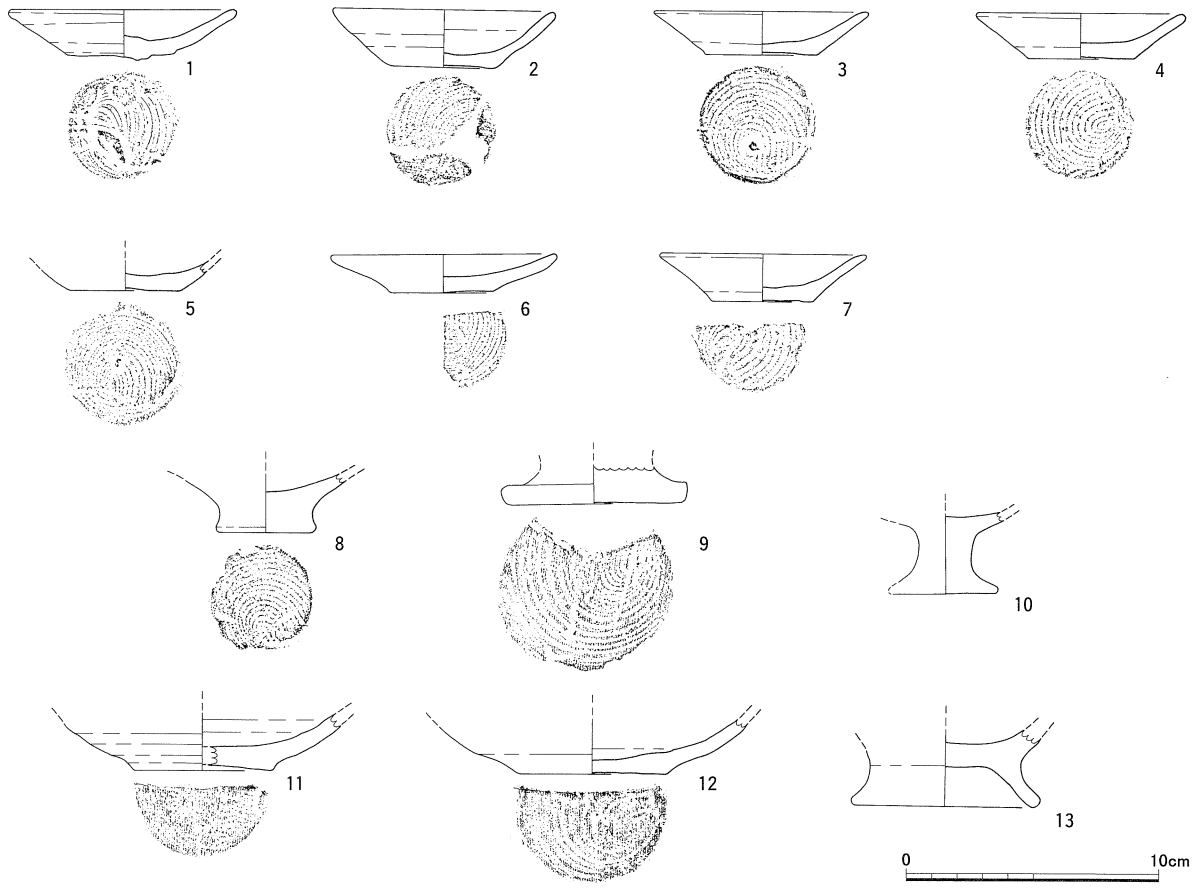
**（規模・概要）** 全長約16m、幅約１m、深さ20cmを測る溝である。溝は南東付近でほぼ直角に折れ曲がっており、検出段階では逆「L」字状を呈している。北東付近は消滅しているため詳しいことは分からないが、わずかながら同様に屈曲している様子がうかがえることから本来は「コ」の字状であったことも考えられる。

また、建物跡の抽出に努めたがピット等は確認されなかった。近くでは土坑１基があるものの、この溝に伴うものかどうかは明らかにできなかった。

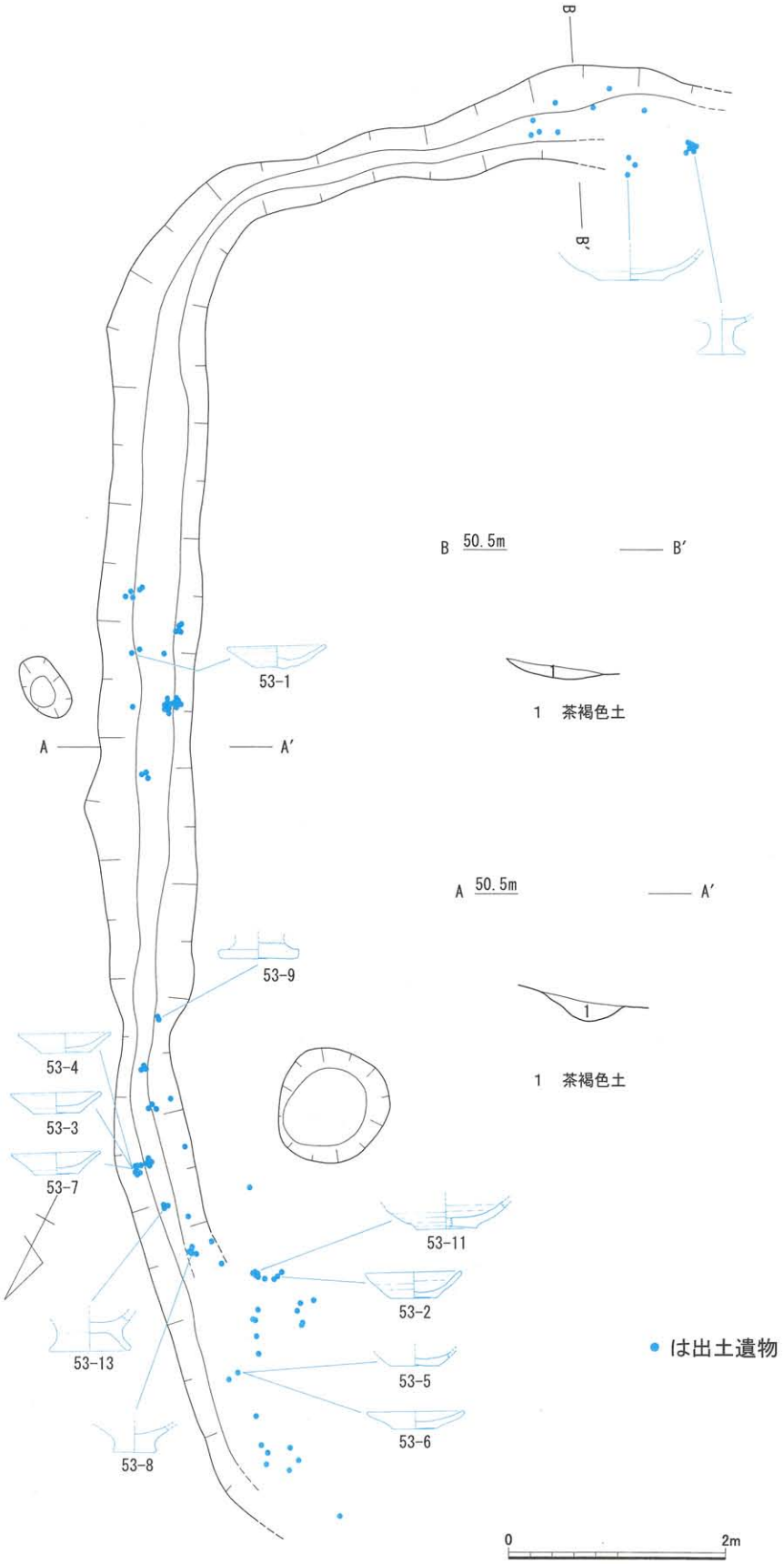
**（遺物出土状況）** 溝床面付近から多くの遺物が出土した。全体的な出土ではなく３カ所からのまとまりをもった出土である。

**（出土遺物）**（第53図、第14表） 出土した遺物は第53図に掲載したもので、詳細は第14表に記載した。皿や柱状高台皿、坏等があり、底部には回転糸切り痕が認められる。

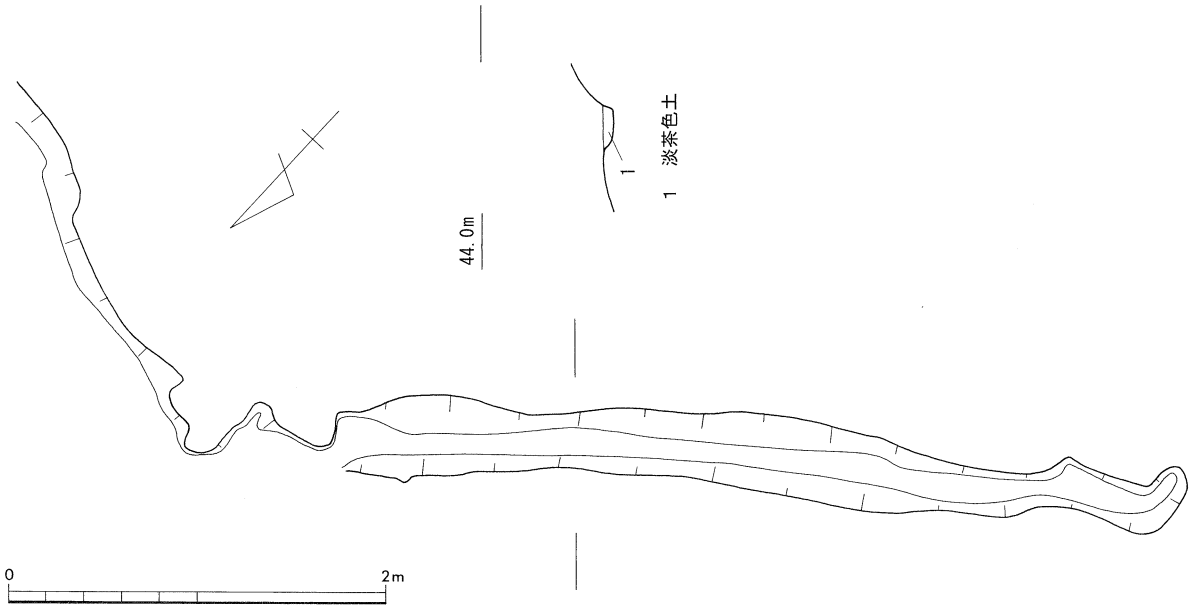
**（時期）** 出土遺物から12世紀前半を中心とした時期が考えられる。(註2)




第53図　溝状遺構１出土遺物実測図　（S＝1/3）




第54図　溝状遺構1実測図　遺物出土状況　（S＝1/60）




第55図　溝状遺構２実測図　（S＝1/40）

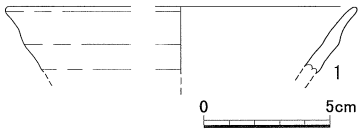
**溝状遺構２（第55図）**

**（立地）** 調査区の南側、標高43.5mのところに位置している。すぐ西にはＳＫ０５がある。

**（規模・概要）** 北東側が不明瞭であるが、残存部分での全長が4.5m、幅0.3mと小規模な溝である。

**（出土遺物）**（第56図、第15表）　土器の小片が数点ほど出土しているが、図化が可能であったのは第56図のもののみである。坏の口縁部と思われる。

**（時期）** 時期がはっきりと分かる遺物がほとんどないため明らかではないが、56-1から溝状遺構１と大差のない時期と考えられる。




第56図　溝状遺構２出土遺物実測図
（S＝1/3）

**ＳＫ０１（第60図）**

北側斜面と東側斜面との間、標高約49.5m付近で検出した遺構である。平面形は円形を呈しており、規模は径が1.0m、深さ30cmを測る。溝状遺構１に隣接しており、それに伴うことも考えられるが、詳しくは不明である。遺物等の出土もなく、時期についても明らかでない。

**ＳＫ０２（第60図）**

溝状遺構１やＳＫ０１のある緩斜面から一段下がったところ、標高約46m付近で検出した遺構である。平面形はやや不整形ながらも長方形状を呈している。規模は長軸方向で1.3m、短軸方向で約0.8mを測る。また深さは約60cmである。遺物等の出土はなく、遺構の性格・時期ともに不明である。

なお、ＳＫ０２周辺では全部で５基のピットが検出されているが、これはその状況からＳＫ０２に伴うものではないと考えられる。

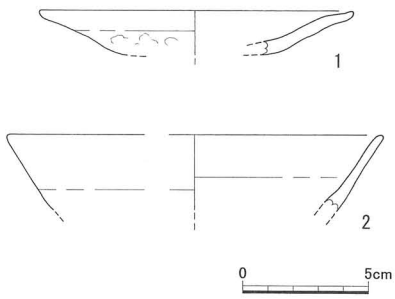
**ＳＫ０３（第61図）**

溝状遺構の東約２mのところで検出した遺構である。標高は約50mを測り、ここから北東は急斜面となっている。平面形は不整形な円状を呈している。規模は径が約1.0mを測るものの、深さは約10cmと浅い。出土遺物等はなく、性格・時期ともに不明である。

**ＳＫ０４（第60図）**

６号横穴墓のすぐ南側で検出された遺構で、標高は約49mを測る。平面形は円形を呈しており、

規模は径が約１m、深さが１m前後を測る。この土坑は、竪穴が掘られた後さらに横に掘り広げられており、通常見られる土坑と異なった形態をしている。全容の把握はできていないため性格も明らかでないが、いわゆる「地下式壙」に類似したものであった可能性もある。遺物として中世土器の破片が覆土中より出土した。小片が中心で図化できたのはわずかである。坏のほか「京都系」土師器皿も見られる。




第57図　ＳＫ０４出土遺物実測図
（Ｓ＝1/3）

**ＳＫ０５（第61図）**

溝状遺構２の西側約１mのところで検出した遺構である。平面形は不整形ながら楕円形と長方形の中間的な形を呈している。規模は長さ約2.2m、幅1.1mで、深さが約30cmを測る。

遺物として覆土中から中世土器の小片や鉄滓の小片などが出土した。このうち図化が可能であったのはわずかである。

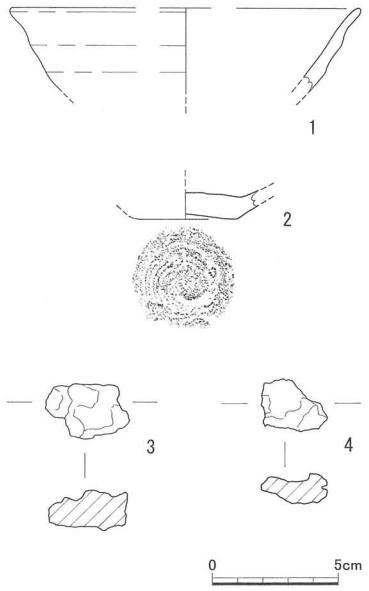
時期は出土した遺物からは12世紀前半代が推測されるものの、覆土中からのものでありはっきりとしない。また性格についても不明である。

**ＳＫ０６・ＳＫ０７（第61図）**

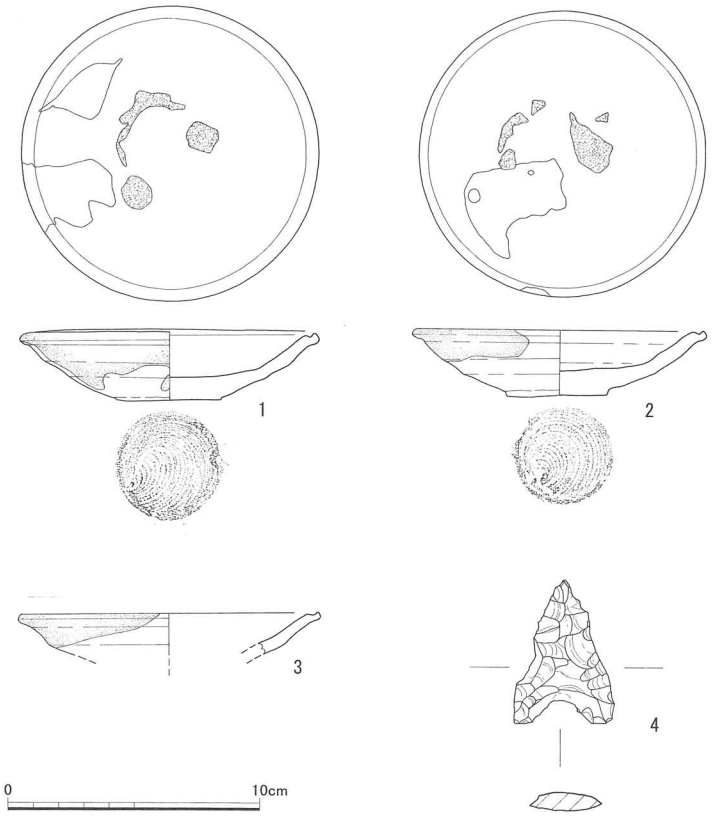
５号横穴墓と溝状遺構２の中間付近、標高約44.5mのところで検出した遺構である。調査時に大部分を破壊してしまったためその全容を明らかにできなかった。残存部分から判断して不整円形状プランの土坑が２基切り合う状態で存在していたものと考えられる。

出土した遺物は第59図に掲載したものである。１～３は床面付近から出土した肥前系の陶器で、17世紀中頃が考えられる。

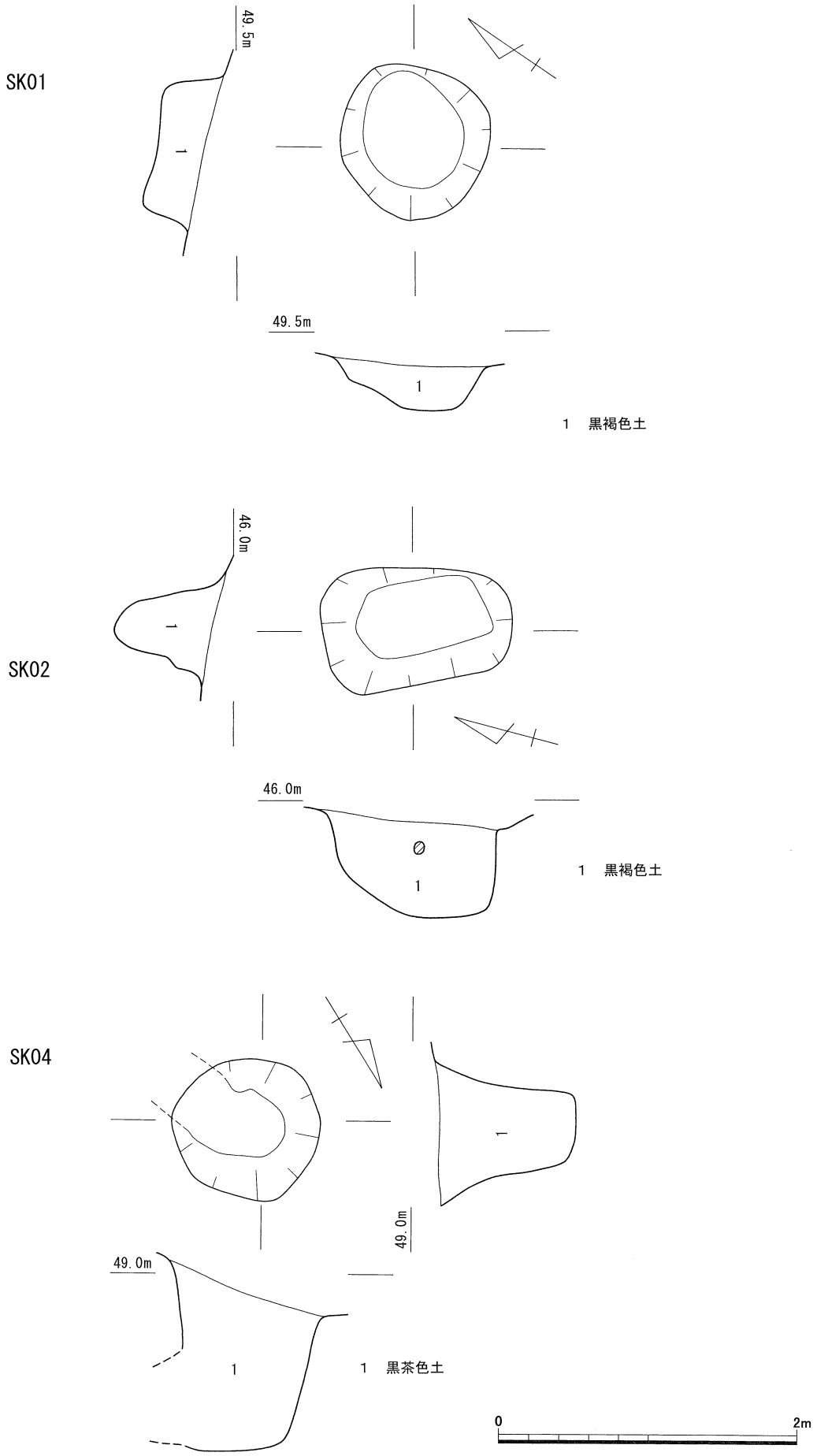
全容が把握できていないため断言はできないが、近世の墓であった可能性が高いと思われる。



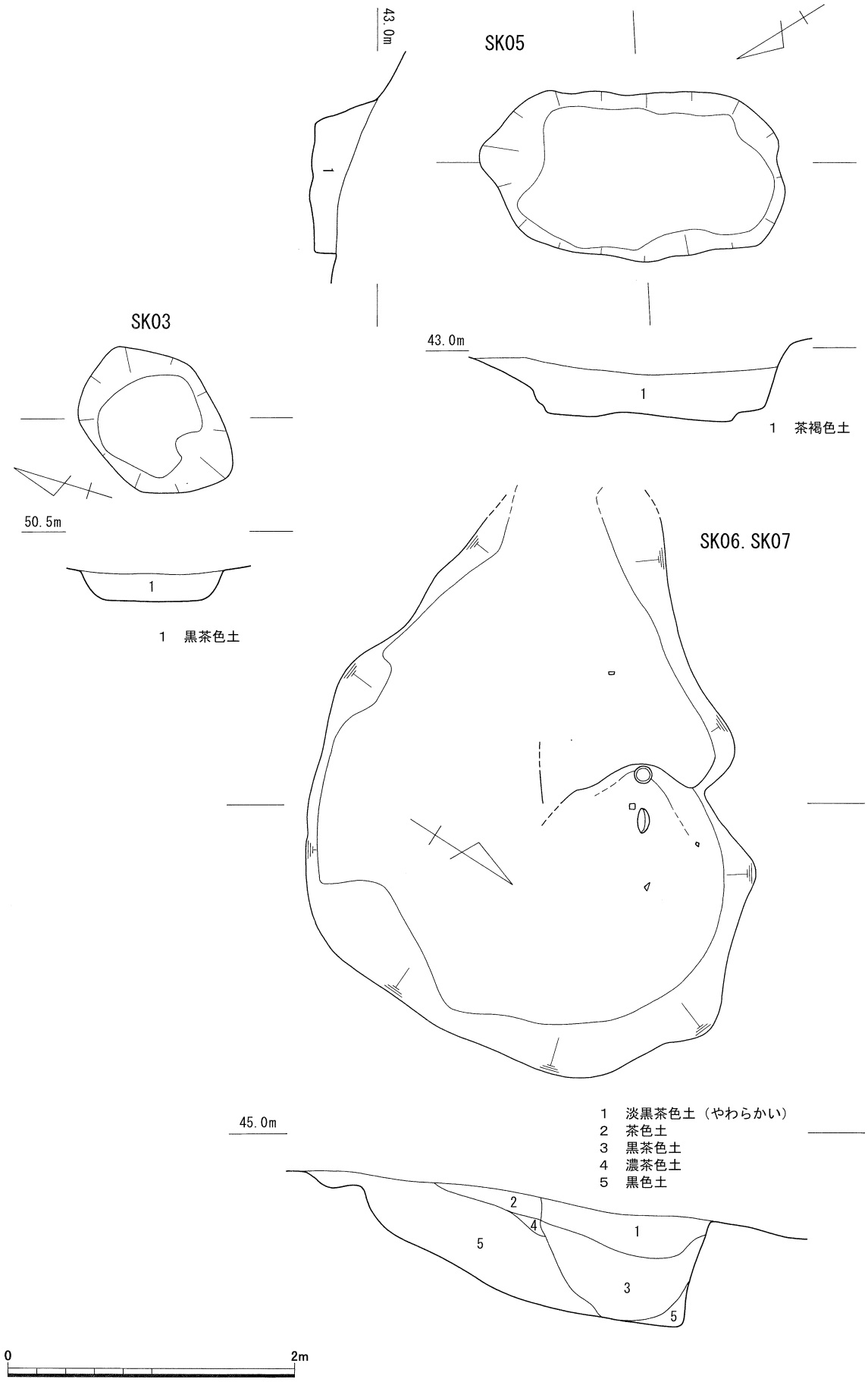

第58図　ＳＫ０５出土遺物実測図
（Ｓ＝1/3）




第59図　ＳＫ０６・ＳＫ０７出土遺物実測図
（Ｓ＝１／３、４はＳ＝２／３）




第60図　ＳＫ０１・ＳＫ０２・ＳＫ０４実測図　（Ｓ＝1/40）




第61図 ＳＫ０３・ＳＫ０５・ＳＫ０６・ＳＫ０７実測図 （Ｓ＝1/40）

## 第14表　ＳＤ０１出土遺物観察表（第53図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種　別 | 法量（cm） | 手法の特徴 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 42 | SD01 | 皿<br>(中世土器) | 口径:9.0<br>器高:1.9<br>底径:4.2 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を多く含む | 良好 | 淡黄褐色 | |
| 2 | 42 | SD01 | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.8<br>器高:2.3<br>底径:4.2 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡橙色 | |
| 3 | 42 | SD01 | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.4<br>器高:1.7<br>底径:4.4 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡黄褐色 | |
| 4 | 42 | SD01 | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.1<br>器高:1.8<br>底径:4.2 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡黄褐色 | |
| 5 | | SD01 | 皿<br>(中世土器) | 口径：－<br>器高：－<br>底径:4.4 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡黄褐色 | |
| 6 | | SD01 | 皿<br>(中世土器) | 口径:9.0<br>器高:1.55<br>底径:4.1 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡黄褐色 | |
| 7 | | SD01 | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.0<br>器高:1.8<br>底径:4.0 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 8 | 42 | SD01 | 皿<br>(柱状高台皿)<br>(中世土器) | 口径：－<br>器高：－<br>底径:3.7 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 9 | 42 | SD01 | 皿<br>(柱状高台皿)<br>(中世土器) | 口径：－<br>器高：－<br>底径:6.8 | 外面：回転ナデ？、<br>回転糸切リ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡橙褐色 | |
| 10 | 42 | SD01 | 皿<br>(柱状高台皿)<br>(中世土器) | 口径：－<br>器高：－<br>底径:4.2? | 外面：回転ナデ？<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 橙色 | |
| 11 | | SD01 | 坏<br>(中世土器) | 口径：－<br>器高：－<br>底径:5.3 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | やや不良 | 淡橙色 | |
| 12 | | SD01 | 坏<br>(中世土器) | 口径：－<br>器高：－<br>底径:5.8 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡橙褐色 | |
| 13 | 42 | SD01 | 坏<br>(中世土器) | 口径：－<br>器高：－<br>底径:7.0 | 外面：回転ナデ？<br>内面：回転ナデ？ | 1㎜程度の砂粒を含む | やや不良 | 淡黄褐色<br>(白っぽい) | 全体的に摩滅<br>調整不明瞭 |

## 第15表　ＳＤ０２出土遺物観察表（第56図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種　別 | 法量（cm） | 手法の特徴 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | SD02 | 坏<br>(中世土器) | 口径:(14.0) | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |

## 第16表　ＳＫ０４出土遺物観察表（第57図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種　別 | 法量（cm） | 手法の特徴 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | SK04 | 皿<br>(中世土器) | 口径:(12.4) | 外面：ナデ<br>内面：ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡黄褐色 | 口径反転復元<br>京都系 |
| 2 | | SK04 | 坏<br>(中世土器) | 底径:(14.8) | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |

## 第17表　ＳＫ０５出土遺物観察表（１）（第58図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種　別 | 法量（cm） | 手法の特徴 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | SK05 | 坏<br>(中世土器) | | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 黄褐色 | 口径推定復元 |
| 2 | | SK05 | 皿？<br>(中世土器) | 底径:4.0 | 外面：回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 黄褐色 | |

第18表　ＳＫ０５出土遺物観察表（２）（第58図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種別 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 重量(g) | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | | SK05 | 鉄滓 | 2.9 | 2.1 | | |
| 4 | | SK05 | 鉄滓 | 2.3 | | 1.9 | |

第19表　ＳＫ０６出土遺物観察表（１）（第59図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種　別 | 法量（cm） | 手法の特徴 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 42 | SK06 | 坏<br>(陶器) | 口径:11.6<br>器高:2.8<br>底径:4.1 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 小石を含む | 良好 | 茶褐色 | 口縁部に段<br>外面の一部に薄緑色～白の釉がかかる<br>内面の一部を除き薄緑色の釉がかかる<br>内面底部見込みには砂目 |
| 3 | 42 | SK06 | 坏<br>(陶器) | 口径:11.4<br>器高:2.6<br>底径:4.0 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 小石を含む | 良好 | 茶褐色 | 口縁部に段<br>外面の一部に薄緑色の釉がかかる<br>内面の一部を除き薄緑色の釉がかかる<br>内面底部見込みには砂目 |
| 5 | | SK06 | 坏<br>(陶器) | 口径:11.8 | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | １～２㎜の小石を含む | 良好 | 茶褐色 | 口径反転復元<br>内外共に釉がかかる |

第20表　ＳＫ０６出土遺物観察表（２）（第59図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種別 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 重量(g) | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 42 | SK06 | 石鏃<br>(石器) | 2.8 | 1.9 | 0.3 | 黒曜石 |

## ３．遺構に伴わない遺物（第62図～第71図、第21表～第27表）

湯後遺跡からは多くの遺物が出土している。そのほとんどが、調査区西側の谷地形となっている付近の堆積土内からの出土である。さまざまな時代のものが混ざって出土しており、層的に取り上げることはできなかった。以下、これらの遺物について報告する。なおこの付近で遺構は検出していない。

### 土師器

第62・63図は主に古墳時代～奈良・平安時代にかけての土師器を掲載した。１は直口壺である。完形で出土した。２～６は坏である。口縁端部は外反気味である。このうち２～４、６は表面が風化しいるものの、内外面ともに赤色顔料が塗彩されていることがうかがえる。また４は暗文がみられる。７，８は手捏ね土器である。手捏ね土器はこのほかにもう１点出土している。９は高坏の脚部と考えられる。土師器の高坏はこのほかに出土していない。10～19は甕である。外面のハケメはほとんどのものが縦方向であるが、11のように横方向に施さるものも見られる。なお、甕片は掲載したもの以外にも多く出土している。

### 土製支脚

第64図には土製支脚を掲載した。土製支脚はほとんどが破損しており、完全な形で出土したものはない。残存している部分から推測すると、いずれも二又突起タイプのもので、三又突起タイプの

ものは見られないようである。また底部はヘラ状のもので削り取られ、上げ底となっている。１、２は背面に穿孔が見られる。３、４もその可能性があるが欠損しており不明である。

**須恵器**

第65・66図には須恵器を掲載した。１～９は蓋である。１～４は蓋に伴う坏に受部があるもので、形態は湯後遺跡で検出した横穴墓出土のものと大差がない。体部は回転ナデによる調整がなされている。このうち１，２は天井部にヘラ記号が見られる。５～９は蓋に受部があるもので、いずれのもつまみは輪状である。このうち５，６は内面にかえりが付くもので、７～９は口縁端部を折り曲げたものである。９には竹管文が認められる。10～21は坏である。10、11は身に受部があるもので、１～４と同様に横穴墓出土のものと大差のないもの、12は６号横穴墓出土のものとほぼ同じもので蓋の可能性もある。13～15は高台の付かない坏である。体部は丸みを帯び、底部は回転糸切り痕を残す。16～20は高台の付く坏である。体部は内湾気味に立ち上がり、底部は回転ナデの見られるものと、回転糸切り痕がみられるものがある。22は有蓋高坏である。湯後遺跡からはほかに出土していない。23～26は高坏である。２方透かしのもので、横穴墓出土のものと同様のものである。27～29は全容が明らかでないが、瓶または長頸壺の底部と考えられる。

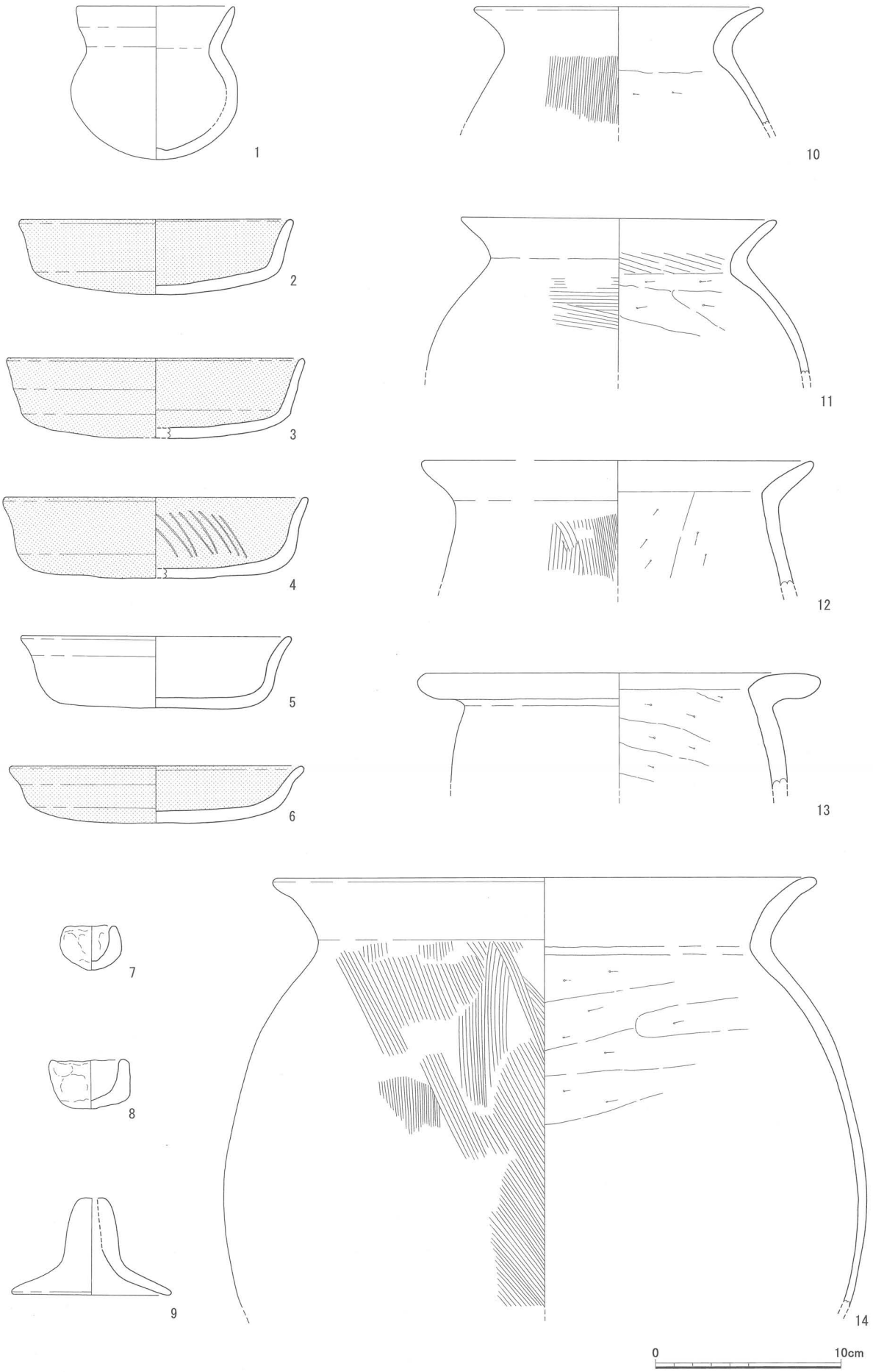
**中世土器**

第67・68図には主に中世の土師器（中世土器）を掲載した。１～９は高台付皿である。高台はほとんどが「ハ」の字状であるが、９は外反して他と異なっている。10～12は柱状高台皿である。口縁部は欠損しており不明である。底部には回転糸切り痕が見られる。13～18は高台付坏である。高台には「ハ」の字状のものや脚端部が外反するものがある。14は体部が直線気味に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。底部には回転糸切り痕が見られる。15は焼成前に穿孔されている。19～26は坏である。19、20は体部が直線的に立ち上がり、底部の調整は19がヘラ切り、20がヘラ切り後ナデである。また20は内外面とも赤色顔料が塗彩されている。21は口縁端部がわずかに外反し、底部は回転糸切り痕が残る。23～26は体部がわずかに内湾し口縁端部は外反気味である。27～50は皿である。形態は様々なものが見られ、器高の高いもの（30）や器壁のやや厚いもの（34）、体部が丸みを帯びるもの（43、44）、体部と底部の境が不明瞭なもの（45、46）などある。39は底部を穿孔している。また43は内・外面が赤色塗彩されている。

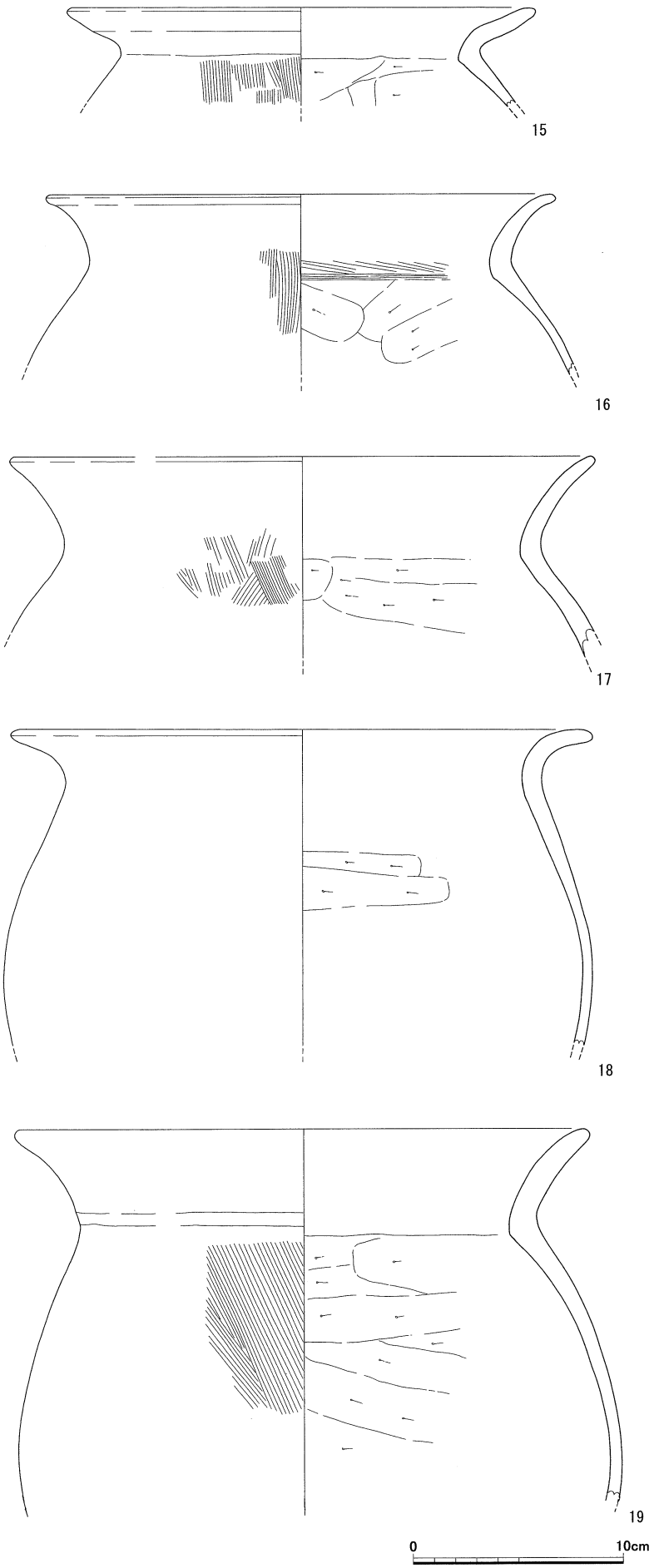
**その他**

第69図には土師器皿、白磁、石鉢などを掲載した。１～４は土師器皿である。いわゆる「京都系」と考えられるもので、内面には「２」の字ナデを施す。５は白磁である。内面見込み部分は段を有する。12世紀頃のもと考えられる。６は香炉である。完形のもので三足である。外面はみがかれ、また、上部の界線の間には雷文がスタンプされる。７は石鉢である。土師器皿は隣接しての出土であるが、遺構は確認していない。

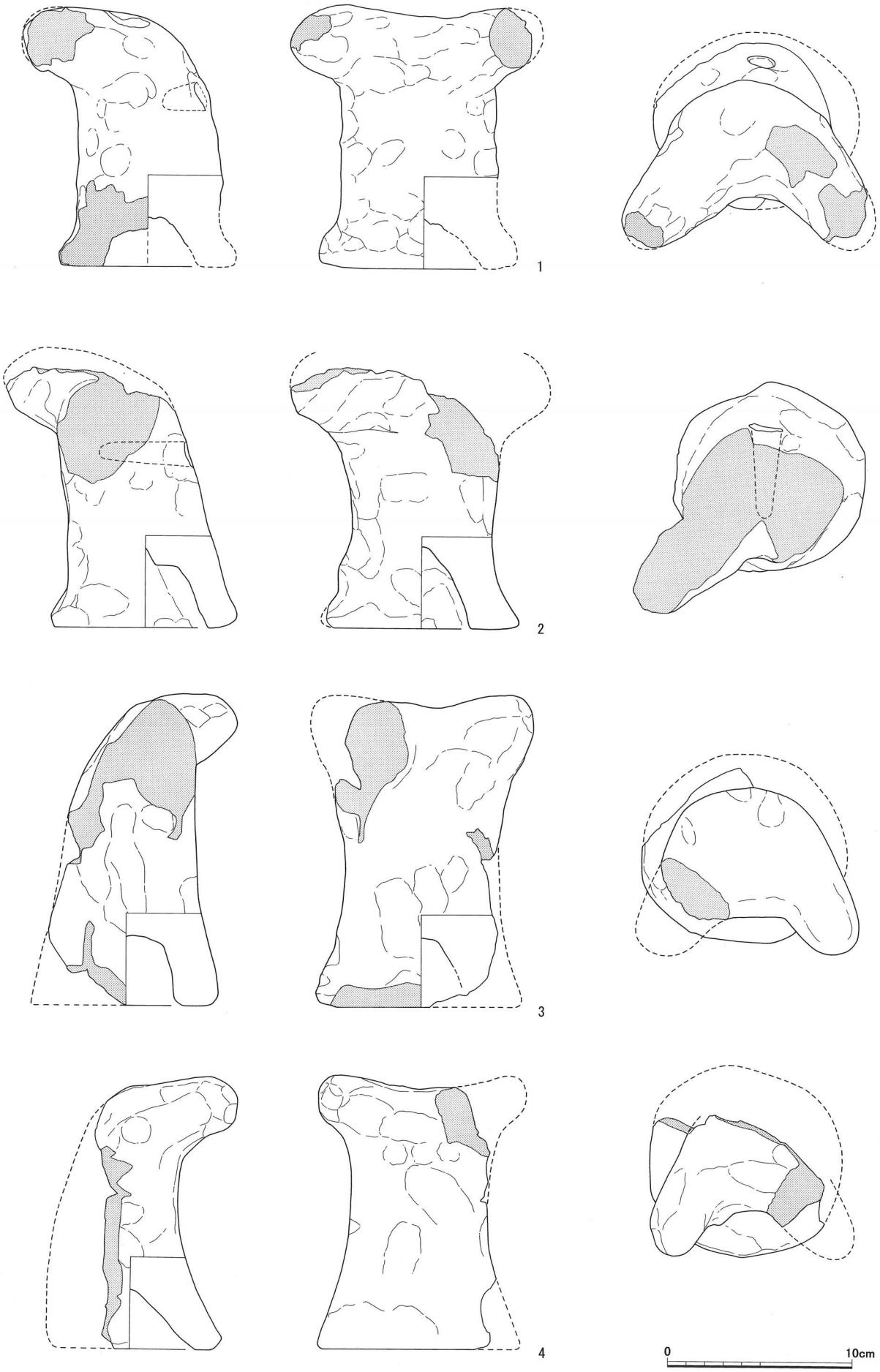
第70図には鉄器・石器を掲載した。１～３は馬具関係の鉄器と考えられる。１は引手、２は鉸具になるものと思われる。３は鉄鈴である。４、５の機種については不明である。６は鉄製の紡錘車と思われる。７は磨製石斧である。基部は欠損している。



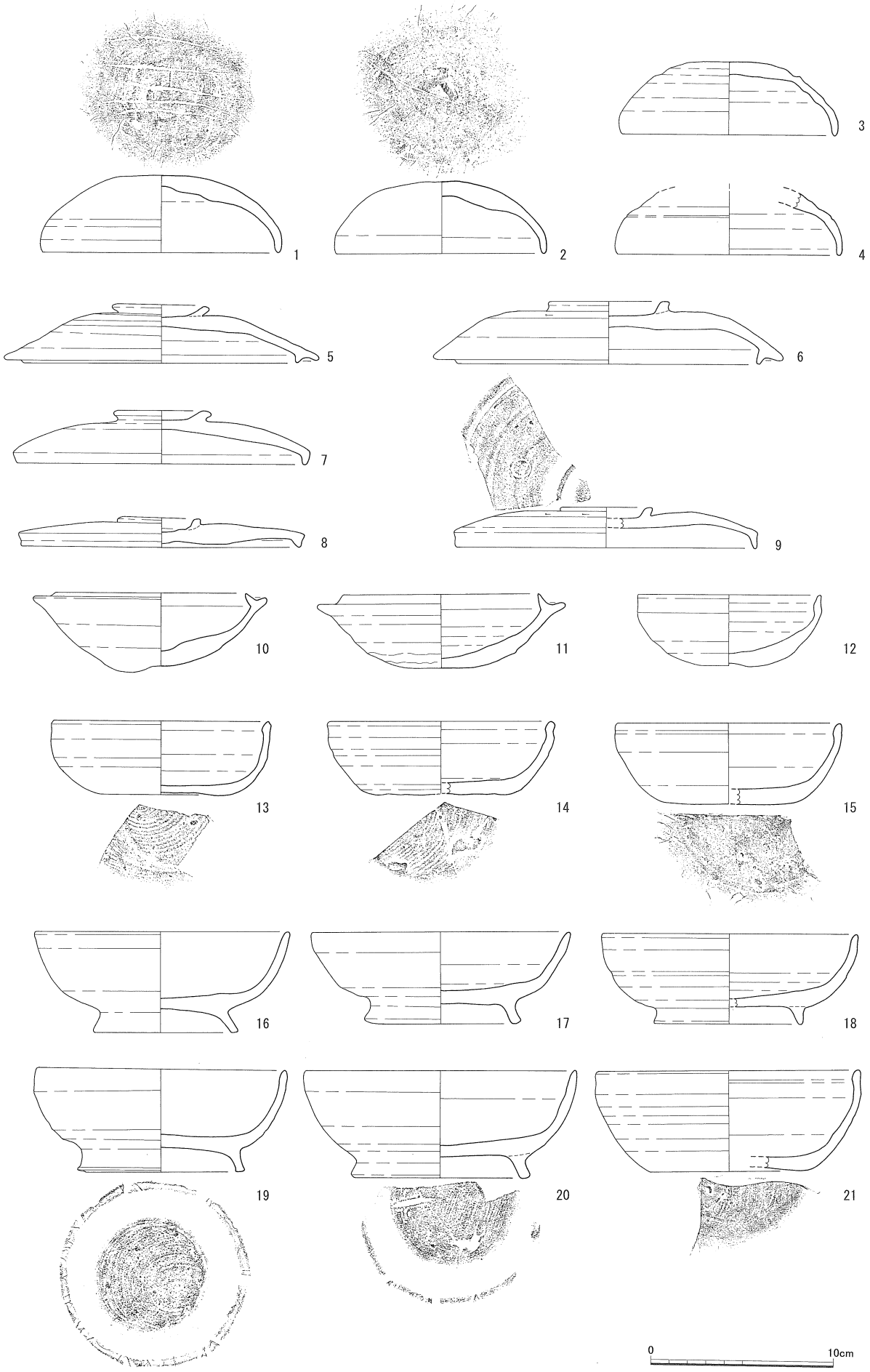

第 62 図　湯後遺跡出土遺物実測図（1）土師器　（S＝1/3）



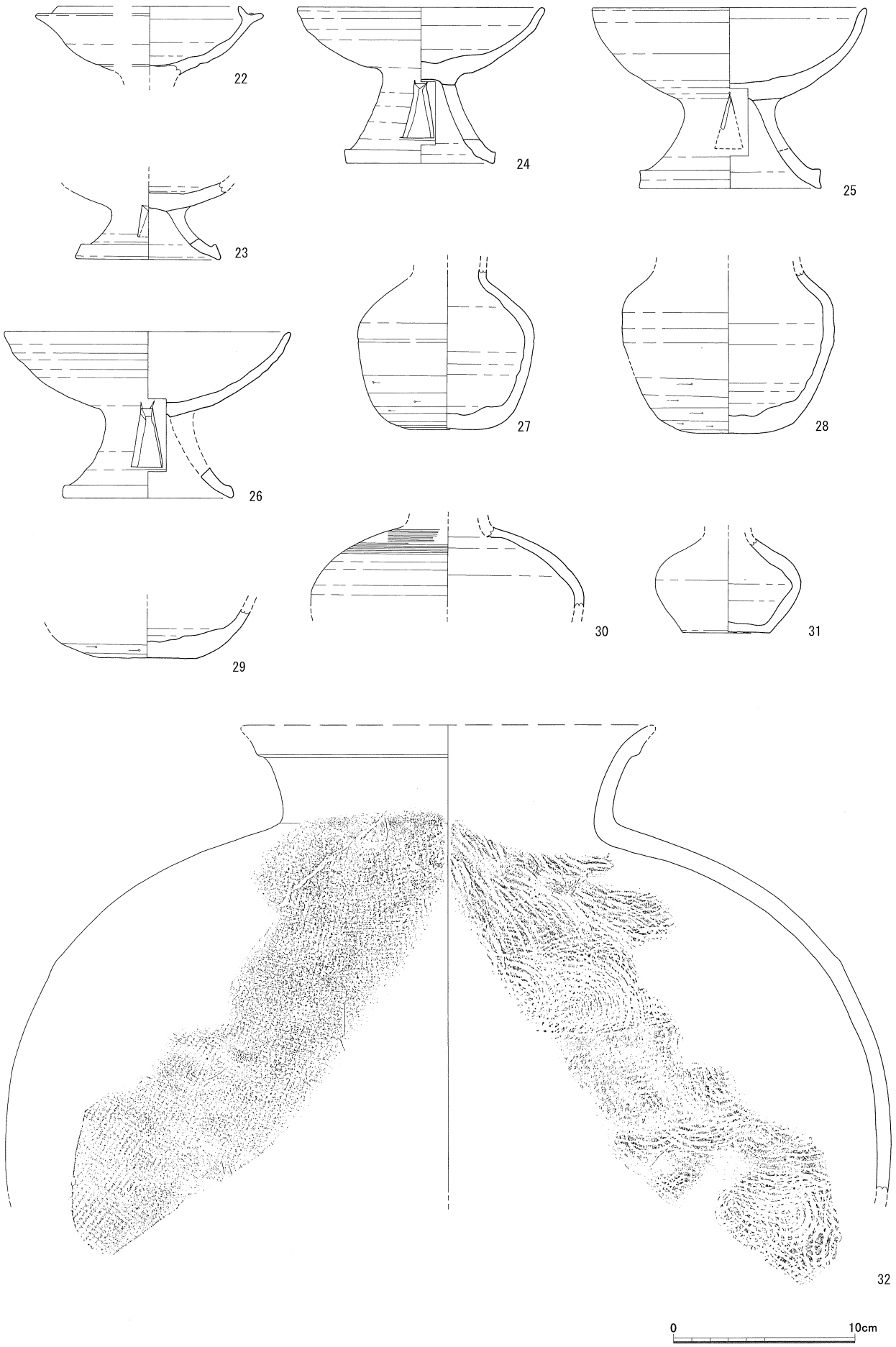

第 63 図　湯後遺跡出土遺物実測図（2）土師器　（S＝1/3）



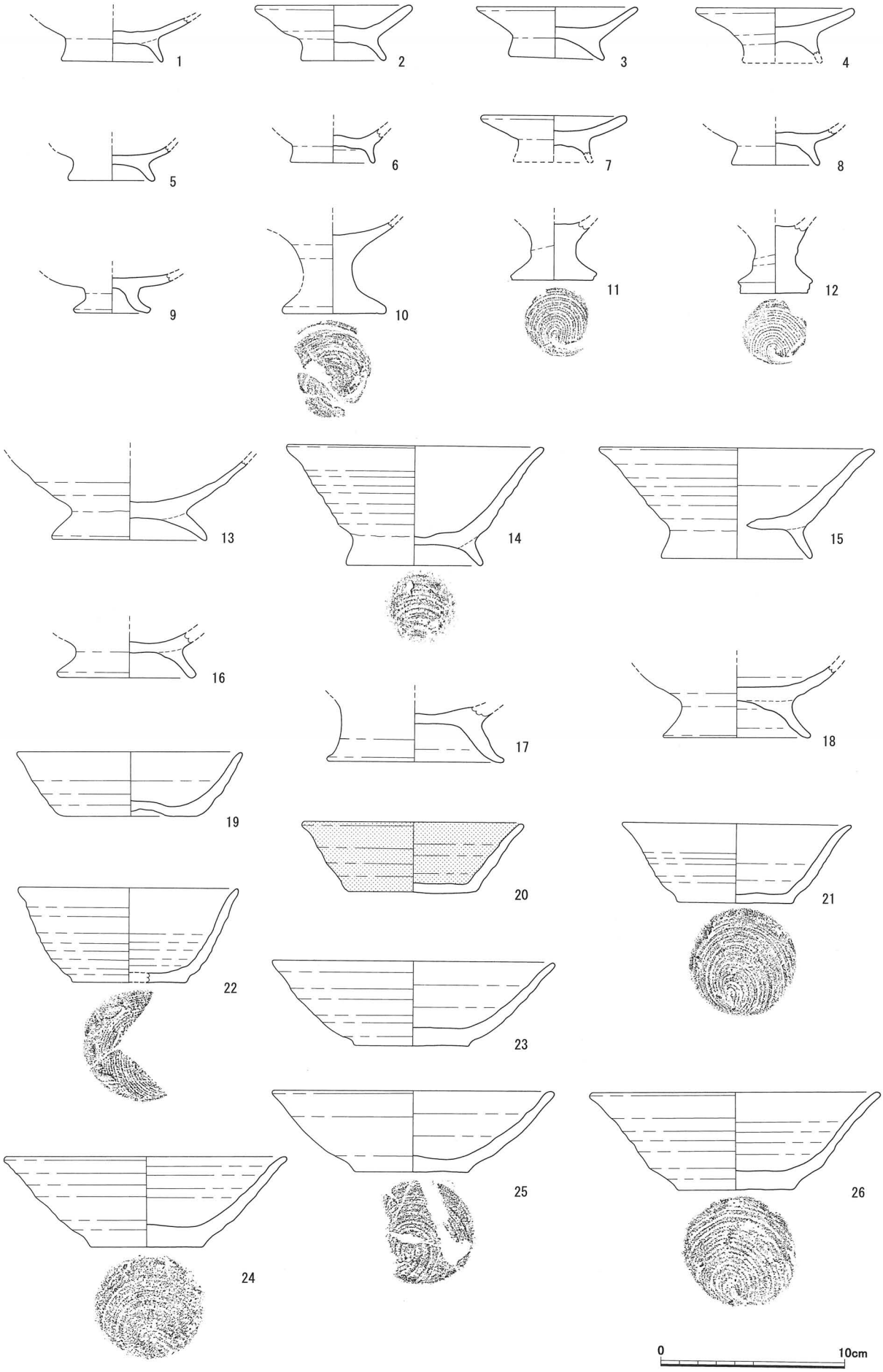

第 64 図　湯後遺跡出土遺物実測図（3）土製支脚　（S＝1/3）



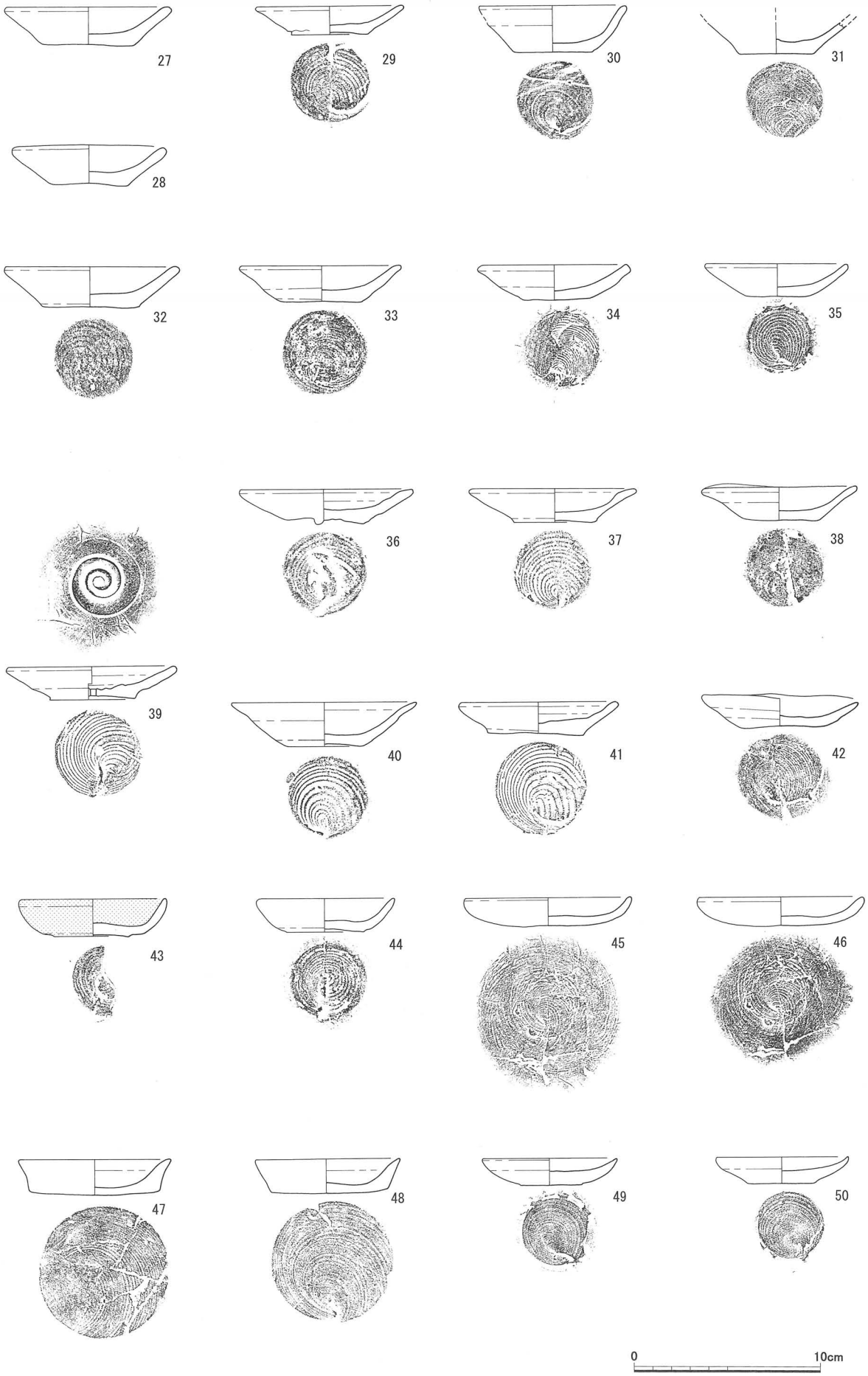

第 65 図　湯後遺跡出土遺物実測図（4）須恵器　（S＝1/3）



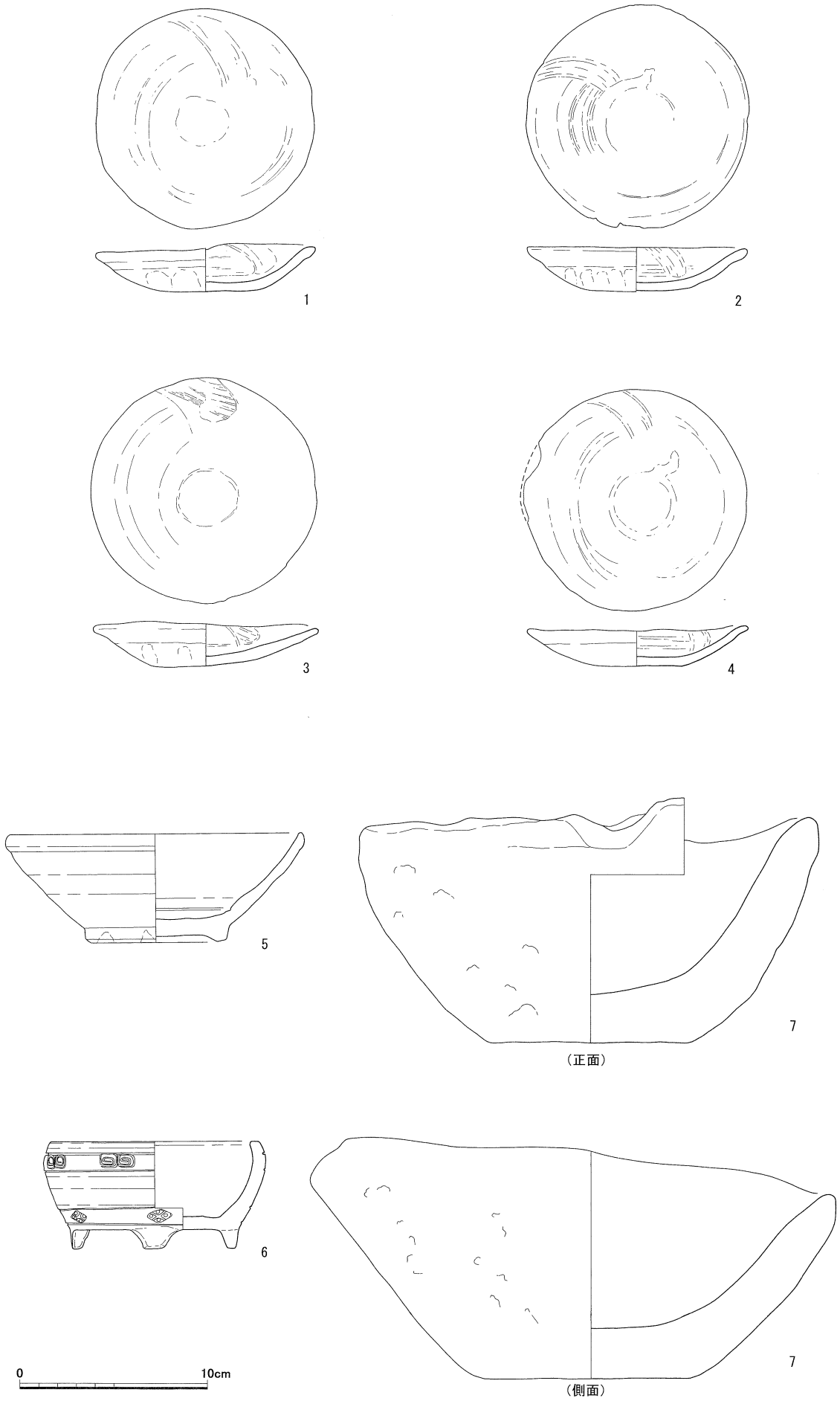

第 66 図　湯後遺跡出土遺物実測図（5）須恵器　（S＝1/3）



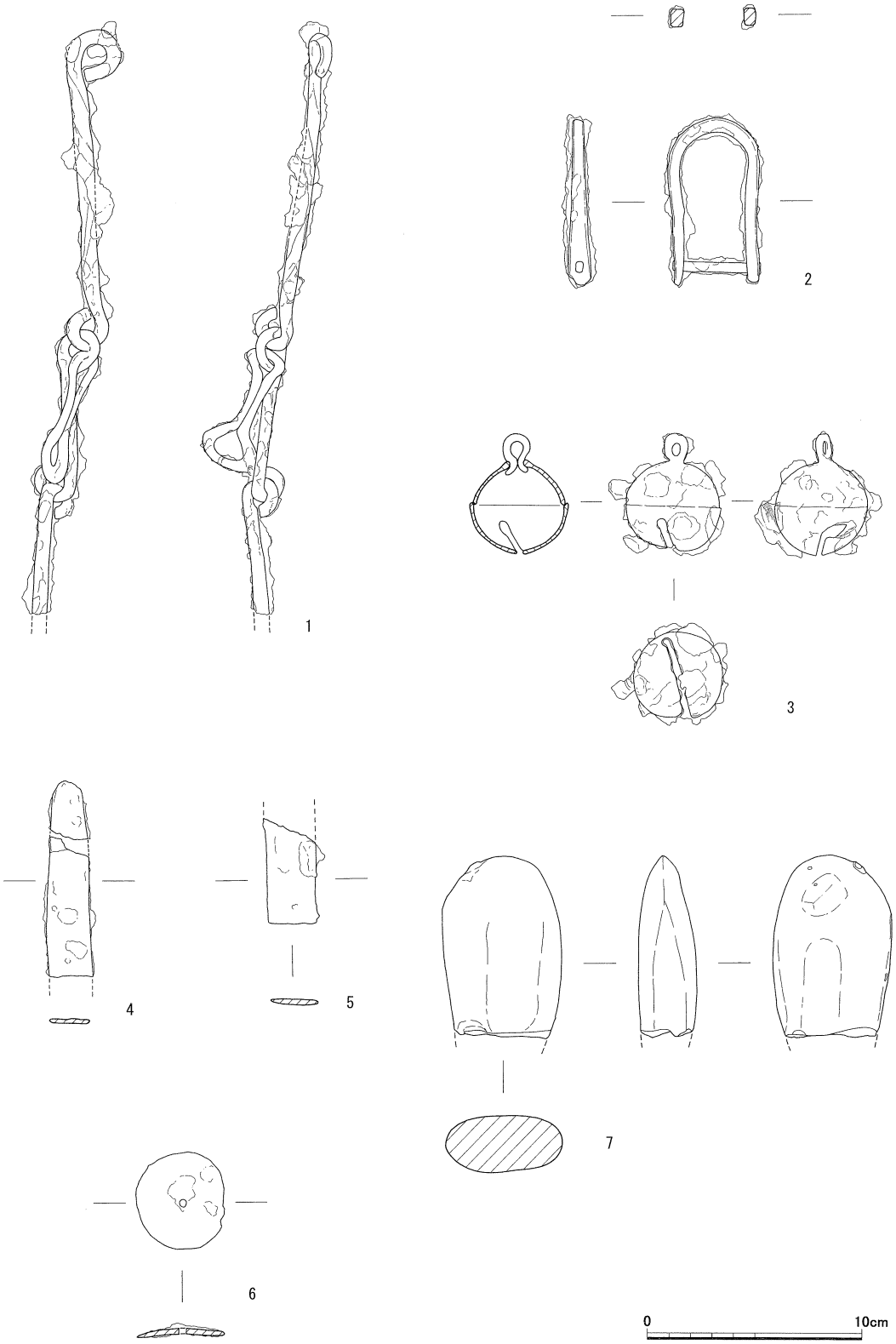

第 67 図　湯後遺跡出土遺物実測図（6）中世土器　（S＝1/3）



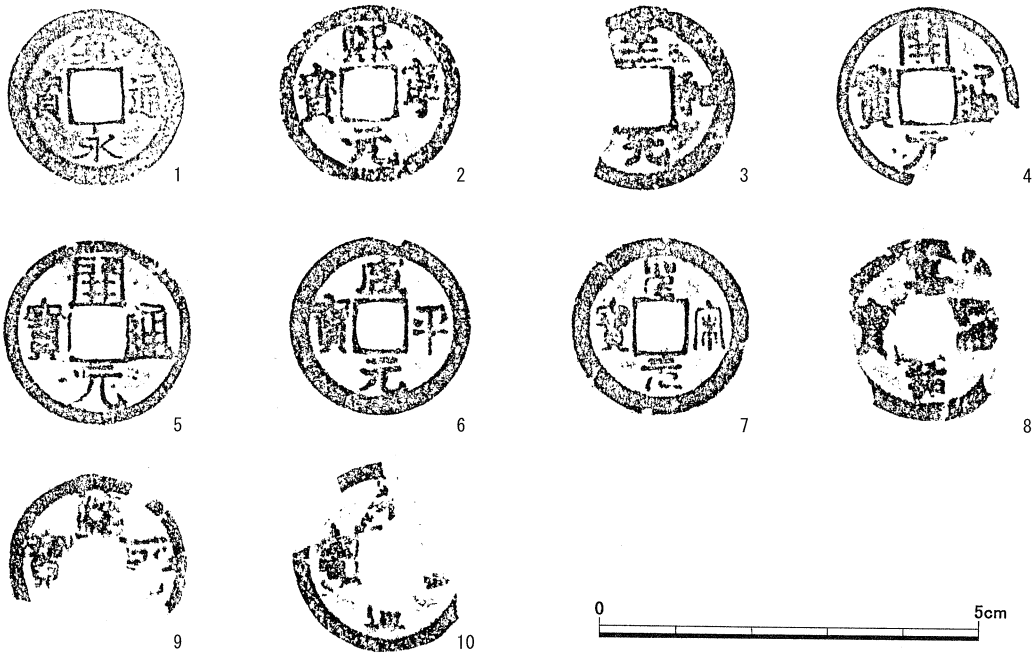

第 68 図　湯後遺跡出土遺物実測図（7）中世土器　（S＝1/3）




第 69 図　湯後遺跡出土遺物実測図（8）中世土器ほか（S = 1/3）




第 70 図　湯後遺跡出土遺物実測図（9）鉄器、石器　（S＝1/3）




第71図　湯後遺跡出土銭貨拓影　（S＝1/1）

第21表　遺構に伴わない出土銭貨計測表（第71図）

| No. | 出土地 | 名　称 | 初鋳年 | 銭径(A)/銭径(B)(mm) | 内径(C)/内径(D)(mm) | 銭　厚(mm) | 量　目(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 25 | 包含層 | 寛永通寶 | ＊ | 23.32　23.30 | 18.83　18.83 | 0.68～0.90 | 2.20 |
| 26 | 包含層 | 熙寧元寶 | 1068年 | 24.02　24.45 | 21.00　21.05 | 0.75～1.08 | 2.73 |
| 27 | 包含層 | 至和元寶 | 1054年 | ＊　24.35 | ＊　19.79 | 0.89～0.95 | 2.04 |
| 28 | トレンチA | 開元通寶 | 621年 | ＊　24.15 | ＊　21.25 | 0.90～0.95 | 1.38 |
| 29 | トレンチA | 開元通寶 | 621年 | 25.15　25.10 | 20.62　20.50 | 0.95～1.05 | 1.43 |
| 30 | トレンチA | 咸平元寶 | 998年 | 24.10　24.05 | 20.00　19.94 | 0.69～0.94 | 1.74 |
| 31 | トレンチA | 聖宋元寶 | 1101年 | 23.75　23.80 | 19.20　19.38 | 1.05～1.30 | 4.19 |
| 32 | 包含層 | 嘉　通寶 | 1056年 | ＊　＊ | ＊　＊ | ＊～＊ | 1.26 |
| 33 | 包含層 | ＊ | ＊ | ＊　23.85 | ＊　21.19 | 1.18～1.20 | 0.90 |
| 34 | 包含層 | ＊ | ＊ | ＊　＊ | ＊　＊ | ＊～＊ | 1.32 |
| 35 | 包含層 | ＊ | ＊ | ＊　＊ | ＊　＊ | ＊～＊ | 1.44 |

第22表　遺構に伴わない出土遺物観察表（1）（第62・63図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種　別 | 法量（cm） | 手法の特徴 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 43 | トレンチA | 直口壺（土師器） | 口径:8.4<br>器高:8.3 | 外面：ヨコナデ<br>内面：ヨコナデ、ヘラケズリ | 1～2㎜程度の砂粒を多く含む | やや不良 | 淡褐色 | |
| 2 | | 包含層 | 皿（土師器） | 口径:(14.6)<br>器高:4.0 | 外面：ヨコナデ？、ナデ<br>内面：ヨコナデ？、ナデ？ | 1～3㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色～赤褐色 | 口径復元<br>赤色塗彩<br>全体的に表面風化 |
| 3 | | 包含層 | 皿（土師器） | 口径:(16.0)<br>器高:4.3 | 外面：ヨコナデ、ナデ<br>内面：ヨコナデ、ナデ | 1～4㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 赤褐色 | 口径反転復元<br>赤色塗彩<br>表面風化 |
| 4 | | トレンチA | 皿（土師器） | 口径:(15.6)<br>器高:(4.5) | 外面：ヨコナデ、ナデ？<br>内面：ヨコナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 赤褐色 | 外面は風化がはげしい<br>赤色塗<br>暗文 |
| 5 | 43 | トレンチA | 皿（土師器） | 口径:14.6<br>器高:3.9 | 外面：ヨコナデ？、回転ヘラ切り<br>内面：ナデ、ヨコナデ？ | 2㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡茶色 | 風化により調整不明瞭 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6 | 43 | 包含層 | 皿<br>(土師器) | 口径:(15.8)<br>器高:3.1 | 外面：ヨコナデ、ナデ<br>内面：ヨコナデ、ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 褐色 | 赤色塗彩 |
| 7 | 43 | 包含層 | 手捏ね土器<br>(その他) | 口径:2.4<br>器高:2.3 | 外面：手捏ね<br>内面：手捏ね | 1㎜程度の砂粒を含む | | 淡茶色 | |
| 8 | 43 | 包含層 | 手捏ね土器<br>(その他) | 口径:3.8<br>器高:2.6 | 外面：手捏ね<br>内面：手捏ね | 1㎜程度の砂粒を含む | | 淡茶色 | |
| 9 | 43 | 包含層 | 高坏？<br>(土師器) | 器高:(8.6) | 外面：ナデ<br>内面：ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡橙色 | 高坏脚部 |
| 10 | | 包含層 | 甕<br>(土師器) | 口径:(15.6) | 外面：ヨコナデ、ハケメ<br>内面：ヨコナデ、<br>ヘラケズリ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡黒茶色 | 口径反転復元 |
| 11 | | トレンチA | 甕<br>(土師器) | 口径:(17.0) | 外面：ヨコナデ、ハケメ<br>内面：ヨコナデ、ハケメ、<br>ヘラケズリ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡黄色 | 口径反転復元 |
| 12 | | トレンチA | 甕<br>(土師器) | 口径:(21.0) | 外面：ヨコナデ、ハケメ<br>内面：ヨコナデ、<br>ヘラケズリ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡茶色 | 口径推定復元 |
| 13 | | 包含層 | 甕<br>(土師器) | 口径:(21.8) | 外面：ヨコナデ、ナデ<br>内面：ヨコナデ、<br>ヘラケズリ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | 口径推定復元 |
| 14 | 43 | 包含層 | 甕<br>(土師器) | 口径:(28.8) | 外面：ヨコナデ、ハケメ<br>内面：ヨコナデ、<br>ヘラケズリ | 1～3㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 黄褐色 | 口径反転復元 |
| 15 | | 包含層 | 甕<br>(土師器) | 口径:22.0 | 外面：ヨコナデ、ハケメ<br>内面：ヨコナデ、<br>ヘラケズリ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡茶色 | |
| 16 | | 包含層 | (土師器) | 口径:(24.0) | 外面：ヨコナデ、ハケメ<br>内面：ヨコナデ、ハケメ、<br>ヘラケズリ | 1～3㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡黄褐色 | 口径反転復元 |
| 17 | | 包含層 | (土師器) | 口径:(28.0) | 外面：ヨコナデ、ハケメ<br>内面：ヨコナデ、ヘラケズリ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡黄褐色 | 口径推定復元 |
| 18 | 43 | 包含層 | (土師器) | 口径:27.8 | 外面：ヨコナデ、ハケメ？<br>内面：ヨコナデ、<br>ヘラケズリ | 1～2㎜程度の砂粒を多く含む | 良好 | 淡褐色 | 表面風化のため調整不明瞭 |
| 19 | 43 | トレンチA | 皿<br>(土師器) | 口径:(27.0) | 外面：ヨコナデ、ハケメ<br>内面：ヨコナデ、<br>ヘラケズリ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色～褐色 | 口径反転復元 |

## 第23表　遺構に伴わない出土遺物観察表（2）（第64図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種　別 | 法量（cm） | 手法の特徴 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 44 | 包含層 | 土製支脚 | 器高:14.1 | 外面：ナデ、ユビオサエ | 2～3㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡黄褐色～淡褐色 | 背面に孔<br>二股突起 |
| 2 | 44 | 包含層 | 土製支脚 | 底径:10.0～11.8 | 外面：ナデ、ユビオサエ | 1～3㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色～淡黄褐色 | 背面に孔 |
| 3 | 44 | 包含層 | 土製支脚 | 器高:17.9 | 外面：ナデ、ユビオサエ | 2～4㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡茶褐色 | |
| 4 | 44 | 包含層 | 土製支脚 | 器高:14.8<br>底径:10.0前後 | 外面：ナデ、ユビオサエ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡茶褐色 | 背面欠損<br>二股突起か？ |

## 第24表　遺構に伴わない出土遺物観察表（3）（第65・66図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種　別 | 法量（cm） | 手法の特徴 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 45 | 包含層 | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:(13.0)<br>器高:4.2 | 外面：回転ナデ、ヘラ切リ<br>内面：回転ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡灰色 | 口径反転復元<br>天井部にヘラ記号 |
| 2 | | トレンチ4 | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:11.4<br>器高:3.9 | 外面：回転ナデ、ヘラ切リ<br>内面：回転ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | 天井部にヘラ記号 |
| 3 | 45 | 包含層 | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:11.7<br>器高:4.0 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | やや良 | 淡青灰色 | 口径反転復元 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | | 包含層 | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:(12.2) | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 口径反転復元<br>天井部欠損 |
| 5 | 45 | 包含層 | 蓋<br>(須恵器) | 口径:15.0<br>最大径17.3<br>器高:3.2 | 外面：回転ナデ、<br>回転ヘラ削り<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | 輪状つまみ |
| 6 | 45 | 包含層 | 蓋<br>(須恵器) | 口径:(16.4)<br>器高:3.4 | 外面：回転ナデ、<br>回転ヘラ削り<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 口径反転復元<br>輪状つまみ |
| 7 | 45 | 包含層 | 蓋<br>(須恵器) | 口径:(15.8)<br>器高:2.9 | 外面：回転ナデ、<br>回転ヘラ削り<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 口径反転復元<br>輪状つまみ |
| 8 | 45 | 包含層 | 坏蓋<br>(須恵器) | 口径:15.1<br>器高:1.6 | 外面：回転ナデ、ナデ<br>内面：回転ナデ | 2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 輪状つまみ |
| 9 | 45 | 包含層 | 蓋<br>(須恵器) | 口径:(16.4)<br>器高:(2.2) | 外面：回転ナデ、<br>回転ヘラ削り<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 回転推定復元<br>輪状つまみ |
| 10 | 45 | トレンチ4 | 坏<br>(須恵器) | 口径:10.4<br>器高:4.0<br>底径:最大12.8 | 外面：回転ナデ、<br>回転ヘラ切り後ナデ？<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | 外面の一部自然釉かかる |
| 11 | 45 | 包含層 | 坏<br>(須恵器) | 口径:(10.6)<br>器高:4.0 | 外面：回転ナデ、ヘラ切り<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 口径反転復元 |
| 12 | | 包含層 | 坏？<br>(須恵器) | 口径:10.0<br>器高:3.9 | 外面：回転ナデ、ヘラ切り<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | |
| 13 | 46 | 包含層 | 坏<br>(須恵器) | 口径:11.8<br>器高:4.0 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1～3㎜程度の砂粒（石）を含む | 良好 | 淡茶色～<br>淡灰色 | 口径反転復元 |
| 14 | 46 | 包含層 | 椀<br>(須恵器) | 口径:(12.0)<br>器高:4.0 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 口径反転復元 |
| 15 | | 包含層 | 坏<br>(須恵器) | 口径:(12.2)<br>器高:4.4 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1～3㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | 口径反転復元 |
| 16 | 46 | トレンチA | 高台付坏<br>(須恵器) | 口径:14.0<br>器高:5.5<br>底径:7.4 | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | |
| 17 | 46 | 包含層 | 高台付坏<br>(須恵器) | 口径:(14.0)<br>器高:5.0<br>底径:8.2 | 外面：回転ナデ、ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | 口径反転復元 |
| 18 | 46 | トレンチA | 高台付坏<br>(須恵器) | 口径:(13.9)<br>器高:4.9<br>底径:8.1 | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | 2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青褐色 | 口径反転復元 |
| 19 | 46 | トレンチA | 高台付坏<br>(須恵器) | 口径:13.7<br>器高:5.7<br>底径:8.7 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1～4㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 茶褐色 | |
| 20 | 46 | 包含層 | 高台付坏<br>(須恵器) | 口径:14.8<br>器高:5.8<br>底径:9.8 | 外面：回転ナデ、静止糸切り<br>内面：回転ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 灰色 | |
| 21 | 46 | 包含層 | 坏<br>(須恵器) | 口径:(14.5)<br>器高:5.5 | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ、(回転糸切り後？)静止糸切り | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 濃青灰色、<br>褐色、青灰色、淡灰色 | 口径反転復元 |
| 22 | 47 | 包含層 | 高台付坏<br>(須恵器) | 口径:(10.0) | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 口径推定復元 |
| 23 | | 包含層 | 高坏<br>(須恵器) | 底径:7.8 | 外面：回転ナデ<br>内面：ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 青灰色 | |
| 24 | 47 | 包含層 | 高坏<br>(須恵器) | 口径:(13.6)<br>器高:8.6<br>底径:8.2 | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ<br>脚部外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | 1～3㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 2方透かし |
| 25 | 47 | 包含層 | 高坏<br>(須恵器) | 口径:(15.1)<br>器高:9.9<br>底径:(10.0) | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | 2方透かし |
| 26 | 47 | 包含層 | 高坏<br>(須恵器) | 口径:15.8<br>器高:9.2 | 外面：回転ナデ<br>内面：ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 不良 | 淡灰色 | 口径反転復元 |
| 27 | 47 | 包含層 | 瓶<br>(須恵器) | | 外面：回転ナデ、<br>回転ヘラ削り<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 青灰色<br>一部褐色 | |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 28 | 47 | 包含層 | 長頸瓶？<br>(須恵器) | | 外面：回転ナデ、ヘラ削り後ナデ、ヘラ削り、ヘラ切り後ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青褐色 | |
| 29 | | トレンチ9周辺 | 長頸瓶底部？<br>(須恵器) | | 外面：回転ヘラ削り<br>内面：回転ナデ | 1㎜弱の砂粒を含む | 良好 | 淡黄灰色 | |
| 30 | | 包含層 | 平瓶？<br>(須恵器) | | 外面：回転ナデ、カキメ<br>内面：回転ナデ | 1～3㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡青灰色 | |
| 31 | 47 | 包含層 | 壷底部<br>(須恵器) | 器高:(5.2)<br>底部:4.7 | 外面：回転ナデ？<br>内面：回転ナデ？ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 表：黒色<br>裏：青灰色 | 自然釉が多くかかる |
| 32 | | 包含層 | 甕<br>(須恵器) | 口径:(22.8) | 外面：回転ナデ、タタキ後カキメ<br>内面：アテ具痕、ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を若干含む | 良好 | 淡青灰色 | |

## 第25表　遺構に伴わない出土遺物観察表(4)（第67・68図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種　別 | 法量（cm） | 手法の特徴 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 48 | 包含層 | 高台付皿<br>(中世土器) | 底径:5.4 | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を多く含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 2 | 48 | 包含層 | 高台付皿<br>(中世土器) | 口径:8.4<br>器高:3.0 | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を多く含む | やや良 | 淡黄白色 | |
| 3 | 48 | 包含層 | 高台付皿<br>(中世土器) | 口径:8.7<br>器高:2.9<br>底径:5.0 | 外面：回転ナデ、ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1～3㎜程度の砂粒を多く含む | 良好 | 淡黄白色 | |
| 4 | 48 | 包含層 | 高台付皿<br>(中世土器) | 口径:8.6 | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を多く含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 5 | | 包含層 | 高台付皿<br>(中世土器) | 底径:4.6 | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を多く含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 6 | | 包含層 | 高台付皿<br>(中世土器) | 底径:4.6 | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 7 | | 包含層 | 高台付皿<br>(中世土器) | 口径:7.8<br>器高:<br>(2.5?) | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を多く含む | 良好 | 淡褐色 | 表面風化 |
| 8 | | 包含層 | 高台付皿<br>(中世土器) | 底径:4.8 | 外面：回転ナデ？<br>内面：ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡黄白色 | |
| 9 | | 包含層 | 高台付皿<br>(中世土器) | 底径:4.0 | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 10 | 48 | 包含層 | 柱状高台皿<br>(中世土器) | 底径:5.5 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡橙色 | 表面風化のため調整不明瞭 |
| 11 | 48 | 包含層 | 柱状高台皿<br>(中世土器) | 底径:4.5 | 外面：回転ナデ、回転糸切り | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡橙色 | |
| 12 | 48 | 包含層 | 柱状高台皿<br>(中世土器) | 底径:3.6 | 外面：回転ナデ、回転糸切り<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡橙色 | |
| 13 | | 包含層 | 高台付坏<br>(中世土器) | 底径:(8.4) | 外面：回転ナデ、ナデ<br>内面：回転ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 茶褐色 | |
| 14 | 48 | 包含層 | 高台付坏<br>(中世土器) | 口径:(13.8)<br>器高:6.5<br>底径:7.2 | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ、回転糸切り | 1～3㎜程度の砂粒を多く含む | 良好 | 淡褐色 | 口径反転復元 |
| 15 | 48 | 包含層 | 高台付坏<br>(中世土器) | 口径:15.0<br>器高:6.0<br>底径:8.0 | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡黄色 | 底部穿孔（焼成前） |
| 16 | | 包含層 | 高台付坏<br>(中世土器) | 底径:7.4 | 外面：回転ナデ、ナデ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 明褐色 | |
| 17 | | 包含層 | 高台付坏<br>(中世土器) | 底径:9.8 | 外面：回転ナデ、回転糸切り後回転ナデ？<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡橙色 | |
| 18 | | 包含層 | 高台付坏<br>(中世土器) | 底径:(7.2) | 外面：回転ナデ<br>内面：回転ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | 表面風化 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 19 | | 包含層 | 坏<br>(中世土器) | 口径:(12.2)<br>器高:3.6<br>底径:(7.2) | 外面：回転ナデ、ヘラ切リ？<br>内面：回転ナデ | 1～3㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 外：褐色<br>内：淡褐色 | 口径反転復元 |
| 20 | 48 | 包含層 | 坏<br>(中世土器) | 口径:11.8<br>器高:3.8<br>底径:6.8 | 外面：回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ<br>内面：回転ナデ、<br>ヘラ切リ後ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡橙色 | 内面，外面とも赤色顔料 |
| 21 | 48 | 包含層 | 坏<br>(中世土器) | 口径:12.4<br>器高:4.3<br>底径:6.0 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 22 | 49 | 包含層 | 坏<br>(中世土器) | 口径:(12.0)<br>器高:5.2<br>底径:(6.2) | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 明褐色 | 口径反転復元 |
| 23 | 49 | 包含層 | 坏<br>(中世土器) | 口径:(15.2)<br>器高:4.6<br>底径:6.0 | 外面：回転ナデ、ナデ<br>内面：回転ナデ | 2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | 口径反転復元 |
| 24 | 49 | 包含層 | 坏<br>(中世土器) | 口径:(15.4)<br>器高:4.9<br>底径:6.2 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | 口径反転復元 |
| 25 | 49 | 包含層 | 坏<br>(中世土器) | 口径:(15.2)<br>器高:4.4<br>底径:6.0 | 外面：回転ヘラ削リ後回転ナデ、回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 褐色 | 口径反転復元 |
| 26 | | 包含層 | 坏<br>(中世土器) | 口径:(15.6)<br>器高:5.3<br>底径:6.2 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | 口径反転復元 |
| 27 | 49 | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.7<br>器高:2.0<br>底径:5.0 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ？<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒をわずかに含む | 良好 | 淡褐色<br>(肌色) | 全体的に摩滅 |
| 28 | | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.0<br>器高:2.0 | 外面：摩滅、回転糸切リ<br>内面：ナデ？ | 2㎜程度の砂粒を多く含む | やや良 | 淡褐色 | 風化により調整不明瞭 |
| 29 | | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:7.8<br>器高:1.5 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 30 | | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:(7.9)<br>器高:2.5<br>底径:4.1 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 褐色 | 口径反転復元 |
| 31 | | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 底径:4.1 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 32 | | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:(9.2)<br>器高:2.2 | 外面：回転ナデ？、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ？ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡赤褐色 | 口径反転復元 |
| 33 | | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:(8.6)<br>器高:1.9<br>底径:4.5 | 外面：回転ナデ？、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1～2㎜程度の砂粒を多く含む | 不良 | 淡白色 | 口径反転復元 |
| 34 | | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:7.8<br>器高:1.9<br>底径:3.8 | 外面：回転ナデ、回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 褐色 | 器壁がやや厚い |
| 35 | 49 | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:7.6<br>器高:1.8<br>底径:3.6 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | キメ細かな胎土 | 良好 | 淡赤褐色 | |
| 36 | | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:9.2<br>器高:1.8 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 37 | | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.6<br>器高:1.8 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | 口縁部付近で外反 |
| 38 | | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.2<br>器高:1.8<br>底径:4.0 | 外面：回転ナデ？、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ？ | 1～3㎜程度の砂粒を多く含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 39 | 49 | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.9<br>器高:1.8 | 外面：回転ナデ、糸切リ<br>内面：強い回転ナデ、棒状の物による線状痕 | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | 底部穿孔 |
| 40 | | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:(10.0)<br>器高:2.4<br>底径:4.0 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 褐色 | 口径反転復元 |
| 41 | | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.3<br>器高:1.7 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒、雲母を含む | 良好 | 淡褐色 | |
| 42 | 49 | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.4<br>器高:1.6 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 淡褐色 | 歪みあり |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 43 | 49 | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:(7.8)<br>器高:2.0<br>底径:4.0 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 赤褐色～<br>淡肌色 | 口径反転復元<br>外面赤色塗彩 |
| 44 | | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:7.4<br>器高:1.8 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜程度の砂粒を含む | 良好 | 赤褐色 | |
| 45 | 49 | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.8<br>器高:1.5 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | ほとんど砂を含まないキメの細かな胎土 | 良好 | 褐色 | |
| 46 | | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.8<br>器高:1.6 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む（キメの細かな胎土） | 良好 | 褐色 | |
| 47 | | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:8.9<br>器高:1.9<br>底径:7.0 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む（キメの細かな胎土） | 良好 | 赤褐色 | |
| 48 | 49 | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:7.7<br>器高:1.8<br>底径:6.3 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む（キメの細かな胎土） | 良好 | 赤褐色 | |
| 49 | | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:7.2<br>器高:1.4<br>底径:3.3 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む（キメの細かな胎土） | 良好 | 赤褐色 | |
| 50 | | 包含層 | 皿<br>(中世土器) | 口径:7.1<br>器高:1.4<br>底径:3.6 | 外面：回転ナデ、<br>回転糸切リ<br>内面：回転ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む（キメの細かな胎土） | 良好 | 淡褐色 | |

## 第26表　遺構に伴わない出土遺物観察表（5）（第69図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種　別 | 法量（cm） | 手法の特徴 | 胎　土 | 焼成 | 色　調 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 50 | トレンチA | 皿<br>(土師器) | 口径:11.6<br>器高:2.2<br>底径:4.0 | 外面：ナデ<br>内面：ヨコナデ | 1㎜以下の砂粒をわずかに含む | 良好 | 肌色 | 内面「2」の字ナデ |
| 2 | 50 | トレンチA | 皿<br>(土師器) | 口径:11.7<br>器高:2.3 | 外面：ナデ<br>内面：ヨコナデ | 1㎜以下の砂粒をわずかに含む | 良好 | 肌色 | 内面「2」の字ナデ |
| 3 | 50 | トレンチA | 皿<br>(土師器) | 口径:12.0<br>器高:2.3 | 外面：ナデ<br>内面：ヨコナデ | 1㎜以下の砂粒をわずかに含む | 良好 | 肌色 | 内面「2」の字ナデ |
| 4 | 50 | トレンチA | 皿<br>(土師器) | 口径:11.8<br>器高:4.4<br>底径:2.2 | 外面：ナデ<br>内面：ヨコナデ | 1㎜以下の砂粒をわずかに含む | 良好 | 肌色 | |
| 5 | 50 | 包含層 | 椀<br>(白磁) | 口径:(15.6)<br>器高:5.8<br>底径:(6.4) | 外面：玉縁 | 1㎜以下の砂粒を含む<br>黒粒を含む | 良好 | 白（灰）色 | 口径反転復元<br>底部には施釉されない |
| 6 | 50 | 包含層 | 香炉 | | 外面：回転ナデ後ヘラミガキ、回転ナデ、ナデ<br>内面：回転ナデ、ナデ | 1㎜以下の砂粒を含む | 良好 | 暗灰褐色 | |
| 7 | 50 | トレンチA | 石鉢 | 口径:24.1<br>器高:13.0<br>底径:10.8 | | | | | |

## 第27表　遺構に伴わない出土遺物観察表（6）（第70図）

| 挿図番号 | 写真図版 | 出土地点 | 種別 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 重量(g) | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | | 馬　具<br>(鉄器) | | | | 引手、銜の部分か？ |
| 2 | 50 | | 馬　具<br>(鉄器) | 7.8 | 3.9 | | 鉸具 |
| 3 | | | 鉄　鈴<br>(鉄器) | 5.3 | 4.4 | | 内側には鉄製の丸 |
| 4 | 50 | | ？<br>(鉄器) | (9.2) | 2.0 | | |
| 5 | | | ？<br>(鉄器) | (3.9) | 2.3 | | |
| 6 | 50 | | 紡錘車<br>(鉄器) | | 4.6 | 2.5 | |
| 7 | | | 磨製石器<br>(石器) | (8.4) | 5.4 | 2.5 | 基部欠損 |

〔註〕（1）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994

（2）八峠　興「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究XIII』1998

# 第４節　まとめ

## １．　横穴墓について

湯後遺跡からは計８基の横穴墓が確認された。前節において報告したとおり、いずれのものも天井部分が崩落しているなど残存状況が良いものではなかったが、ここでは気づいた点を中心に整理しまとめとしたい。

### （１）　横穴墓の時期について

各横穴墓から出土した須恵器はほとんどが出雲５期[註1]の範疇に収まるものと考えられるものである。それ以前の時期のものは横穴墓及びその周辺からは確認されず、また、それより新しい時期のものは出雲６期に該当すると考えられるものが一部の横穴墓で確認される程度で、さらに新しい時期のものは横穴墓内からは一切確認されていない。

以上の点から、後世の侵入・盗掘など考慮しなければならない点はあるものの、湯後遺跡における横穴墓は出雲５期を中心に築造が開始され、出雲５期～出雲６期にかけて使用されたものと考えられる。

### （２）　玄室の形態について

玄室形態の詳細はこれまで繰り返し述べているように、残存状況がよくないため明らかでない。残存している部分から推測すると、平面が長方形で断面が斜辺の膨らむ三角形や半円形を呈するものと、平面形が不整形で断面は同様の形態を呈するものとが存在するようである。これまでの調査や研究により、斐伊川中・上流域における横穴墓の様相は、断面が三角形のテント形のものが主流とされているが[註2]、今回確認した横穴墓も多くはテント形のものと考えられることから、基本的にはそれを追認するものといえよう。

### （３）　閉塞施設について

閉塞状況が明確に確認できるものはなかったが、１・２・４・６・７号横穴墓ではその痕跡と考えられる浅い溝が認められた。調査時には閉塞に用いられたと考えられるような石などは検出していないことから、木板などによって閉塞されたものと考えられる。また３・５号横穴墓のように閉塞部分が段状となっているものもあるが、これも石は確認していないことから、形態は異なるものの同じく木板等によって閉塞されていたものと思われる。三刀屋町の東下谷横穴群においても同様な推測がされているほか[註3]石による閉塞が確認されていないことからすると、石のあまり産出しない当地域においては木板などによる閉塞が一般的であった可能性も考えられる。

### （４）　玄室内施設について

６号・７号横穴墓の玄室内では扁平な石が確認されている。周辺地域において玄室内から扁平な石が確認された例としては、三刀屋町の東下谷横穴群４号穴[註4]や太田横穴群１号穴[註5]などが知られている。こうした玄室内の石の性格については、瑞穂町の江迫横穴群の調査結果[註6]から、遺体を乗せる平板の土台である可能性が高いとされており、今回検出したものも同様のものであると考えられる。

また３号横穴墓においては石などは確認されていないものの、床面に４カ所の窪みが確認されている。配置状況から考えて、そこに遺体を安置するためのなんらかの施設があったことは考えられるが、そのほかに推測できるものがなく具体的には明らかにできなかった。今後類例を待って検討したい。

### （5） 石棺と被葬者について

湯後遺跡において確認した横穴墓のうち、２号横穴墓と４号横穴墓の２基には玄室内に石棺が納められていた。両横穴墓は横穴墓の規模や副葬品などの点においても他の横穴墓とは一線を画しており、それぞれの斜面を一つの支群として捉えるならば、各支群における「盟主的」な横穴墓であるといえるものである。

しかしながら、採用されている石棺形態は、２号横穴墓のものが来待石と考えられる凝灰質砂岩の切石によって構成された組み合わせ式の家形石棺であるのに対して、４号横穴墓のものは割石を用いて構成される箱形石棺というように違いをみせている。

家形石棺は、これまでのところ、出雲地域では60例あまりが知られているが(註7)、斐伊川中・上流域においてはその存在が確認されていなかった石棺である。それに対して４号横穴墓にみられるような割石を用いた箱形石棺は、同じ加茂町内の平田横穴群１号穴(註8)など数例確認されており、当地域では比較的一般的な石棺といえるものである。

（1）において述べているように、両者はほぼ同時期に築造されていると考えられるものであり、時間的な差はほとんど認められない。また前述のとおり、湯後遺跡において確認された横穴墓の玄室形態は当地域に一般的な形態であったと推測され、そのこととともあわせると、２号横穴墓に納められた石棺は、現状では当地域において異質なものと捉えることができそうである。

このように採用する石棺に違いが現れるのは、そこに葬られる被葬者の性格が大きく反映されているものと考えられよう。

ところで、出雲（東部）地域の家形石棺についてはその属性（特徴）に地域性が認められることが指摘されている(註9)。今回確認した石棺には、天井石が扁平である点や側石内面が「冂」状に刳り込まれている点、さらに箱形である点などいくつかの特徴が認められるが、こうした特徴は宍道湖沿岸地域や馬橋川・意宇川流域の石棺に特徴的なもののようである(註10)。

そのような点ともあわせて被葬者像について考えると、２号横穴墓に埋葬された人物は宍道湖沿岸地域ないしは松江周辺地域と何らかの関わりがありそれらの地域の石棺形態を指向した人物、また４号横穴墓に埋葬された人物は在地の石棺形態を指向した人物であったものと想定されるのではないだろうか。もちろん、ここでは社会的背景や工人の問題など検討しなければならない問題もあるが、それについては今後の課題としておきたい。

## ２．中世の遺構と遺物について

湯後遺跡からは中世のものと考えられる遺物が多数出土している。出土遺物は土師器坏・皿類が中心であるがわずかながら白磁も認められる。これらの時期としては12世紀前半代が考えられるが、(註11)同時期の遺構は、調査区の北東側で確認した溝状遺構１などわずかである。溝状遺構１はその形状等から考えて建物に付随していたものと思われるが、確認はできなかった。しかしながら、出土遺物の量から推測してもこの時期に人々の活動があったことは確実で、なんらかの施設が存在していた可能性は十分考えられよう。

加茂町内においてこの時期の資料がまとまって確認された例は少なく、貴重な資料となるものと思われる。

〔註〕

（1）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994

（2）大谷晃二・松山智弘「横穴墓の形式とその評価」『田中義昭先生退官記念文集―地域に根ざして』1999
西尾克己・原田敏照・守岡正司「出雲西部における横穴墓の様相」『湖陵町誌研究』第１号　1992

（3）杉原清一・広江耕史『東下谷横穴群発掘調査報告書』三刀屋町教育委員会　1984

（4）前掲（3）に同じ
杉原清一『角・宮ノ峠横穴・柏原遺跡』横田町教育委員会　1994
『下布施横穴墓群　現地説明会資料』木次町教育委員会　2000
前掲（4）に同じ
前掲（4）に同じ

（5）『太田横穴群発掘調査報告書』三刀屋町教育委員会　1982

（6）「江迫横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』 1974

（7）大谷晃二「出雲の古墳時代後期の切石石棺」『第23回　山陰考古学研究集会　古墳時代後期の棺
～家形石棺を中心に～』　1995

（8）「平田横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』　1974

（9）大谷晃二・松本岩雄・勝部昭・三宅博士『御崎山古墳の研究』島根県教育委員会・島県県立八雲立つ
風土記の丘

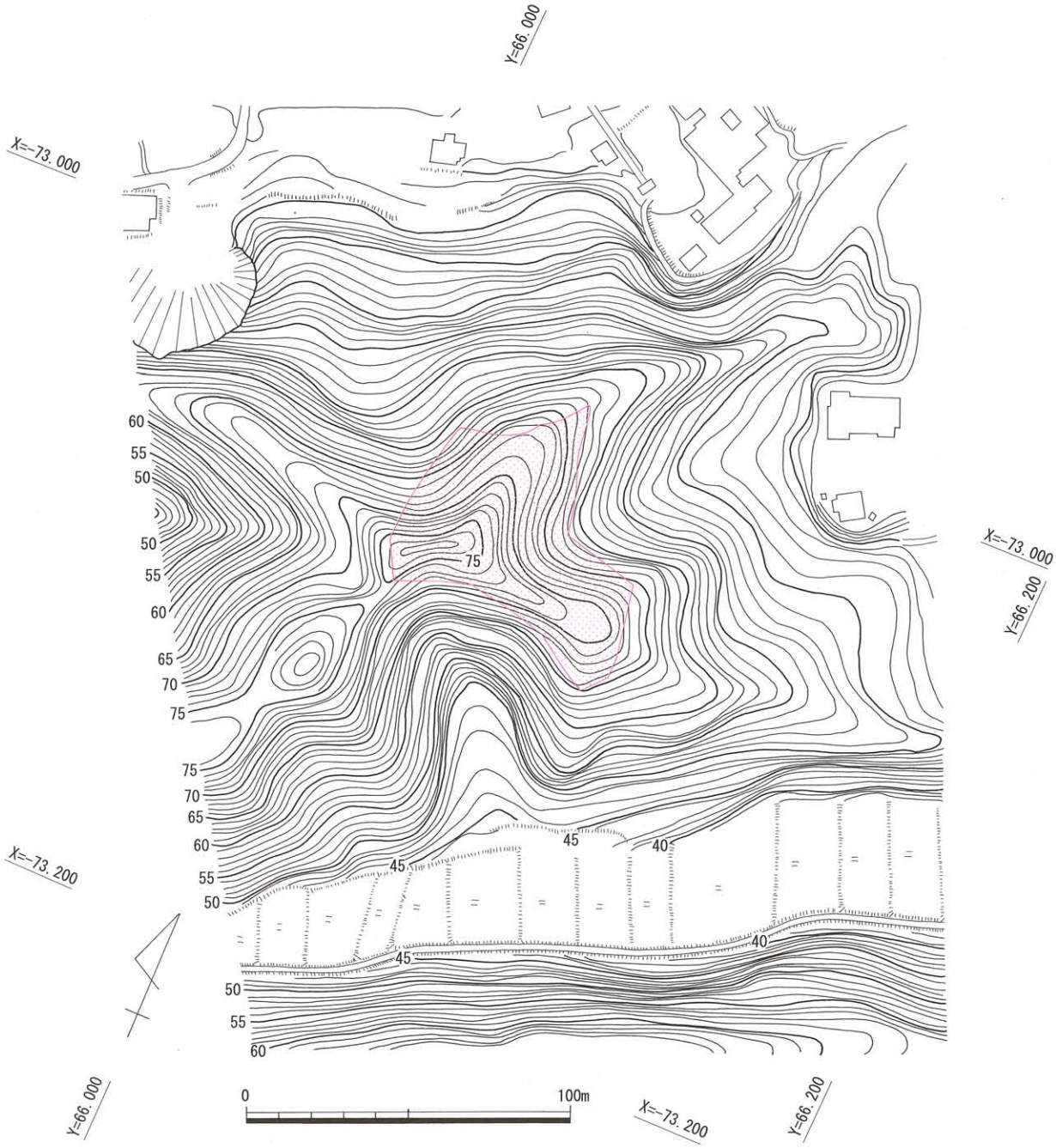
(10) 大谷晃二氏のご教示による

(11) 八峠　興「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究ＸⅢ』 1998

# 第６章　土井・砂遺跡

## 第１節　遺跡の位置と概要

土井・砂遺跡は大原郡加茂町大字神原に所在する。遺跡は斐伊川の支流、赤川南岸の標高約65m～76mの低丘陵に位置する。赤川中流域の加茂盆地を臨み、眼下には神原神社古墳、東には神原正面遺跡群が一望できる。遺跡内からは前期古墳６基、横穴墓７穴が検出された。その他、明確な遺構は少ないが、奈良時代から近世までの遺物を確認するに至った。とりわけ、前期古墳６基は神原神社古墳と同時期の様相を持つことから、出雲内陸部での古墳出現期の様相を解明する資料となった。同じく、古墳時代後期後半に造営が始まる横穴墓の調査は、横穴墓の調査例が少ない出雲内陸部にあって加茂盆地、特に赤川中流域の横穴墓の様相に新たな資料を追加することになった。




第72図　土井・砂遺跡調査前測量図　（S＝1/2,000）

## 第２節　調査の経過と概要

土井・砂遺跡の発掘調査は、平成６年度に行われた中国横断自動車道尾道松江線建設ルートの分布調査の結果、墳墓などの存在が予想されたことから、建設に先立つ予定地内遺跡の発掘調査として、平成11年４月15日から開始された。

同年４月15日～26日までトレンチ調査を行い、遺跡内の丘陵上に古墳３基（１・４・５号墳）と丘陵北西斜面に横穴墓１穴（６号横穴墓）を確認するに至った。この結果に基づき、予定地内の丘陵上から丘陵斜面を含む3500平方メートルが本調査の対象となった。

５月６日より、丘陵斜面に対し重機による表土掘削を開始した。表土直下の土層から土師器片が頻繁に見られるようになったため、５月13日より作業員を動員して本調査を行うことになった。

当初、古墳の調査を優先させていたが、工事用の土砂採掘が遺跡内において開始されることになったため、破壊される恐れのある丘陵斜面の横穴墓の調査を優先させることになった。

６月15日に島根県文化財保護審議委員蓮岡法暲氏、８月12日に島根大学法文学部教授渡邊貞幸氏、９月17日に島根県立松江北高等学校教諭大谷晃二氏の調査指導を受け、横穴墓・古墳の調査を行った。また、奈良女子大学文学部教授広瀬和雄氏には、古墳主体部の調査について助言を得た。

10月15日に現地説明会を開催し、参加者は110名を数えた。そして調査は11月８日に終了した。

## 第３節　調査の結果

### １．古墳の調査

#### １号墳（第74図）

**（墳形・墳丘規模）**（第75図）　１号墳は当遺跡の東尾根筋の先端に位置し、後世の撹乱（尾根筋に沿った小さな山道）のため、主体部を含めた墳丘南側の大半が削りとられている。

墳形は地山を削り出した方墳で規模は南北10m、東西10m、現存高は0.8mである。なお、表土直下は地山になり、盛り土は確認できなかったが、周溝内埋土がそれの一部に相当するものと考えられる。墳丘北裾の中央部に不明瞭な周溝が東西方向に、墳丘西裾では２号墳と画される周溝が南北に走る。また、撹乱を免れた墳丘の南西裾では墳端が辛うじて検出された。墳丘東裾は周溝等の施設がないため、墳端の確認は困難であったが、北・西の周溝の底面のコンターが70.5mラインを走ることと符合するかのように、70m付近で僅かながらテラス状を呈している。ただし、東辺では岩脈が20cm前後の幅で北西方向に10mほど走っているため、このテラスは部分的に確認されるのみである。

これらを以って上述の墳丘規模を測った。

**（周溝）**（第76図）　墳丘北裾の周溝は、墳丘と尾根筋の北斜面を画する溝というより、テラス状の緩やかな面を形成するために造られた浅い掘り込みのようなものである。この周溝の北側では、コンターの幅が広くなっているのが確認できる。西裾の周溝は２号墳と画される溝であるが、土層観察の結果、１号墳からの流土が２号墳のそれに先行して堆積しているようである。

**（埋葬施設の調査）**（第77図）　東西・南北のトレンチ調査の土層観察と表土除去後の土層の平面観察から、墳頂平坦面には切り合った二つの主体部が存在することを確認した。土層の観察から、古い方を第１主体部、新しい方を第２主体部とする。

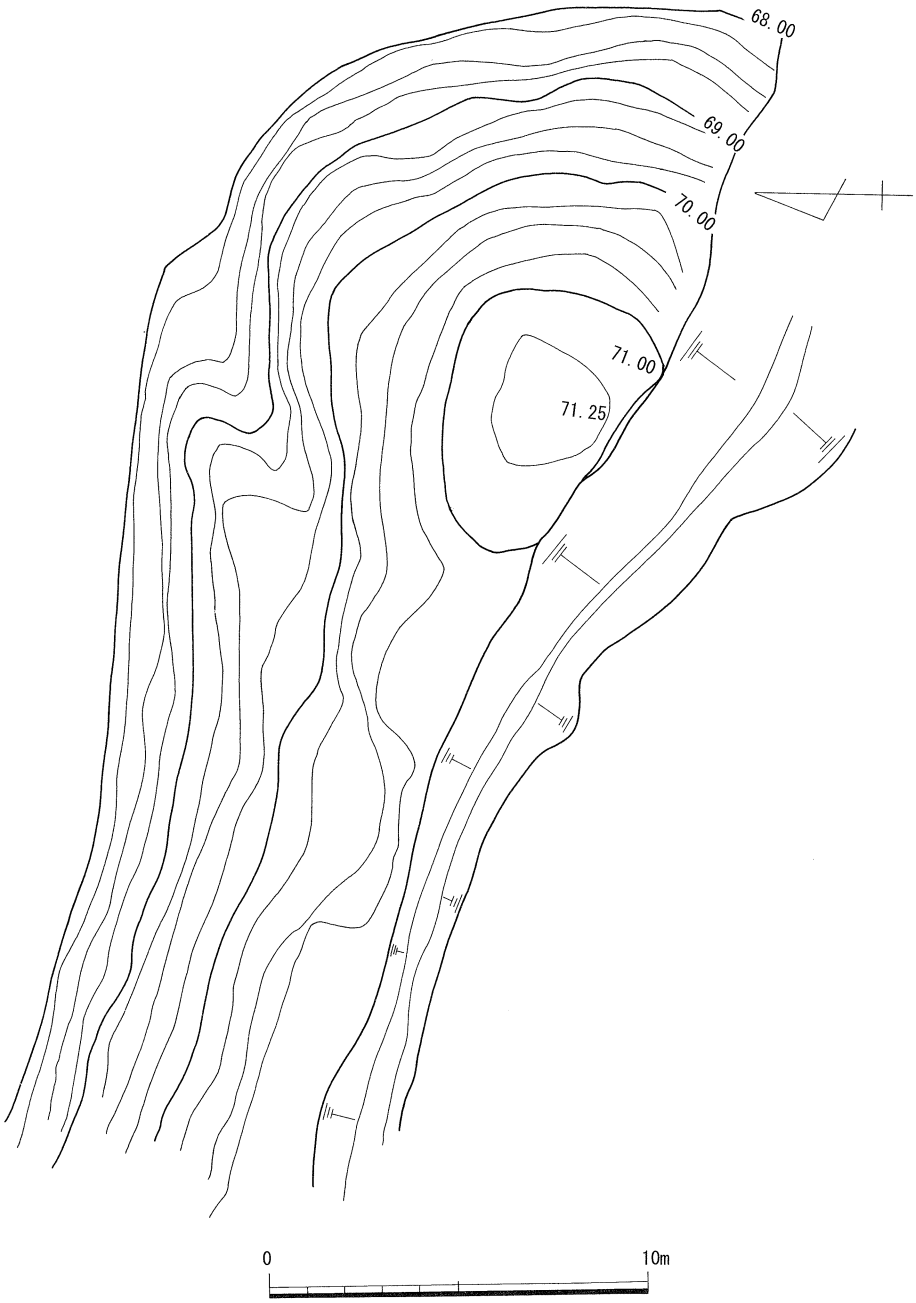
第１主体部は地山を掘り込んだ二段墓壙である。第２主体部に墓壙一段目の西壁を破壊され、撹乱

第73図　土井・砂遺跡遺構配置図　（S＝1/400）

により南壁の一部を破壊されている。このため、検出上面の規模は現状で南北3.4m以上、東西1.8m以上、墓壙一段目までの深さは0.37mである。二段目の規模は南北3.1m、東西1.0m、墓壙一段目からの深さは0.37mである。

土層観察より、埋葬施設は箱形木棺であるものと考えられる。22層は暗灰黄色の粗砂で、木棺の下に敷かれていたようである。21層は棺底に相当する層位と考えられ、棺底の規模は長軸1.8m、短軸0.37mと推定される。

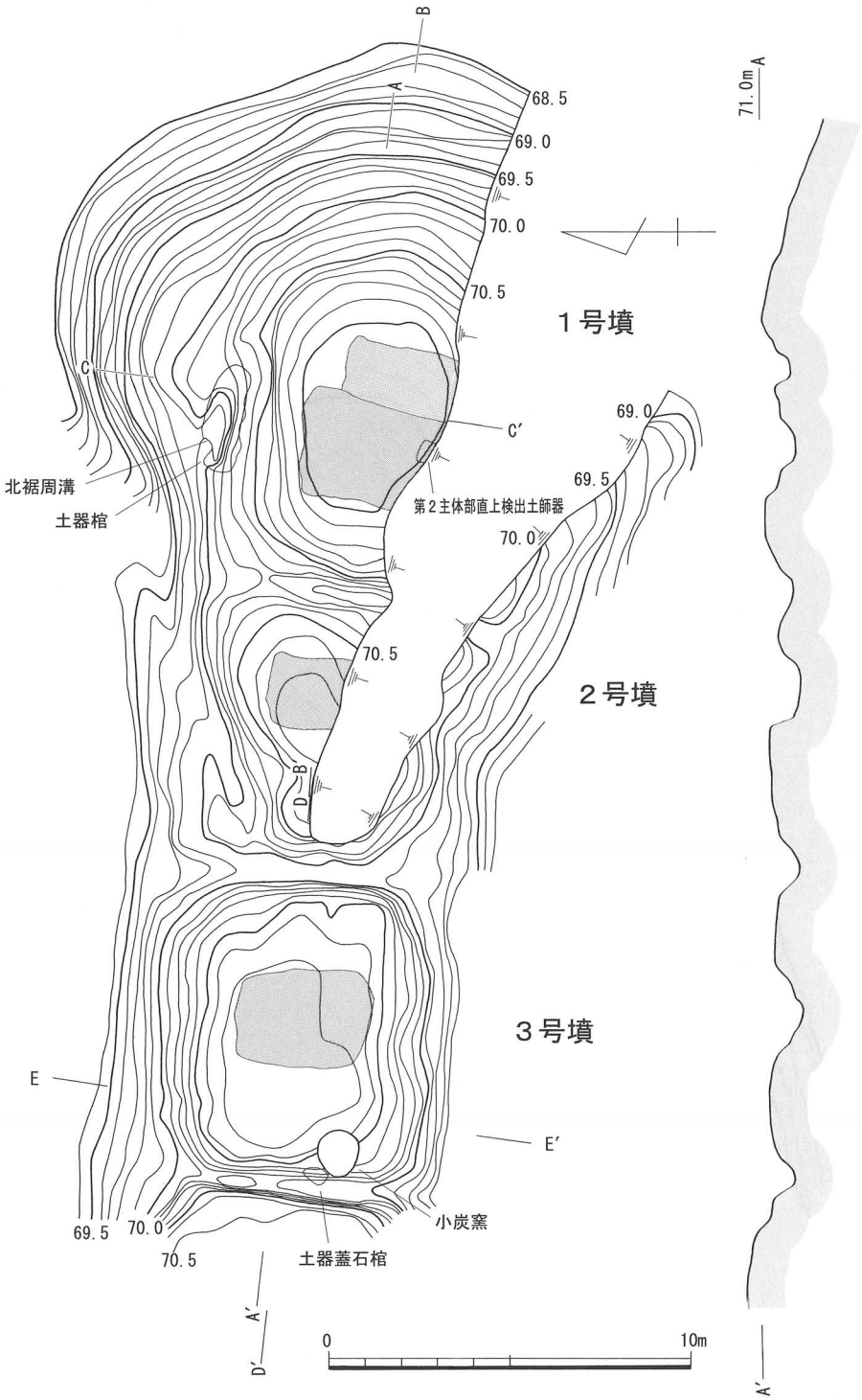
西側側板は23層の暗茶褐色砂質土に相当するものと考えられる。また、主体部二段目の西側に長さ1.4m、幅0.2m、深さ0.1mの溝があり、その埋土も23層と同じであった。このことから、この溝



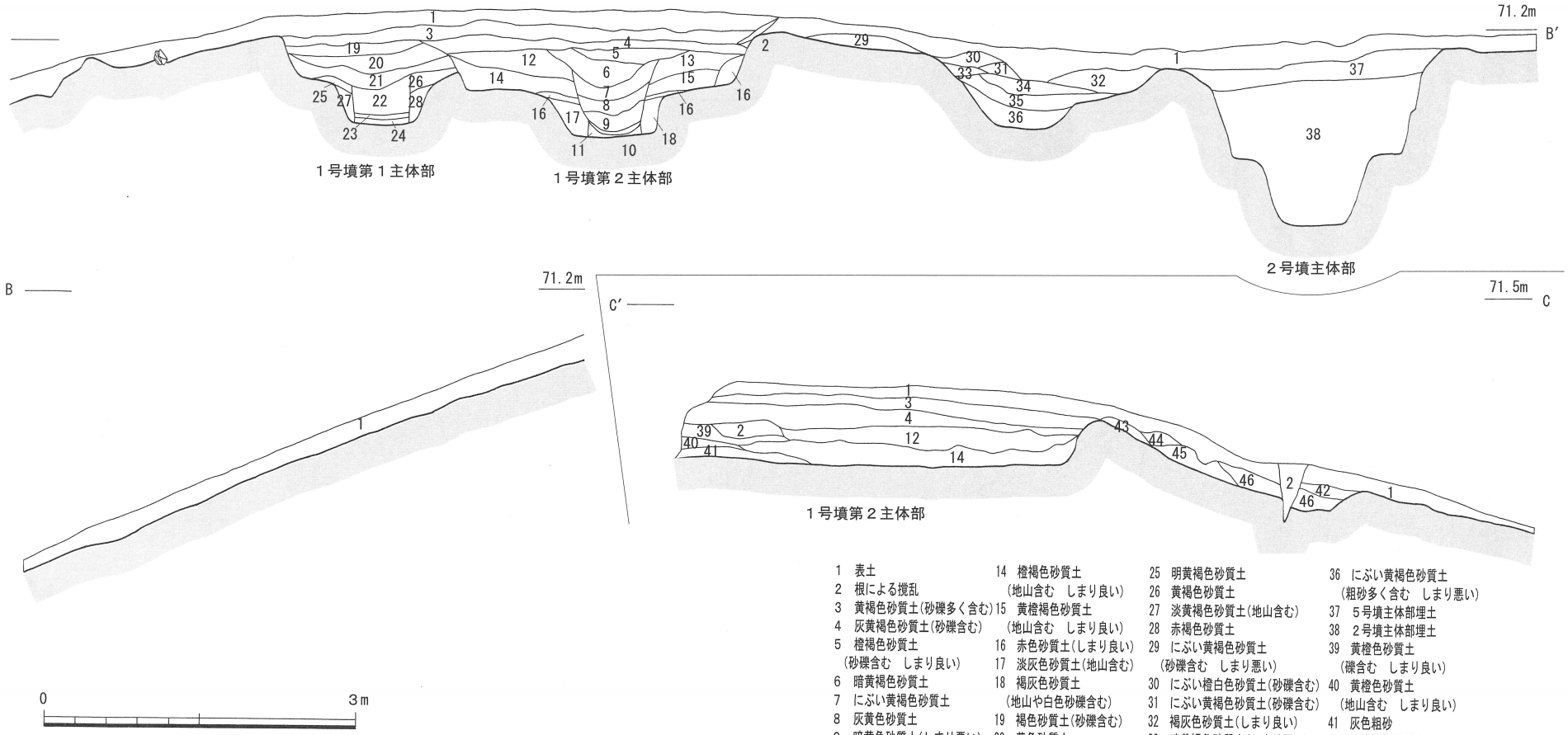

第74図　1号墳周辺調査前測量図　（S＝1/200）

は棺の西側側板を立てるために掘られた可能性が高いと思われる。棺の東側板・両小口板は土層観察では確認できなかった。その他、棺を囲むように充填された裏込め土が確認された。

主体部横断面の土層観察では、地山を含む締まりの良い26・30層がこれに相当する。これらの土層は一段目のテラス部分まで堆積する。一方、主体部縦断面では地山を含む締まりの良い37～39層がこれに相当する。棺の両小口側では一段目のテラスがないことから、38層のように主体部の約2/3の高さまで裏込め土が堆積する。棺は推定であるが、裏込め土の関係から、19～21・23層に相当するものと考えられる。なお、棺の両小口の裏込め土である39層は木棺に向かって傾斜している。こ

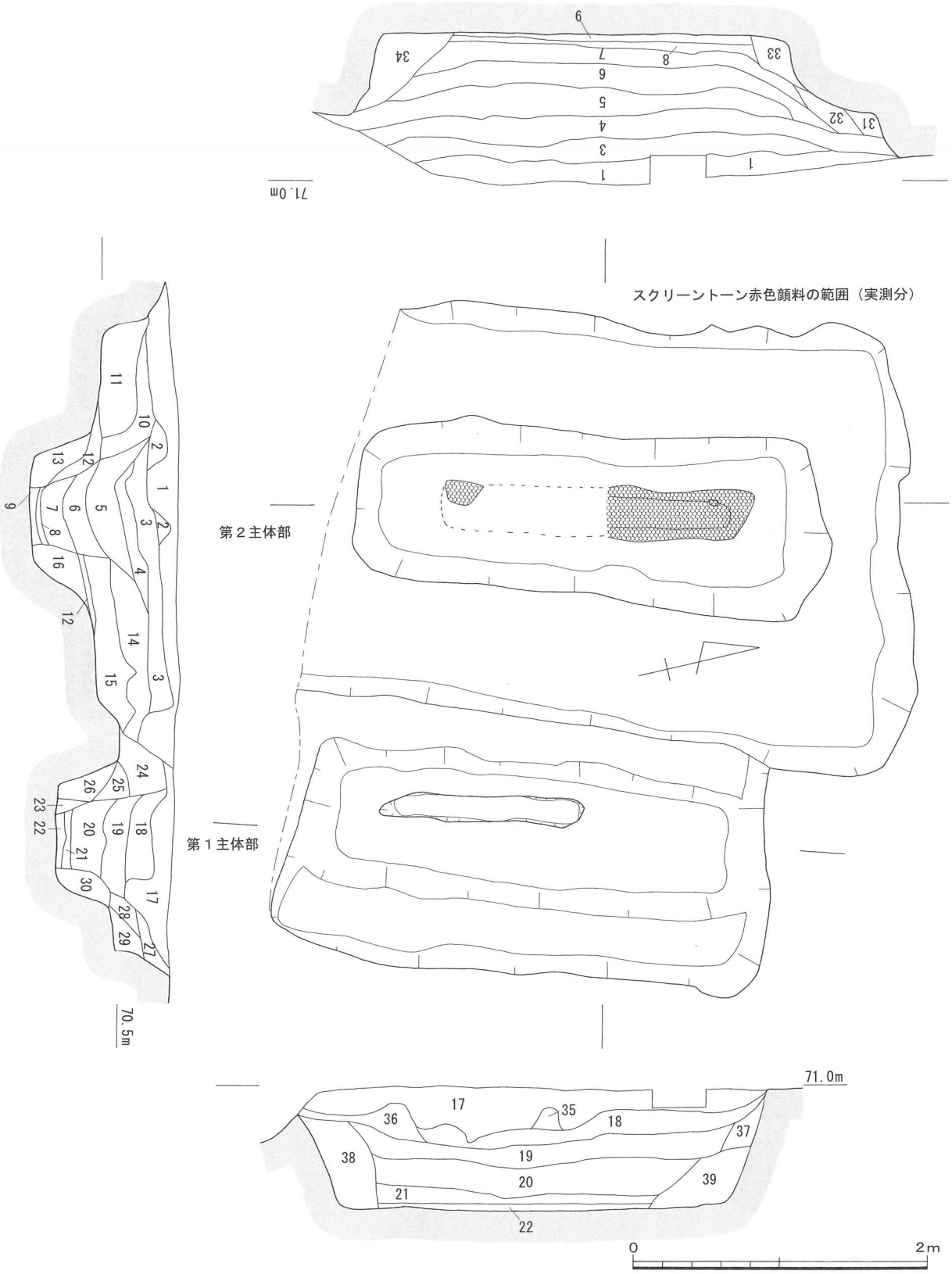



第75図　1・2・3号墳墳丘測量図　（S＝1/200）




1　表土
2　根による攪乱
3　黄褐色砂質土(砂礫多く含む)
4　灰黄褐色砂質土(砂礫含む)
5　橙褐色砂質土
（砂礫含む　しまり良い）
6　暗黄褐色砂質土
7　にぶい黄褐色砂質土
8　灰黄色砂質土
9　暗黄色砂質土(しまり悪い)
10　赤色粗砂
11　黄色粗砂
12　にぶい褐灰色砂質土
13　淡黄褐色砂質土
（地山や白色砂礫含む）
14　橙褐色砂質土
（地山含む　しまり良い）
15　黄橙褐色砂質土
（地山含む　しまり良い）
16　赤色砂質土(しまり良い)
17　淡灰色砂質土(地山含む)
18　褐灰色砂質土
（地山や白色砂礫含む）
19　褐色砂質土(砂礫含む)
20　黄色砂質土
21　黄褐色砂質土
22　にぶい黄褐色砂質土
23　暗黄褐色砂質土
（赤色砂資土含む）
24　暗灰黄色粗砂
25　明黄褐色砂質土
26　黄褐色砂質土
27　淡黄褐色砂質土(地山含む)
28　赤褐色砂質土
29　にぶい黄褐色砂質土
（砂礫含む　しまり悪い）
30　にぶい橙白色砂質土(砂礫含む)
31　にぶい黄褐色砂質土(砂礫含む)
32　褐灰色砂質土(しまり良い)
33　暗黄褐色砂質土(しまり悪い)
34　暗黄褐色砂質土
（粗砂多く含む　しまり悪い）
35　にぶい黄色砂質土
（粗砂多く含む　しまり悪い）
36　にぶい黄褐色砂質土
（粗砂多く含む　しまり悪い）
37　５号墳主体部埋土
38　２号墳主体部埋土
39　黄橙色砂質土
（礫含む　しまり良い）
40　黄橙色砂質土
（地山含む　しまり良い）
41　灰色粗砂
42　暗黄褐色砂質土
43　にぶい黄褐色砂質土(砂礫含む)
44　褐灰色砂質土(しまり良い)
45　にぶい黄色砂質土(砂礫含む)
46　暗黄褐色砂質土(粗砂含む　しまり悪い)

第76図　1・2号墳墳丘土層図　(S＝1/60)




1　灰黄褐色砂質土（5mm程度の砂礫多く含む）
2　にぶい灰黄色砂質土
3　橙褐色砂質土（5mm程度の砂礫多く含み、しまり堅緻）
4　暗黄橙色砂質土
5　にぶい黄褐色砂質土
6　灰黄色砂質土
7　暗灰黄色砂質土（しまり悪い）
8　赤色粗砂土
9　黄色粗砂土
10　淡黄褐色砂質土（5mm程度の砂礫含む）
11　黄橙褐色砂質土（地山土含み、しまり堅緻）
12　にぶい橙色砂質土（地山土含み、しまり堅緻）
13　褐灰色砂質土（地山土、白色砂礫含む）
14　にぶい褐灰色砂質土（地山土含む）
15　橙褐色砂質土（地山含み、しまり堅緻）
16　淡灰色砂質土（地山含む）
17　褐色砂質土（5mm程度の砂礫含む）
18　黄色砂質土
19　黄褐色砂質土
20　にぶい黄褐色砂質土
21　暗黄褐色砂質土（赤色粗砂含む）
22　暗灰黄色粗砂
23　暗茶褐色砂質土
24　明黄色砂質土（5mm程度の砂礫含み、しまり堅緻）
25　黄橙砂質土
26　赤褐色砂質土
27　橙褐色砂質土
28　明黄灰色砂質土
29　明黄橙褐色砂質土
30　淡黄褐色砂質土
31　淡黄白色砂質土
32　にぶい灰黄色砂質土（粗粒を多く含む）
33　にぶい黄色砂質土（地山土含み、しまり堅緻）
34　淡灰黄色砂質土（地山土含む）
35　黄色砂質土
36　淡黄橙色砂質土（5mm程度の砂礫多く含む）
37　にぶい赤色砂質土（地山土含み、しまり堅緻）
38　淡黄白色砂質土（地山土含み、しまり堅緻）
39　赤色砂質土（地山土含み、しまり堅緻）

第77図　１号墳第１・２主体部実測図　（S＝1/40）

のことから、小口板が存在しなかった可能性と、棺の腐朽に伴い土圧で裏込め土が傾斜した可能性などが考えられる。第１主体部の墓壙二段目の底は、北側の高さが南側より高いことから、被葬者は北枕で埋葬されていたものと考えられる。主体部からは、後述する主体部埋土内の検出土器片を除いて副葬品の検出はなかった。

第２主体部は地山を掘り込んだ二段墓壙である。第１主体部の一部を破壊して造られていること、墓壙一段目上部の南壁面を破壊されていることから、検出上面は現状で南北4.2m以上、東西3.2m、墓壙一段目までの深さは0.6mである。二段目の規模は南北3.3m、東西1.3m、墓壙一段目からの深さは0.47mである。

土層観察より、埋葬施設は棺底が緩いU字状の木棺であることが確認できた。９層は黄色粗砂で木棺の下に敷かれていたものと考えられる。８層は赤色粗砂であるが、棺底に相当する層位と思われる。また、８層では赤色顔料の広がりを面的に確認できたことから、棺内には赤色顔料が塗布あるいは、散布されていたものと思われる。棺底の規模は長軸2.05m、短軸0.4mである。

棺の側板、小口板及び上部構造は土層からは確認できなかったが、土層観察により裏込め土が確認できた。主体部横断面の土層観察では、地山を含む締まりの良い11～16層が相当する。同じく主体部縦断面では、地山を含む締まりの良い31～34層がこれに相当する。34層が木棺に向かって傾斜していることは、第１主体部と同じく小口板が存在しなかった可能性と、棺の腐朽に伴い土圧で裏込め土が傾斜した可能性などが考えられる。

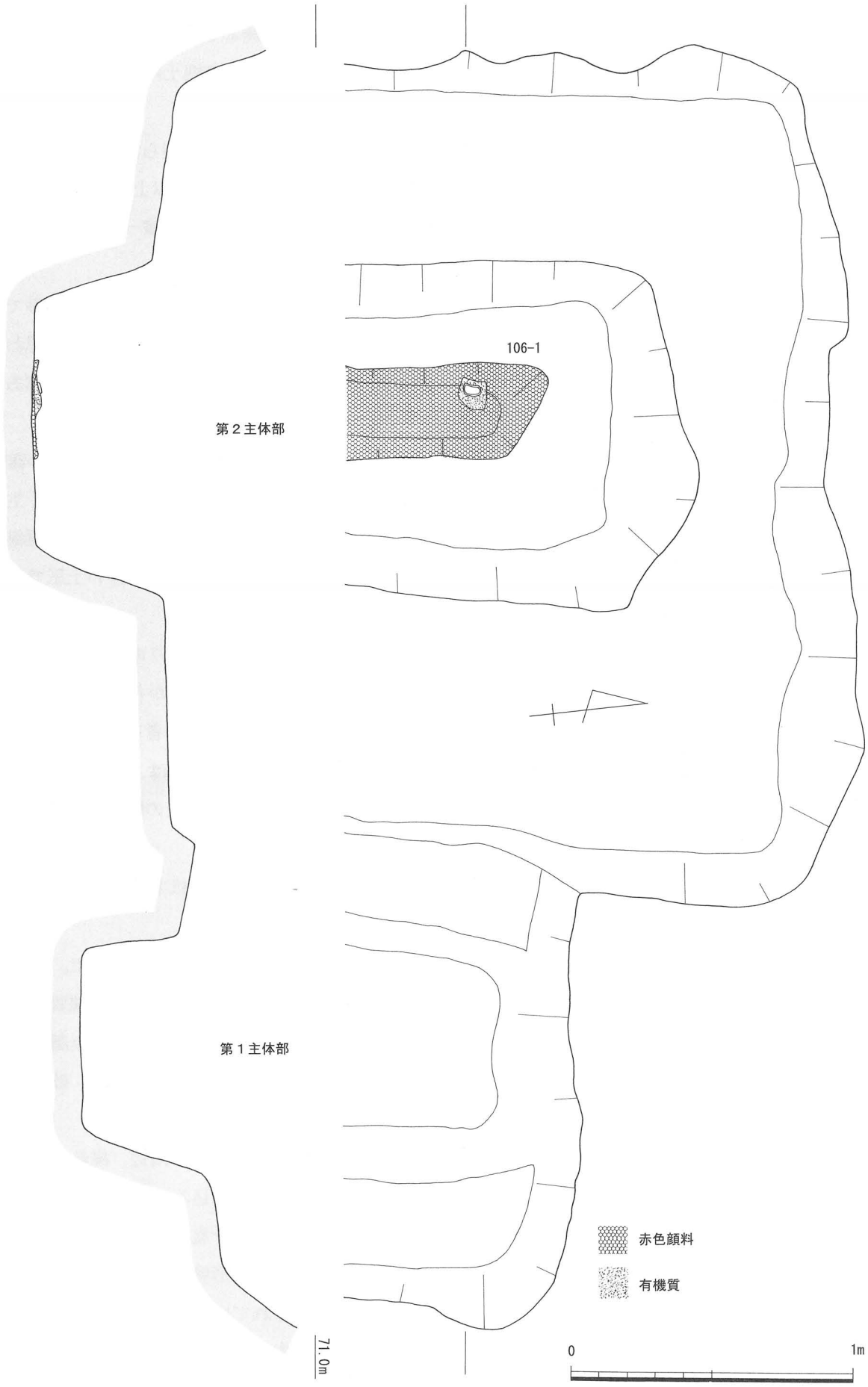
また、主体部横断面の土層観察をしたところ、厚さ10cm前後の地山を含む締まりの良い12層が、墓壙一段目のテラスとほぼ同じレベルで二段墓壙内の両端で検出されていることから、棺の下半分は少なくともこの高さまであったものと推定される。この12層の上面は棺内へ被葬者を埋葬したり、副葬品を供したりする葬送儀礼の作業面であった可能性も想定できる。この想定は、第１主体部の裏込め土である25・30層の上面にも当てはめられる。棺は推定であるが、裏込め土の関係から見て、少なくとも５～８層に相当するものと考えられる。

第２主体部の墓壙二段目の底は北側の高さが南側より高いことから、被葬者は北枕で埋葬されていたものと考えられる。

**（第２主体部破鏡出土状況）**（第78図）　棺内からは、破鏡１片(註1)と微細な鉄錆が出土した。前者は赤色顔料が広がる棺内の北辺で鏡面を上に向けた状態で検出され、破鏡の下には黒色の有機質（木質）が僅かながら見られた。棺材、木箱の可能性が考えられる。後者は破鏡より北側の赤色顔料が広がる棺内から出土したが、あまりに微細で脆かったため検出できなかった。後述するが、破鏡にはベンガラが付着していた。

**（第２主体部直上検出土器）**（第79図・第81図）　出土位置は第２主体部直上の南辺、撹乱により一部削平を受けている。現存で南北64cm、東西72cm、深さ16cmの規模の掘り込みに、１個体の土師器甕が倒れた状況で検出された。第２主体部埋土を掘り込んで、底部穿孔を施した土師器甕を置いている状況から、墳墓祭祀に伴う供献土器の性格が考えられる。口縁部の形態は、復元できなかったため不明である。肩部は波状文が認められ、内面にはケズリが施されている。内面上部のケズリは横方向、下部のケズリは斜め上方向に施されている。また、底部内面に指圧痕が認められ、底部は焼成後に穿孔されている。

**（１号墳北裾土器棺）**（第80図・第82図）　１号墳の北裾周溝が埋没した後、周溝の西側肩を一部

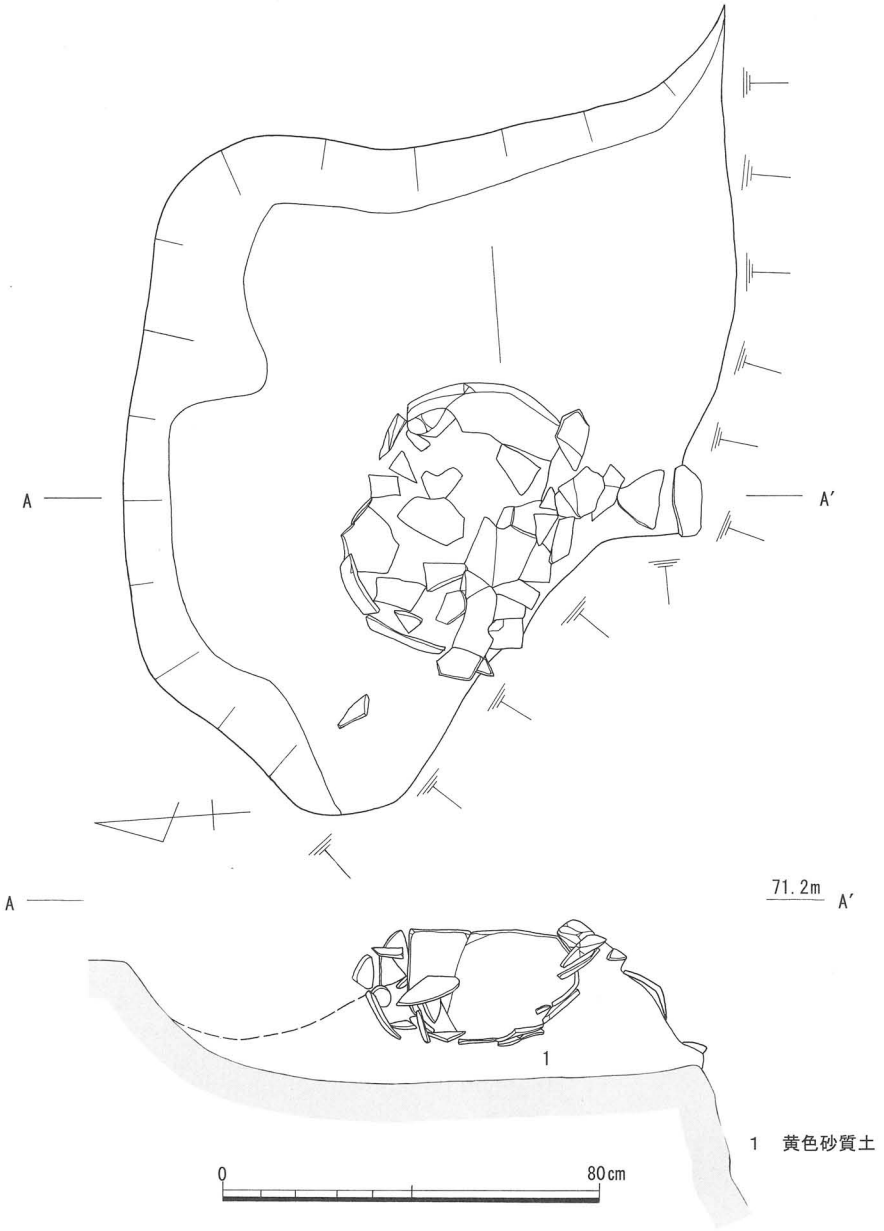



第 78 図　１号墳第２主体部　破鏡出土状況図　（S＝1/20）

壊して土器棺が造られている。墓壙の規模は南北1.3m、東西1.45m、深さ0.7mである。土器棺の規模は南北0.95m、東西0.9m、深さ0.63mであり、頭位は判断しかねる。

口縁直下に円筒埴輪の突帯のような突出部を付けた大形の壺を棺として使用している。出土状況から葬送の手順を想定すると、大きく二つに割った壺の一方を墓壙底に寝かせ、そこに埋葬すべきものを置く。そして、埋め土などを施した後、もう一方の壺の破片をさらに割ってそれを棺蓋として覆っていく手順が想定できる。

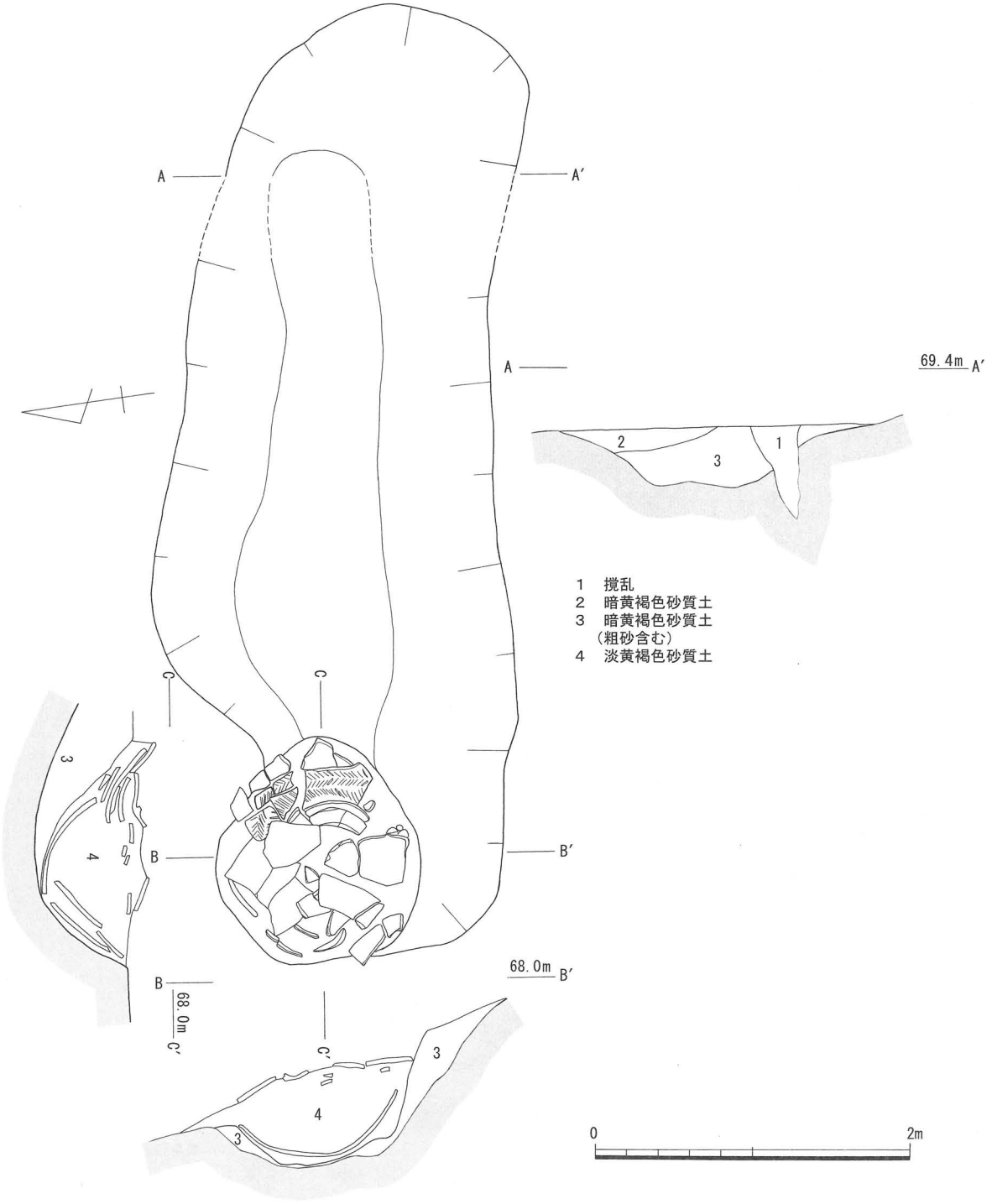
土器棺に使用された土器は大形の土師器の壺である。口縁は内傾して立ち上がり、口縁端部は僅かに内傾し平らな面を作っている。突帯は断面M字状である。突帯の貼り付けにはキザミ等の調整は確認できなかった(註2)。胴部は大きく張り出しており底部はほぼ平底である。外面の肩部には黒斑が見られる。外面と内面の調整は対応する可能性がある。すなわち、外面調整を上から見て行くと口縁部から突帯はナデ、頸部から肩部には３列の羽状文、胴部の上部はヨコハケ後に一部タテハケ、



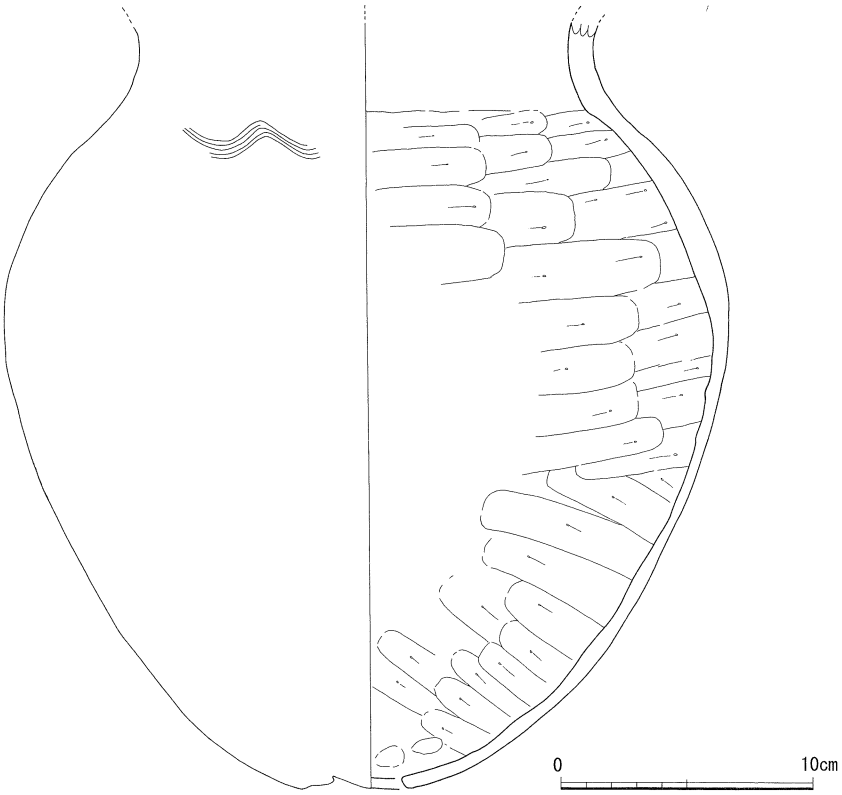

第79図　１号墳第２主体部直上土器出土状況図　（S＝1/16）

胴部の中部はタテハケ、胴部の下部から底部にかけては中部とは異なる原体でタテハケが施されている。これに対して、内面調整は口縁部から突帯部にかけてナデ、ここでは粘土紐の継ぎ目と指頭圧痕跡が認められる。頸部から肩部にかけては横方向の細かなケズリが施されており、胴部上・中部は横方向の大きめのケズリが施されている。また胴部下部から底部にかけては縦方向のケズリが施されている。このことから考えると、この壺は口縁部～頸部、肩部～胴部中部、胴部下部～底部の３つの部分に分けて、あるいは３つの段階を経て作られたものと思われる。

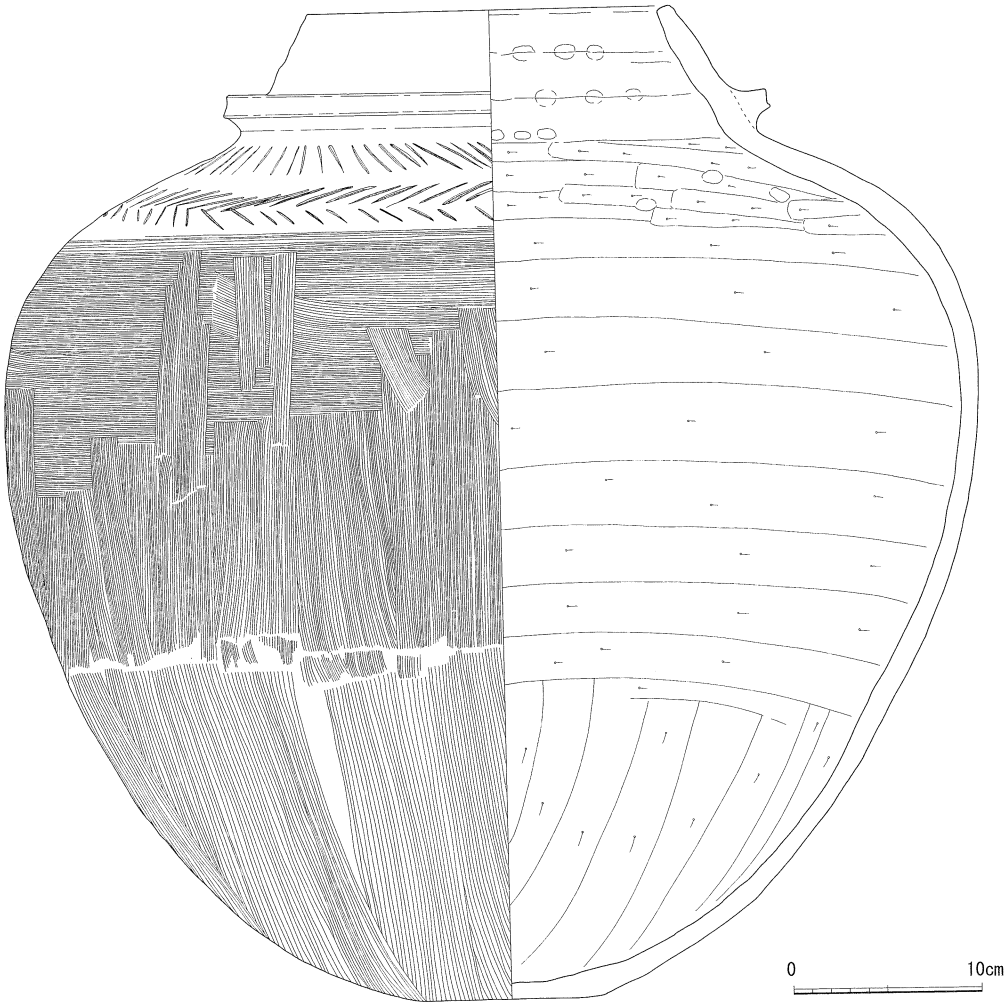
この種の大形壺は鳥取県内にその分布が目立つ(註3)が、出雲地方においても４例見られる(註4)。




第80図　１号墳北裾周溝及び土器棺実測図　（S＝1/40）




第 81 図　1 号墳第 2 主体部直上検出土器実測図　（S ＝ 1/3）



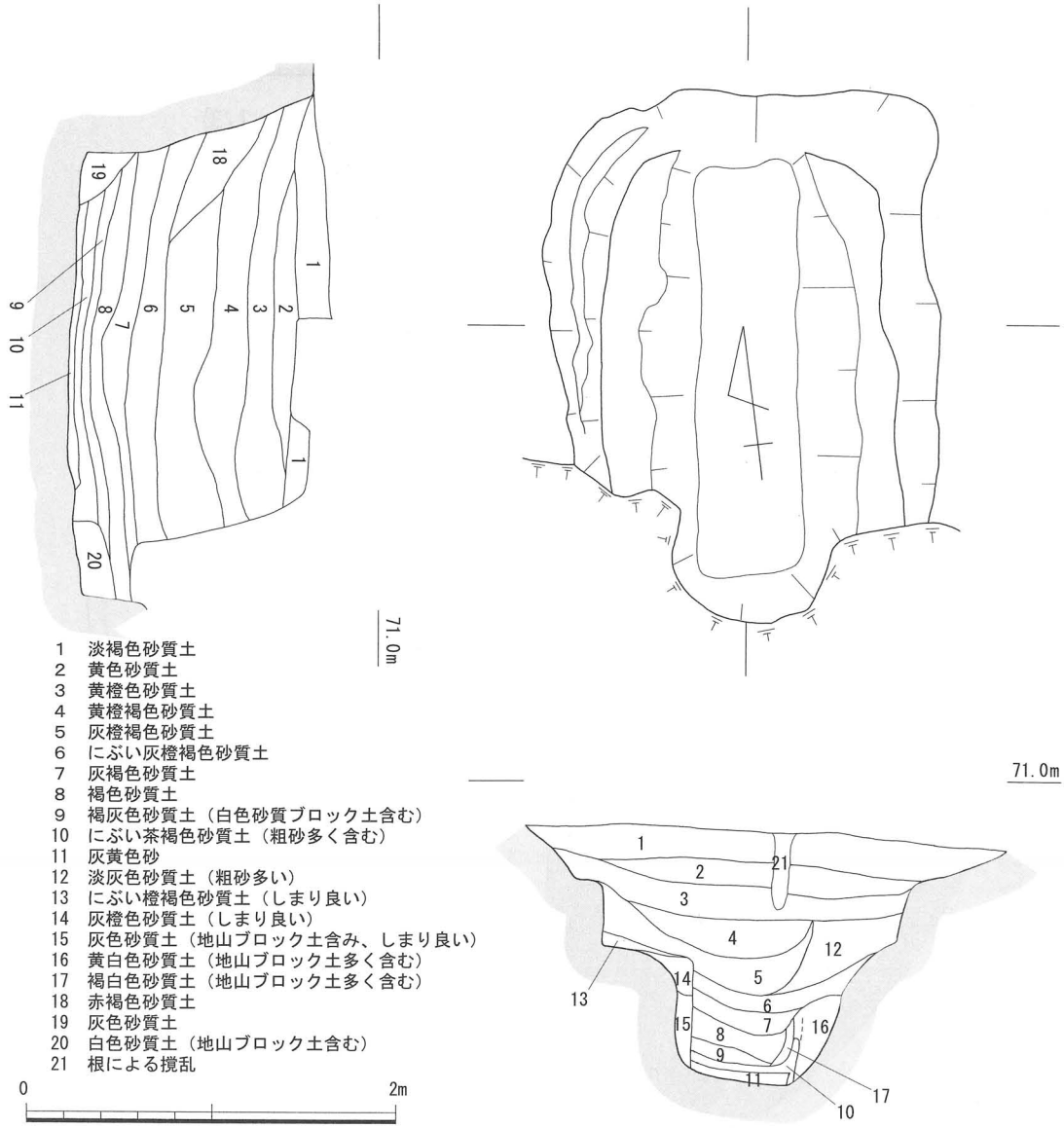

第 82 図　1 号墳北裾出土土器棺実測図　（S ＝ 1/4）

**（出土遺物）**（第84図）　１号墳に確実に伴う土師器は１～５である。３は低脚坏の脚部で墳頂部から出土した。４は第１主体部と第２主体部の埋土上層から出土した鼓形器台の破片で接合関係にある。５は北側周溝内埋土から出土した甕であり肩部に波状文が認められる。６～12は２号墳に伴う可能性もあるので後述する。

**２号墳（第74図）**

**（墳形・墳丘規模）**（第75図）　２号墳も後世の撹乱により墳丘の南側と北側が大きく削られていて、１号墳の西隣に先述した周溝を隔てて造られている。墳丘の東西裾にそれぞれ尾根筋に直交させた周溝が平行して南北方向に走る。墳形は地山を削り出して造られた方墳で盛り土は認められない。墳丘規模は東西の周溝が終わるコンター70m付近から復元して南北９m、東西7.5m、現存高は周溝底部から測って0.8mである。

**（周溝）**（第85図）　墳丘西裾の周溝は３号墳と画されている。周溝内埋土の土層堆積を観察すると、24層のように２号墳からの流出土が３号墳に若干先行して堆積していると思われる。




第83図　２号墳主体部実測図　（S＝1/40）

**（主体部の調査）**（第83図）　撹乱により、主体部の墓壙南側は削平を受けていた。墓壙は東西両端部が２段墓壙になっている。検出面の規模は南北2.8m以上、東西2.15m、墓壙一段目までの深さは0.7mである。墓壙二段目の規模は南北2.5m以上、東西1.2m、墓壙一段目までの高さは0.7mである。

土層観察の結果、埋葬施設は箱形木棺であるものと思われる。11層は木棺の下に敷かれた灰黄色の砂である。10層が棺底に相当するものと思われるが、棺の西側板や北小口板は土層からは確認できなかった。北小口板は、棺の裏込め土と思われる19層が木棺に向かって傾斜していることから存在しなかった可能性と、木棺腐朽後に裏込め土が傾斜した可能性などが考えられる。

主体部縦断面の土層観察で、10層が主体部南側で墓壙底まで達していることから、木棺の南小口板は存在していたものと思われる。

棺底の規模は長軸1.57m、短軸0.57mである。墓壙二段目と木棺の間には裏込め土が充填されている。裏込め土は地山を含む締まりの良い砂質土で、主体部横断面の14・15・16層、主体部縦断面の19・20層が相当するものと思われる。

箱形木棺に相当する土層は少なくとも６～10層であると考えられる。７・８層が褐色系の土色を呈することから棺蓋に相当する可能性があり、６層は棺蓋にかけられた土砂である可能性が考えられる。17層は地山を多く含むことから、裏込め土の一部が棺の腐朽に伴い棺内に流れ込んだ可能性が考えられる。また、裏込め土の14層が墓壙一段目の西側テラスで平坦にならされている状況を考えると、木棺の安置から棺蓋の閉塞までの葬送行為の作業面であったことも想定できる。

**（出土遺物）**（第84図）　２号墳の墳頂・墳丘裾から出土した遺物はない。しかし、１号墳と２号墳間の周溝の北側斜面で多数の土師器片が出土したことから、１号墳か２号墳に伴う遺物という認識にした。

６～10・12は口縁部端が平らに形成されているものもあるが、幾分丸く収まるもの、あるいは端部を外反させて形成しているものもある。６・９の二重口縁部突出部の内面は指で浅く窪められている。10は１号墳と２号墳間の周溝内埋土から出土した壺である。その口縁部端は外反し平らな面を作っている。また、突出部は水平に鋭く突出する。11の土師器甕は底部が痕跡的な平底であり、口縁部端が外反し幾分丸く収まっている。これらは、松山編年の大木式～小谷１式（草田６期）の特徴が看取できる[註5]。１・２号墳出土の土器は古墳時代前期初頭と考えられる。

**３号墳（第74図）**

**（墳形・墳丘規模）**（第75図・第85図）　３号墳はＳＸ０３（小炭窯）による撹乱を除けば、土井・砂古墳群の中で最も墳丘・主体部の遺存状態が良好な古墳である。ただし、１・２号墳から続く山道が地山まで達していないだけで、踏み固められた土砂や撹乱土が墳頂部を中心に堆積していた。２～５・25・27層は山道に伴う撹乱土と考えられる。

墳丘の東西裾に、それぞれ尾根筋に直交させた周溝が平行して南北方向に走る。墳形は地山を削り出して造られた方墳である。

26・28層は盛り土あるいはその流出土と考えられる。墳丘規模は、東西裾の周溝底部のコンター69.6～70m付近から復元して南北8.6m、東西8.0m、周溝底部からの現存高は0.8mである。

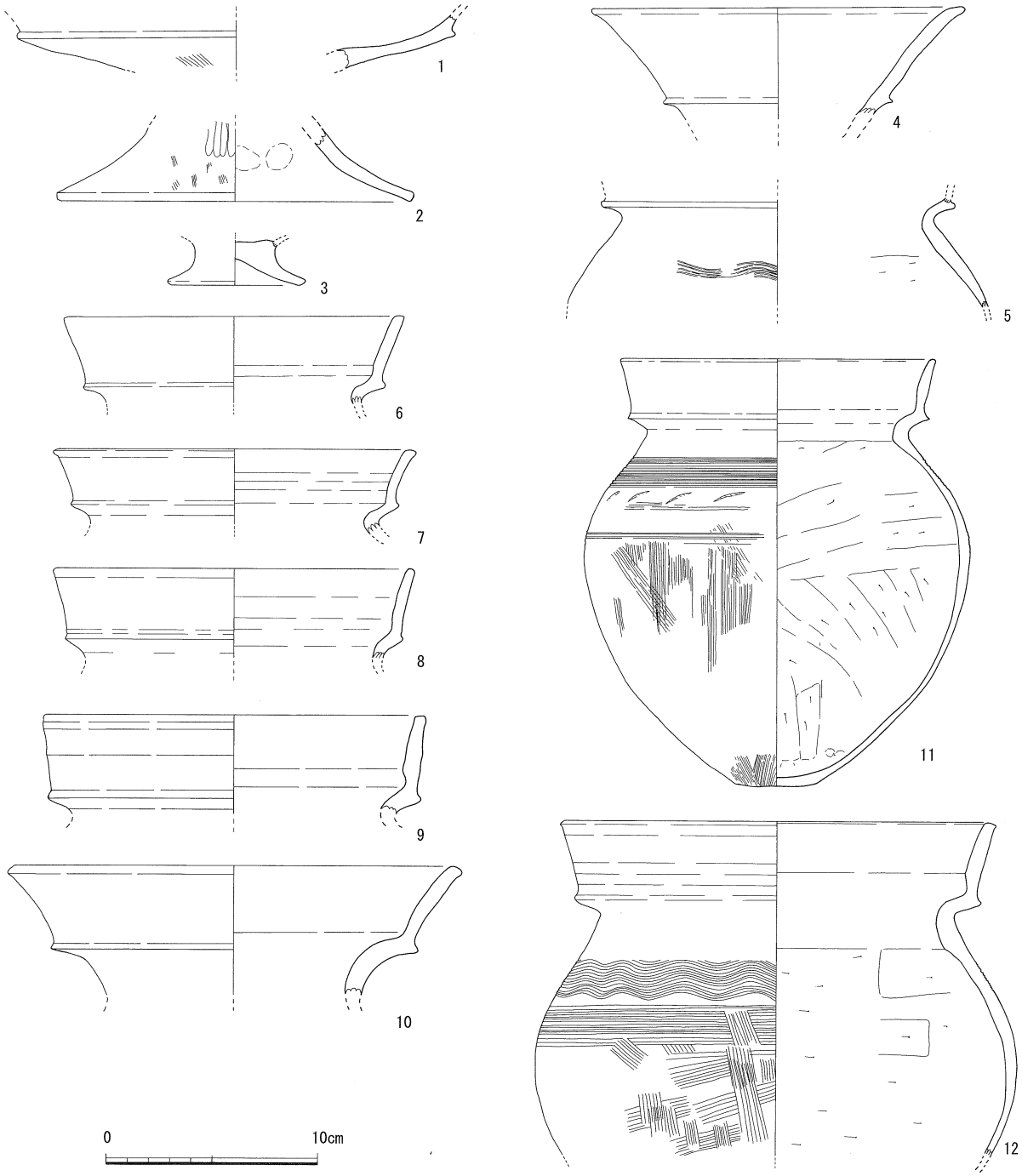
**（周溝）**（第85図）　墳丘東裾の周溝に関しては先述したとおりである。墳丘西裾の周溝の特徴は、西側の肩部がテラス状になっていることである。周溝内埋土の堆積状況は、墳丘西側の尾根筋から

の流出土がかなり厚く堆積している。後述するが、10・11層からは土器蓋石棺を、12層からはほぼ完形の土師器の壺１個体を検出している。

**（主体部の調査）**（第86図）　主体部の墓壙は東西両端部で二段墓壙になっている。検出面での規模は南北3.75m、東西2.8m、墓壙一段目までの深さは0.65mである。

墓壙二段目の規模は南北2.75m、東西1.0m、墓壙一段目までの高さは0.3mである。主体部埋土の土層観察より埋葬施設は、棺底が緩いU字状の木棺であること考えられる。８層は棺の下に敷いた粗砂を多く含んだ砂質土である。棺底は７層に相当するものと考えられる。

棺底の規模は長軸1.95m、短軸0.35mである。木棺の東西両側板に相当する土層は確認できなかった。また、木棺北側の小口板に相当する土層は確認できなかったが、木棺の裏込め土である16層が



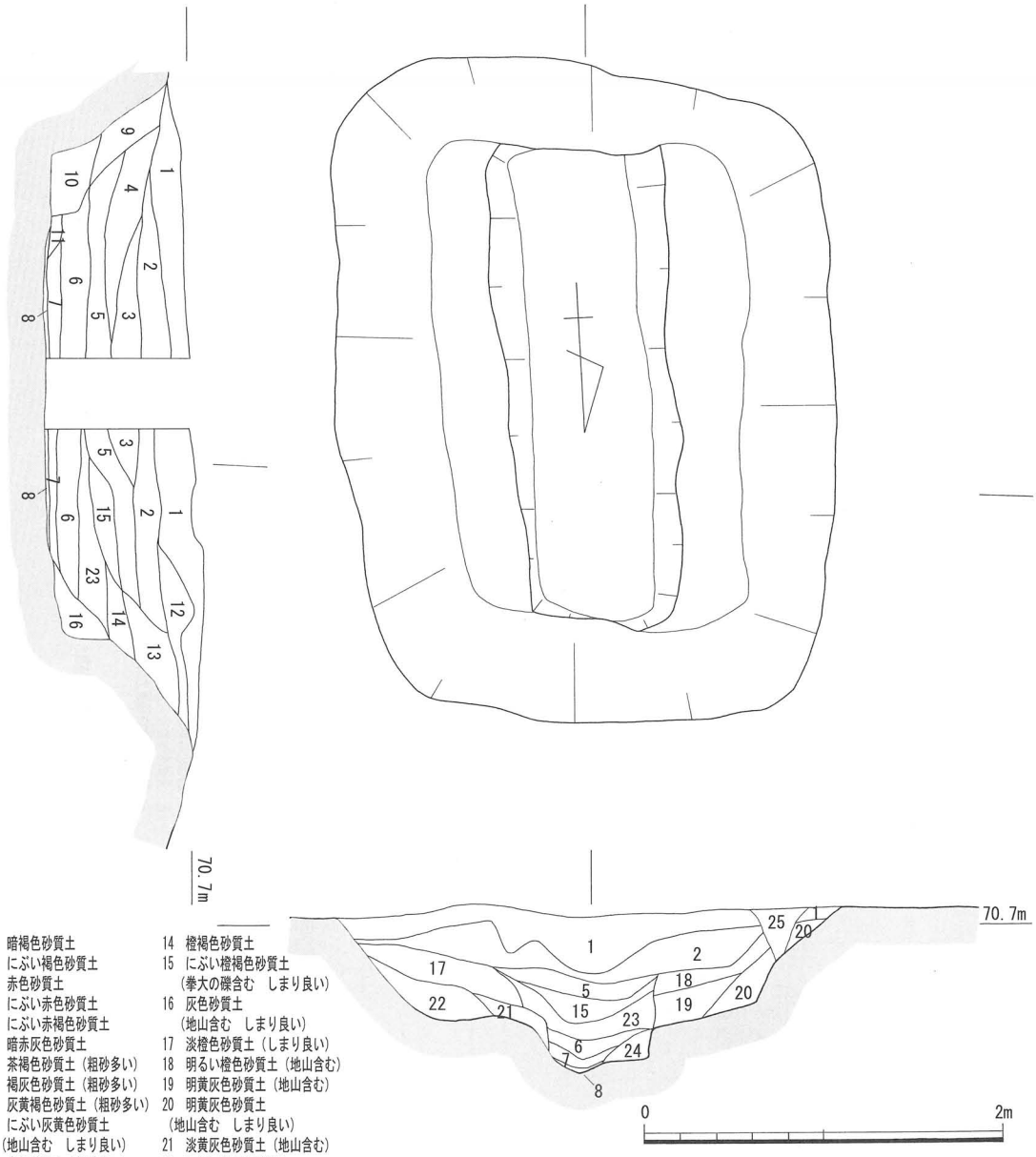

第84図　１・２号墳出土遺物実測図　（S＝1/3）

第85図　3号墳墳丘土層図　（S＝1/60）

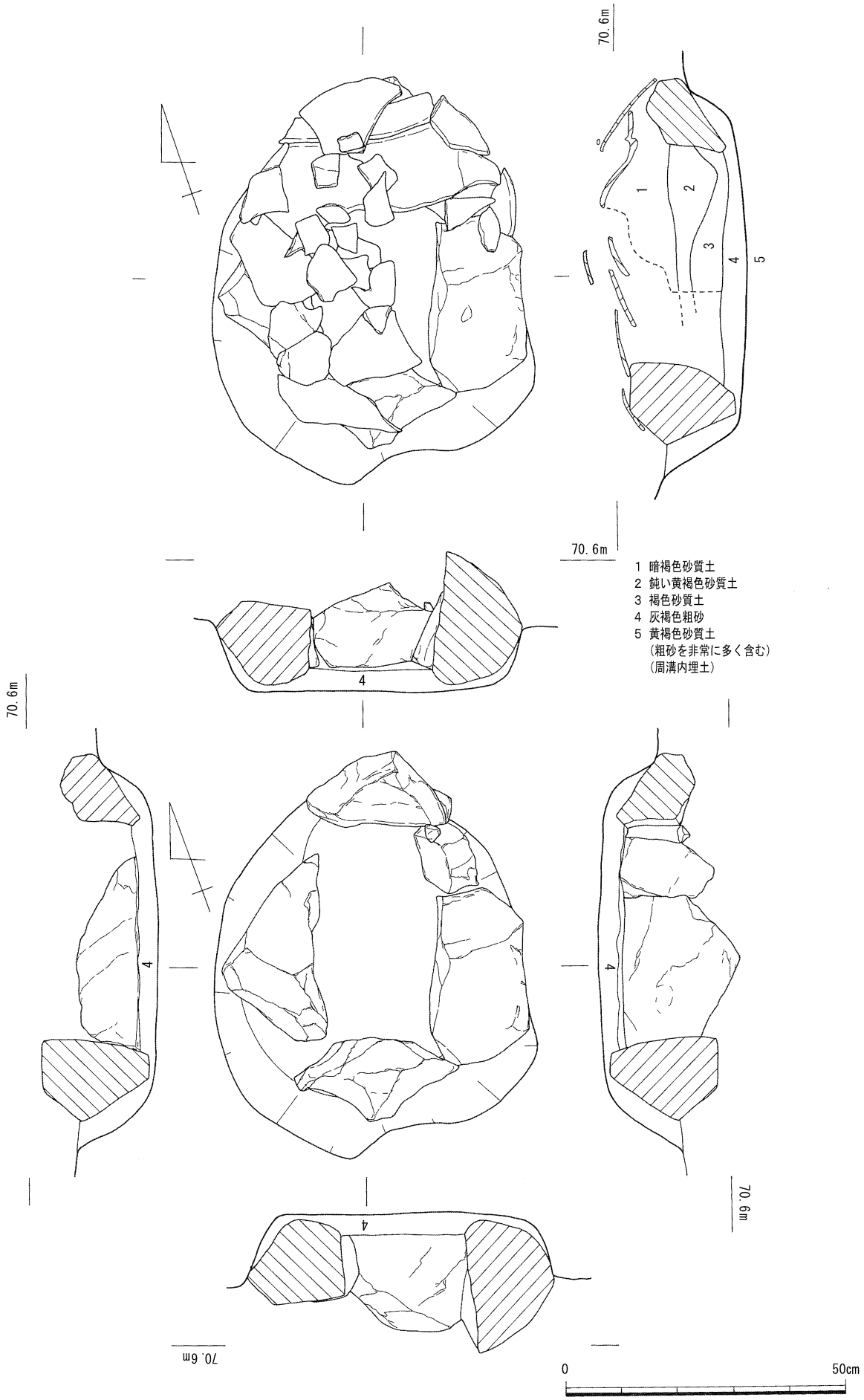
木棺に向かって傾斜していることから、北小口板は存在していなかった可能性と、木棺腐朽に伴って裏込め土が土圧によって傾斜した可能性などが考えられる。南小口板は、木棺南側の裏込め土が傾斜していないことも考えると、11層に相当する可能性が考えられる。

主体部横断面の土層観察より、墓壙一段目テラスまでの木棺裏込め土は21・22・24層に相当する。また、それより上の裏込め土は17～20層に相当する。これらの土層は、すべて地山を含んだ締まりの良い土質である。同じく主体部縦断面の土層観察より、裏込め土は地山を含んだ締まりの良い10・16層に相当する。

木棺の上部構造は土層から確認できなかったが、木棺は少なくとも６・７層に相当するものと考えられる。




第86図　３号墳主体部実測図　（S＝1/40）




第87図　3号墳西側周溝内土器蓋石棺実測図　(S＝1/10)

頭位は、墓壙二段目の北側底の高さが南側より高いことから北枕と考えられる。

**（西側周溝内土器蓋石棺）**（第87図）　土器蓋石棺は、３号墳の西側周溝内埋土の中層に当たる第85図の10・11層を掘り込んだ墓壙に造られている。

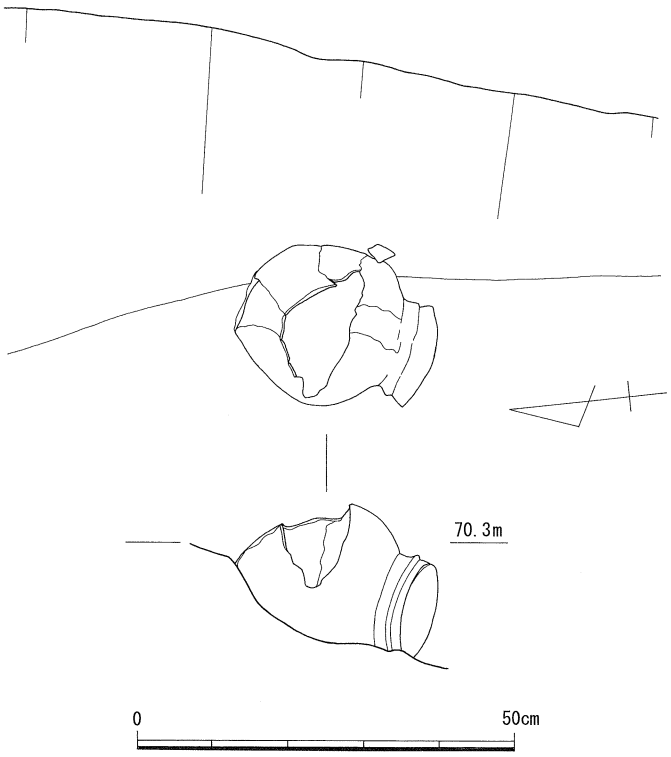
墓壙の規模は南北1.4m、東西1.1m、深さ0.22mである。石棺の規模は南北1.36m、東西1.08m、土器蓋からの深さは0.58mである。石棺の内法は南北0.76m、東西0.44mである。

構築手順は、墓壙の底に厚さ0.1m程度の灰褐色の粗砂（４層）を敷き、0.2～0.6mの割石５つで石囲みの石棺を造る。石棺の内側は平らな面を呈している。次に、埋葬すべきものを石棺内に安置し、封土等を充填する。そして、大形の土師器壺（１個体）を割った破片のほぼ半分を棺蓋として石棺に被せる。

この大形の土師器壺（第89図）　は焼成後に底部を穿孔したものである。摩滅が著しく外面調整は不明瞭であるが、胴部～底部にタテハケが認められる。口縁部の外面には一部赤彩が認められる。内面調整は口縁部にヨコナデ、頸部に細かなケズリ、胴部に横方向のケズリ、胴部下部に斜め上方向のケズリである。

なお、出雲地方ではこの様な土器蓋石棺は他に例を見ないが、類似するものとして小型の石棺の中に砂を敷き、蓋には石と３個体分の土器片を使用する安来市所在の山ノ神石棺(註6)が見られる。また、小型の箱式石棺が八雲村所在の小屋谷１号墳北西裾で検出されている(註7)。

**（土器蓋石棺直下検出土師器）**（第88図）　土器蓋石棺検出後、さらに周溝内埋土を掘削していくと、ちょうど土器蓋石棺の直下にほぼ完形の土師器甕１個体が倒れた状況で検出された。第85図の12層からの検出である。この土師器甕は墳丘上からの転落の結果、周溝内で検出されるに至った可




第88図　３号墳西側周溝内土器蓋石棺直下検出土師器出土状況図　（S＝1/10）

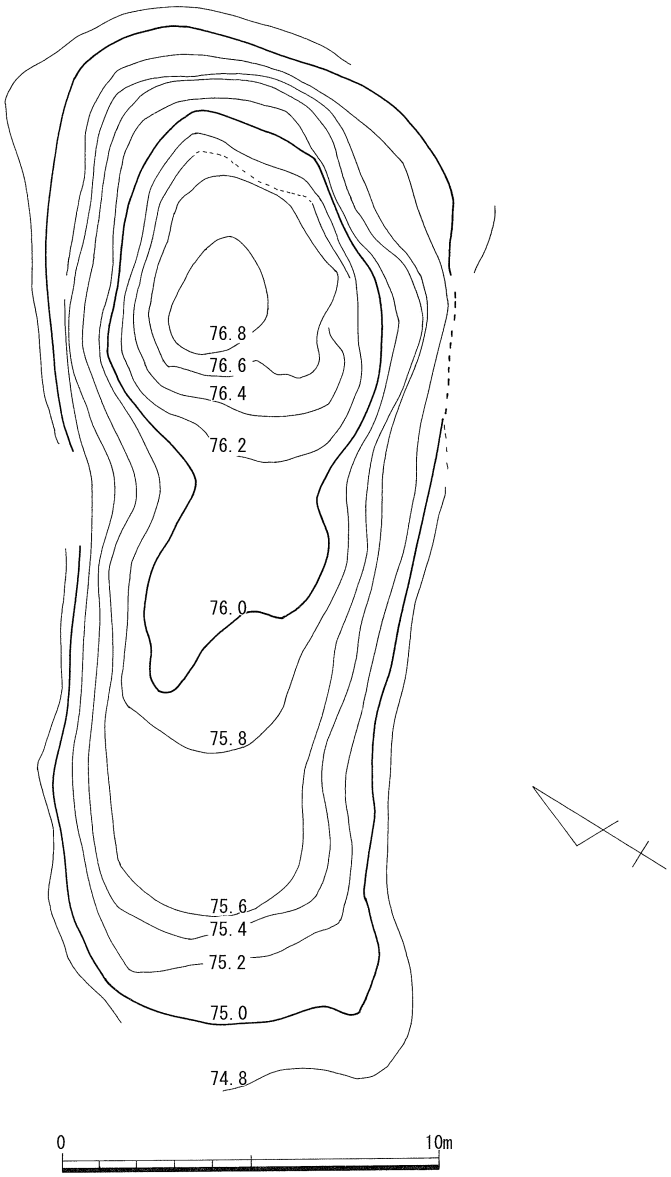
能性もある。しかし、周溝のほぼ最下層に位置することから、３号墳の上限を示す資料の可能性が考えられる。この土師器甕（第100図－５）は、復元後の観察により焼成後に底部穿孔された可能性が指摘できる。土器蓋石棺との位置関係は偶然によるものかどうかは判断しかねる。

第 89 図　３号墳西側周溝内土器蓋石棺（蓋）実測図　（S＝1/4）

**（出土遺物）**（第100図）　１・２・４の甕はいずれも口縁端部が丸く形成されており、草田６期の様相を示す。これらは墳丘東周溝内埋土より出土しているが、２号墳に伴う可能性も考慮しなければならない。西側周溝内埋土から出土した甕３は口縁端部が形骸化し器壁が厚い。甕５は墳丘西側周溝の最下層から出土しており、３号墳の上限を示す資料の可能性が考えられる。底部を穿孔しているが丸底状を呈しており、内面にも指頭圧痕が認められる。また、口縁部が垂直気味に立ち上がり、口縁部端の平坦面が形骸化して丸みを帯びている。そして、口縁部から頸部のくびれも浅くなり器壁も厚くなっている。小谷３式、草田７期でもかなり新しい様相を示すものと考えられる。３号墳は古墳時代初頭～前期中葉と考えられる。

**４号墳（第90図）**

**（墳形・墳丘規模）**（第91図）　４号墳は５号墳と共に遺跡内の最高所、標高76m付近に位置している。調査前測量から表土除去後まで、４号墳・５号墳を１つの前方後円墳の可能性があるものと



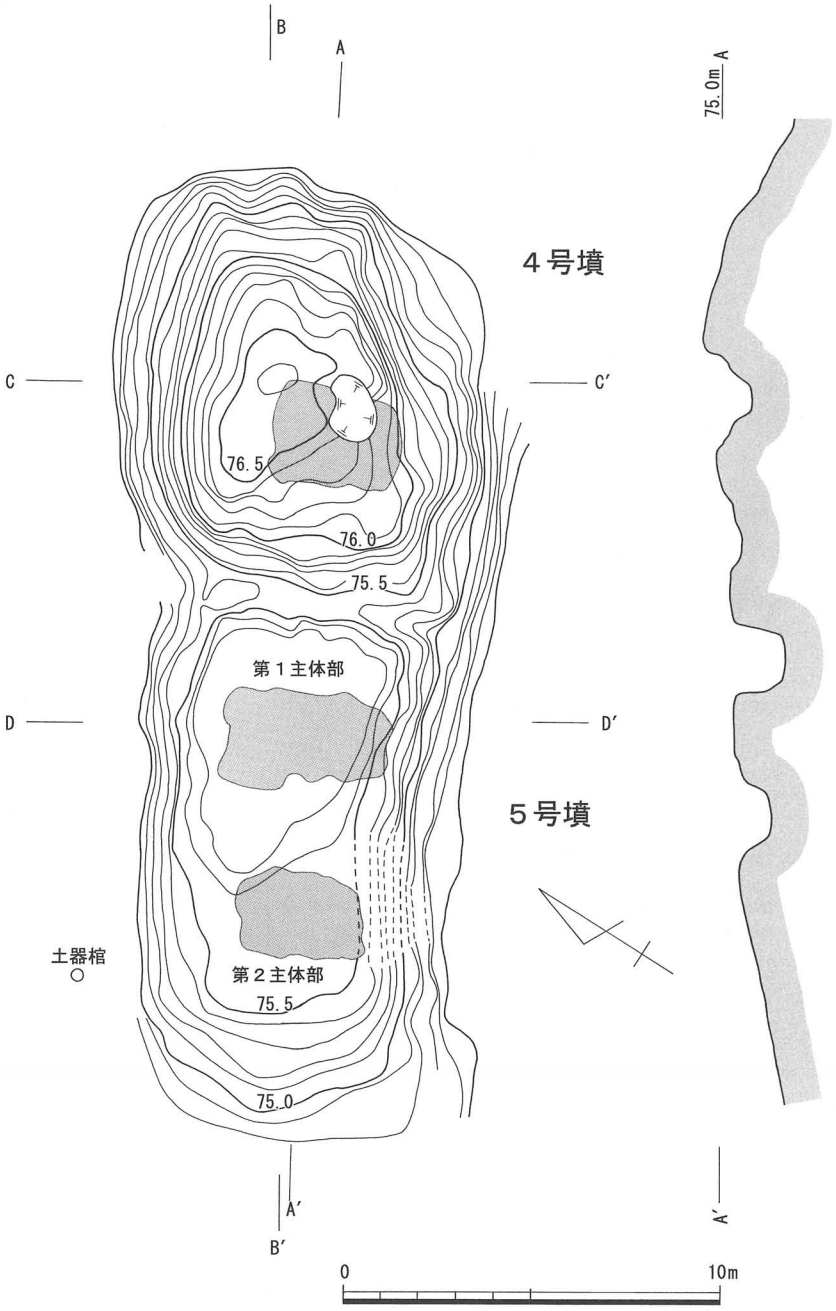

第 90 図　４・５号墳調査前測量図　（S＝1/200）

認識していたが、４号墳と５号墳の間に周溝が南北に走るのが確認された。このことから、４・５号墳はそれぞれ独立した古墳であることが判明した。

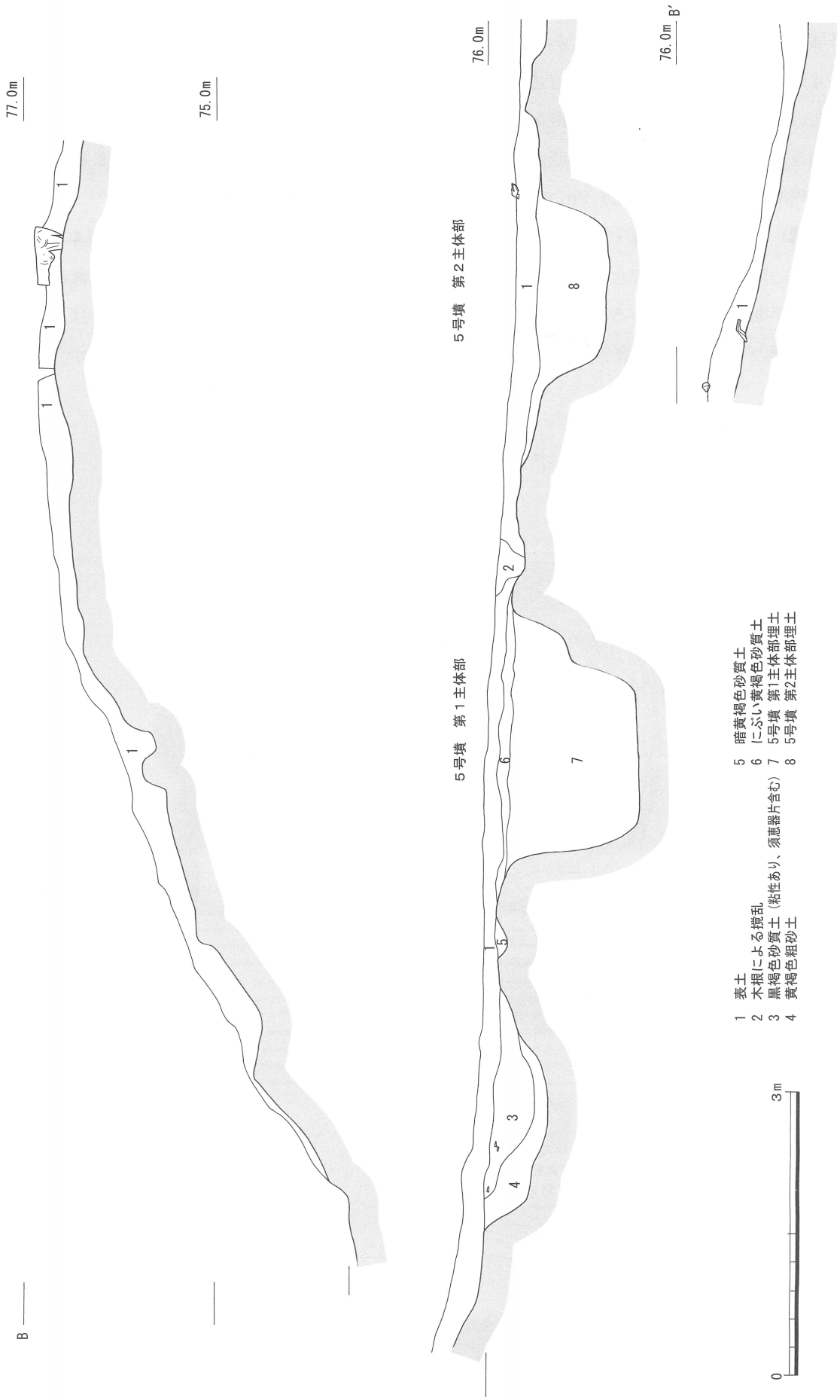
４号墳は墳丘南東部を中心に山道による撹乱で削平を受けているが、墳形は方墳と考えられる。また、墳頂部には現代の撹乱坑があり墳頂部も削平を受けている。

墳丘規模は、墳丘西側周溝の底部付近のコンター75.5mラインから復元して南北8.6m、東西8.6m、周溝底部からの現高は1.3mである。

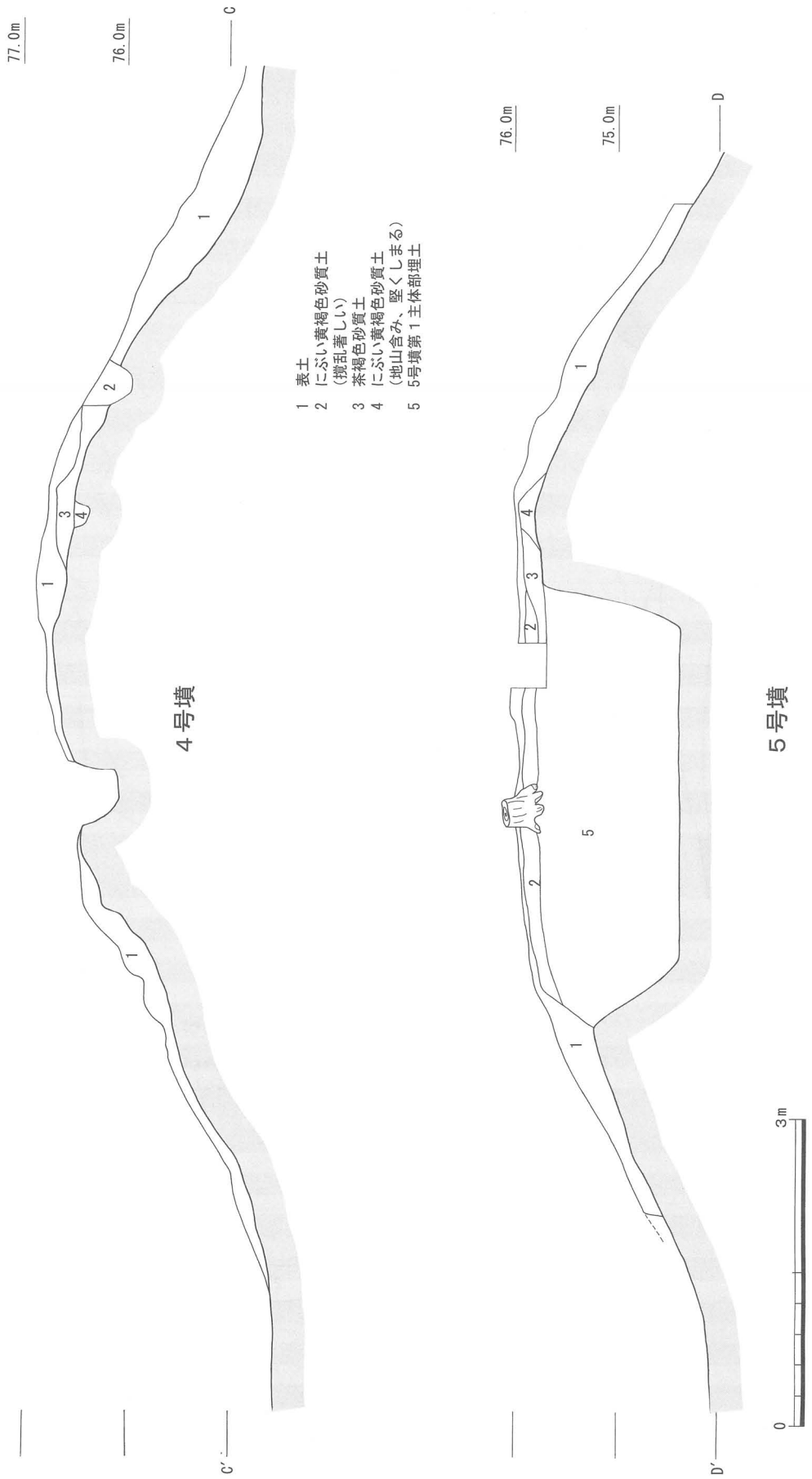
**（周溝）**（第92図）　４・５号墳は周溝で画されている。この周溝の土層観察からは４・５号墳の切り合い関係等は確認できなかった。ただ、４層は堆積状況から見て、４号墳からの流出土である可能性が高い。粘性のある黒褐色砂質土の３層は須恵器片を含む層である。須恵器片はこの周溝の埋没時期の下限を決める資料である。須恵器（第129図－10）は後述するが、その特徴から大谷編年




第91図　４・５号墳墳丘測量図　（S＝1/200）




第92図　4・5号墳墳丘土層図（1）（S＝1/60）

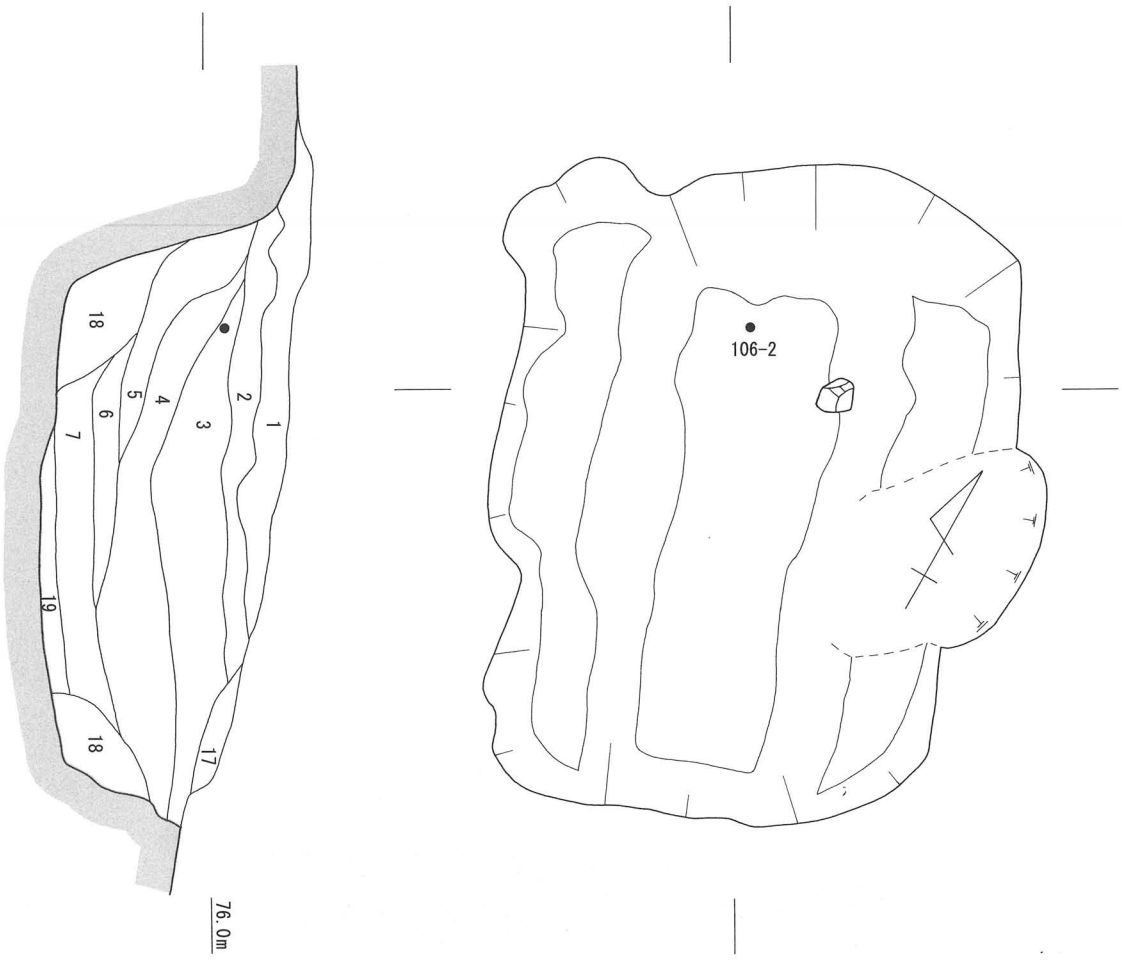



第93図　4・5号墳墳丘土層図(2)　(S＝1/60)

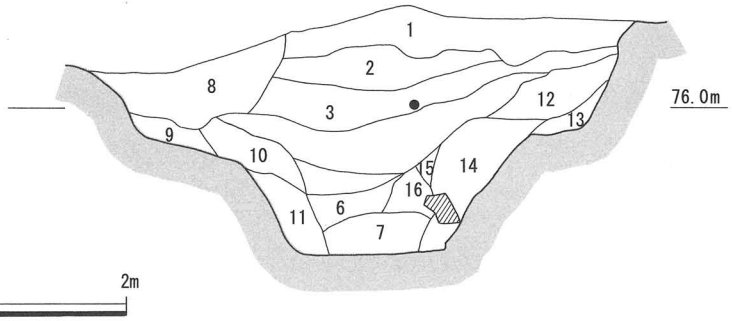
の６期に相当する。

**（主体部の調査）**（第94図）　主体部の東部・中央部は現代の撹乱坑によって破壊されていた。

主体部の墓壙は東西両端部で二段墓壙になっている。主体部の検出面の規模は南北3.6m、東西2.75m、墓壙一段目までの深さは0.5mである。墓壙二段目の規模は南北2.85m、東西1.6m、深さ




1　黒褐色砂質土
2　淡黄褐色砂質土
3　淡黄色砂質土（粗砂多い）
4　淡黄橙色砂質土（粗砂多い）
5　にぶい灰黄色砂質土
6　黄褐色砂質土
7　赤褐色砂質土
8　根による撹乱
9　暗黄灰色砂質土
10　黄灰色砂質土
11　淡灰色砂質土（地山及び白色砂礫含む）
12　橙灰色砂質土
13　淡橙色砂質土（地山含む）
14　灰色砂質土（地山含む）
15　褐灰色砂質土
16　褐色砂質土
17　黒褐色砂質土
18　淡黄白色砂質土（地山含む）
19　暗黄褐色粗砂
●　鉄斧出土位置



第94図　４号墳主体部実測図　（S＝1/40）

は0.55mである。

主体部の埋葬施設は主体部横断面の観察より棺底が平らであること、木棺の裏込め土と考えられる11・14層が直線的になってることから、箱形木棺と考えられる。

木棺の棺底、両側板や両小口板は土層観察からは確認できなかった。主体部縦断面の観察から、19層は木棺の下に敷く粗砂であったと考えられる。少なくとも、木棺に相当する土層は6・7・15・16層と考えられる。

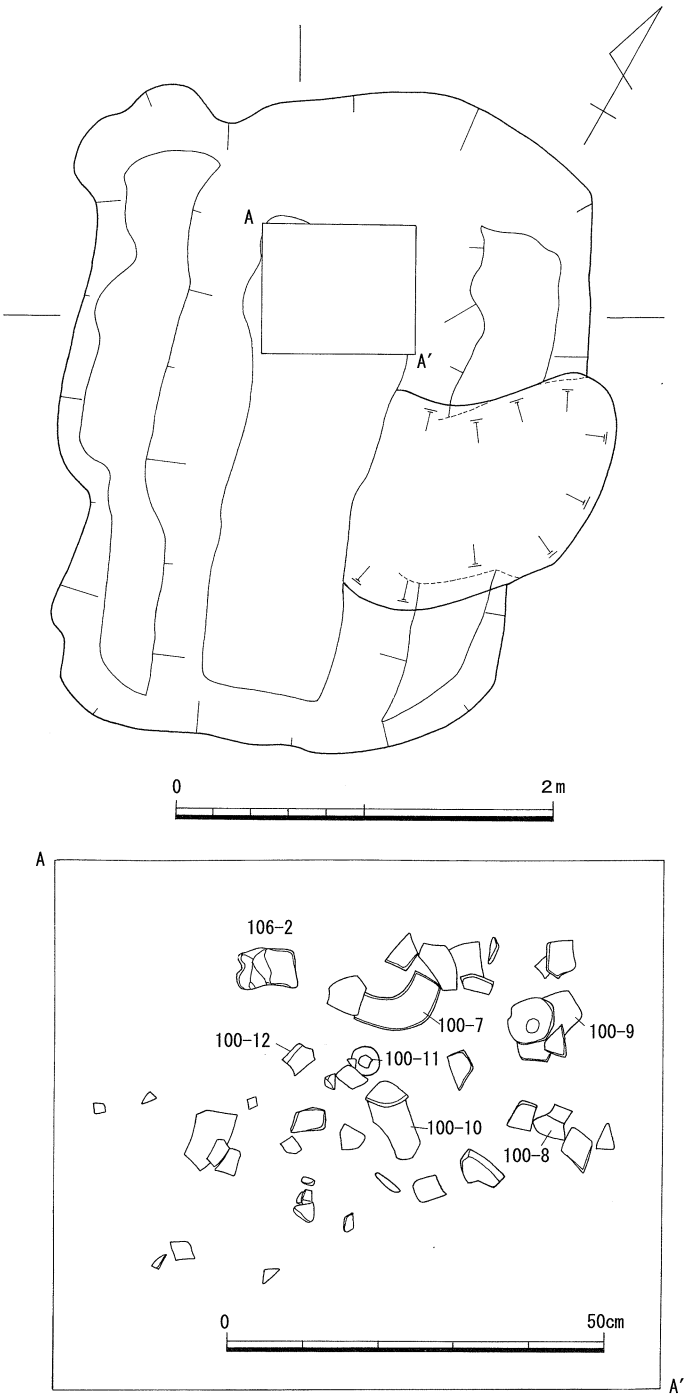
木棺の裏込め土は9～14・18層に相当するものと考えられる。また、14層中からは20cm前後の角礫が検出された。これは、木棺を支える役目を担っていた可能性と、標石として使用された可能性が考えられる。

両小口板は、裏込め土である18層が木棺の内側に向かって傾斜していることから、小口板が存在しなかった可能性と、木棺腐朽に伴って裏込め土が土圧のため傾斜している可能性などが考えられる。

頭位は、墓壙二段目の北側の高さが南側に比べて高くなることから、北枕と考えられる。

**（遺物出土状況）**（第95図）　主体部埋土の3層からは、被葬者の頭位付近と思われる主体部北側に集中して、多数の土師器片と袋状鉄斧1点が検出された。このうち、袋状鉄斧は刃を下に向けて直立した状態で検出された。後述する土師器片は復元できたもので5個体が確認されている。

**（出土遺物）**（第100図）　6は4号墳墳丘裾から出土した甕の頸部である。7～11は主体部直上から出土した土師器で、袋状鉄斧と同じ層位から出土した。7・8は鼓形器台である。7・8共に鼓形器台の突帯は粘土を貼り付けて整形されている。8の下段の口縁部は大きく外反し、端部はやや肥厚する。9は低脚坏で




第95図　4号墳主体部直上遺物出土状況図
（S＝1/40・1/10）

ある。内面に僅かながら炭化物が付着する。10は高坏である。坏部と脚部の接合は円盤充填である。坏底部に直径３㎜の軸部が観察できる。11は低脚坏の脚部である。これらは口縁部を欠くため、隣接する５号墳出土の土器の様相を参考にした場合、大木式～小谷１式（草田６期）と考えられる。４号墳は古墳時代前期初頭と考えられる。

**５号墳（第90図）**

**（墳形・墳丘規模）**（第91図）　墳丘南側は山道による撹乱で一部地山が削られており、第２主体部の南側も若干削平を受けている。墳丘は４・５墳間の溝底部のコンター75.5mラインから復元したところ、南北８m、東西13m、現高0.6mの長方形を呈する方墳と考えられる。

**（主体部の調査）**（第96図・第97図）　５号墳からは２つの主体部が検出された。両者の主体部は南北方向に主軸を向けて並列していた。

第１主体部は墳丘中央部から東よりのところに造られている。検出上面の規模は南北4.55m、東西2.4mで、深さ1.4mの一段墓壙である。主体部の北西隅には墓壙内へ降りる段が設けられている。土井・砂古墳群の中で最大規模の一段墓壙である。

埋葬施設は土層の観察から箱形の木棺と考えられる。10層は木棺の下に敷かれていた砂質土層、９層は木棺の底板に相当すると考えられる。棺底の規模は長軸2.7m、短軸0.7mと推定される。また、11～17層は木棺の裏込め土と考えられ、８・９層は木棺に相当するものと考えられる。

木棺の両側板、両小口板に相当する土層は確認できなかったが、裏込め土が土層13・15を除いてほぼ垂直に立ち上がることから、少なくとも南小口板と東側板は存在したと考えられる。西側板は、裏込め土の14層がほぼ垂直に立ち上がることから存在したと考えられ、15層は木棺腐朽に伴う土圧によって、内側に傾斜した可能性も考えられる。北小口板の存在は、裏込め土の13層が内側に傾斜していることから、存在していなかった可能性と木棺腐朽に伴う土圧による傾斜の可能性などが考えられる。

木棺北側の棺底より赤色顔料が検出されたこと、墓壙のレベルが北側で僅かながら高いことから、頭位は北方向であると考えられる。副葬品の検出はなかった。

第２主体部は墳丘中央部から西よりのところに造られている。検出上面の規模は南北3.2m、東西2.38mで、深さ0.85mの一段墓壙である。

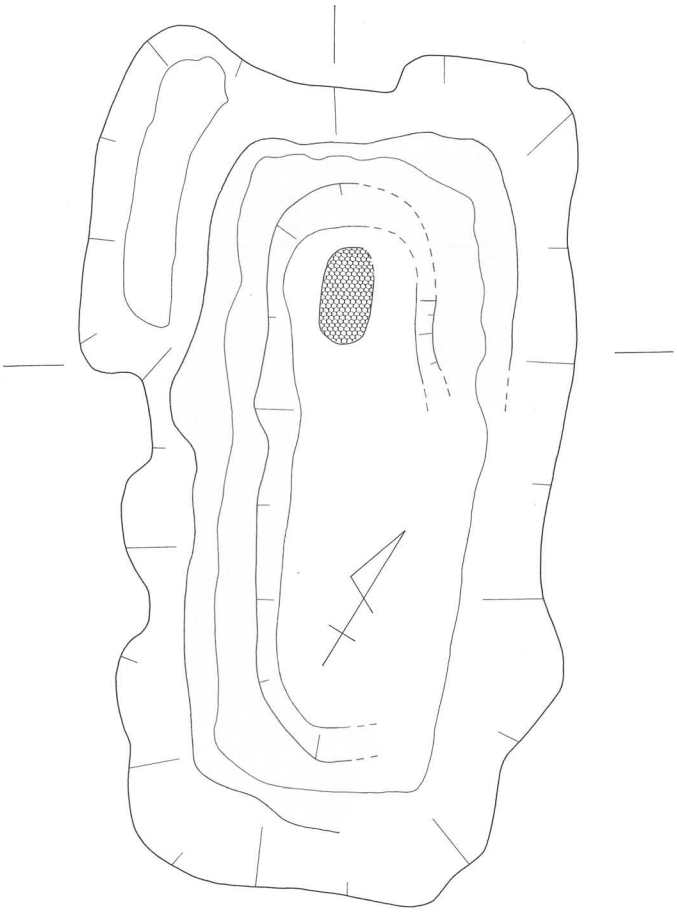
埋葬施設は土層の観察から箱形の木棺と考えられる。棺底の規模は長軸1.35m、短軸0.6mと推定される。

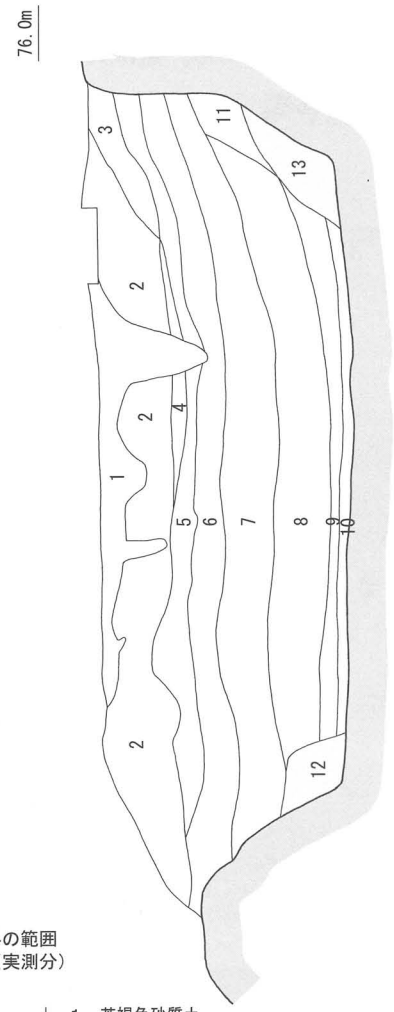
土層からは東側板・両小口板の存在は確認できなかった。13層を除く裏込め土が内側に向けて傾斜していることから、木棺腐朽に伴う土圧傾斜の可能性が考えられる。木棺に相当する土層は少なくとも５・９層に相当すると考えられる。

木棺北側の棺底より赤色顔料が検出されたこと、墓壙のレベルが北側で僅かながら高いことから、頭位は北方向であると考えられる。

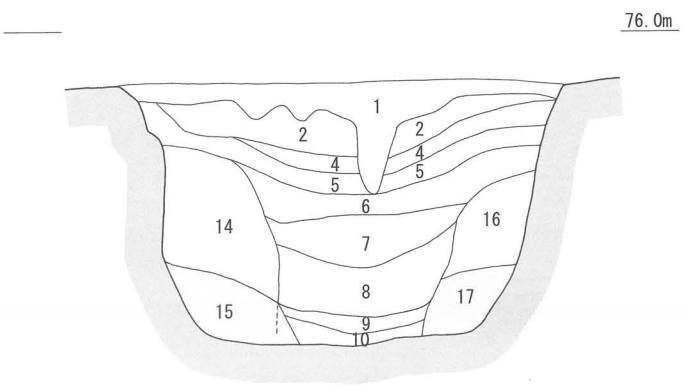
**（遺物出土状況）**（第97図）　主体部埋土の１層から鉇２点（推定）、不明鉄器１点が検出された。トレンチ調査時に検出されたため、これらの詳細な出土方向等は不明である。

**（墳丘北西裾検出土器棺）**（第98図）　浅い掘り方の規模は現存長で0.5m×0.5m、深さ0.25mである。この中に土師器壺１個体横たわっていた。ただし、40㎝未満の小規模な壺であることから、土器棺ではない可能性も考えられる。





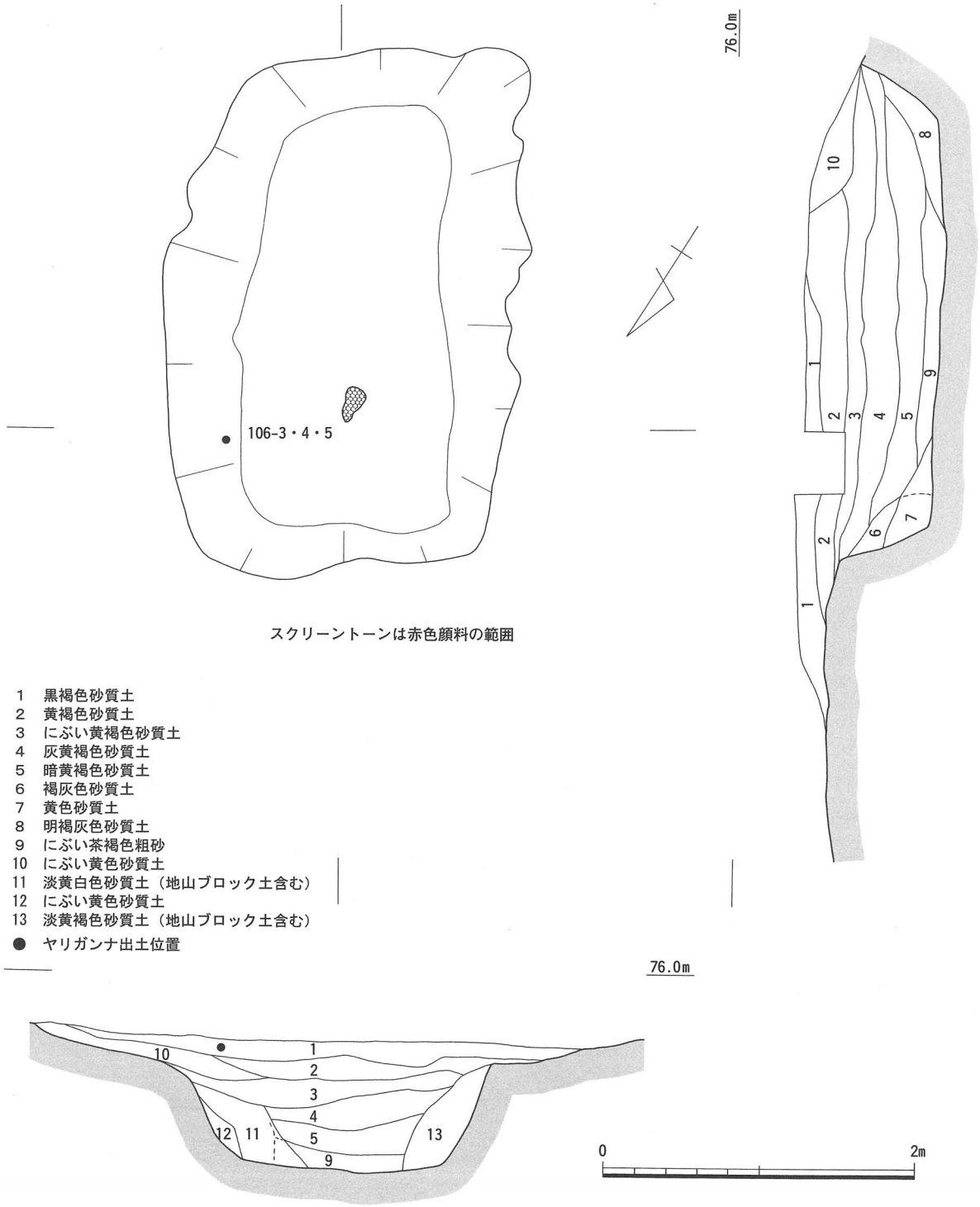

スクリーントーンは赤色顔料の範囲
アミかけ部分は棺裏込め土（実測分）



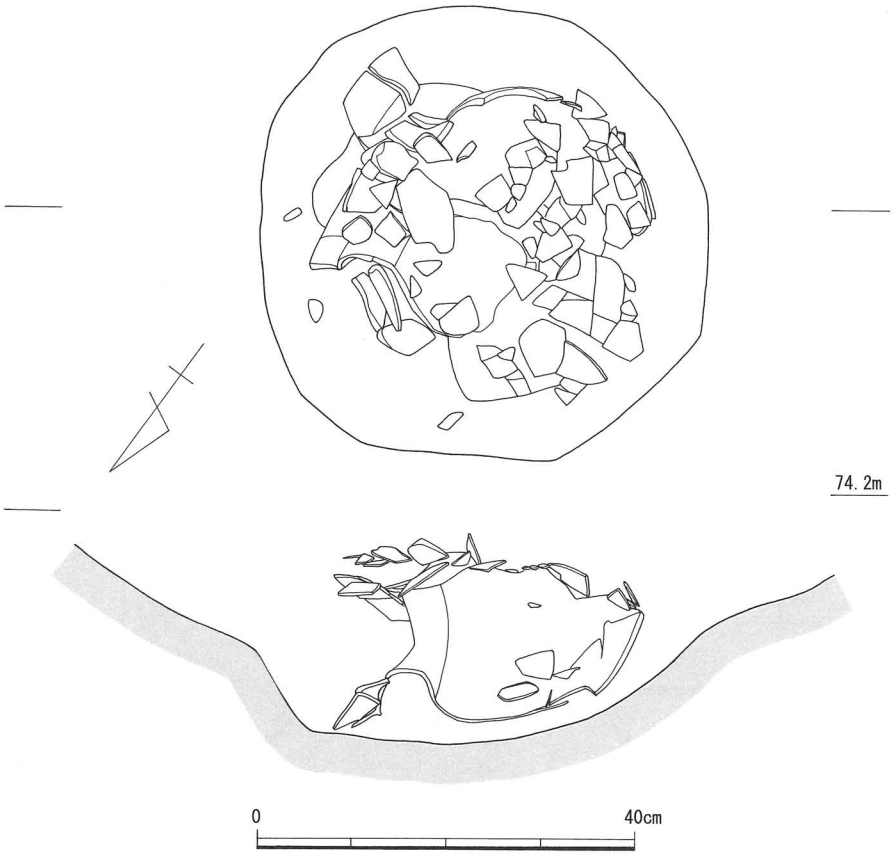

1　茶褐色砂質土
2　灰黄褐色砂質土
3　明灰黄褐色砂質土
4　にぶい赤褐色砂質土
5　黄褐色砂質土
6　灰色砂質土
7　褐灰色砂質土
8　にぶい褐灰色砂質土
9　赤褐色粗砂
10　暗褐灰色砂質土
11　淡黄褐色砂質土（地山含む）
12　淡黄橙褐色砂質土（地山含み、しまり堅緻）
13　暗灰色砂質土（地山含む）
14　黄灰色砂質土（地山含む）
15　淡黄灰色砂質土（地山含む）
16　灰黄色砂質土（地山含む）
17　褐色砂質土（地山含む）

第96図　5号墳第1主体部実測図　（S＝1/40）

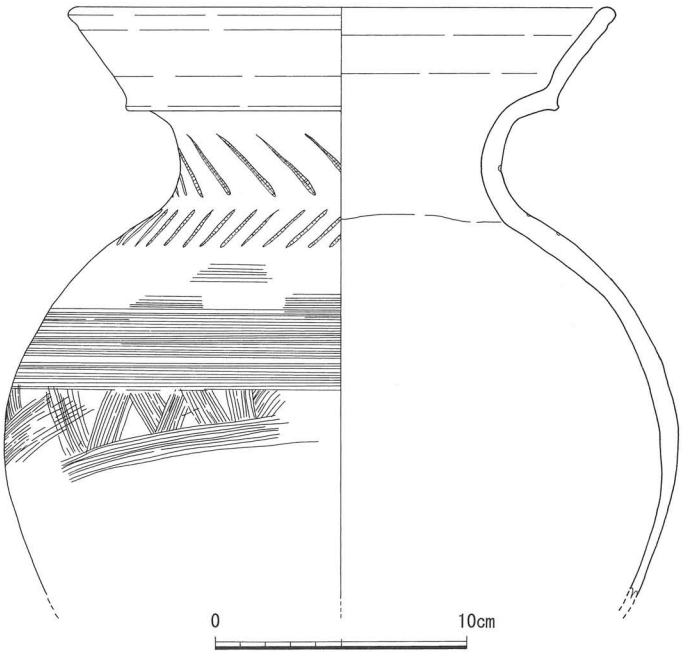
**（出土遺物）**（第100図）　12は４・５号墳間の周溝から出土した鼓形器台のくびれ部である。突帯部は粘土を貼り付けて整形している。13は第１主体部直上出土の鼓形器台の脚部である。底部は大きく外反し、端部ではさらに水平方向に外反する。突出部は緩やかにのびる。14は第１主体部直上出土の甕である。口縁部端が丸く収まる形態である。また、墳丘北西裾の土器棺の壺（第99図）は頸部に羽状文が巡る複合口縁壺である。形態的には松本１号墳出土土器に類似しており、小谷３式に下る可能性がある。他は大木式～小谷１式（草田６期）に相当する。５号墳は古墳時代前期初頭と考えられる。



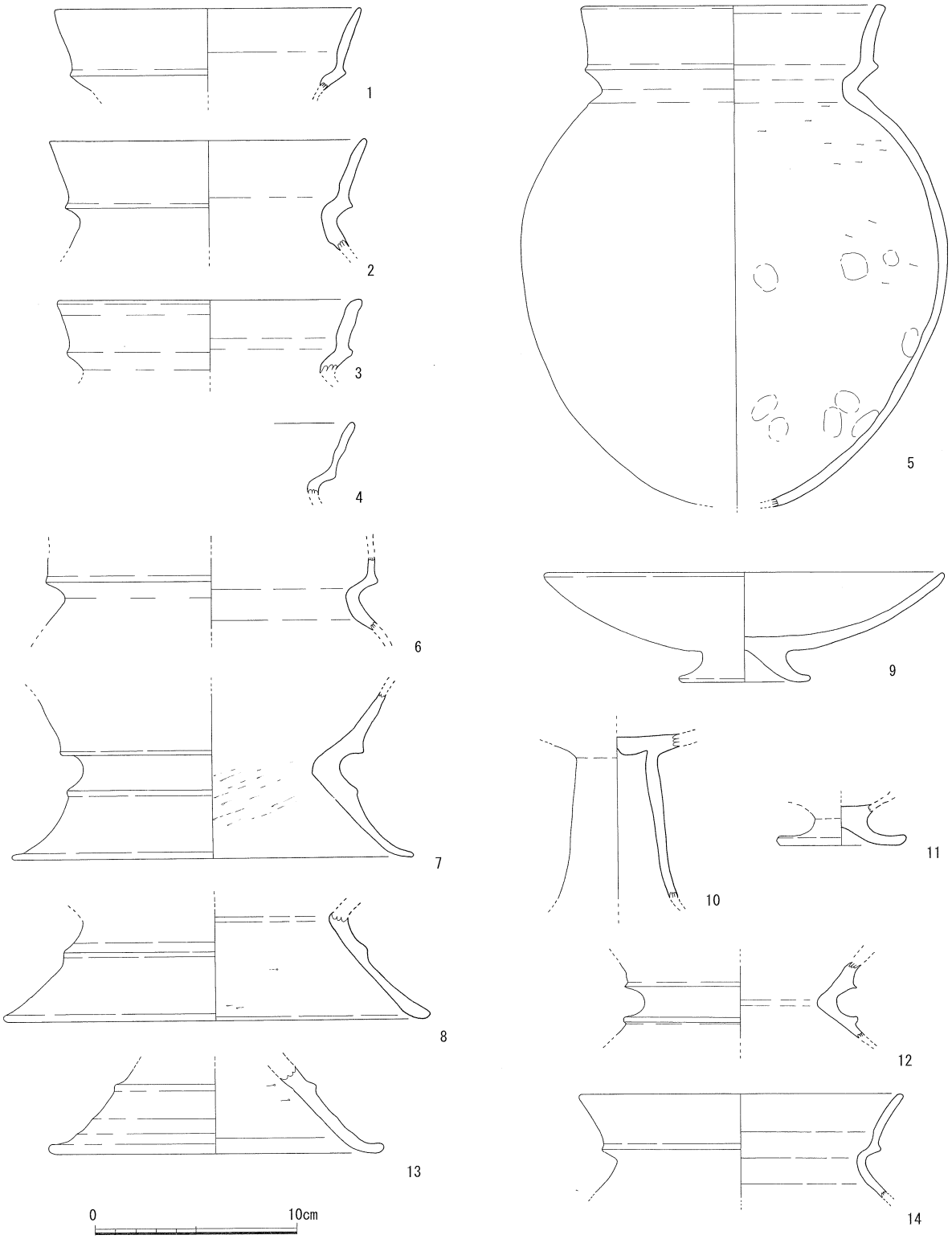

第97図　５号墳第２主体部実測図　（S＝1/40）




第98図　5号墳北西裾土器棺出土状況図　（S＝1/8）




第99図　5号墳北西裾出土土器棺実測図　（S＝1/3）



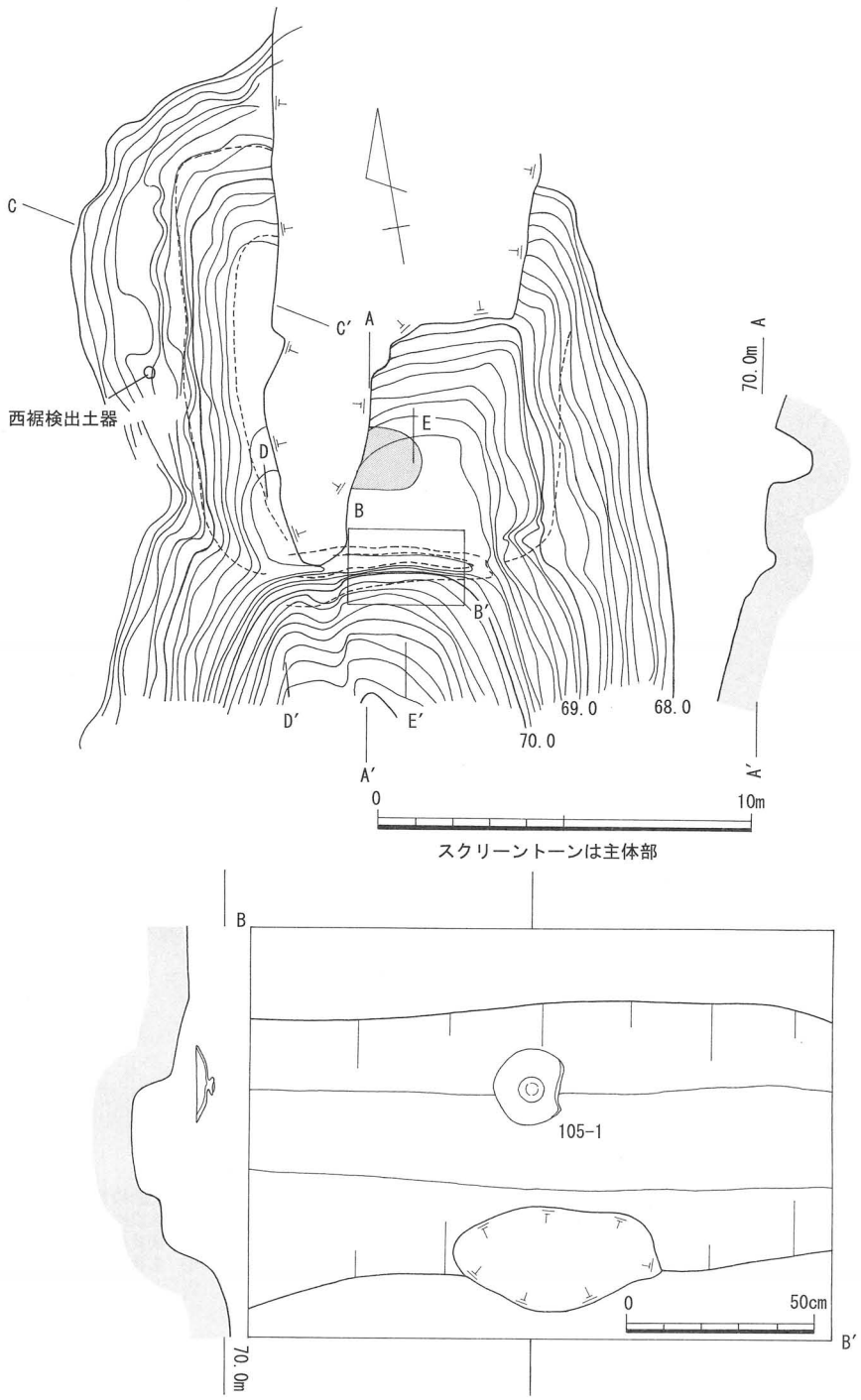

第100図　3・4・5号墳出土遺物実測図　（S＝1/3）

## ６号墳

**（墳形・墳丘規模）**（第101・102図）　６号墳は山道による撹乱と作業員待機場所を設営する為の調査前の削平により、墳丘の半分以上が失われている。

墳丘の南側には丘陵尾根筋と墳丘を画する周溝が存在する。周溝内より、ほぼ完形の低脚坏１個体が逆さまに倒れた状態で出土した。

墳丘規模は推定復元で南北11m、東西10mの方墳である。溝底部からの墳丘の高さは0.3m、同じく墳丘北裾からは0.7mである。

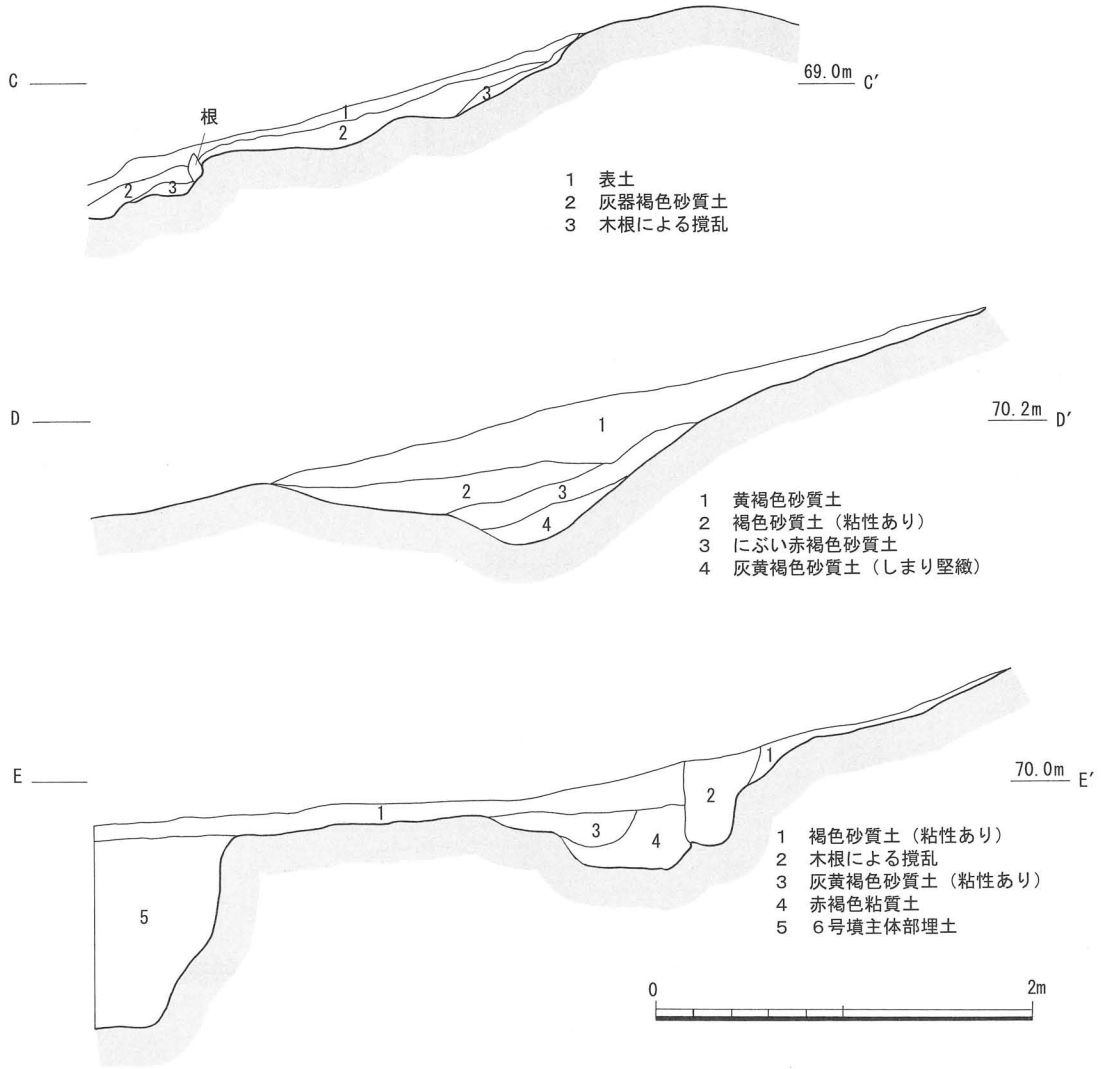



第101図　６号墳測量図及び６号墳周溝内遺物出土状況図　（S＝1/200・1/20）

**（主体部の調査）**（第103図）　主体部の西半は山道による撹乱のため底部を除いて削平を受けている。主体部は緩やかな二段墓壙である。検出上面の規模は東西2.9m以上、南北1.55mで、一段目までの深さは0.65mである。二段目の規模は東西2.6m以上、南北1.1m、一段目までの高さは0.3mである。

土層の観察から埋葬施設は箱形の木棺と考えられる。17・19・30層は木棺の裏込め土であると考えられる。20・21層は木棺に相当するものと考えられる。棺底の規模は長軸2.0m、短軸0.4mである。土層からは木棺の両側板・両小口板は確認できなかったが、木棺の両側板は裏込め土が垂直に立ち上がっていることから、存在していたものと考えられる。東小口板は29層が内側に傾斜していることから、存在しなかった可能性が考えられる。ただ、20層と21層の間に29層が入っていくことから、木棺腐朽に伴う土圧の可能性が高いと考えられる。西小口板は撹乱のため不明である。

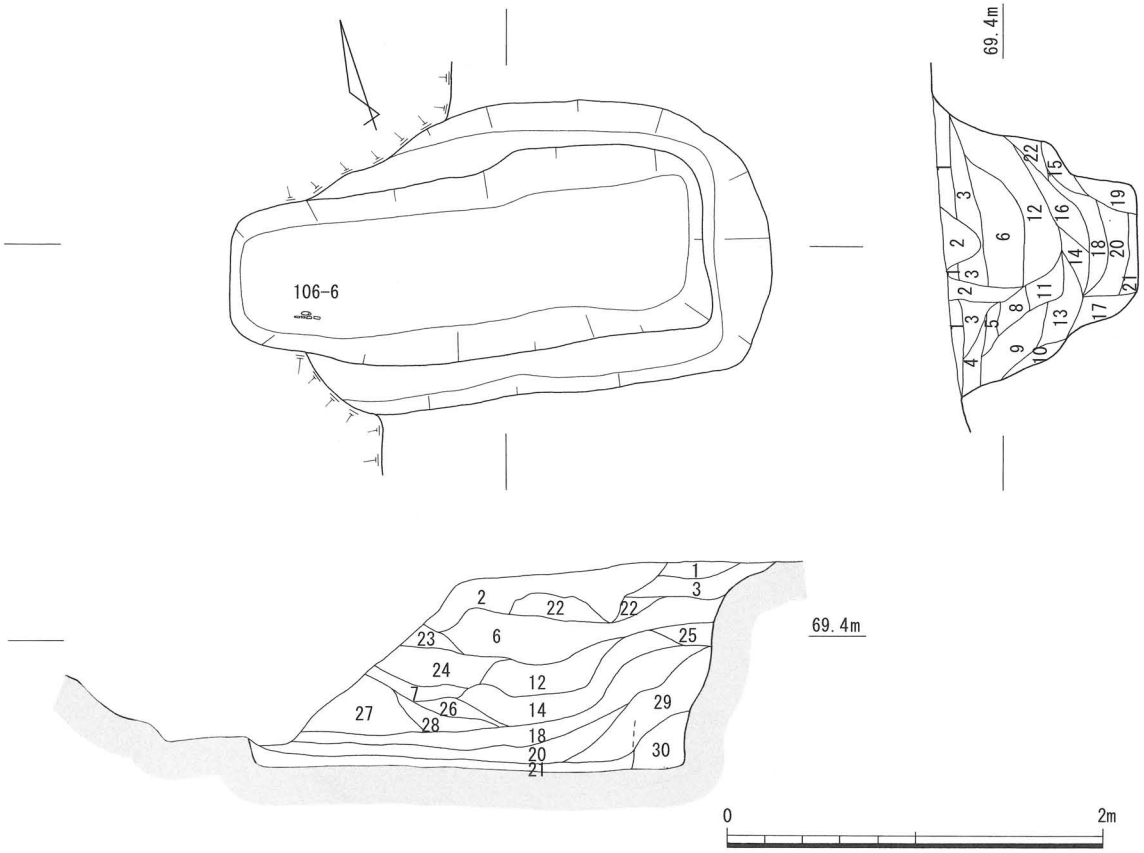
頭位は墓壙二段目が僅かに東側で広がり、墓壙底が東側で僅かに高くなることから、東頭位であると考えられる。




第102図　６号墳墳丘土層図　（S＝1/40）

**（遺物出土状況）**（第103図）　棺内南西裾で、切っ先を西に向けた鉈１点を検出した。頭位を東とした場合、被葬者の足側に位置することとなる。

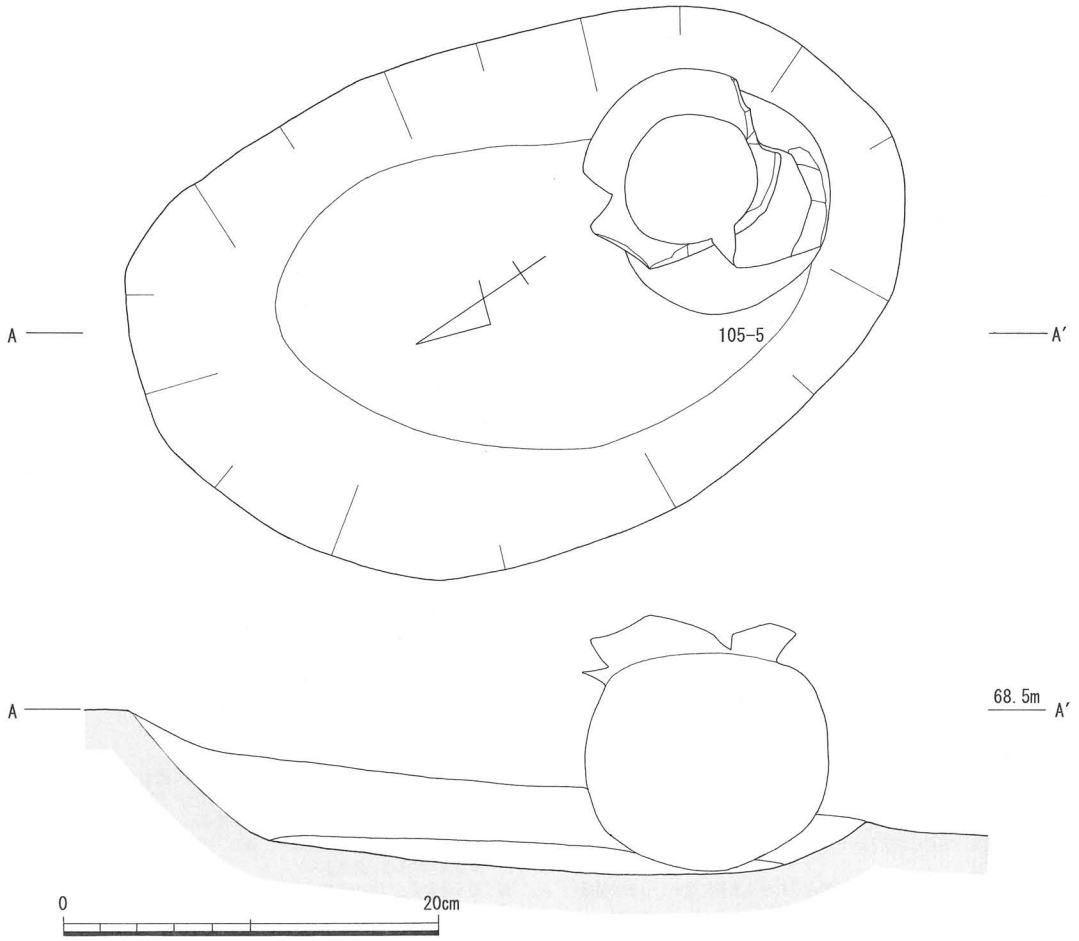
**（墳丘西裾検出土器）**（第104図）　墳丘の西裾には、外面に炭化物の付着したほぼ完形の小型の丸底甕１個体が浅い掘り込みに据えられていた。掘り込みの規模は現存長0.4m×0.26m、深さ0.06mである。墳墓祭祀に伴う可能性が考えられる。



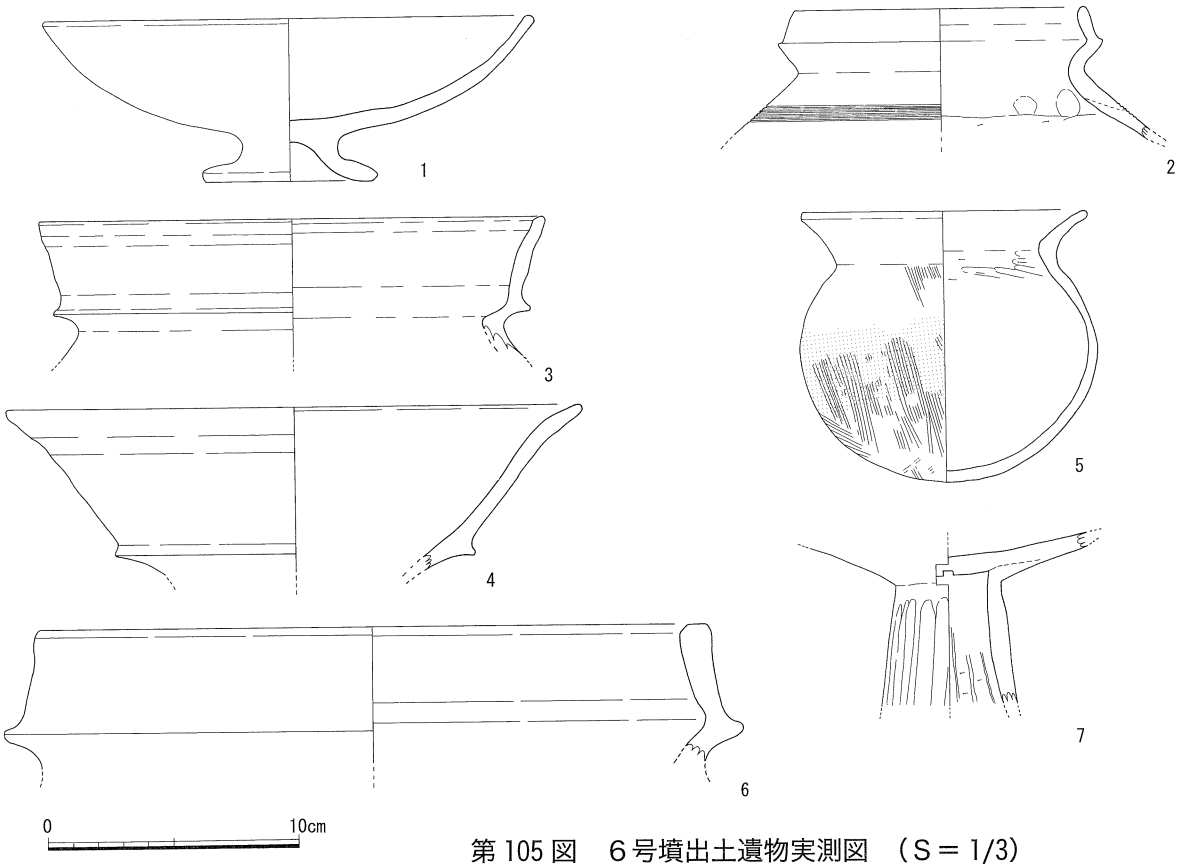

1　赤褐色砂質土（しまり堅緻）
2　黒褐色砂質土（木根による攪乱）
3　明赤褐色砂質土（白色砂粒含み、しまり堅緻）
4　黄色砂質土（粘性あり、地山ブロック土混）
5　黄色粗砂土（しまり悪い）
6　赤褐色砂質土（粘性あり）
7　黄褐色砂質土（粘性あり、地山ブロック土混る。４より色調暗く、砂粒細い）
8　明黄褐色砂質土（粘性あり、地山ブロック土多く混る）
9　淡灰黄色砂質土（赤色の地山ブロック土混る）
10　淡灰黄褐色砂質土（しまり悪く粗砂多い）
11　灰黄褐色粗砂土
12　黄橙褐色砂質土（粘性あり、地山ブロック土混る）
13　淡灰黄色砂質土（白色砂粒含み、９よりしまり悪い）
14　暗赤褐色砂質土
15　にぶい黄橙褐色砂質土（粘性あり、地山ブロック土多く含み、しまり堅緻）
16　暗黄橙褐色砂質土（粘性あり、地山ブロック混る）
17　淡黄白色砂質土
18　淡黄灰色粗砂土
19　明黄橙色砂質土（地山ブロック多く混る）
20　にぶい黄灰色粗砂土
21　暗黄灰色粗砂
22　明黄橙褐色砂質土（粘性あり）
23　赤褐色砂質土（粘性あり、地山ブロック土混る）
24　黄褐色砂質土（粘性あり、地山ブロック土混る）
25　明黄色砂質土（粘性あり、地山ブロック土多く混る）
26　にぶい黄褐色砂質土（粘性あり、地山ブロック土混る）
27　明黄褐色砂質土（地山ブロック土多く混る）
28　にぶい黄褐色砂質土（粘性あり、地山ブロック土多く混る。26より色調暗い）
29　暗赤褐色砂質土（粘性あり）
30　淡赤色砂質土（地山ブロック土多く混る）

第103図　６号墳主体部実測図　（S＝1/40）

**（出土遺物）**（第105図）　１は北側周溝内埋土より出土した低脚坏である。口縁部端は丸く収まる形態である。内面には炭化物が付着している。２～４は墳丘裾出土の土師器である。２は壺である。口縁部は内傾し、突出部はやや上方を向く。頸部の外面には７条の沈線が巡り、それに対応する内面では粘土の継ぎ目とケズリ調整、指頭圧痕が認められる。３は甕である。口縁部の突出部は鋭く水平に飛び出している。口縁部端は外側に引っ張られて形成されている。外面に黒斑が認められる。４は鼓形器台である。外反する口縁部は口縁端部付近でさらに外反する。突帯部は粘土を貼り付けて整形している。５は小型丸底の甕である。口縁部端は若干つまみ上がる。外面は胴部から底部に不整方向のハケ調整が施されており、炭化物が多く付着する。６は墳丘西裾斜面出土の大型の壺の口縁部である。口縁部端は平らになっている。突出部は僅かに下方を向く。この破片は、３号墳西側周溝内の土器蓋石棺の蓋に使用された壺の口縁部と形態・規模が非常に類似しており、同一個体の可能性が高い。３号墳の土器蓋石棺に使用されなかった壺の残存の一部は、土井・砂古墳群が立地する丘陵で廃棄されていた可能性がある。７は高坏である。坏部に脚部を接合した粘土の単位が観察できる。ただし、坏部と脚部の筒内部の接合には円盤充填が行われていた可能性がある。これは坏底部に直径４㎜の軸痕が観察できることから伺える。この軸痕は脚部の高さを揃える等の、高坏を製作するための規格の痕跡とも考えられる。これらは大木式～小谷１式（草田６期）に相当する。６号墳は古墳時代前期初頭と考えられる。




第104図　６号墳西裾土器出土状況図　（S＝1/4）




第105図　６号墳出土遺物実測図　（S＝1/3）

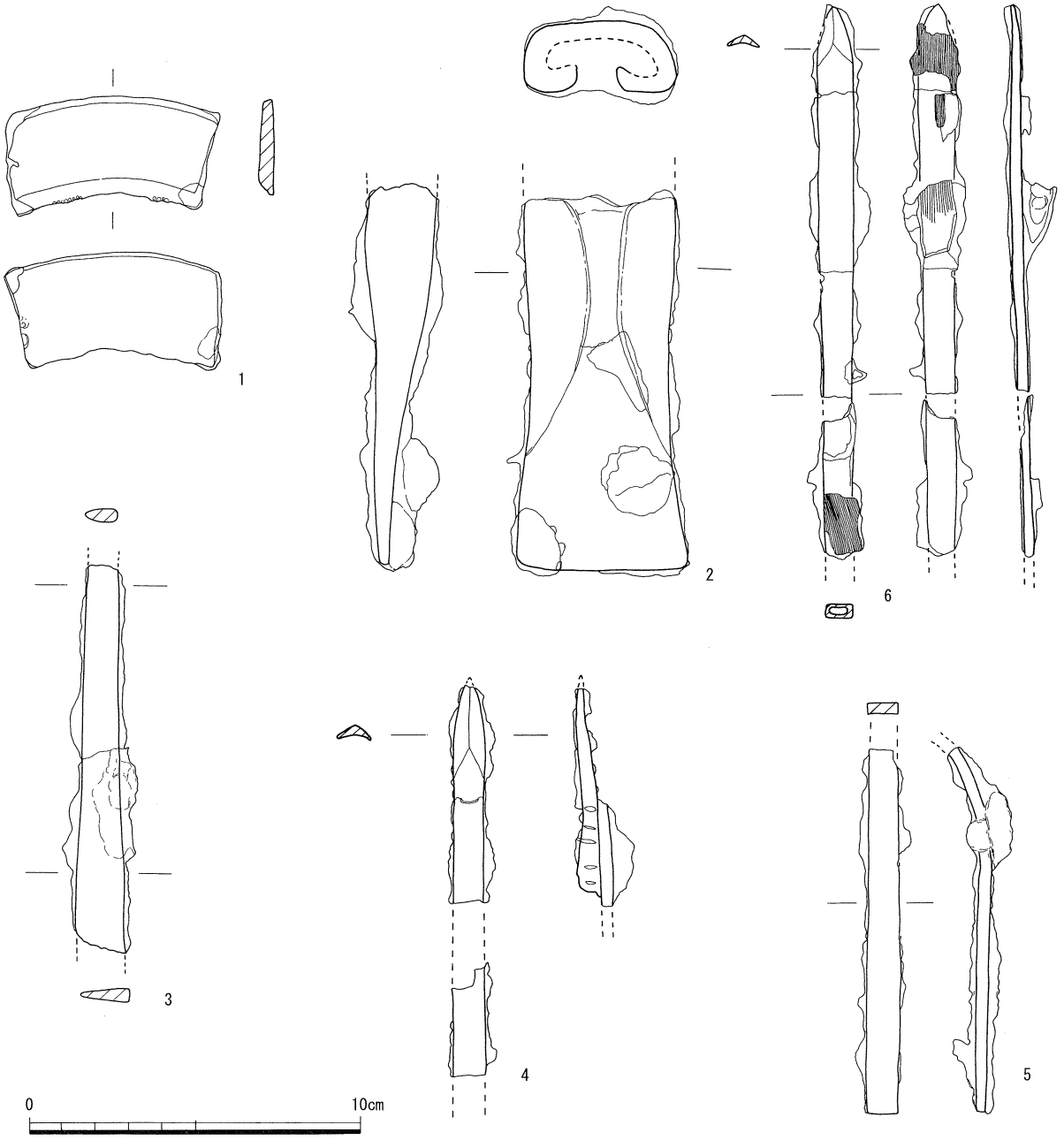
**古墳出土の金属器（第106図・第28表）**

１は１号墳第２主体部出土の破鏡で、鏡の周縁片である。遺存状態は良好で、鏡背面は一部の剥離面や緑青を除いて鈍い銀色を呈する。鏡面も鈍い銀色を呈するが、艶やかな黒色を呈する部分が認められる。重量は65.88ｇである。鏡背両面、破砕面共に研磨されており、本来の大きさや断面形態は不明である。現存の復元径から見て直径17.7cm以上と大型になること、精緻な櫛描文が観察されることなどから、後漢の内行花文鏡と考えられる(註8)。後漢鏡を分類・編年した岡村秀典氏によれば、漢鏡Ｉ式に分類され１世紀前半、王奔代から後漢初期の製作と考えられる(註9)。また、櫛描文の部分に僅かながら、ベンガラが付着しているのが検出された(註10)。

２は４号墳主体部出土の袋状鉄斧である。錆化が著しいため不明瞭であるが、袋部の折り返しは左右が合わさらないものである。また、鉄斧の上部は欠損している。現存長11.3cm、刃部長2.4cm、最大刃幅5.1cm、刃部先端の厚み0.3cmである。袋部の製作技法を検討した金田善敬氏の分類によれば（金田1995）、Ａ技法で製作されたもので古墳時代前期前葉の年代観が与えられている。

３～５は５号墳第２主体部からの出土である。３は不明鉄器である。現存長11.7cm、断面形態は刃部らしき部分と楕円形を呈する部分が確認できる。最大幅は1.5cmである。

４は鉈である。他の個体が付着している。５と同一個体の可能性もあるが、不明である。残存長は４が6.5cm、４と同一個体と考えられる破片が3.2cm、５が11cmである。４、５共に木質などの痕跡は検出できなかった。４の刃部長は2.8cm、刃幅1.0cmである。刃部の断面形態は裏鋤状になっている。５の断面形態は矩形になっている。６は６号墳出土の鉈である。現存長20.7cmである。刃部長は1.6cm、刃幅1.1cmである。木質部が鉈の表裏両面にいくつか見られる。これは木棺の木質部が付着したものと考えられる。これらの鉈は古瀬清秀氏の分類によれば（古瀬1991）、刃部長が３cm以下の１ａ類に属するもので古墳時代前期に盛行するものである。




第106図　1・4・5・6号墳主体部出土金属器実測図　（S＝1/2）

〔参考文献〕

金田善敬1995年「有袋鉄斧の製作技法の検討」『古代吉備』第１７集

古瀬清秀1991年「農工具」『古墳時代の研究８　古墳２副葬品』

〔註〕

1. ここでは研磨や穿孔などの２次加工を行った鏡片を「破鏡」と称する立場に立つ。
2. 東森市良氏は突帯を付加した大型の壺（土器棺）の突帯が、山陰で最古の円筒埴輪の手法と共通した点を持つことから、山陰地方で円筒埴輪が使用されるに至る過程の一つの手がかりになるとの見解を述べている。（東森市良1967年「山陰地方発見の壺棺とその特色」『考古学研究第14巻２号』考古学研究会）
3. 同形態の大型壺は、鳥取県中部の天神川下流域を中心とした地域に分布の中心があり、東部の千代川流域にもその分布が認められる。（註２の東森1967年、松本岩雄1986年「墳丘出土の大型土器」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会、吉田学2000年「山陰東部における古墳時代の土器棺、土器棺墓の様相」妻木晩田調査団編『大山町埋蔵文化財発掘調査報告第17集妻木晩田遺跡発掘調査報告書』鳥取県西伯郡大山町教育委員会・大山スイス村発掘調査団）
4. 出雲地方における同形態の類例としては、松江市大佐遺跡頂上部土器棺１（石川崇他編1999年『松江市文化財調査報告書第79集　ソフトビジネスパーク建設に伴う大佐遺跡群発掘調査報告書』松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団）・松江市袋尻８号主体部西側出土の１号土器（曽田辰雄他編1998年『松江市文化財調査報告書第76集　第２卸商業団地造成工事に伴う袋尻遺跡群発掘調査報告書』松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興財団）・八雲村小屋谷１号墳壺棺（宮本徳昭編1981年『御崎谷遺跡小屋谷古墳群』島根県八束郡八雲村教育委員会）・玉湯町大谷１号墳土器棺（島根県教育委員会1999年『埋蔵文化財調査年報Ⅶ』）が挙げられる。
5. 古墳群出土の土師器の編年については（松山智弘2000年「小谷式再検討－出雲平野における新資料を中心に－」『島根考古学会誌』１７号島根考古学会と赤沢秀則1992年『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　南講武草田遺跡』）に依拠した。
6. 近藤正1978年「安来平野における土壙墓」『山陰古代文化の研究』近藤正遺稿集刊行会
7. 宮本徳昭編1981年『御崎谷遺跡小屋谷古墳群』島根県八束郡八雲村教育委員会
8. 京都大学博物館　森下章司氏のご教示による。
9. 京都大学人文科学研究所　岡村秀典氏のご教示による。
   岡村秀典1993年「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第５５集
10. 財団法人元興寺文化財研究所の分析による。

## ２．横穴墓の調査

土井・砂遺跡内で検出された横穴墓は、丘陵の北東斜面の群（１～４号横穴墓）と北西斜面の群（５～７号横穴墓）に分かれる。

### １号横穴墓（第107図）

**（立地）** １号横穴墓は丘陵の北東斜面に位置する。標高は69m付近である。

**（規模と形態）** 墓道と玄室までが一続きとなった形態である。墓道の規模は長さ3.5m、幅0.74mである。玄室の規模は墓道側の幅0.65m、奥壁の幅1.3m、奥行き3.25mである。天井部は崩落しているが、奥壁の高さは推定で1.3mである。天井部の形態はテント形と推定される。

閉塞部は玄室入口の左右両袖壁に幅0.1m、高さ１mの抉り込みが認められる。木の板等の閉塞板を立てかける施設として機能していたものと考えられる。

**（土層状況）** １・６層は斜面からの流土である。２層は天井崩落土や流土と考えられる。３・４層は最終埋葬時の埋土と考えられる。５・７～10層は最終埋葬時の整地土と考えられる。11～14層は２次埋葬に伴う埋土で、12層は腐食のため黒褐色である。砂礫を含んだ灰黄褐色砂質土の15・16層は、初葬時に伴う埋土と考えられる。以上のことから、最低３回の埋葬が行われていたと考えられる。

**（遺物出土状況）**（第108図）　玄室内からは須恵器の蓋坏が２セット出土した。奥壁の北側に並置されていることから、枕として使用されていた可能性がある。２次埋葬時のものと考えられる。

墓道堆積土の19層からは提瓶（第109図－７）　１点が出土した。２次埋葬時、あるいは最終埋葬時のものと考えられる。12層からは須恵器蓋の破片が出土した。初葬時に伴うものと考えられる。５層からは須恵器の坏の破片（同－４）が出土した。これは２次埋葬時、あるいは最終埋葬時に伴うものと考えられる。

**（時期）** 遺物の特徴を記すと、玄室内出土の須恵器蓋（第109図－１・２・５・６）は丁寧なヘラケズリを天井部に施している。墓道堆積土19層出土の提瓶（同－７）は把手が古式の様相である。墓道堆積土の12層から出土した須恵器蓋の破片（同－３）は口径が11.4cmと小さいが口縁部端の内側に段がある。これらは大谷編年の３～４期に相当するものと考えられる。以上のことから、１号横穴墓の埋葬行為は大谷編年の３～４期（古墳時代後期後半）に行われていたと考えられる(註1)。

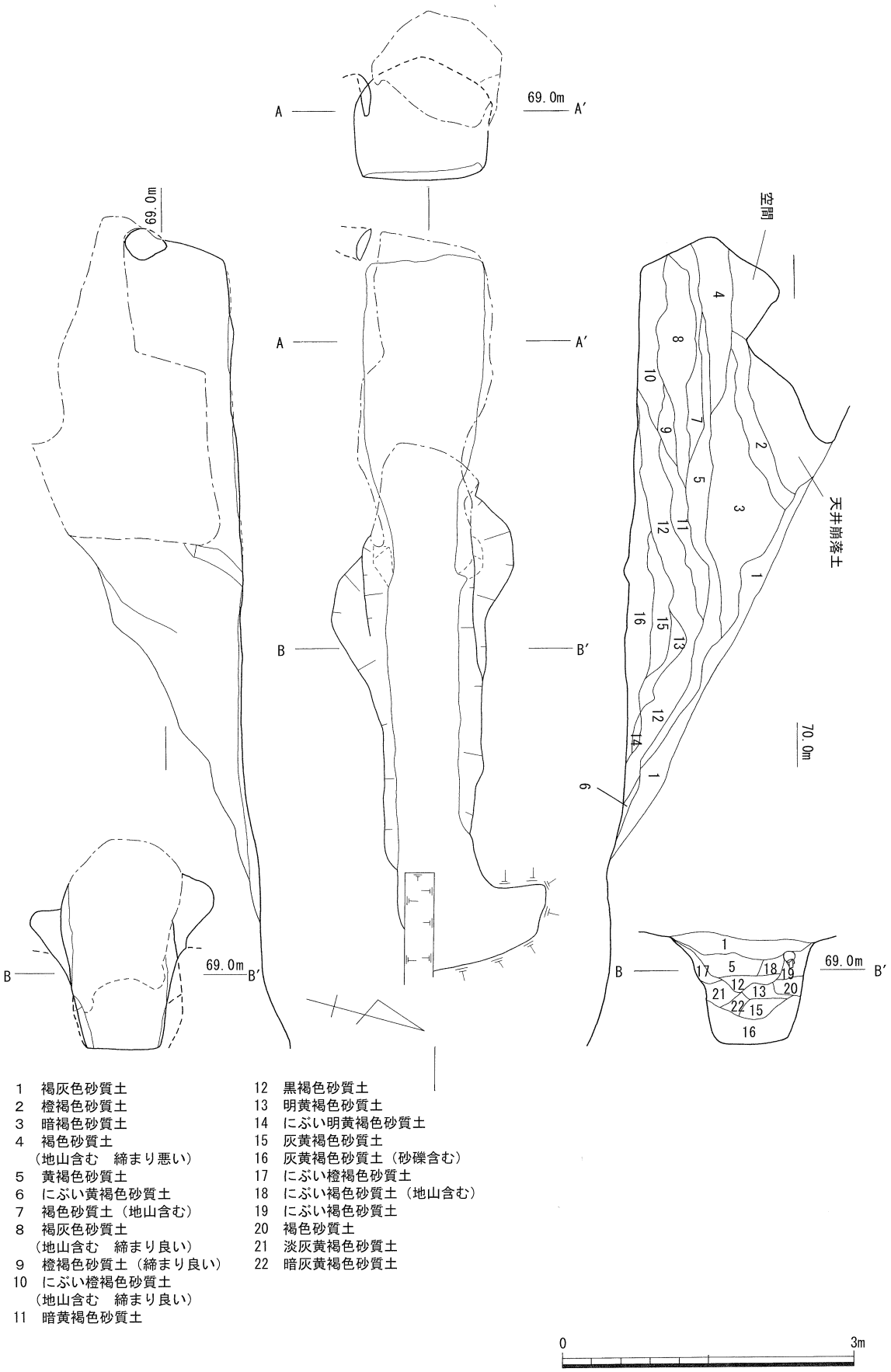
### ２号横穴墓（第110図）

**（立地）** ２号横穴墓は丘陵の北東斜面に立地し、１号横穴墓の北隣に位置する。標高は68m付近である。

**（規模と形態）**　墓道と玄室が一続きになった形態である。墓道の規模は長さ1.55m、幅0.6mである。玄室の規模は墓道側の幅0.57m、奥壁の幅0.7m、奥行き1.4m、奥壁の高さ0.7mである。天井部は一部崩落しているが、テント形の形態と推定される。

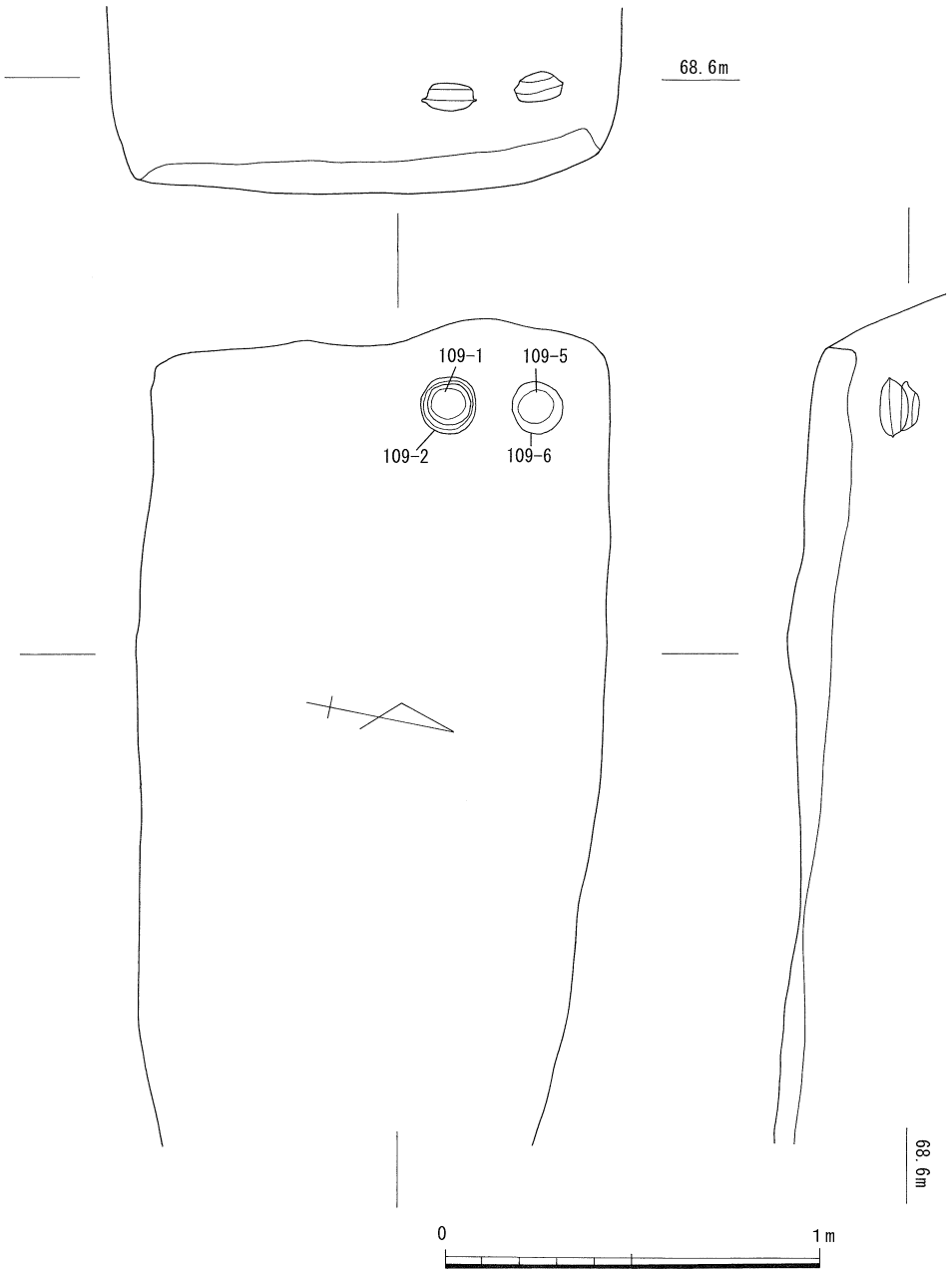
閉塞部は、玄室入口の床面に幅0.7m、長さ0.3m、深さ0.2mの溝が設けられている。閉塞板を据えるための機能を有していたものと考えられる。

**（土層状況）** １層は最終埋葬時の埋土か、流土と考えられる。２・３層は２次埋葬時、あるいは最終埋葬時の埋土と考えられる。４層は２次埋葬時の埋土（初葬時の埋土を掻き出したもの）と考えられる。５層は初葬時の埋土、あるいは２次埋葬時の整地土と考えられる。以上のことから最低２回の埋葬が行われていたと考えられる。




1　褐灰色砂質土
2　橙褐色砂質土
3　暗褐色砂質土
4　褐色砂質土
（地山含む　締まり悪い）
5　黄褐色砂質土
6　にぶい黄褐色砂質土
7　褐色砂質土（地山含む）
8　褐灰色砂質土
（地山含む　締まり良い）
9　橙褐色砂質土（締まり良い）
10　にぶい橙褐色砂質土
（地山含む　締まり良い）
11　暗黄褐色砂質土
12　黒褐色砂質土
13　明黄褐色砂質土
14　にぶい明黄褐色砂質土
15　灰黄褐色砂質土
16　灰黄褐色砂質土（砂礫含む）
17　にぶい橙褐色砂質土
18　にぶい褐色砂質土（地山含む）
19　にぶい褐色砂質土
20　褐色砂質土
21　淡灰黄褐色砂質土
22　暗灰黄褐色砂質土

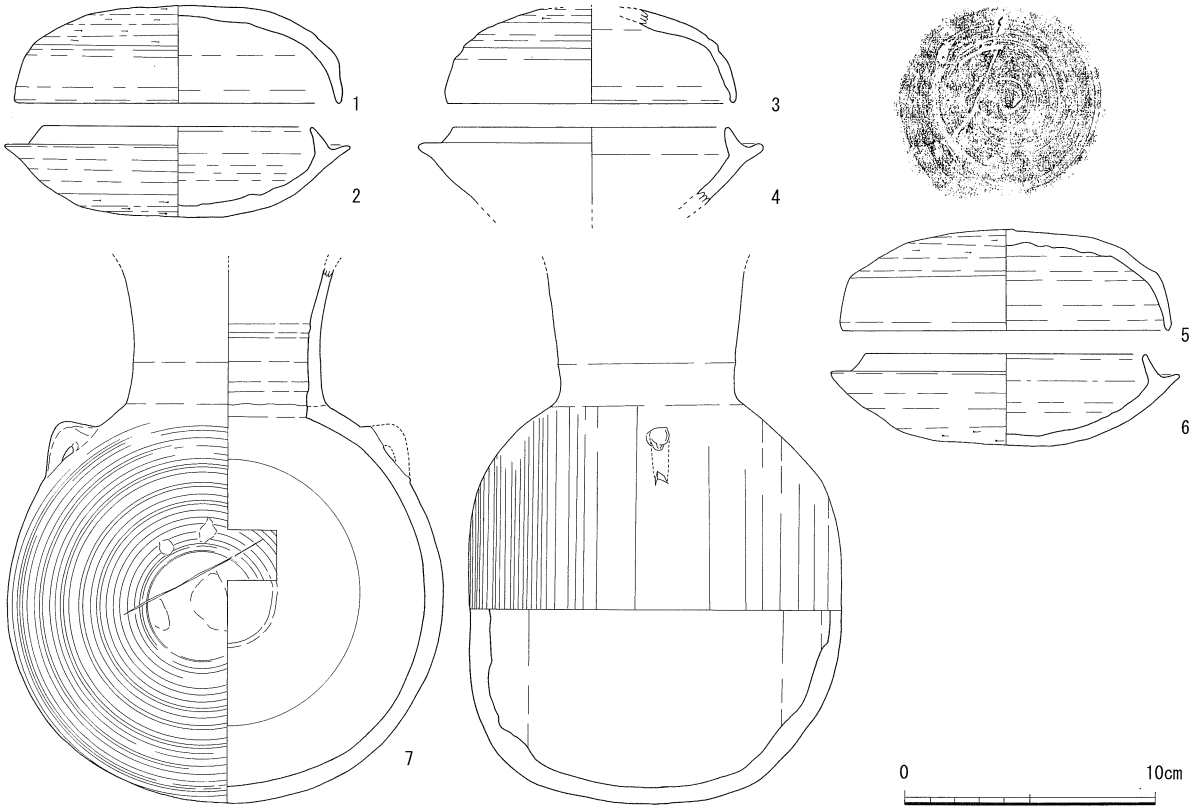
第107図　1号横穴墓実測図　（S＝1/60）



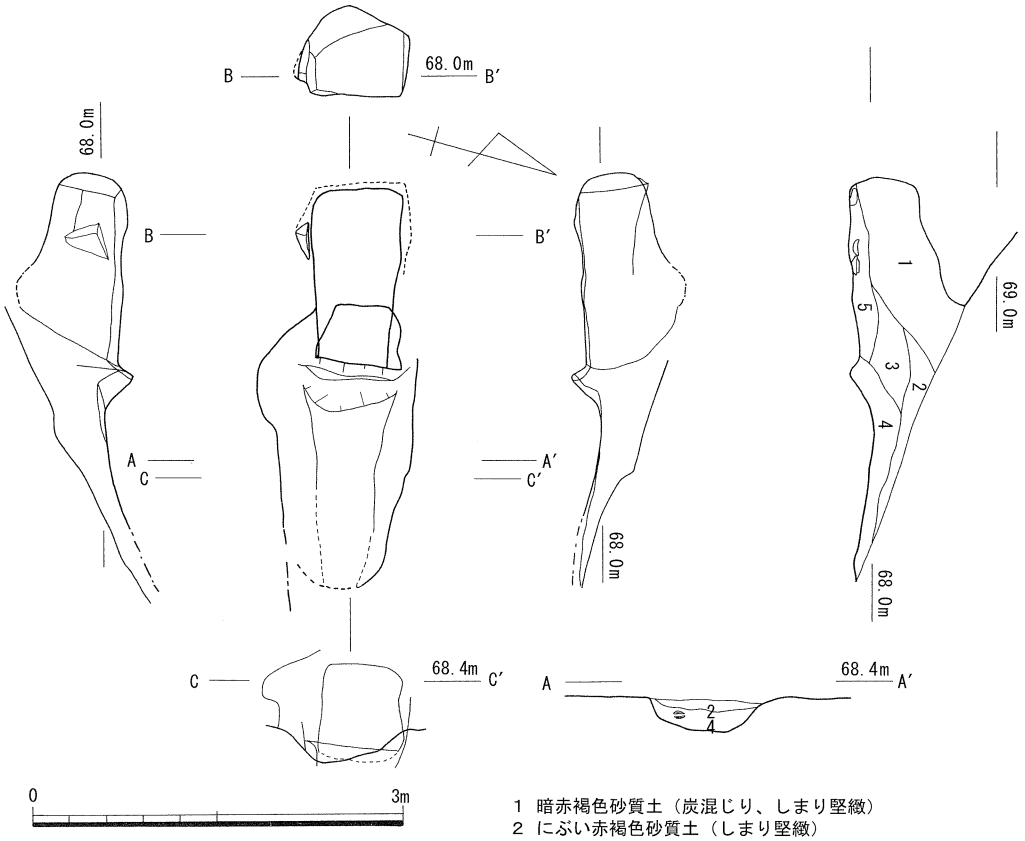

第108図　1号横穴墓遺物出土状況図　（S＝1/20）

**（遺物出土状況）**（第111図）　玄室内からは須恵器の蓋４点（第112図－１・２・４・５）・坏２点（同－８・11）・提瓶１点（同－７）の合計７個体の完形の須恵器が出土した。初葬時のものと考えられる。墓道堆積土の４層からは須恵器の蓋２点（同－３・６）・坏３点（同－９・10・12）・直口壺３点（同－14～16）が出土した。これらも初葬時のものと考えられる。また、２層からも須恵器の坏１点（同－13）が出土している。玄室内と墓道の須恵器を合わせると、蓋坏のセットが６セット出来る。これらの須恵器は後述するように同じ様相を示すことから、２層の坏も初葬時の可能性が出てくる。なお、直口壺（同－15）の一部（破片）が１号横穴墓の墓道堆積土内から出土しており、両横穴墓で直口壺の接合関係が認められる。

**（時期）**遺物の特徴を記すと、玄室内、墓道堆積土内の須恵器蓋坏（第112図－１～６）は粗雑なヘラケズリを天井部に施す大谷４期の特徴を持つ。玄室内出土の提瓶（同－７）も把手がボタン状で

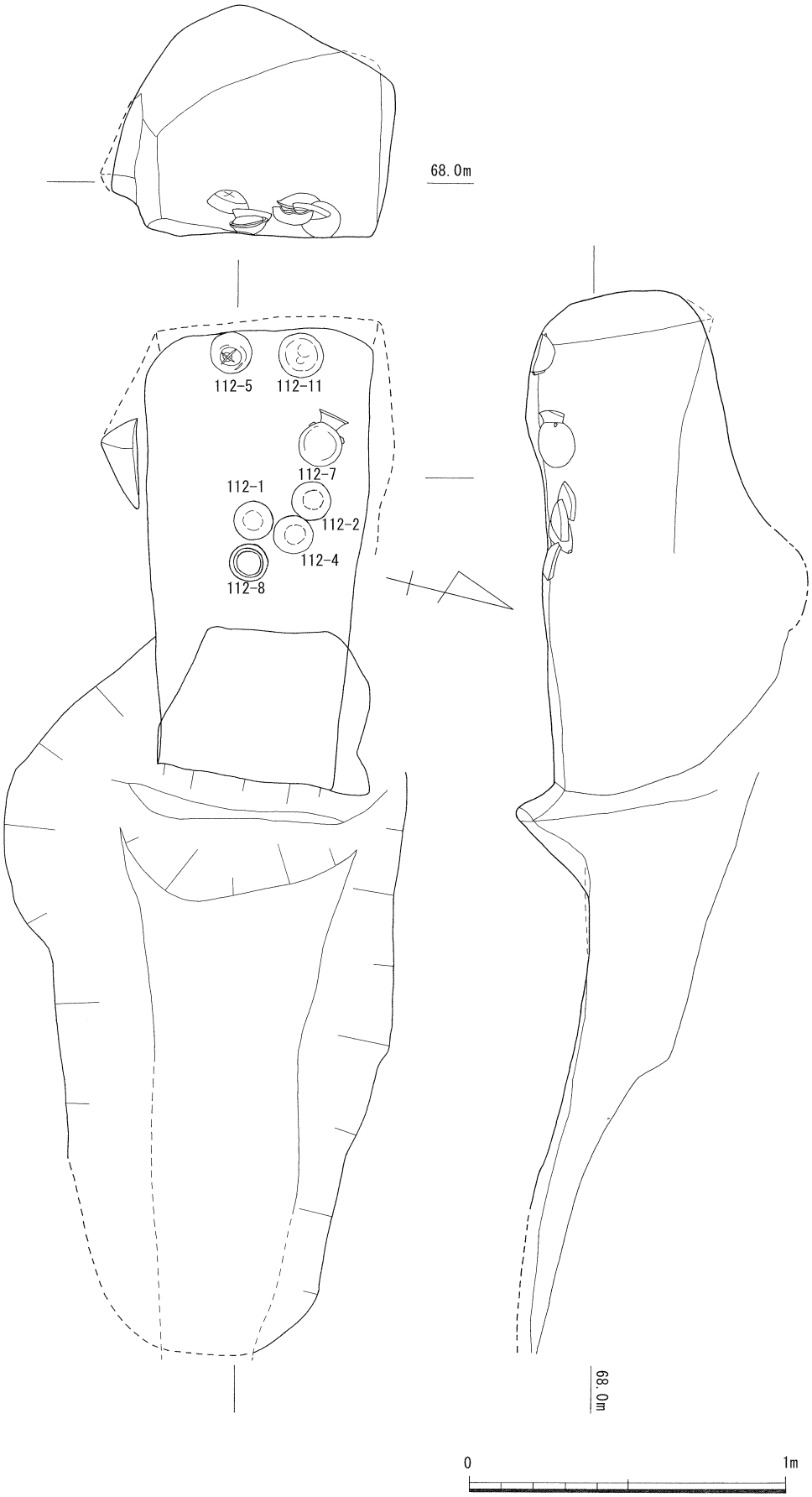



第 109 図　1 号横穴墓出土遺物実測図　（S ＝ 1/3）



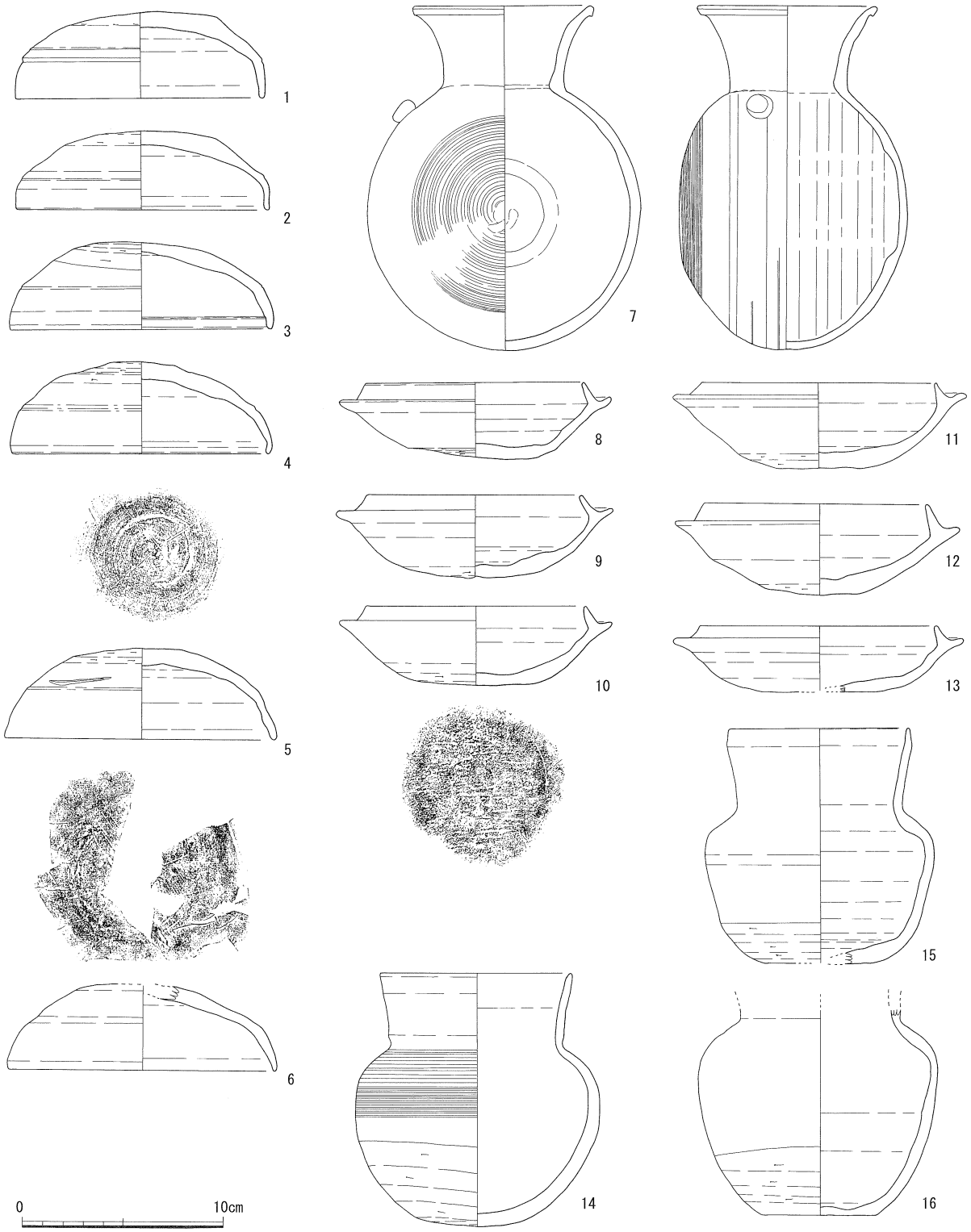

1 暗赤褐色砂質土（炭混じり、しまり堅緻）
2 にぶい赤褐色砂質土（しまり堅緻）
3 にぶい褐色砂質土（粘性あり）
4 暗褐色砂質土（粗い砂含む、しまり堅緻、須恵器片）
5 褐色砂質土（粘性あり）

第 110 図　2 号横穴墓実測図　（S ＝ 1/60）




第 111 図　２号横穴墓遺物出土状況図　（S＝1/20）

あることから、退化が伺われる。直口壺（同－14～16）はいずれも底部外面に丁寧なヘラケズリを行っている。以上のことから、２号横穴墓の埋葬行為の期間は大谷４期（古墳時代後期後葉）に収まるものと考えられる。




第 112 図　２号横穴墓出土遺物実測図　（S＝1/3）

**３号横穴墓（第113図）**

**（立地）** ３号横穴墓は丘陵北東斜面に立地し、２号墳の北隣に位置する。標高は68m付近である。

**（規模と形態）** 墓道から玄室までが一続きになった形態である。墓道の規模は長さ3.2m、幅0.7mである。玄室の規模は墓道側の幅0.55m、奥壁の幅0.9m、奥行き3.1mである。天井部はかなり崩落しているが、奥壁の高さは推定1.2mである。天井部の形態はテント形と推定される。

閉塞部は、玄室入口の右袖部の床面に深さ0.1m程度、直径0.1mの抉り込みと、左袖部に幅0.1m、長さ１mの突出部が設けられている。閉塞板を据えるための機能を有していたと考えられる。

**（土層状況）** １層は斜面からの流土である。２・３層は最終埋葬時の埋土か流土である。ただ、３層は地山ブロック土を含むことから、天井の崩落土の可能性もある。５～７層は最終埋葬時の埋土（２次埋葬時の埋土を掻き出したものか）と考えられる。４・９～12層は２次埋葬時の埋土（初葬時の埋土を掻き出したものか）と考えられる。４・９層は腐食して黒褐色である。８・13層は地山が風化した粗砂を含むことから、初葬時の埋土と考えられる。

以上のことから、３号横穴墓では最低３回の埋葬が行われていたと考えられる。

**（遺物出土状況）**（第114図）　玄室内からは須恵器の蓋坏が２セット、奥壁に平行して並んだ状態で出土した。枕として使用されていたと考えられる。また、提瓶が１点蓋坏の隣から出土した。これらの須恵器は２次埋葬に伴うものと考えられる。

**（時期）** 遺物の特徴を記すと、須恵器蓋（第117図－１・２・４・５）の天井部には丁寧なヘラケズリを施すが、中心部などにケズリ残しが観察でき、粗雑なヘラケズリに移行している感がある。蓋の口縁部端の整形には抉り込みが認められる。

提瓶（同－３）も把手がボタン状になるなど、退化の様相を示す。なお、提瓶の頸部には絞り込んだような暗紋が観察できる。

以上のことから、これらの須恵器は大谷編年の４期に相当すると考えられ、３号横穴墓の埋葬行為の期間は４期内（古墳時代後期後葉）に行われたと考えられる。

**４号横穴墓（第115図）**

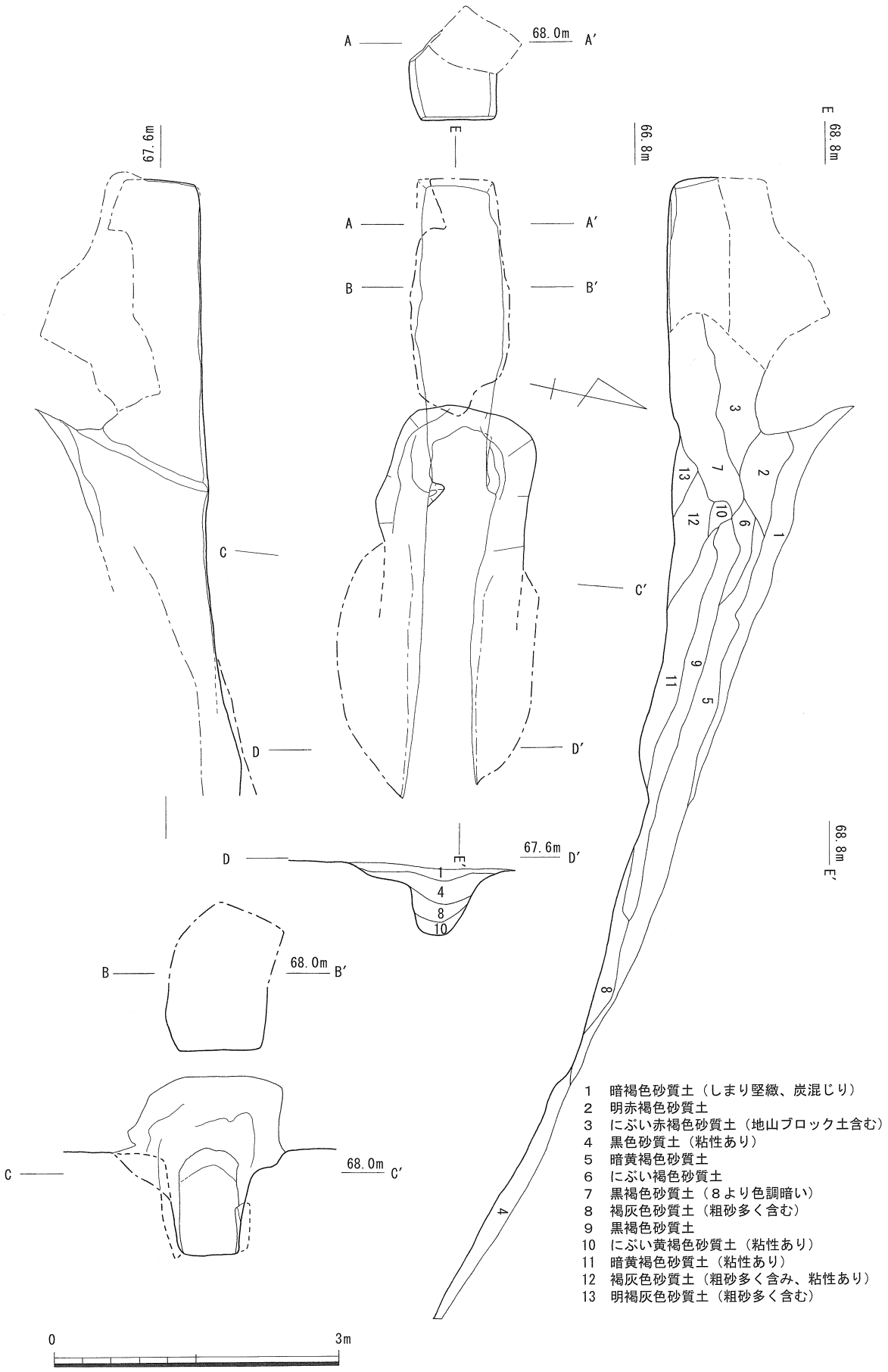
**（立地）** ４号横穴墓は丘陵北東斜面に立地し、３号墳の北隣に位置する。標高は66m付近である。

**（規模と形態）** 墓道と玄室の間に玄門部が存在する。玄門部は墓道より狭くなっている。

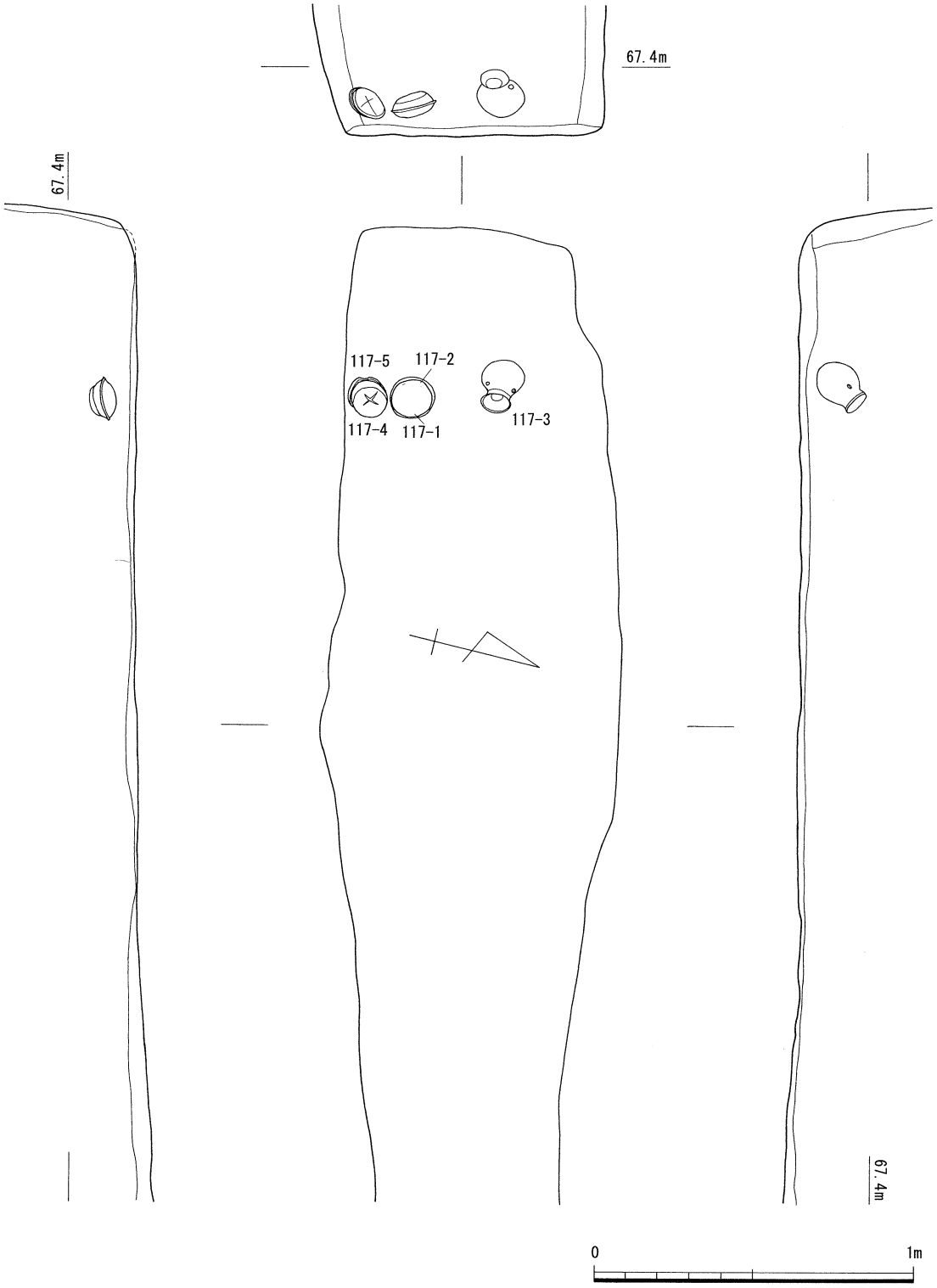
墓道の規模は長さ2.8m、幅0.7m、玄門部の規模は長さ0.5～0.8m、幅0.6mである。玄室の規模は玄門部側の幅1.2m、最大幅1.5m、奥壁の幅1.0m、奥行き2.3mである。天井部は崩落しているが、奥壁の高さは推定で1.5mである。玄室内部では左袖が袖部より0.4mほど広がっている。天井部の形態はテント形と推定される。

閉塞部は、玄室入口の床面に幅0.9m、長さ0.2m、深さ0.1mの溝が設けられている。閉塞板を据えるための機能を有していたものと考えられる。

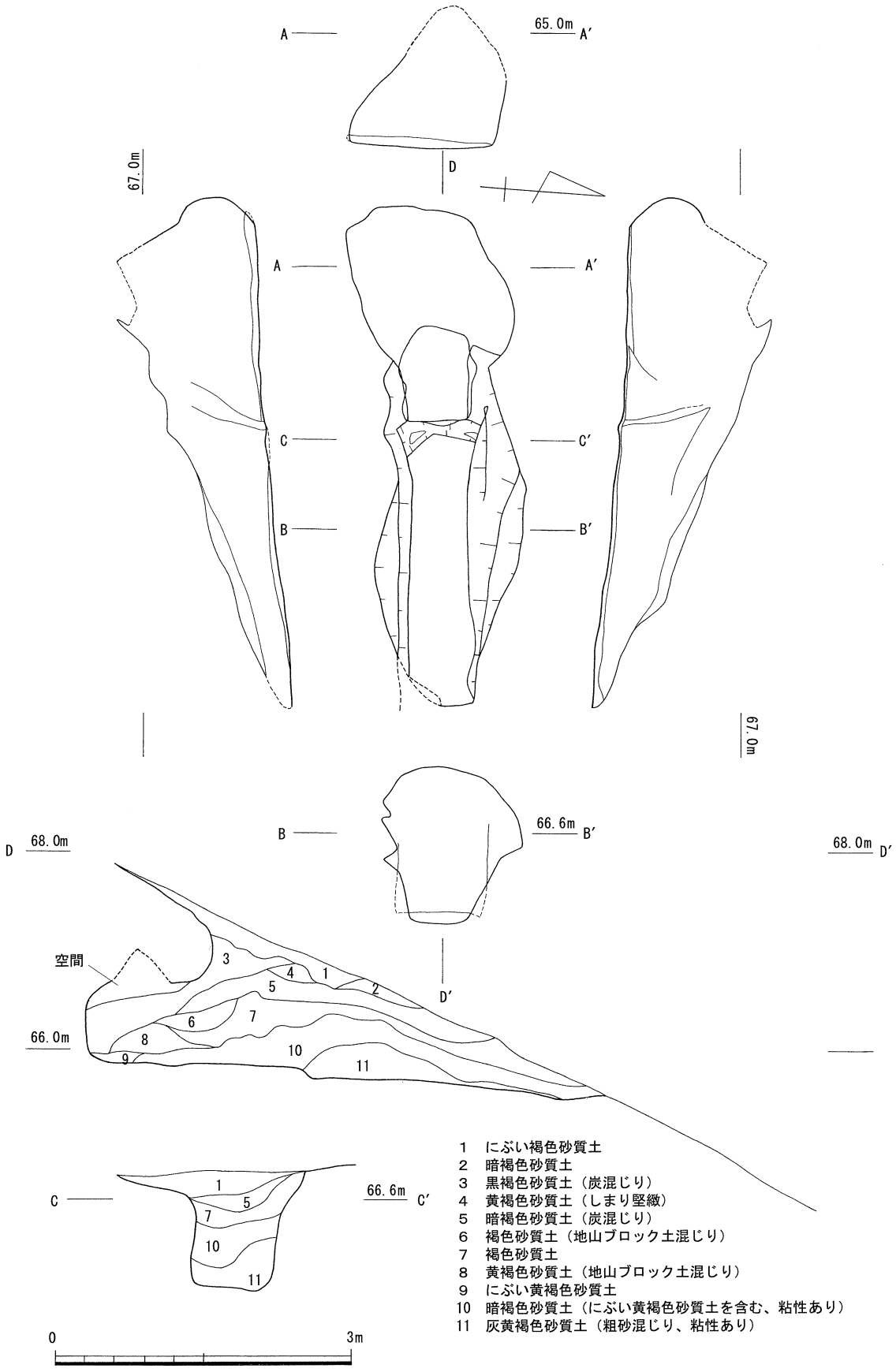
**（土層状況）** １層は斜面からの流土である。３層は炭混じりの黒褐色砂質土であることから、最終埋葬時の埋土と考えられる。２・４・５層も最終埋葬時の埋土と考えられるが、５層は炭混じりの腐食が認められる暗褐色土であることから、２次埋葬時の埋土を掻き出した土の上面になるものと考えられる。６・８層は地山ブロック土を含むことから、天井崩落土と考えられる。７層は最終埋葬時の整地土、あるいは埋土と考えられる。９・10層は２次埋葬時の埋土と考えられる。11層は地山が風化した粗砂が混じることから、初葬時に伴う埋土と考えられる。




第113図　３号横穴墓実測図　（S＝1/60）




第114図　3号横穴墓遺物出土状況図　（S＝1/20）

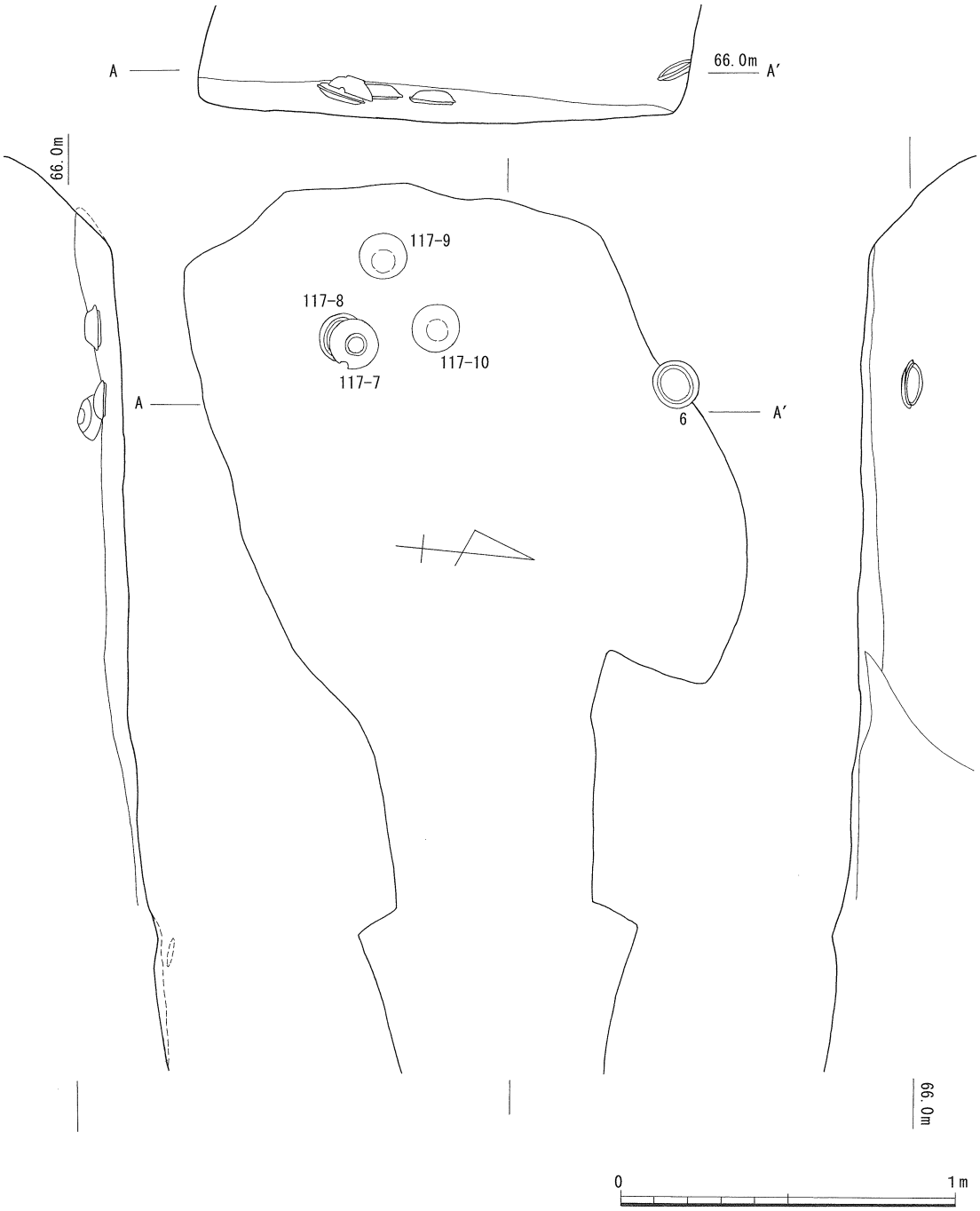



第115図　4号横穴墓実測図　（S＝1/60）

以上のことから、４号横穴墓では最低３回の埋葬が行われていたと考えられる。

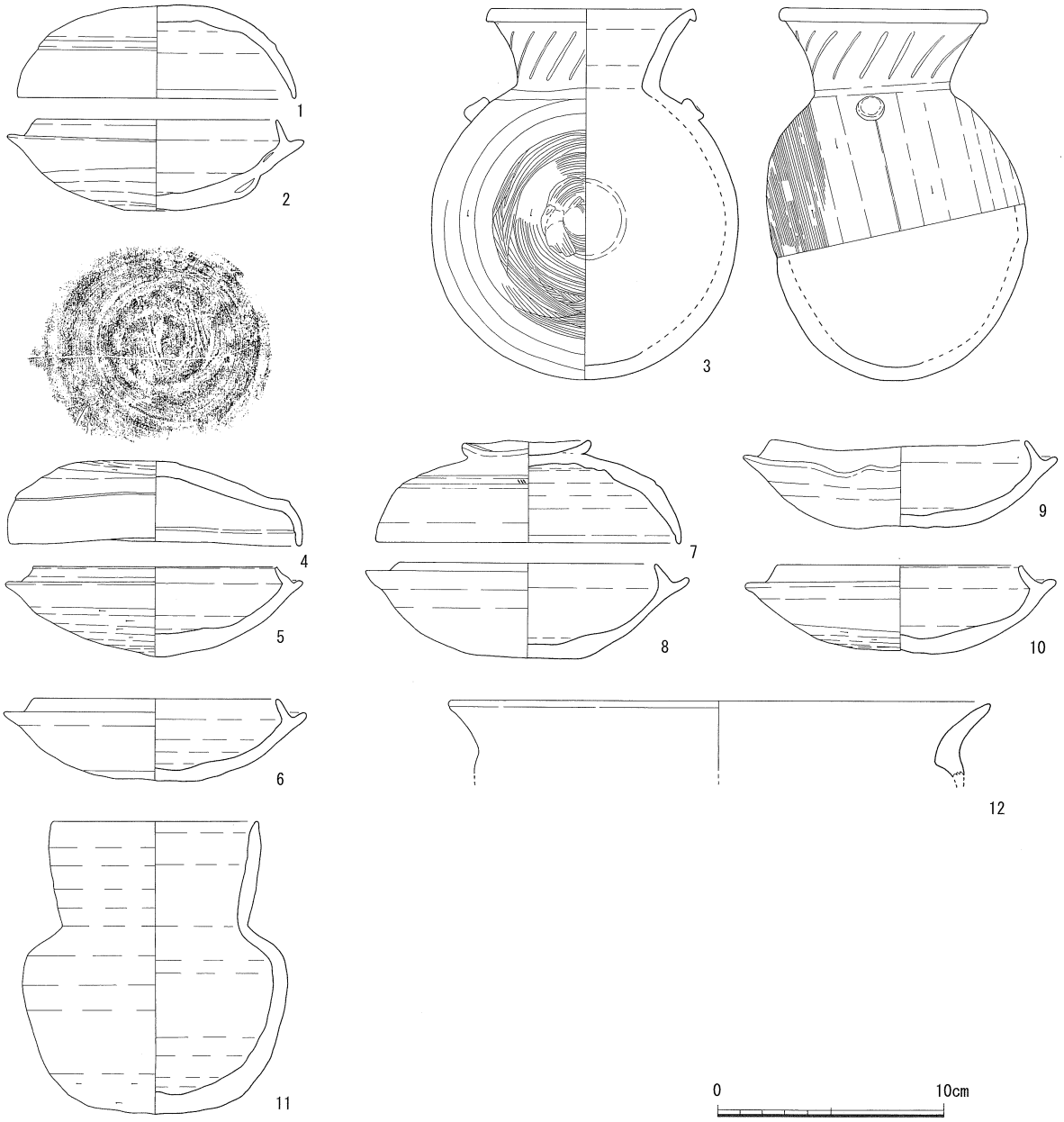
**（遺物出土状況）**（第116図）　玄室内からは須恵器の蓋１点、坏４点が出土した。また、墓道堆積土の10層からは直口壺１点、１層からは土師器甕破片が出土した。これらの須恵器は２次埋葬に伴うものと考えられる。

**（時期）**　遺物の特徴を記すと、須恵器坏（第117図－６・８～10）の天井部には外周のみに粗雑なヘラケズリが認められる。また、外周のみにヘラケズリを施した後、中心部をナデているものもある（同－９）。蓋（同－７）は天井部に平らなつまみを付加している特異なものである。また、内




第116図　４号横穴墓遺物出土状況図　（S＝1/20）

面には赤色顔料が付着している。口縁部端の整形には抉り込みが認められる。天井部の調整や口縁部端の整形から、これらの須恵器は大谷編年の４期に相当すると考えられる。４号横穴墓の埋葬行為の期間は、ほぼ大谷４期（古墳時代後期後葉）に収まるものと考えられる。




第 117 図　３・４号横穴墓出土遺物実測図　（S＝1/3）

## ５号横穴墓（第118図）

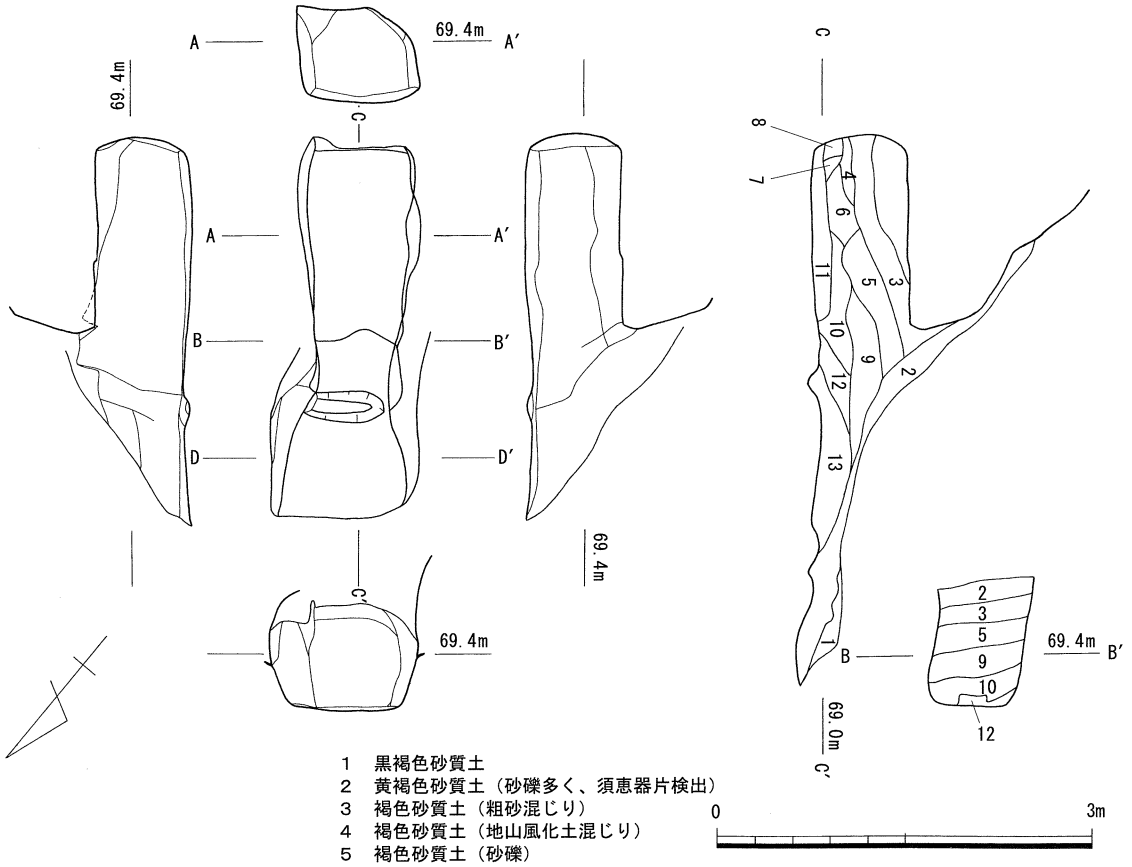
**（立地）** ５号横穴墓は丘陵北西斜面に位置する。標高は69m付近である。

**（規模と形態）** 前庭と玄室が一続きとなった形態である。前庭の規模は長さ１ｍ、幅１ｍ、閉塞部で幅が0.8mと減じる。平面プランが台形の小規模な前庭である。玄室の規模は前庭側の幅0.6m、奥壁の幅0.9m、奥行き1.9m、奥壁の高さ0.75mである。天井部の形態は平天井である。

閉塞部は玄室入口の床面に、幅0.6m、長さ0.2m、深さ0.1mの溝が設けられている。閉塞板を据える機能を有していたと考えられる。

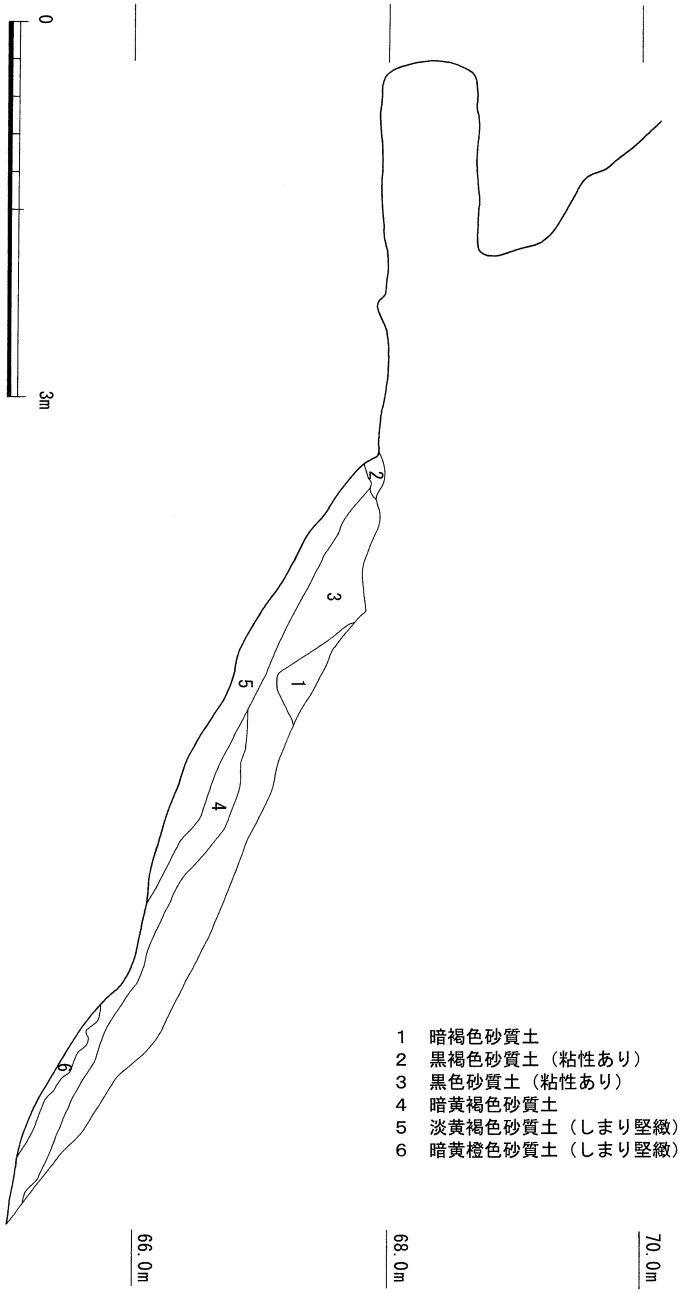
**（土層状況）** １層は表土の根が腐食した残りの層であると考えられる。２層は斜面からの流土である。３・５・９層は最終埋葬時の埋土、４・６～８・10・12層は最終埋葬時の整地土と考えられる。11・13層は地山風化土であることから、初葬時の埋土と考えられる。

前庭部の土層堆積は（第119図）、１層は表土からの根が腐食した層である。２層は２次埋葬時の埋土で、３層は２次埋葬時の整地土と考えられる。４～６層は横穴墓の築造時の排土と考えられる。以上のことから、５号横穴墓の埋葬行為は最低２回あったと考えられる。




1　黒褐色砂質土
2　黄褐色砂質土（砂礫多く、須恵器片検出）
3　褐色砂質土（粗砂混じり）
4　褐色砂質土（地山風化土混じり）
5　褐色砂質土（砂礫）
6　褐色砂質土（粘性あり）
7　褐色粘質土
8　褐色粘質土（７に比べて、きめ細い）
9　褐色砂質土
10　地山土
11　褐灰色砂質土（地山風化土含む）
12　褐灰色砂質土
13　灰色砂質土（地山風化土含む）

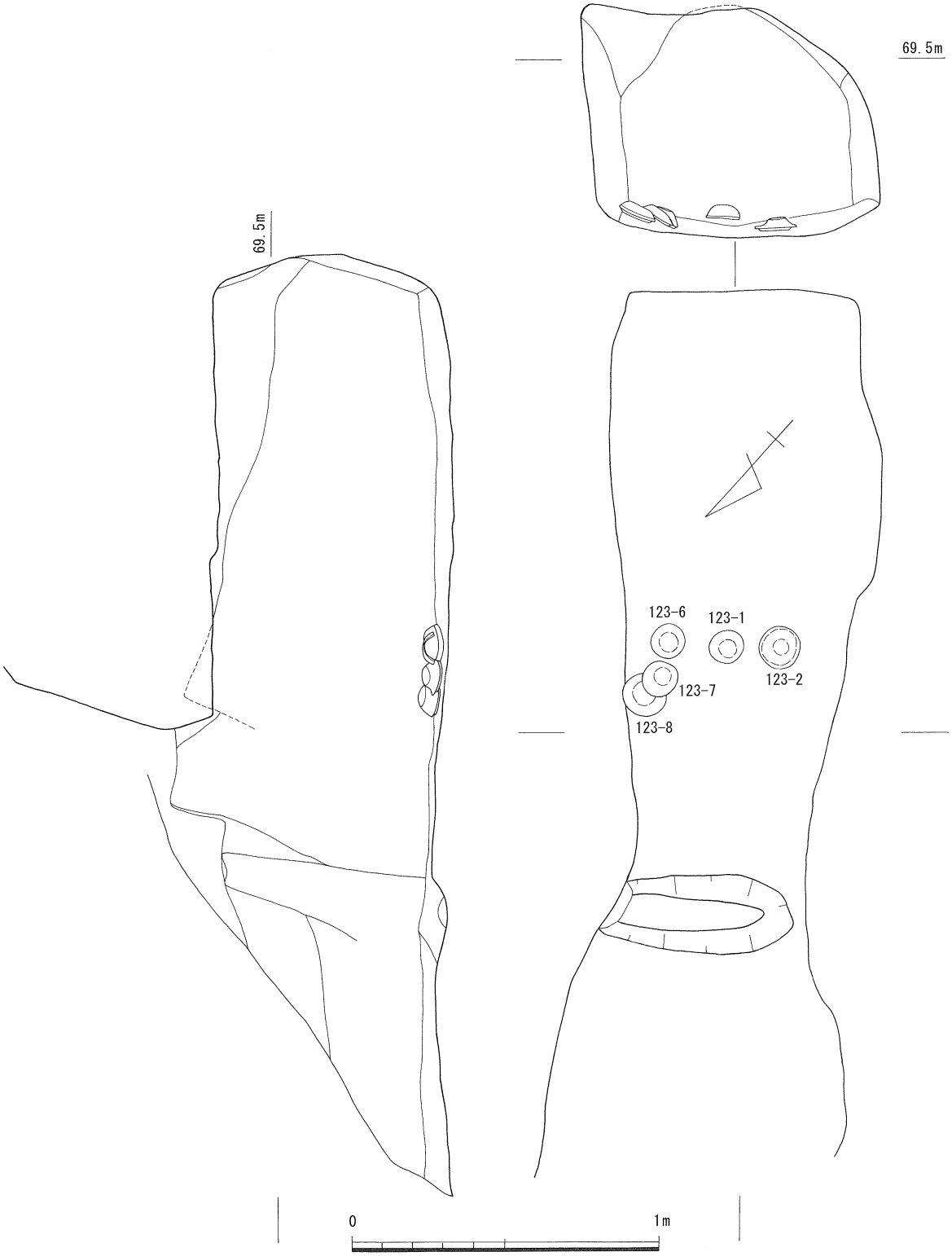
第118図　５号横穴墓実測図　（S＝1/60）




第119図　５号横穴墓前庭土層図　（S＝1/60）

**（遺物出土状況）**（第120図）　玄室内からは須恵器の蓋２点、坏３点が、全て口縁を下に向けた状態で出土した。初葬時に伴うものと考えられる。前庭堆積土の２層からは須恵器の蓋４点（第123図－３・５・９・11）、坏７点（同－４・10・12～16）が出土した。流土と考えられる層から出土していることから、追葬に伴い玄室外に掻き出されたものか、前庭における祭祀に使用されたものかは判断できない。なお、13層直上に須恵器の蓋坏１セット（同－３・４）が合わさって出土していることから、前庭における祭祀があった可能性が考えられる。

**（時期）**遺物の特徴を記すと、玄室内から出土した須恵器は蓋坏共に天井部のヘラケズリが省略されている。同じく、前庭堆積土から出土した須恵器蓋も同じ特徴が見られるが、口径が10cm以下の




第120図　5号横穴墓遺物出土状況図　（S＝1/20）

ものも含まれ（第123図－4・10・13）、小型化する様相が認められる。このことから、5号横穴墓の埋葬行為が行われた期間は、大谷編年の5期～6期（古墳時代終末期）と考えられる。

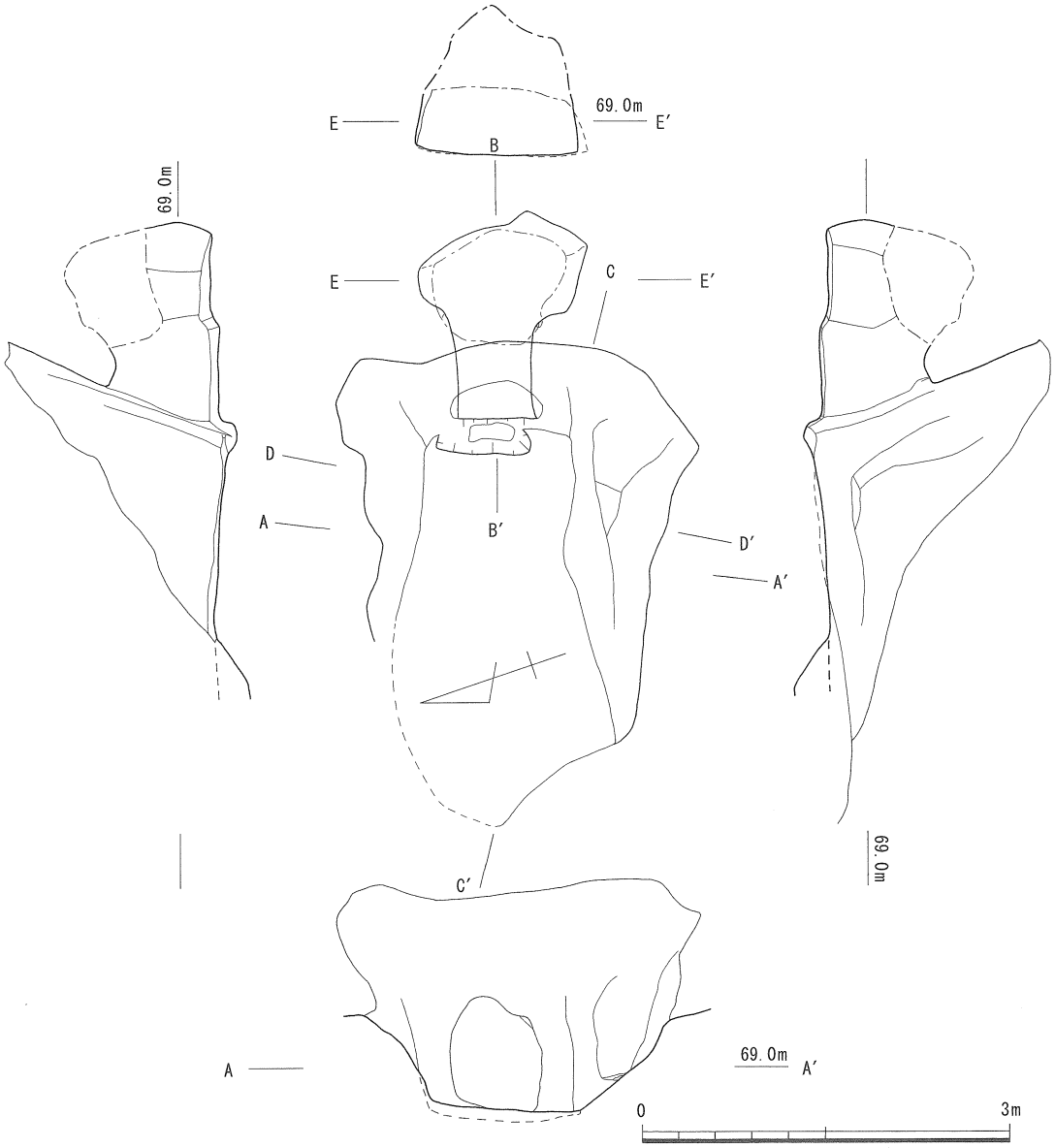
**6号横穴墓（第121図・第122図）**

**（立地）** 6号横穴墓は丘陵北西斜面に立地し、5号横穴墓の北隣に位置する。標高は69m付近である。

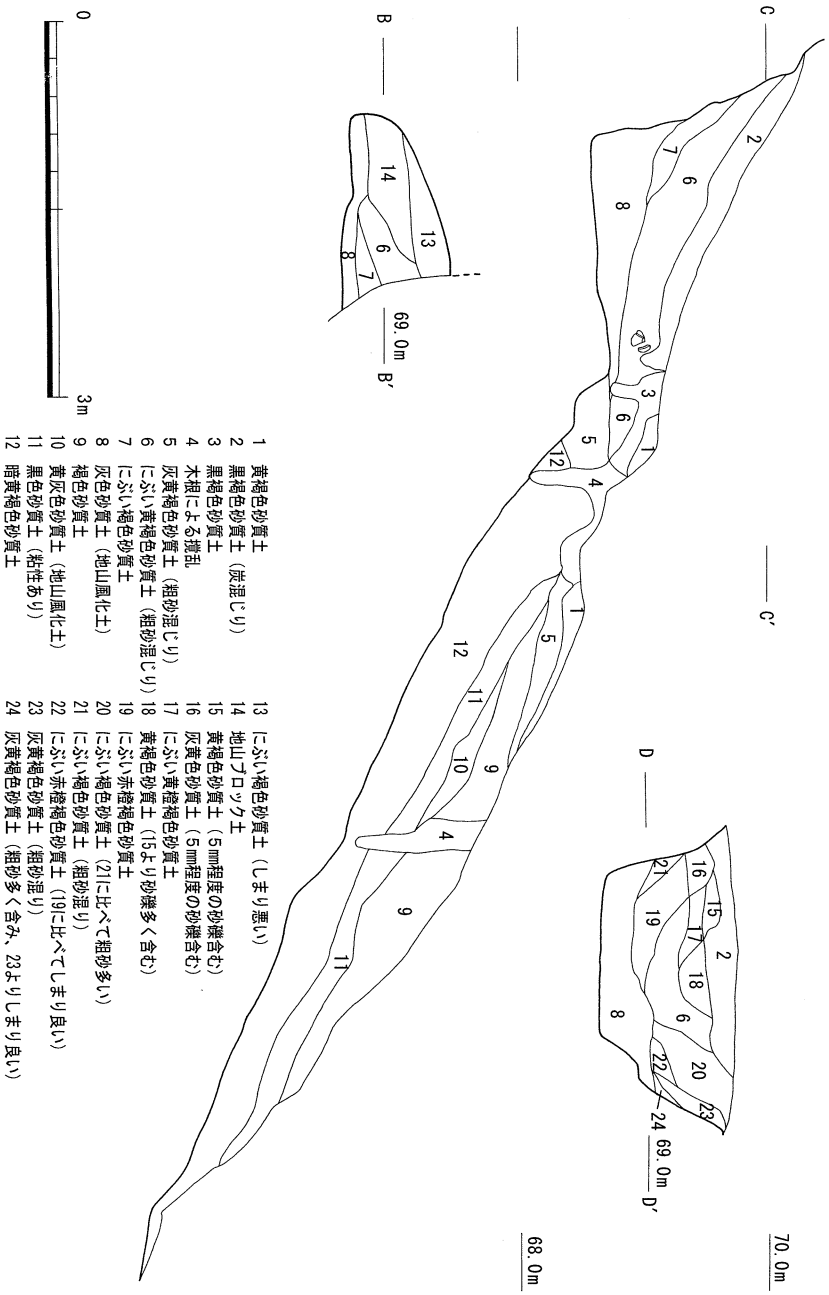
**（規模と形態）** 土井・砂遺跡内検出の横穴墓で唯一、前庭部と閉塞部と玄門部と玄室の４つから成る形態である。前庭部の規模は長さ2.5m、幅1.3m、玄門部の規模は長さ0.8m、幅0.7mである。玄室の規模は玄門部側の幅1.15m、奥壁の幅1.35m、奥行き1.7m、天井部は崩落しているが推定1.2mである。天井部の形態はテント形と推定される。奥壁の形態は不整形である。

閉塞部は玄門入口の床面に幅0.8m、長さ0.3m、深さ0.15mの溝が設けられている。閉塞板を据える機能を有していたと考えられる。

**（土層状況）** 縦断面を基本に見た場合、１・２層は斜面からの流土と考えられる。３・４層は表土からの木の根による撹乱である。５・９・10層は２次埋葬時に前庭部斜面を整地するために堆積された土層と考えられる。５層や10層は地山が風化した粗砂混じりの砂質土であることから、初葬時




第121図　６号横穴墓実測図　（S＝1/60）




第122図　6号横穴墓土層図　（S＝1/60）

の埋土を掻き出した可能性も考えられる。11層は腐食した粘性のある黒色土であることから、初葬時以降に堆積した旧表土とも考えられる。12層は横穴墓造営に伴う排土の可能性が考えられる。

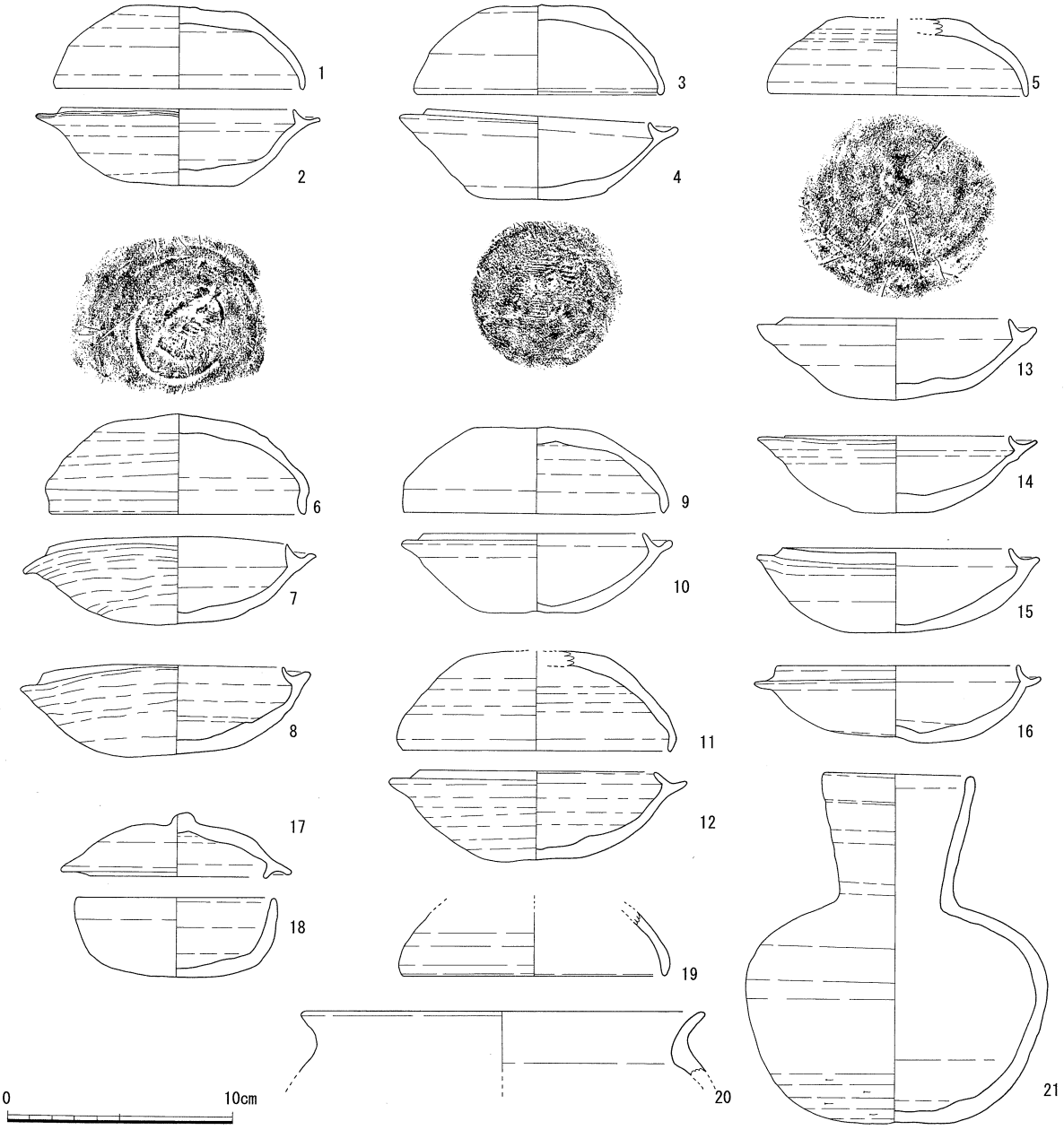
６・７層は最終埋葬時に、初葬時あるいは２次埋葬時の埋土を掻き出したものと考えられる。８層は地山風化土で初葬時の埋土と考えられる。13層は流土と考えられるが、14層は地山ブロック土であることから天井崩落土と考えられる。

横断面を基本に見た場合、８・20～24層は地山風化土をはじめ粗砂を含むことから初葬時の埋土と考えられる。15～18層は最終埋葬時の埋土と考えられ、６・19層は最終埋葬時、あるいは２次埋葬時に埋土を掻き出したものと考えられる。

以上のことから、６号横穴墓では最低３回の埋葬が行われていたと考えられる。

**（遺物出土状況）** 玄室からは須恵器等の遺物は出土しなかった。前庭部からは堆積土の６層から直口壺１点、須恵器蓋２点、坏１点が出土した。これらは、初葬時あるいは２次埋葬時以降に伴うものと考えられる。

**（時期）** 遺物の特徴を記すと、つまみの付く須恵器蓋（第123図－17）、立ち上がりが無くなる須恵器の坏（同－18）が出土している。そして、口径10cm以下の天井部にヘラケズリの無い須恵器蓋（同－19）が出土していることから、６号横穴墓の埋葬行為が行われた期間は大谷編年の６期（古墳時代終末期）に収まるものと考えられる。なお、17・18は出土層位を同じにすることと形態の点で、セット関係になる可能性が高いと考えられる。




第 123 図　5・6号横穴墓出土遺物実測図　（S＝1/3）

**７号横穴墓（第124図）**

**（立地）** ７号横穴墓は丘陵北西斜面に立地し、６号横穴墓の北隣に位置する。標高は70m付近である。

**（規模と形態）** 前庭部・閉塞部・玄室の３つからなる。前庭部の規模は長さ1.8m、幅0.9mである。玄室の規模は閉塞部側の幅0.65m、奥壁の幅1.1m、奥行き1.75m、奥壁の高さ１mである。天井部の形態は緩やかにカーブをするが平らな面もある。閉塞部は玄室入口の床面に２本の溝が設けられている。前庭部寄りの溝の規模は幅0.75m、長さ0.2m、深さ0.1m。玄室寄りの溝の規模は幅1.0m、長さ0.3m、深さ0.2mである。閉塞板を据えるためのものと思われるが、２つの溝が時期を違えて掘削されたかは、後述する埋土堆積からも判断できなかった。

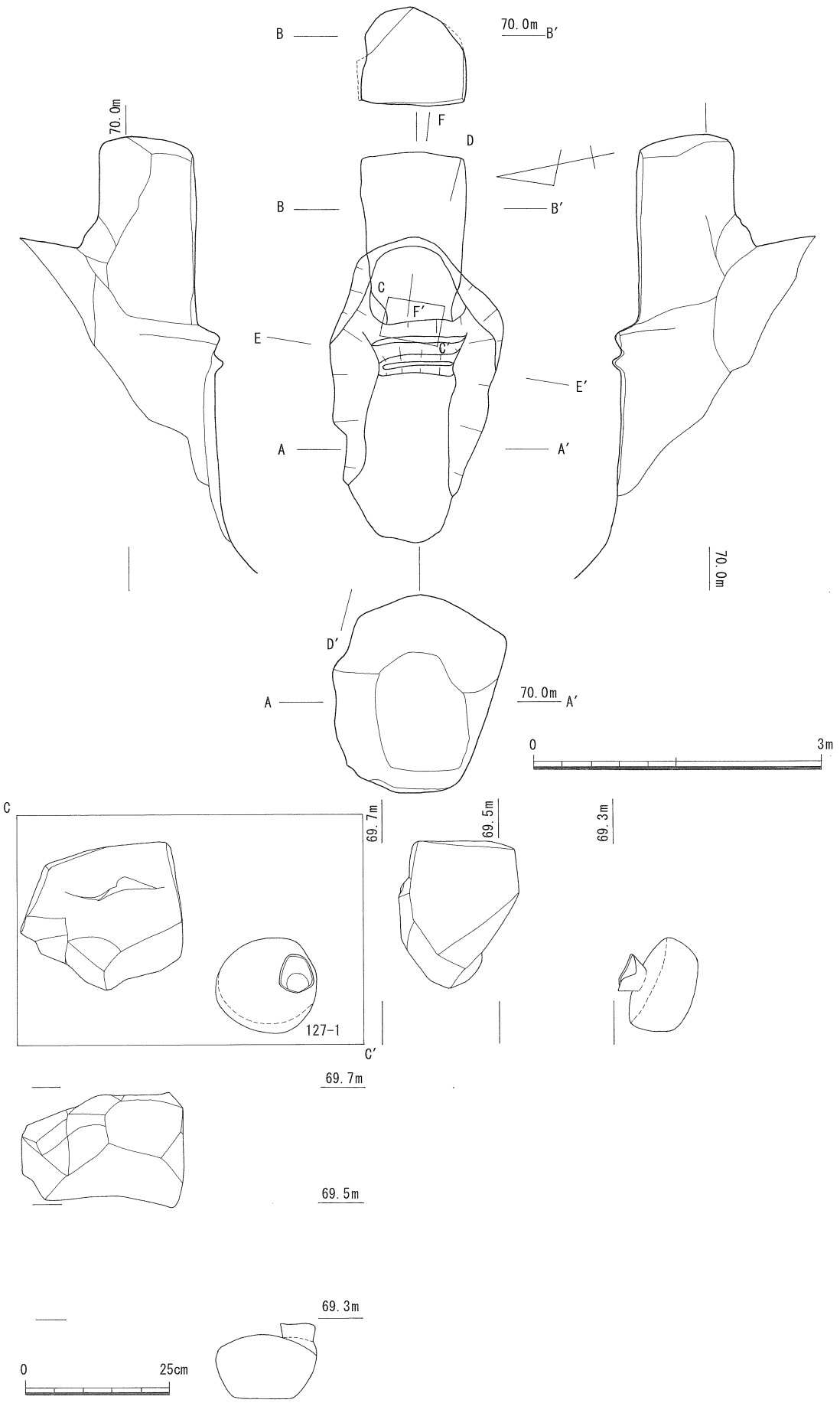
**（土層状況）** （第125図） １層は斜面からの流土で、一部玄室内にも流入している。２層は表土からの木根が腐食した層である。３～８層は最終埋葬時の埋土と考えられる。９層は地山風化土の砂質土であることから初葬時の埋土と考えられる。10層は最終埋葬時の埋土と考えられる。11・12層は斜面からの流土と考えられる。13層は横穴墓掘削時の排土と考えられる。６・７層の境付近からは、20cm程の大きな石が検出された。これは、閉塞板の押さえとして使用された可能性も考えられるが、出土状況からは不明と言わざるを得ない。以上のことから、７号横穴墓では最低２回の埋葬が行われていたと考えられる。

**（遺物出土状況）** （第126図） 玄室内からは、床面に炭化物が付着した土師器甕が倒れずに座った状態で出土した（第127図－４）。この土師器甕の中からは須恵器の蓋（同－３）が検出された。甕の内容物は不明であるが、この須恵器蓋は土師器甕の蓋として使用された可能性が考えられる。最終埋葬時のものと考えられる。

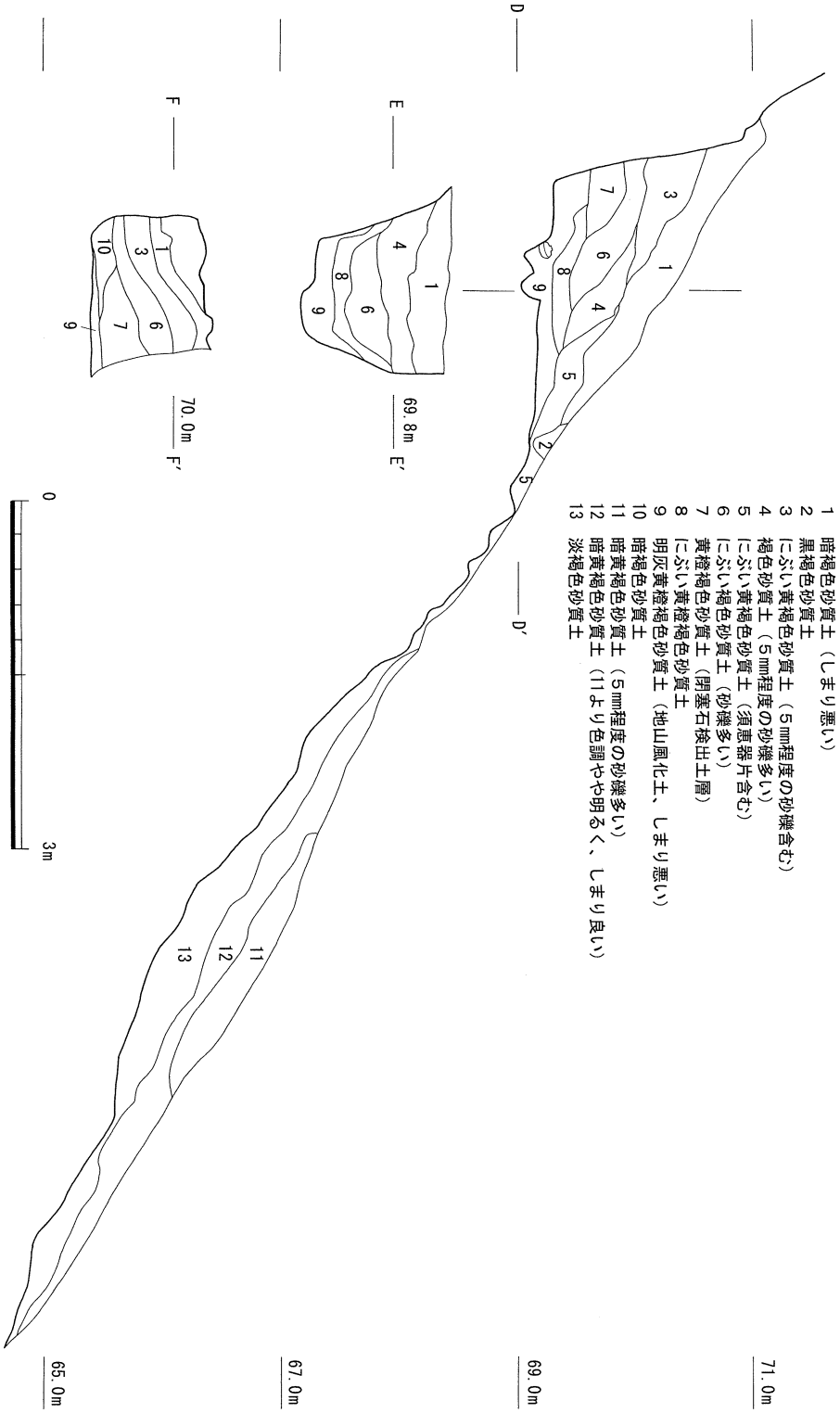
前庭部堆積土の９層からは平瓶（同－１）が出土した。初葬時のものと考えられる。５層からは須恵器の坏２点（同－５・６）が出土した。これらは、初葬時のものが掻き出されたものと考えられる。

また、前庭部前端付近からは須恵器の蓋１点（同－２）が出土した。初葬時以降に使用されたものと考えられる。

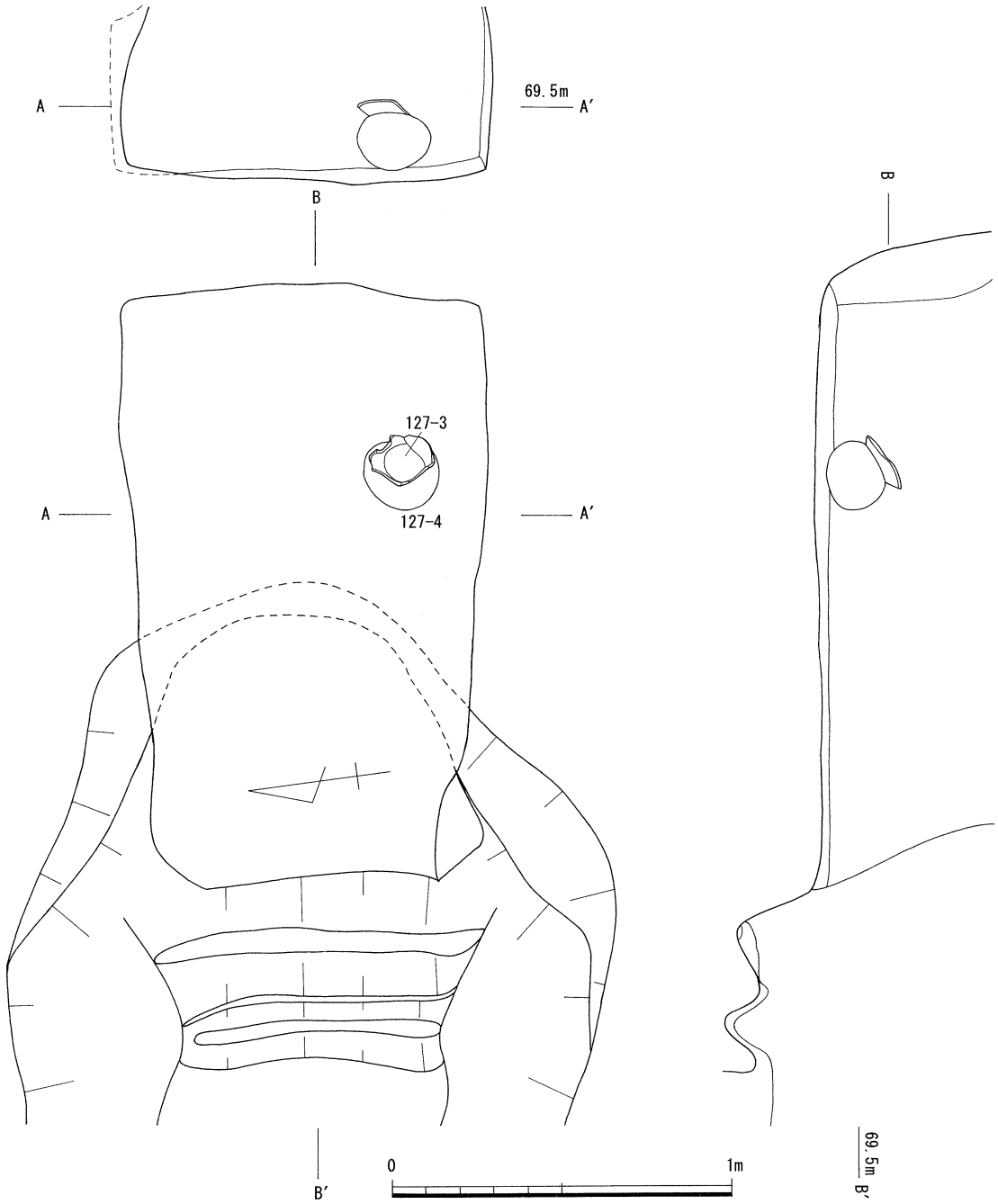
**（時期）** 遺物の特徴を記すと、前庭埋土から出土した須恵器の坏（第127図－５・６）は天井部にヘラケズリを行わないもので、形態的にも口縁の立ち上がりが低くなっており、口径も10cm以下である。このことから、大谷編年の６期に相当するものと考えられる。同じく、玄室内出土の須恵器蓋（同－３）や前庭前端部出土の須恵器蓋（同－２）は、つまみを持ちかえりも浅いことから大谷編年の６期に相当するものと考えられる。以上のことから、７号横穴墓の埋葬行為が行われた期間は大谷編年の６期（古墳時代終末期）に収まるものと考えられる。




第124図　7号横穴墓実測図　（S＝1/60・1/10）




第125図　7号横穴墓土層図　（S＝1/60）




第126図　7号横穴墓遺物出土状況図　（S＝1/20）

## 3．その他の遺構の調査

**ＳＸ０１（第128図）**　丘陵の北東斜面と北斜面の中間に位置する。標高は70.6m付近である。急な斜面に掘られた浅い土壙であるが、上部や斜面下側は流出している。埋土の残りから見て現存で、直径42cm程度の不整円形の土壙である。この土壙からは、伏せられた状態の赤彩土師器（第129図－30）の上に土師器甕（同－29）が被せられている状態で検出された。このような遺構は管見のところ類例を見ず、遺構の意味するところは不明である。

赤彩土師器の特徴は底部がやや丸みを帯び、底をはじめ全体にナデ調整を施す。暗文やミガキ調整は見られない。また、土師器甕は口縁部しか復元できなかったため、遺構の時期の決定材料にはならなかった。

以上の特徴から考えると、７世紀後葉から８世紀前葉に属する可能性が高いと思われる。このことから、横穴墓に関係する遺構ではないと考える。

**ＳＸ０２（第73図－遺構配置図－）**　ＳＸ０２は１号横穴墓の墓道前端の北隣0.8mに位置している。

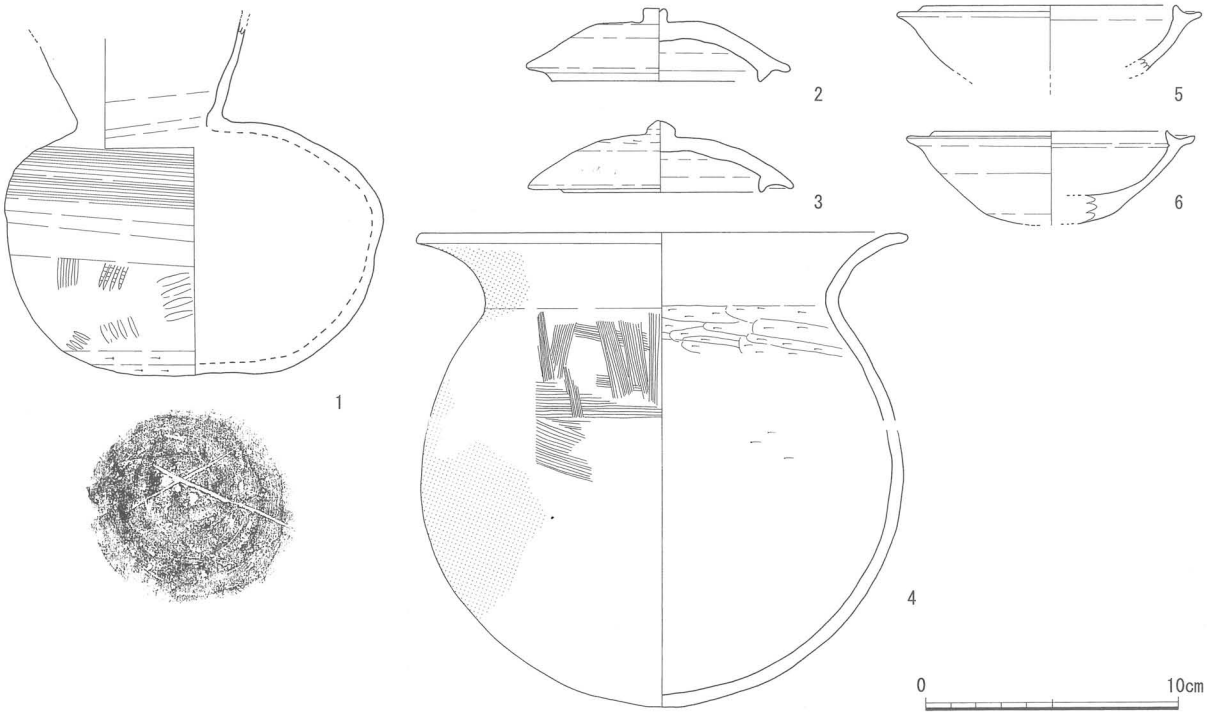
この遺構は土壙のような明確な遺構ではなく、炭混じりの黒色土の広がりで規模も１ｍ×１ｍ以内の不明瞭なもので深さも計測できなかった。この黒色土の広がりからは須恵器の蓋１点・坏２点（第129図－22～24）が出土している。これらの須恵器は天井部に丁寧なヘラケズリを施している。大谷編年の３～４期に相当するものと考えられる。このことから、この遺構は１号横穴墓に伴うものである可能性が考えられる。遺構の性格は不明であるが、炭が混じっていることから火を使用した墓前祭祀の可能性が考えられる。ただし、この遺構から出土した須恵器に火を受けた痕跡は認められなかった。

**小炭窯（第73図－遺構配置図－）**　３号墳の西裾に位置する。墳丘と溝の一部を地山まで掘り込んだ直径約１ｍの土壙である。中には炭が大量に含まれており、表土直下から掘られていることから時期は限定できないが、近世以降の小炭窯と考えられる。

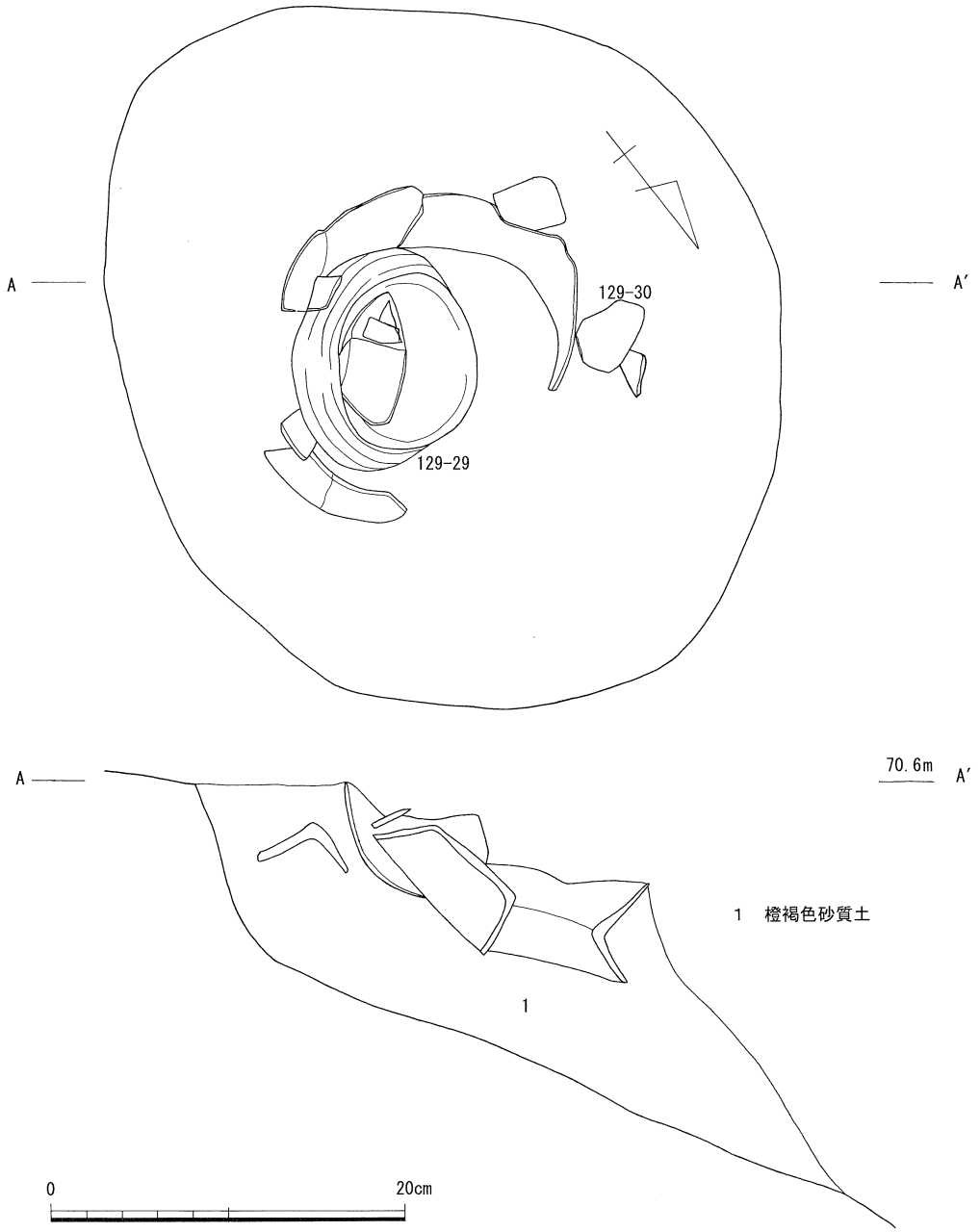
## ４．遺構外遺物（第129図）

包含層からは須恵器・土師器が検出されている。遺物観察表に出土位置等を記しているが、須恵器の多くは横穴墓付近の包含層から出土している。土師器は古墳・横穴墓に伴うものの他に時期の新しくなるものが含まれている。

まず、古墳・横穴墓に伴う可能性が考えられる遺物について記す。




第127図　７号横穴墓出土遺物実測図　（Ｓ＝1/3）




第128図　ＳＸ０１実測図　（Ｓ＝1/40）

15・16は３号墳北斜面と東裾周溝付近の包含層から出土した土師器の直口壺である。３号墳に伴う可能性が考えられる。１・２は６号横穴墓前庭付近の包含層から出土した須恵器の蓋坏である。口径が10cm前後に小型化したもので天井部のヘラケズリを省略するものである。大谷編年の６期に相当するものと考えられる。６号横穴墓に伴う須恵器の年代と齟齬がないことから６号横穴墓に伴う可能性が考えられる。

３・４・５は５～７号横穴墓付近の包含層から出土した須恵器の蓋坏である。口径が10cm前後に小型化したもので、大谷編年の６期に相当するものと考えられる。５～７号横穴墓に伴う須恵器の年代と齟齬がないので５～７号横穴墓に伴う遺物と考えられる。

10は４・５号墳間の周溝内埋土から出土した須恵器蓋である。口径が10.2cmと小さく、形態的に

も口縁が肥厚して内湾し天井部のヘラケズリも省略されていることから、大谷編年の６期に相当するものと考えられる。この須恵器が出土した斜面下には５～７号横穴墓が存在している。この須恵器はこれらの横穴墓と同時代のものであると考えられる。

14は１号横穴墓南斜面の包含層より出土した須恵器の坏で、大谷編年の３期に相当する形態である。１号横穴墓出土須恵器と同時期であることから１号横穴墓に伴う可能性が考えられる。

20・21は３号墳北斜面の包含層より出土した須恵器の蓋坏である。大谷編年の３期に相当する形態で、天井部には丁寧なヘラケズリが認められる。須恵器を検出した地点は僅かながら緩やかな傾斜のところであった。この須恵器は１号横穴墓出土須恵器と同時期である。１号横穴墓に伴う祭祀に使用された可能性も考えられるが断定はできない。

次に古墳・横穴墓に直接伴わないと考えられる遺物と時期不明遺物について記す。

６は土師器甕の口縁である。５～７号横穴墓付近の包含層から出土しているが、胴部の形態は不明であるため時期の決定に欠く。

７は７号横穴墓付近の包含層から出土した土師器の坏の底部である。底部に糸切り痕跡が認められる。糸切り痕跡を有することから時期的に見て、７号横穴墓とは関係のない遺物であろう。

８は６号墳の北斜面の包含層から出土した高台付きの須恵器坏である。静止糸切り痕が底面に残る高広ⅢＢ期（７世紀末～８世紀前葉）の時期に相当するものと考えられる。

11は６号墳の西斜面の包含層より出土した高台付の須恵器坏である。高広ⅢＡ期（７世紀中葉～末葉）のものと考えられる。

12は６号墳北斜面の包含層より出土した赤彩土師器である。外面にミガキ、内外面に赤彩が施され、底部が緩やかに内湾している。調整はヘラオコシ後ナデを施している。須恵器の坏の形態から類推して８世紀代と考えられる。

13は６号墳北斜面の包含層から出土した土師器甕で、口縁部端が丸くなっている。胴部は残存していないので時期は不明である。

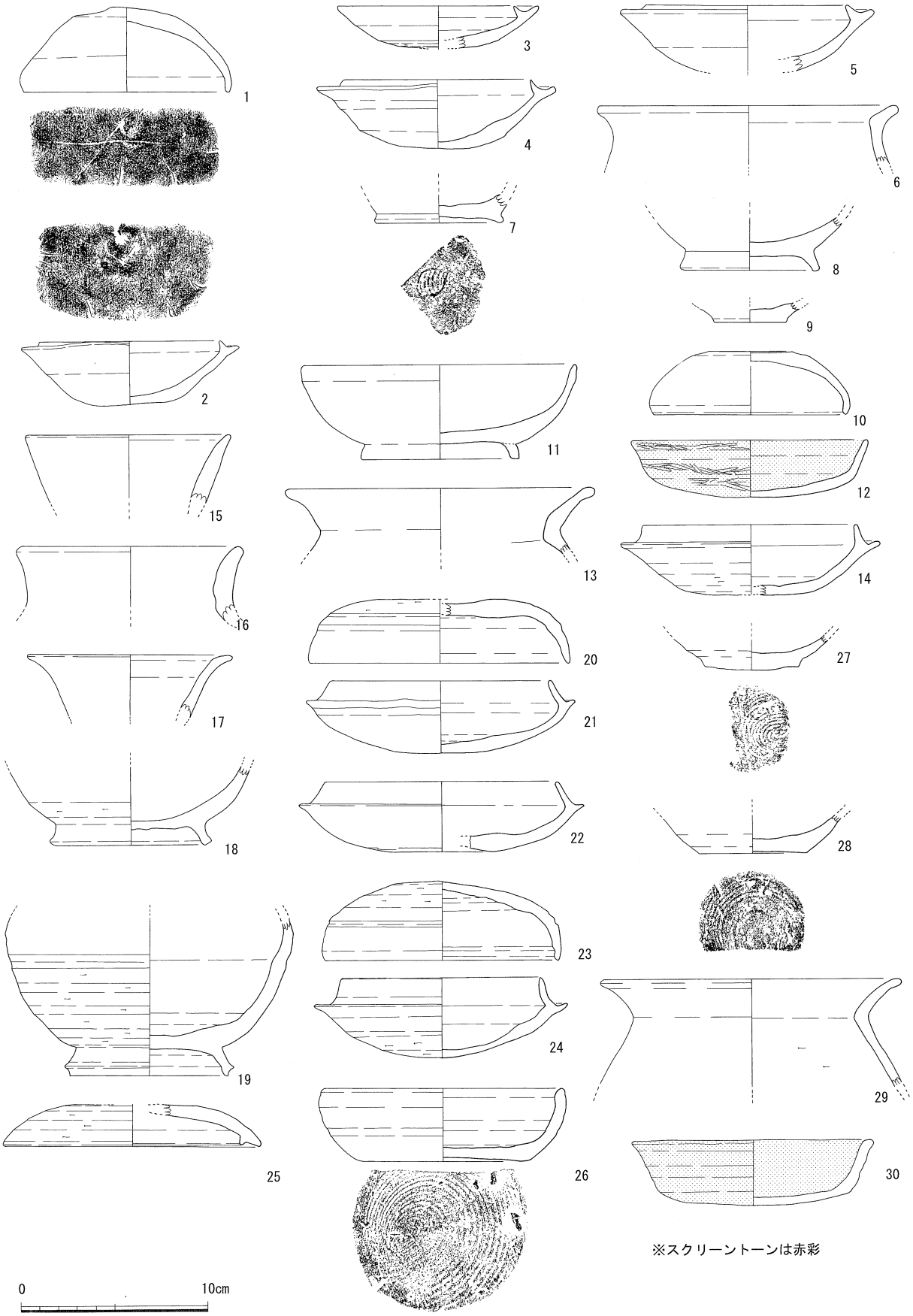
17は３号墳北斜面と周溝内付近の包含層から出土した須恵器長頸壺の口縁部である。時期は不明である。

18は須恵器の長頸壺である。１号横穴墓の南斜面の包含層より出土した。高台が付くことから時期は１号横穴墓より下るものである。高広ⅢＡ期に相当するものと考えられる。

19は須恵器の長頸壺である。４号横穴墓付近の包含層より出土した。高台が付くことから時期は４号横穴墓より下るものである。高広ⅢＡ期に相当するものと考えられる。

25・26は１号横穴墓南斜面の包含層より出土した須恵器の蓋坏である。蓋にはかえりが付いており大谷編年６期以降に相当する形態と考えられる。ただし、つまみの有無は不明である。坏は回転糸切り痕が底部に見られる。時期は高広ⅣＡ期（８世紀中葉～後半）と考えられ、１号横穴墓に伴わないと考えられる。

27・28はそれぞれ４号横穴墓東斜面、１号横穴墓南斜面の包含層から出土した。27は土師器皿底部、28は土師器の坏底部である。共に回転糸切りが認められ、８世紀代と考えられる。




第 129 図　その他の遺構及び遺構外出土遺物実測図　（S＝1/3）

## ５．表採遺物（第130図・第131図・第29表・第30表）

表土中からは弥生時代～中近世までの遺物が出土している。

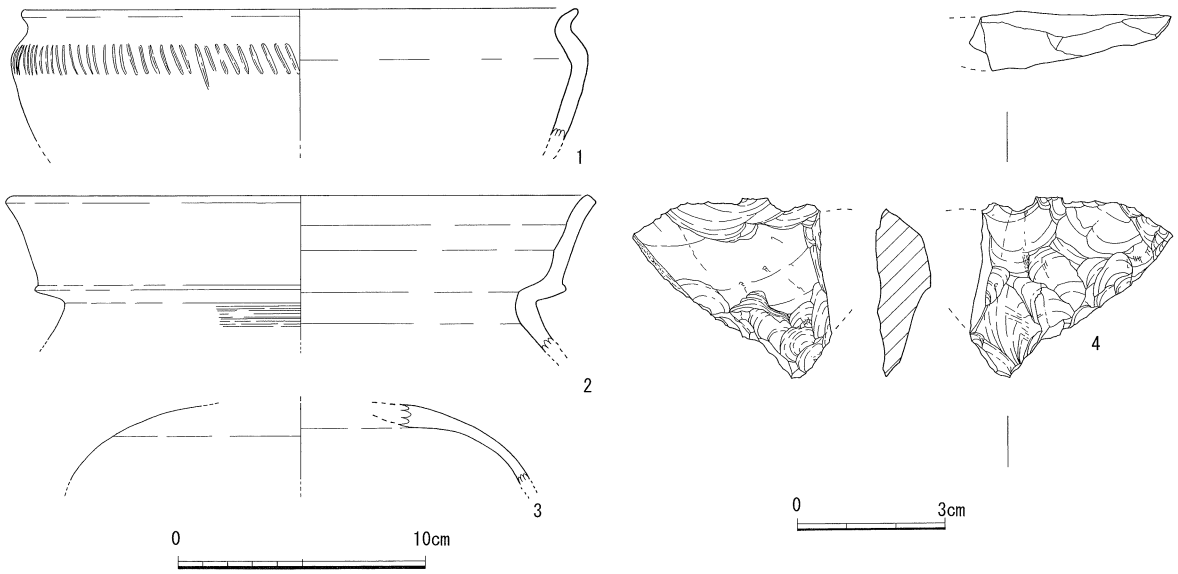
（第130図－１）は弥生土器の鉢である。口縁部の形態はＳ字状である。ハケ状工具による刺突文が肩部に巡る。形態の全容は不明であるが、刺突文が1.2cm前後と長いことから、松本編年(註2)のⅣ様式（弥生時代中期後葉）に相当すると考えられる。

（同－２）は土師器甕の口縁部である。口縁部はやや外反し端部は外に向けて平端である。草田６期に相当する古墳時代前期初頭のものと考えられる。遺跡内のいずれかの古墳に伴うものと考えられる。

（同－４）は黒曜石製のスクレーパーの破損品と考えられる。図の上が刃部である。残存で刃部の長さ4.2cm、幅3.5cm、厚み1.1cmで、重さは11.97ｇである。図の右は自然剥離面になっている。特に丁寧な加工は行っておらず使用痕も確認できなかった。透明度の少ない黒色であることから隠岐島産の黒曜石と考えられる。

（第131図－１・２）は４号墳墳頂の表土中より出土した五輪塔の火輪である。同じく（同－３）の寛永通宝（新寛永）も４号墳墳頂の表土中より出土している。出土地点付近には拳大の角礫の集積が認められ、墓などの祭祀遺構があった可能性がある。

１・２共に凝灰質砂岩製で来待石と考えられる。また、１・２の柄部に鑿等の工具痕が認められる。１の底部中央にも、やや風化しているが鑿等の工具痕が残る。２の底部は研磨されており、工具痕は認められなかった。１・２の軒部四面は欠損している部分もあるが顕著な研磨が施されている。各部の計測値から、１・２共に一辺七寸×高さ三寸の方形を呈した石材を加工して製作されたものと考えられ、製品の企画性と加工への省力化が認められる。時期は製品の形態から近世以降、17世紀前半と思われる(註3)。



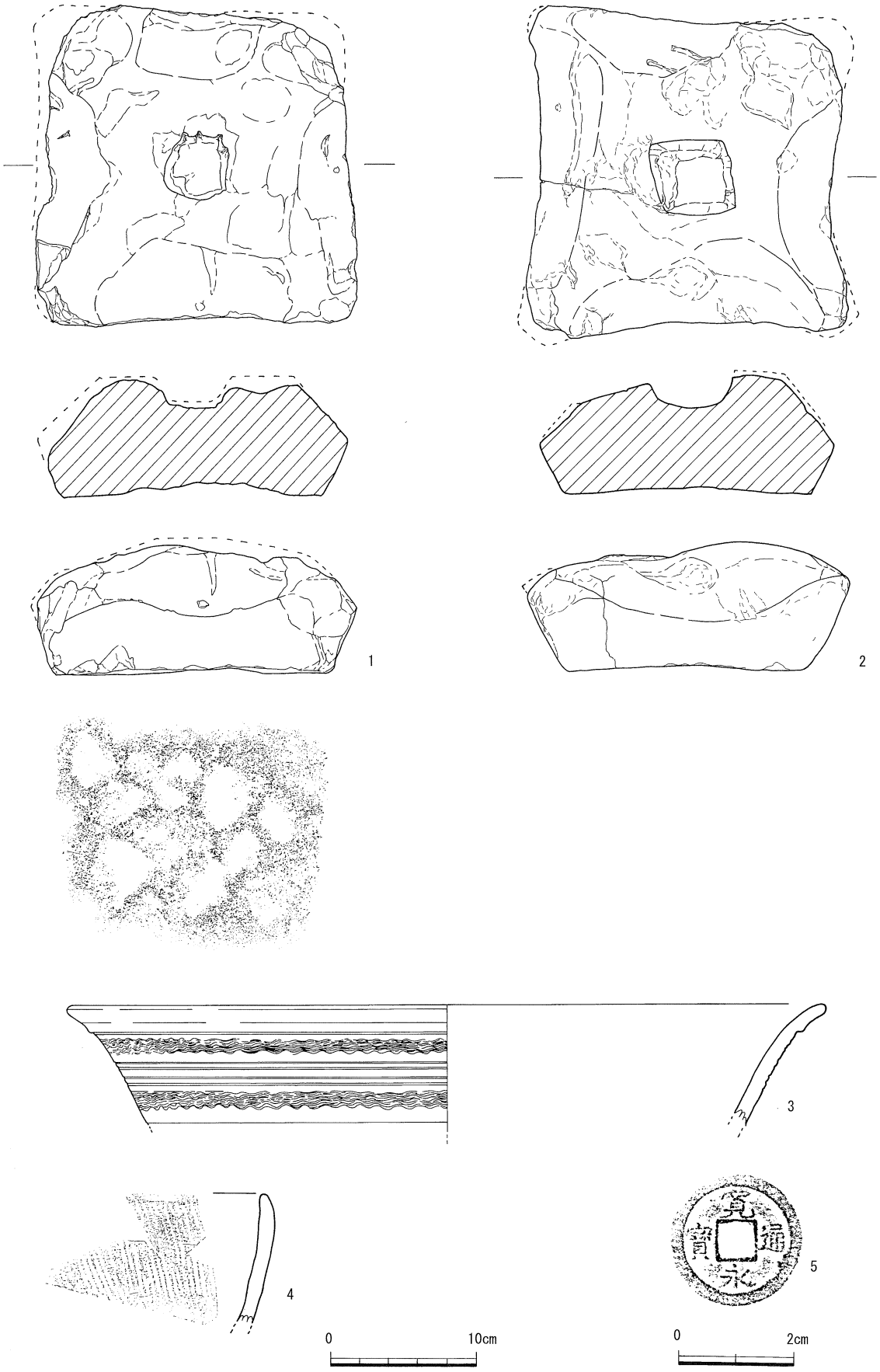

第130図　表採遺物実測図（１）（Ｓ＝1/3・2/3）

〔註〕

1．須恵器の編年は、（大谷晃二1994年「出雲地域の須恵器の編年と地域性」『島根考古学会誌』第11集の大谷編年と足立克己・丹羽野裕編1984年『高広遺跡発掘調査報告書－和田団地造成工事に伴う発掘調査－』島根県教育委員会の高広編年）に依った。

2．松本岩雄1992年「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』耳木社

3．島根県教育庁埋蔵文化財調査センター　間野大丞氏のご教示による。




第 131 図　表採遺物実測図（2）（S＝1/4、5は原寸）

## 第４節　小　結

土井・砂遺跡では合計６基の古墳を検出した。古墳群はいずれも赤川を臨む立地である。立地から見れば、調査区外の尾根続き（５号墳の南西）に古墳が存在する可能性が考えられる。土井・砂古墳群は後述するとおり、古墳時代前期初頭～中葉に造営されていたものと考えられる。

同じく、土井・砂遺跡からは横穴墓７穴を検出した。古墳時代後期後半～終末期に造営されていたものと考えられる。以下に古墳群と横穴墓の様相についてまとめる。

### １．土井・砂古墳群の様相

#### （１）古墳群の時期

土器の様相に限って土井・砂古墳群内における古墳の先後関係を整理すると、１号墳・２号墳が相次いで丘陵先端に築造される。同じく、先後関係は分からないが、丘陵の最高所に、４号墳・５号墳、同じく別の尾根筋に６号墳が築造される。最後に１・２号墳と同一尾根筋に３号墳が築造される。１号墳・２号墳に伴う土器は３号墳より古い様相を示すが、４～６号墳の土器とは同じ様相を示す。ただし、５号墳北西裾土器棺の壺は、３号墳と同じ小谷３式に下る可能性がある。先後関係は、（１・２・４～６号墳）→３号墳という図式になる。

土井・砂古墳群は土器の様相から考えて、古墳時代前期初頭～中葉にその築造が終了しているものと考えられる。

#### （２）主体部

１～４・６号墳の主体部は二段墓壙である。このうち、１・３号墳の主体部は墓壙一段目が明確なテラス状になっている。また、１号墳第２主体部と３号墳主体部からは、緩いU字状の棺底を有する木棺（以下、刳り抜き式木棺）が検出された。その他の古墳主体部からは箱形木棺が検出された。１号墳第１主体部と第２主体部は二段墓壙の形態が類似しているが、棺構造が異なっている。二段墓壙の主体部に関しては、１号墳の第２主体部の規模が当古墳群内で最大規模である。ただし、一段墓壙の５号墳第１主体部は、墓壙に降りるためのものと考えられるテラス部分が付加されており、深さ・平面プラン共に、当古墳群の中で最大の規模である。また、箱形木棺も棺底で2.7mあり、これも当古墳群最大の規模である。

#### （３）墳丘規模

主体部を並列している５号墳が長方墳である以外は方墳で、各墳丘規模に大差はない。また、土器棺等の従属的な埋葬施設が営まれているのが１・３・５号墳である。前二者の古墳主体部は刳り抜き式木棺を埋葬施設としている。

#### （４）頭位方向

１～５号墳主体部の頭位はほとんど北方向を向いているが、各古墳を立地から見ると、古墳主体部の主軸はすべて古墳の立地する尾根筋に直交していることが分かる。６号墳主体部の頭位は東方向であるが、これも主体部の主軸が尾根筋に直交した結果と考えられる。以上の観点から見ると、土井・砂古墳群では北枕の志向があったとしても、主体部の主軸を尾根に直交させるという統一性

が認められる。

### （５）赤色顔料

棺内から赤色顔料が認められたものとして、１号墳第２主体部、５号墳第１・２主体部が挙げられる。５号墳第１・２主体部の赤色顔料の成分分析は行っていないため不明であるが、１号墳第２主体部出土の鏡片付着の赤色顔料と鏡片周辺の木質付着の赤色顔料の分析結果によると、１号墳第２主体部出土の鏡片の赤色顔料は「ベンガラ」であった。一方、鏡片周辺の木質には「朱」が付着していた。

### （６）まとめ

土井・砂古墳群は古墳時代前期初頭～中葉に営まれた古墳群であり、当地域における首長層の墓域と考えられる。古墳群内では主体部の主軸方向を尾根筋に直交させる点や、各古墳が尾根筋に直交する周溝で尾根筋や隣接する古墳と画されている点で、古墳群のあり方に統一性が認められる。その中で、特に主体部構造と木棺形態、副葬品や従属的埋葬施設の有無に相違が認められる。それらは、階層性・性別・出自などに起因する可能性が考えられる。

## ２．横穴墓の様相

土井・砂遺跡内における横穴墓は大きく二つの支群に分かれる。即ち、丘陵北東斜面に位置する１～４号横穴墓、同じく丘陵北西斜面に位置する５～７号横穴墓のまとまりである。以下、前者を北東支群、後者を北西支群とする。

先述したとおり、二つの支群は出土須恵器の様相から時間的にも殆ど重なることはない。概ね、北東支群が古墳時代後期後半、北西支群が古墳時代終末期に営まれている。

北東支群の様相はまず１号横穴墓が営まれ、続いて２号、３号、４号横穴墓という順番に支群構成が成される。１～３号横穴墓は標高68m付近に立地しているが、４号横穴墓のみ標高66m付近に立地している。しかし、１～４号横穴墓の形態は玄室、閉塞施設、墓道の３つから構成され、規模の差こそあれ形態に差異はない。墓道前端から玄室奥壁までの規模が最も大きいものが１号横穴墓で、最も規模の小さいものが２号横穴墓である。１号横穴墓の墓道端の北側では、墓前祭祀の可能性が考えられる痕跡（ＳＸ０２）が認められた。１号横穴墓は北東支群で最初に築造され、規模も大きいことから、北東支群の中心的な横穴墓の性格を持つ可能性が考えられる。

２号横穴墓の玄室の長さは1.55mと小規模ながら、出土須恵器の量が北西支群中で最も多い。即ち、玄室内及び墓道堆積埋土内から蓋坏６セット、直口壺３点、提瓶１点の少なくとも計16個体が出土しており、規模の最も大きい１号横穴墓のそれを上回る。

２号横穴墓は墓道埋土の堆積状況から、少なくとも２回の埋葬行為を確認した。他の横穴墓も２回～３回以上と埋葬行為を繰り返す中で、須恵器の出土数は２号横穴墓に比べて少ない。

２号横穴墓出土の器種構成と他の横穴墓のそれを比較した場合、３・４号横穴墓の器種構成には２号横穴墓とほぼ変わることはない。蓋坏の他に、３号横穴墓では提瓶が、４号横穴墓では直口壺が出土し、２号横穴墓出土の提瓶・直口壺と共通の形態を示している。２号横穴墓は北東支群の中で様相を異にし、特徴的であると思われる。

北西支群は、ほぼ同時期に標高69m付近に５～７号横穴墓が構成されている。先後関係は須恵器の様相から、５号横穴墓が若干６・７号横穴墓に先行して築造されている可能性が考えられる。横穴墓の形態は北東支群とは異なり、前庭部が存在する。特に、５・７号横穴墓に挟まれた６号横穴墓は、玄室・玄門・閉塞部・前庭部から成っており、北西支群中、最も広い前庭部を有する。このことから、６号横穴墓は北西支群の中心的な横穴墓の性格を持つ可能性が考えられる。また、５号横穴墓は北西支群中で最多の須恵器を出土しており、玄室の天井形態も北西支群中のみならず、北東支群にもない平天井の形態である。５号横穴墓も北西支群中において、様相を異にするものと思われる。

両者の支群は、異なった集団が構成した造墓単位であったと考えられる。ただし、５号横穴墓を除く他の横穴墓の天井形態には、その共通性が認められる。即ち、玄室横断面がやや膨らんだ三角形と推定されることから、出雲山間部に多く見られる「アーチ系統の持術によるテント形」（大谷・松山1999）の可能性が高いと考えられる。

**〔参考文献〕**

大谷晃二・松山智弘　1999「横穴墓の形式とその評価」『田中義昭先生退官記念文集　地域に根ざして』

### 第28表　土井・砂古墳群主体部出土金属器計測表

| 挿図番号 | 図版番号 | 出土位置 | 品　目 | 材　質 | 法　　量（cm） | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 106-1 | 87 | １号墳<br>第２主体部<br>棺内 | 破鏡 | 青銅 | 復元径　－１７．７以上<br>厚み　－外縁０．３<br>－外区０．２ | 鏡背両面・外縁・外区を研磨<br>外区に櫛歯文、ベンガラ付着<br>後漢の舶載内行花文鏡 |
| -2 | 87 | ４号墳<br>第１主体部<br>埋土 | 袋状鉄斧 | 鉄 | 残存長　－１１．３<br>袋端部幅　－　４．４<br>（内法３．４）<br>厚み　－　２．１（内法）<br>体部厚み　－　０．６<br>刃部厚み　－　０．３<br>刃部幅　－　５．１ | 金田分類－Ａ技法 |
| -3 | 87 | ５号墳<br>第２主体部<br>埋土 | 不明鉄器<br>（刀子？） | 鉄 | 残存長　－１１．７<br>残存刃部長－　６．４<br>幅－　１．５<br>厚み－　０．４<br>残存柄部長－　５．２<br>幅－　１．１<br>厚み－　０．４ | |
| -4 | 87 | ５号墳<br>第２主体部<br>埋土 | 鉇 | 鉄 | 残存長　－6.5と3.2(2部分)<br>残存刃部長－　２．８（部分）<br>幅－　０．９５<br>厚み－　０．３５<br>残存柄部長－　不明<br>幅－　１．０<br>厚み－　０．４５ | 別個体が付着している<br>古瀬分類－１ａ類 |
| -5 | 87 | ５号墳<br>第２主体部<br>埋土 | 鉇 | 鉄 | 柄部残存長－１１．０<br>幅－　１．１<br>厚み－　０．４ | |
| -6 | 87 | ６号墳<br>主体部<br>棺内 | 鉇 | 鉄 | 残存長　－２０．７<br>刃部長　－　１．６<br>刃幅　－　１．１ | 刃部・柄部に木質付着 |

### 第29表　土井・砂遺跡出土五輪塔計測表

| 挿図番号 | 図版番号 | 出土位置 | 部位 | 天(cm) | 地(cm) | 軒部(cm) | | 柄部(cm) | | 高さ(cm) | 研磨 | 梵字 | 石材 | 残存率 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 幅 | 幅 | 幅 | 高さ | 幅 | 高さ | | | | | | |
| 131-1 | 92 | 5･6号墳付近 | 火輪 | 13.5 | 18 | 22 | 4.5 | 5 | 2 | 8 | 有 | 無 | 来待石 | 90% | 柄穴に加工痕 |
| 131-2 | 92 | 5･6号墳付近 | 火輪 | 14 | 16.5 | 22.5 | 6 | 6 | 2.2 | 9 | 有 | 無 | 来待石 | 90% | |

## 第30表　土井・砂遺跡出土土器観察表

口径（ ）の数値は復元径、器高（ ）の数値は現存高

| 挿図番号 | 図版番号 | 出土位置 | 器　種 | 口径(cm) | 器高(cm) | 特　徴 | 調　整 | 色　調 | 残存率 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 84-1 | 75 | 1号墳<br>墳丘裾 | 土師器<br>高坏 | 不明 | (2.3) | | ヨコナデ、<br>ハケ目 | 淡橙色 | 15% |
| -2 | 75 | 1号墳<br>墳丘裾 | 土師器<br>高坏 | (16.6)<br>底径 | (3.4) | | 外面ハケ目後ヘラミガキ、<br>内面ヘラケズリ後ナデ | 淡橙色 | 15% |
| -3 | 75 | 1号墳<br>墳頂部 | 土師器<br>低脚坏 | (6.0)<br>底径 | (2.1) | | 外面ナデ、内面摩滅のため不明 | 淡黄褐色 | 10%<br>15%<br>(底部) |
| -4 | 75 | 1号墳<br>1･2主体部<br>直上 | 土師器<br>鼓形器台 | (17.4) | (5.2) | | 内外面摩滅のため不明 | 淡赤黄褐色 | 10%<br>15%<br>(口縁) |
| -5 | 75 | 1号墳<br>周溝内 | 土師器<br>甕 | 不明 | (5.1) | 波状文 | 外面ヨコナデ、<br>内面ケズリ | 明橙褐色 | 15% |
| -6 | 75 | 1･2号墳<br>墳丘裾 | 土師器<br>甕 | (15.6) | (4.0) | 口縁はわずかな面を持つが、肥厚しない　直線的に伸びる　稜の突出は鋭い | 内外面ヨコナデ | 黄褐色 | 10% |
| -7 | 75 | 1･2号墳<br>墳丘裾 | 土師器<br>甕 | (16.4) | (3.9) | 口縁は平坦面を持ち、外側へ肥厚 稜の突出は甘く、下側を強くヨコナデ | 内外面ヨコナデ | 黄褐色 | 15% |
| -8 | 75 | 1･2号墳<br>墳丘裾 | 土師器<br>甕 | (16.8) | (4.1) | | 内外面ヨコナデ | 淡黄褐色 | 10% |
| -9 | 75 | 1･2号墳<br>墳丘裾 | 土師器<br>甕 | (17.7) | (4.6) | | 内外面ナデ | 淡茶褐色 | 10% |
| -10 | 75 | 1･2号墳<br>周溝内 | 土師器<br>甕 | (20.4) | (6.0) | | 内外面摩滅のため不明 | 明茶褐色 | 15% |
| -11 | 76 | 1･2号墳<br>墳丘裾 | 土師器<br>甕 | (14.6) | 19.9 | 沈線　ハケ目列点文<br>炭化物付着 | 内面ヨコナデ、ケズリ、ナデ、ハケ目指圧痕 | 淡橙褐色 | 35% |
| -12 | 76 | 1･2号墳<br>墳丘裾 | 土師器<br>甕 | (19.8) | (15.7) | 櫛描波状文(7条/cm、原体幅2.1cm) ハケとは原体が異なる口頸は全体的に厚手　稜は太く、突出はやや弱い | 内面ヨコナデ、ヨコヘラケズリ、一部はその後ナデ、指圧痕、外面ヨコハケ、部分的にタテハケ | 黄褐色 | 20% |
| 100-1 | 79 | 3号墳<br>東周溝内 | 土師器<br>甕 | (14.9) | (4.1) | | 内外面摩滅のため不明 | 淡黄褐色 | 10% |
| -2 | 79 | 3号墳<br>東周溝内 | 土師器<br>甕 | (15.6) | (5.3) | | 内面ヨコナデ、ケズリ | 赤褐色 | 10% |
| -3 | 79 | 3号墳<br>西周溝内 | 土師器<br>甕 | (14.7) | (3.4) | | 内外面ヨコナデ | 淡黄褐色 | 10% |
| -4 | 79 | 3号墳<br>東周溝内 | 土師器<br>甕 | 不明 | (3.6) | | 内外面ヨコナデ | 淡橙色 | 10% |
| -5 | 76 | 3号墳<br>西周溝内 | 土師器<br>甕 | 14.5 | 24.8 | 底部穿孔　上部、下部別造り | 内外面ヨコナデ、内面指圧痕 | 淡黄褐色 | 80% |
| -6 | 79 | 4号墳<br>墳丘裾 | 土師器<br>甕 | 不明 | (3.4) | | 内面ヨコナデ、ケズリ | 淡橙褐色 | 10% |
| -7 | 76 | 4号墳<br>主体部直上 | 土師器<br>鼓形器台 | (19.8)<br>底径 | (8.1) | | 内面ケズリ | 淡黄褐色 | 20%<br>50%<br>(底部) |
| -8 | 79 | 4号墳<br>主体部直上 | 土師器<br>鼓形器台 | (20.7)<br>底径 | (5.3) | | 内面ケズリ | 淡褐色 | 10% |
| -9 | 76 | 4号墳<br>主体部直上 | 土師器<br>低脚坏 | (19.4)<br>6.2<br>底径 | 5.4 | 内面に少し炭化物が付着 | 内外面摩滅のため不明 | 淡黄褐色 | 35% |
| -10 | 76 | 4号墳<br>主体部直上 | 土師器<br>高坏 | 不明 | (8.0) | 軸痕あり | 内外面摩滅のため不明 | 淡褐色 | 15% |
| -11 | 76 | 4号墳<br>主体部直上 | 土師器<br>低脚坏 | 5.9<br>底径 | (1.9) | | 内外面ナデ | 淡褐色 | 20%<br>60%<br>(底部) |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 100-12 | 79 | 4・5号墳間<br>周溝 | 土師器<br>鼓形器台 | 不明 | (3.8) | | 内外面ヨコナデ | 淡茶褐色 | 10% |
| -13 | 79 | 5号墳<br>第1主体部<br>直上 | 土師器<br>鼓形器台 | (15.8)<br>底径 | (4.3) | 内面に少し炭化物が付着 | 内外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ | 淡橙色 | 10% |
| -14 | 79 | 5号墳<br>第1主体部<br>直上 | 土師器<br>甕 | 不明 | (5.1) | | 内外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ | 淡橙色 | 10% |
| 105-1 | 81 | 6号墳<br>周溝内 | 土師器<br>低脚坏 | 19.3<br>6.7<br>(脚径) | 6.5 | 外わんして口縁に至り、口縁は丸くおさめる | 内外面丁寧なナデ | 黄橙色 | 80% |
| -2 | 81 | 6号墳<br>墳丘裾 | 土師器<br>壺 | (11.6) | (5.3) | 接合痕あり<br>櫛描波状文(7条/cm) | 内外面ヨコナデ、内面ケズリ、指圧痕 | 淡灰褐色 | 10%<br>20%<br>(口縁) |
| -3 | 81 | 6号墳<br>墳丘裾 | 土師器<br>甕 | (20.0) | (5.5) | 黒斑あり | 内外面ヨコナデ | 淡黄橙褐色 | 10%<br>15%<br>(口縁) |
| -4 | 81 | 6号墳<br>墳丘裾 | 土師器<br>鼓形器台 | (22.8) | (6.6) | | 内外面ヨコナデ | 淡黄褐色 | 10% |
| -5 | 81 | 6号墳<br>西裾 | 土師器<br>小型丸底<br>の甕 | (11.3) | 10.8 | 炭化物付着<br>口縁は若干つまみ上げる | 内面ヨコナデ、ケズリ、外面ハケ目 | 橙褐色 | 90% |
| -6 | 81 | 6号墳<br>西裾 | 土師器<br>甕 | (26.9) | (5.2) | | 摩滅のため不明 | 淡黄褐色 | 10% |
| -7 | 81 | 6号墳<br>周溝内 | 土師器<br>高坏 | 不明 | (6.7) | 坏部裏側に径4㎜の軸痕 | 外面タテヘラミガキ、ナデ(但し摩滅)内面シボリ痕を残すヨコヘラケズリ | 淡黄灰色 | 10%<br>脚部<br>完存 |
| 81 | 77 | 1号墳<br>第2主体部<br>直上 | 土師器<br>甕 | 不明<br>28.8<br>(胴径) | (30.4) | 底部穿孔　波状文 | 内面ヘラケズリ、他は摩滅のため不明、指圧痕(内) | 淡黄褐色 | 30% |
| 82 | 77 | 1号墳<br>北裾 | 土師器<br>壺 | (21.0) | (23.3) | ハケ原体による羽状文<br>表面摩滅多い　ヘラ痕<br>口縁は丸くおさめる<br>稜は下方に突出 | 内面ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ、外面ヨコハケ、タテハケ | 橙褐色 | 50% |
| 109-1 | 82 | 1号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>蓋 | 12.9 | 3.9 | A3c | 外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデ | 青灰色 | 完形 |
| -2 | 82 | 1号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>坏 | 10.8 | 3.6 | A3b | 内面ナデ、回転ナデ、外面回転ヘラケズリ | 青灰色 | 完形 |
| -3 | 82 | 1号横穴墓<br>墓道 | 須恵器<br>蓋 | 11.4 | (3.8) | A3a | 外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデ | 淡青灰色 | 30% |
| -4 | 86 | 1号横穴墓<br>墓道 | 須恵器<br>坏 | 11.0 | (3.1) | A6～7 | 内外面回転ナデ | 青灰色 | 5% |
| -5 | 82<br>88 | 1号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>蓋 | 13.0 | 4.0 | A3c　天井部にヘラ記号 | 外面回転ヘラケズリ内面回転ナデ、ナデ | 淡青灰色 | 完形 |
| -6 | 82 | 1号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>坏 | 11.2 | 3.6 | A3 | 内面ナデ、回転ナデ、外面回転ヘラケズリ | 暗青灰色 | 完形 |
| -7 | 82 | 1号横穴墓<br>墓道 | 須恵器<br>提瓶 | 17.4<br>(胴径) | (21.2) | B2　底部にカキメ・ヘラ記号 | 内外面回転ナデ、ナデ | 青灰色 | 95% |
| 112-1 | 82 | 2号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>蓋 | 12.4 | 4.2 | A4～5　外周のみにヘラケズリの痕跡 | 外面回転ナデ、回転ヘラケズリ、ヘラオコシ痕あり、周辺ヘラ削り、内面回転ナデ | 青灰色 | 完形 |
| -2 | 82 | 2号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>蓋 | 12.5 | 3.9 | A4 | 外面回転ナデ、ヘラケズリ後一部ナデ | 青灰色 | 完形 |
| -3 | 82 | 2号横穴墓<br>墓道 | 須恵器<br>蓋 | 12.9 | 4.3 | A4 | 外面回転ヘラケズリ、回転ナデ後ナデ、沈線の上を強くナデる | 淡青灰色 | 完形 |
| -4 | 82 | 2号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>蓋 | 12.7 | 4.5 | A4　天井部ケズリ残す　沈線の上をナデる | 外面回転ヘラケズリ、回転ナデ、ナデ | 淡青灰色 | 95% |
| -5 | 82<br>88 | 2号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>蓋 | 13.4 | 4.5 | A4　天井部にヘラ記号(×) | 外面回転ヘラケズリ、回転ナデ | 青灰色 | 完形 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 112-6 | 82 | 2号横穴墓<br>墓道 | 須恵器<br>蓋 | 13.2 | (4.2) | A5　天井部中央にヘラ記号 | 外面ヘラ切り後ナデ、内面回転ナデ | 淡青灰色 | 90% |
| -7 | 83 | 2号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>提瓶 | 8.8<br>13.5<br>(胴径) | 16.9 | 口縁部に接合部の痕跡<br>把手ボタン状 | 外面回転ナデ、カキメ | 青灰色 | 完形 |
| -8 | 83 | 2号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>坏 | 10.8 | 3.7 | A4　天井部粗雑なヘラケズリ | 外面回転ナデ、回転ヘラケズリ | 青灰色 | 完形 |
| -9 | 83 | 2号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>坏 | 10.7 | 4.1 | A4　天井部は粗雑なヘラケズリ後に中心部をナデる | 外面回転ナデ、回転ヘラケズリ後ナデ | 暗青灰色 | 95% |
| -10 | 83 | 2号横穴墓<br>墓道 | 須恵器<br>坏 | 10.9 | 3.9 | A4～5　底部は回転ヘラケズリ後ヘラオコシ | 外面回転ナデ後ナデ、回転ヘラケズリ | 暗青灰色 | 完形 |
| -11 | 83 | 2号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>坏 | 11.7 | 4.2 | A4 | 外面回転ナデ、回転ヘラケズリ、内面ナデ | 青灰色 | 完形 |
| -12 | 83 | 2号横穴墓<br>墓道 | 須恵器<br>坏 | 11.1 | 4.5 | A4　内外周に自然釉付着 | 外面ナデ、回転ナデ、ヘラケズリ | 灰色 | 完形 |
| -13 | 83 | 2号横穴墓<br>墓道 | 須恵器<br>坏 | 11.7 | (3.3) | A5 | 外面回転ナデ後ナデ | 青灰色 | 50% |
| -14 | 83 | 2号横穴墓<br>墓道 | 須恵器<br>直口壺 | 9.4<br>12.1<br>(胴径) | 12.5 | 口縁部ナデで凹む | 外面回転ヘラケズリ、回転ナデ後ナデ、カキメ | 淡青灰色 | 80% |
| -15 | 83 | 2号横穴墓<br>墓道 | 須恵器<br>直口壺 | 8.9<br>11.4<br>(胴径) | (11.6) | 口縁は尖り気味　胴部ナデにより凹む | 外面回転ナデ、回転ヘラケズリ、一部ナデ | 暗青灰色 | 70% |
| -16 | 83 | 2号横穴墓<br>墓道 | 須恵器<br>直口壺 | 11.8<br>(胴径) | (10.1)<br>5.6<br>(底径) | | 外面回転ナデ後ナデ、ヘラケズリ | 淡青灰色 | 60% |
| 117-1 | 84 | 3号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>蓋 | 12.3 | 4.1 | A5 | 外面回転ナデ、ヘラ切り後ナデ（不整方向） | 淡青灰色 | 完形 |
| -2 | 84 | 3号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>坏 | 10.7 | 4.0 | A5　天井部は丁寧なヘラケズリ<br>但し中心部はヘラオコシ　外面に自然釉付着 | 外面回転ナデ後ナデ、回転ヘラケズリ | 淡青灰色 | 完形 |
| -3 | 84 | 3号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>提瓶 | 8.8<br>13.6<br>(胴径) | 16.4 | 頸部外側に暗紋 | 回転ナデ、回転ヘラケズリ（手前）、回転ナデ（背面） | 淡青灰色 | 完形 |
| -4 | 84 | 3号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>蓋 | 12.8 | 3.7 | A5　天井部にヘラ記号（－） | 外面回転ナデ後ナデ、回転ヘラケズリ | 淡青灰色 | 完形 |
| -5 | 84 | 3号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>坏 | 10.8 | 4.0 | A5　天井部は丁寧なヘラケズリ | 外面回転ナデ後ナデ、回転ヘラケズリ | 淡青灰色 | 完形 |
| -6 | 84 | 4号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>坏 | 10.9 | 3.6 | A5 | 外面回転ヘラケズリ、底部ナデ、回転ヨコナデ | 淡青灰色 | 完形 |
| -7 | 84 | 4号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>蓋 | 13.4 | 4.5 | A5　裏面に赤色顔料付着 | 外面回転ヘラケズリ、回転ナデ | 淡青灰色 | 完形 |
| -8 | 84 | 4号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>坏 | 11.3 | 4.2 | A5 | 外面回転ナデ、ヘラ切り後ナデ | 淡青灰色 | 完形 |
| -9 | 84 | 4号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>坏 | 11.3 | 3.8 | A5 | 外面回転ヨコナデ、ヘラ切り後ナデ | 淡青灰色 | 完形 |
| -10 | 84 | 4号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>坏 | 10.8 | 3.9 | A5～6 | 外面ナデ、回転ナデ、回転ヘラケズリ | 淡青灰色 | 完形 |
| -11 | 84 | 4号横穴墓<br>墓道 | 須恵器<br>直口壺 | 9.1<br>11.8<br>(胴径)<br>5.6<br>(底径) | 12.9 | | 外面回転ナデ後ナデ、回転ヘラケズリ、内面回転ナデ | 淡青灰色 | 完形 |
| -12 | 86 | 4号横穴墓<br>墓道 | 土師器<br>甕 | (23.6) | (3.3) | | 不明 | 淡黄褐色 | 10% |
| 123-1 | 85 | 5号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>蓋 | 11.0 | 3.7 | A8 | 外面ヘラ切り後ナデ、内面回転ナデ、 | 淡青灰色 | 完形 |
| -2 | 85 | 5号横穴墓<br>玄室内 | 須恵器<br>坏 | 10.3 | 3.4 | A8 | 外面ヘラ切り後ナデ、内面回転ナデ | 淡青灰色 | 完形 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 123-3 | 85 | 5号横穴墓前庭 | 須恵器蓋 | 10.8 | 4.0 | A8　端部は僅かに内側に肥厚する | 外面ヘラオコシ後ナデ、内面回転ナデ | 淡青灰色 | 完形 |
| -4 | 85<br>88 | 5号横穴墓前庭 | 須恵器坏 | 9.8 | 4.0 | A8　底部にヘラオコシ痕　少し丁寧なつくり | 内外面回転ナデ | 淡青灰色 | 完形 |
| -5 | 85 | 5号横穴墓前庭 | 須恵器蓋 | 11.4 | (3.4) | A8 | 外面ヘラ切り後ナデ、回転ナデ、ナデ | 淡青灰色 | 50% |
| -6 | 85<br>88 | 5号横穴墓玄室内 | 須恵器蓋 | 11.3 | 4.4 | A7～8　天井部にヘラ記号 | 外面ヘラ切り後ナデ、内面回転ナデ | 青灰色 | 完形 |
| -7 | 85 | 5号横穴墓玄室内 | 須恵器坏 | 10.6 | 3.8 | A7～8　歪みあり少し丁寧なつくり | 外面ヘラ切り後ナデ、内面回転ナデ | 淡青灰色 | 完形 |
| -8 | 85 | 5号横穴墓玄室内 | 須恵器坏 | 10.7 | 4.1 | A7～8　歪みあり少し丁寧なつくり | 外面ヘラ切り後ナデ、内面回転ナデ | 青灰色 | 完形 |
| -9 | 85 | 5号横穴墓前庭 | 須恵器蓋 | 11.5 | 3.8 | A8 | 外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデ | 淡青灰色 | 完形 |
| -10 | 85 | 5号横穴墓前庭 | 須恵器坏 | 9.8 | 3.5 | A8 | 外面ヘラ切り後ナデ、回転ナデ、内面回転ナデ後ナデ | 青灰色 | 完形 |
| -11 | 85 | 5号横穴墓前庭 | 須恵器蓋 | 11.9 | (4.4) | A8 | 外面ヘラ切り後ナデ、内面回転ナデ | 淡青灰色 | 50% |
| -12 | 85 | 5号横穴墓前庭 | 須恵器坏 | 10.4 | 4.0 | A8 | 外面ヘラ切り後ナデ、内面回転ナデ | 淡青灰色 | 95% |
| -13 | 86<br>88 | 5号横穴墓前庭 | 須恵器坏 | 10.0 | 3.6 | A8　内面底部にヘラ記号（×） | 外面回転ヘラケズリ後ナデ、内面回転ナデ、ナデ | 淡灰色 | 完形 |
| -14 | 86 | 5号横穴墓前庭 | 須恵器坏 | 11.1 | 3.4 | A8　内面に赤色顔料付着（水銀朱？） | 外面回転ナデ、ヘラ切り後ナデ | 淡青灰色 | 70% |
| -15 | 86 | 5号横穴墓前庭 | 須恵器坏 | 10.1 | 3.7 | A8　側面に歪み | 外面回転ナデ後ナデ、ヘラ切り後ナデ | 青灰色 | 95% |
| -16 | 86 | 5号横穴墓前庭 | 須恵器坏 | 10.6 | 3.4 | A8　外面に所々縦方向のナデ痕 | 外面回転ナデ、ヘラオコシ後ナデ | 淡青灰色 | 85% |
| -17 | 86 | 6号横穴墓前庭 | 須恵器蓋 | 7.8 | 2.8 | C1　外面に自然釉付着 | 内外面回転ナデ | 青灰色 | 完形 |
| -18 | 86 | 6号横穴墓前庭 | 須恵器坏 | 8.8 | 3.5 | C1 | 外面回転ナデ、ヘラ切り後ナデ | 青灰色 | 75% |
| -19 | 86 | 6号横穴墓前庭 | 須恵器蓋 | (11.6) | (2.8) | A8　外面に自然釉付着 | 内外面回転ナデ | 暗青灰色 | 10% |
| -20 | 86 | 6号横穴墓前庭 | 土師器甕 | (17.6) | (2.8) | | 外面ヨコナデ、内面ヨコヘラケズリ | 橙褐色 | 10% |
| -21 | 86 | 6号横穴墓前庭 | 須恵器直口壺 | 6.6<br>13.5<br>(胴径)<br>4.0<br>(底径) | 15.5 | | 外面回転ナデ、回転ヘラケズリ、内面回転ナデ | 青灰色 | 完形 |
| 127-1 | 87 | 7号横穴墓前庭 | 須恵器平瓶 | 15.0<br>(胴径)<br>4.5<br>(底径) | (14.0) | C3　底部に「×」印のヘラ記号　胴部の上部にカキメ　胴部中央に接合痕か？凹みも | 外面回転ナデ、回転ヘラケズリ、タタキ後回転ナデ | 暗青灰色 | 90% |
| -2 | 87 | 7号横穴墓前庭 | 須恵器蓋 | 8.3 | 2.9 | C1 | 内外面回転ナデ | 青灰色 | 完形 |
| -3 | 87 | 7号横穴墓玄室内 | 須恵器蓋 | 7.8 | 2.8 | C1 | 外面ナデ、ケズリ、回転ナデ | 暗青灰 | 完形 |
| -4 | 87 | 7号横穴墓玄室内 | 土師器甕 | 19.0<br>19.1<br>(胴径) | 18.8 | 口縁部、胴部に炭化物付着 | 外面ヨコナデ、ハケ目、内面ケズリ後ナデ | 橙褐色 | 90% |
| -5 | 86 | 7号横穴墓前庭 | 須恵器坏 | (10.0) | (2.6) | A8　外面に自然釉付着 | 内外面回転ナデ | 淡灰色 | 10% |
| -6 | 87 | 7号横穴墓前庭 | 須恵器坏 | (9.2) | (3.7) | A8　底部に自然釉付着 | 内外面回転ナデ | 青灰色 | 40% |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 129-1 | 89 | 6号横穴付近 | 須恵器蓋 | 10.9 | 4.5 | A8　内面にヘラ記号 | 内外面ナデ、回転ナデ | 淡青灰色 | 完形 |
| -2 | 89 | 6号横穴付近 | 須恵器坏 | 9.6 | 3.4 | A8　内面にヘラ記号外面に自然釉付着 | 内外面ナデ、回転ナデ | 淡青灰色 | 完形 |
| -3 | 90 | 5･6･7号横穴付近 | 須恵器坏 | 8.0 | (2.2) | A8 | 外面回転ナデ後ナデ、回転ヘラケズリ | 淡青灰色 | 20% |
| -4 | 89 | 5･6･7号横穴付近 | 須恵器坏 | 10.0 | 3.7 | A8 | 外面回転ナデ後ナデ | 淡青灰色 | 完形 |
| -5 | 89 | 5･6･7号横穴付近 | 須恵器坏 | 10.7 | (3.5) | | 外面回転ナデ後ナデ | 淡青灰色 | 40% |
| -6 | 90 | 5･6･7号横穴付近 | 土師器甕 | (15.8) | (3.1) | | 外面ヨコナデ内面ケズリ | 淡褐色 | 10% |
| -7 | 90 | 7号横穴付近 | 土師器坏 | (6.6)底径 | (1.5) | 糸切り痕 | 内外面ナデ | 淡黄褐色 | 10%25%(底部) |
| -8 | 89 | 6号墳北斜面 | 須恵器高台付坏 | (7.0)底径 | (2.8) | 底部回転ナデ高広ⅢB期 | 外面ナデ、回転ヨコナデ | 灰色 | 30%45%(底部) |
| -9 | 90 | 1号横穴南斜面 | 土師器坏 | (3.7)底径 | (1.1) | | 摩滅のため不明 | 黄褐色 | 10%15%(底部) |
| -10 | 89 | 4･5号墳間周溝 | 須恵器蓋 | (10.2) | 3.4 | | 内外面回転ナデ、ナデ | 淡青灰色 | 50% |
| -11 | 89 | 6号墳西斜面 | 須恵器高台付碗 | (14.4) | 5.0 | A8 | 内外面回転ナデ、ナデ | 淡青灰色 | 60%95%(底部) |
| -12 | 89 | 6号墳北斜面 | 土師器皿 | (12.4) | 3.0 | 8世紀？　赤彩 | 内面回転ナデ、ヘラミガキ | 赤茶褐色 | 80% |
| -13 | 90 | 6号墳北斜面 | 土師器甕 | (16.0) | (3.3) | | 内面ヨコナデ、ケズリ、全体的に摩滅 | 淡黄褐色 | 10% |
| -14 | 89 | 1号横穴南斜面 | 須恵器坏 | (11.3) | (3.7) | | 内外面回転ナデ | 淡青灰色 | 25% |
| -15 | 91 | 3号墳北斜面 | 土師器直口壺 | (10.7) | (3.6) | | 内外面ヨコナデ | 淡黄褐色 | 10% |
| -16 | 91 | 3号墳東溝内 | 土師器直口壺 | (11.6) | (3.9) | | 内外面ヨコナデ | 淡橙褐色 | 10% |
| -17 | 91 | 3号墳北斜面 | 須恵器直口壺 | (10.6) | (3.3) | | 内外面ヨコナデ | 暗赤紫色 | 10%25%(口縁) |
| -18 | 89 | 1号横穴南斜面 | 須恵器長頸壺 | (7.9)底径 | (4.1) | 高広ⅢA期 | 外面回転ナデ、ナデ、回転ヘラケズリ | オリーブ黄色 | 40% |
| -19 | 89 | 4号横穴付近 | 須恵器長頸壺 | 8.4(17.3)胴径 | (8.3) | 高広ⅢA期高台に水平に引き出すような稜 | 外面回転ナデ、ナデ、回転ヘラケズリ | 暗青灰色 | 高台部完存 |
| -20 | 89 | 3号墳北斜面 | 須恵器蓋 | (13.8) | 3.4 | A3a | 外面回転ナデ、回転ヘラケズリ | 淡青灰色 | 40% |
| -21 | 90 | 3号墳北斜面 | 須恵器坏 | (11.6) | 3.8 | A3 | 外面回転ナデ、回転ヘラケズリ | 青灰色 | 60% |
| -22 | 90 | SX02 | 須恵器坏 | (12.4) | 3.7 | A3 | 外面回転ナデ、ナデ、回転ヘラケズリ | 青灰色 | 40% |
| -23 | 90 | SX02 | 須恵器蓋 | 12.4 | 4.2 | A3a焼成やや不良 | 外面回転ナデ、回転ヘラケズリ | 淡褐灰色 | 95% |
| -24 | 90 | SX02 | 須恵器坏 | 10.5 | 4.3 | A3a　口縁に向けて一度屈曲しながら立ち上がる、焼成やや不良 | 外面回転ナデ、ナデ、回転ヘラケズリ | 褐灰色 | 95% |
| -25 | 90 | 1号横穴南斜面 | 須恵器蓋 | (11.8) | (2.3) | C2 | 外面回転ナデ、回転ヘラケズリ | 淡青灰色 | 25% |
| -26 | 90 | 1号横穴南斜面 | 須恵器坏 | (12.6) | 3.9 | 高広ⅣA期回転糸切り | 外面回転ナデ、回転ナデ後ナデ | 暗青灰色 | 50% |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 129-27 | 91 | ４号横穴<br>東斜面 | 土師器<br>坏 | 5.0<br>(底径) | (1.6) | 回転糸切り | 内外面ヨコナデ、ナデ | 淡黄褐色 | 30%<br>60%<br>(底部) |
| -28 | 91 | １号横穴<br>南斜面 | 土師器<br>坏 | 5.6<br>(底径) | (2.0) | 回転糸切り | 内外面回転ナデ、ナデ | 淡褐色 | 30%<br>60%<br>(底部) |
| -29 | 89 | ＳＸ０１ | 土師器<br>甕 | (15.6) | (5.5) | | 外面ヨコナデ、<br>内面ケズリ | 淡桃黄色 | 15%<br>35%<br>(口縁) |
| -30 | 89 | ＳＸ０１ | 土師器<br>皿 | 12.2 | 3.5 | ８世紀？　赤彩 | 外面回転ナデ、ナデ | 淡灰色 | 95% |
| 130-1 | 91 | 表採 | 弥生土器<br>鉢 | (22.3) | (5.3) | 列点文 | 内外面ナデ | 明黄褐色 | 10% |
| -2 | 91 | 表採 | 土師器<br>甕 | (23.2) | (6.3) | 炭化物付着 | 外面ヨコナデ、<br>ヨコハケ | 明黄褐色 | 10%<br>25%<br>(口縁) |
| -3 | 91 | 表採 | 須恵器<br>壺 | 不明 | (3.2) | 自然釉付着 | 内外面回転ナデ | 暗青灰色 | 10% |
| 131-3 | 91 | 表採 | 須恵器<br>壺 | (102.0) | (8.4) | 波状文 | 内外面ヨコナデ | 淡黄灰色 | 10% |
| -4 | 91 | 表採 | 須恵器<br>鉢 | 不明 | (9.0) | | 内外面ヨコナデ、タタキ | 暗褐色 | 10% |
| 99 | 80 | ５号墳<br>北西裾 | 土師器<br>壺 | 19.0<br>51.7<br>(胴径) | 52.6 | 羽状文　口縁下に突帯 | 外面ヨコハケ、タテハケ、内面ケズリ、ナデ、指頭圧痕 | 橙褐色 | 95% |
| 89 | 78 | ３号墳<br>西側周溝内 | 土師器<br>壺 | (26.6)<br>48.4<br>(胴径) | 87.0 | 底部穿孔 | 外面ナデ、タテハケ、内面ナデ、ケズリ | 淡黄褐色 | 50% |

# 第７章　加茂町湯後遺跡横穴群出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室
井　上　晃　孝

## Ⅰ．はじめに

島根県加茂町延野地内の湯後遺跡横穴群の内、人骨が出土したのは２号横穴と４号横穴２穴であった。

２横穴墓からの出土人骨の遺残性はやや不良であった。

以下、各横穴ごとに出土人骨の概要を報告する。

最後に、湯後遺跡横穴群出土人骨一覧（付表）にまとめた。

## Ⅱ．２号横穴

玄室内には、左側壁に沿って石棺が安置されていた。

石棺内には、奥部の方に２体分の頭骨片と歯牙が並列して遺残していたが、２体の上下肢骨は骨格順配列が見られず、２体の骨は撹乱状態を呈していた。

玄室中央側（東側）の頭骨片と歯牙群を１号人骨、玄室左側（西側）の頭骨片と歯牙群を２号人骨と称する。

１号人骨（♀）と２号人骨（♂）の骨には、はっきり性差がみられ、撹乱状態であったが、鑑別が容易であった。

被葬者２体の遺残性はやや不良であった。

### １．１号人骨

１号人骨の骨数は少なく、完形骨もなく、脆弱化していた。

１）骨の遺残性

骨数少なく、完形骨もなく、脆弱化しており、骨の遺残性は不良であった。

２）遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭　骨：頭骨片；若干

下顎骨：右下顎臼歯部～下顎枝［歯牙（－）］

歯　牙：遊離歯牙21ヶ

| | |
|---|---|
| △△△△△△ | △　△△△△ |
| ６５４３２１ | １　３４５６ |
| ４３２１ | １２３４５６ |
| △△△△ | △△△△△△ |

△：遊離歯牙

上腕骨

上腕骨：左；近位部～骨体の一部

右；ほぼ完形（脆弱化）、骨長290mm

下肢骨

大腿骨：左；骨体中央部

脛　骨：左；近位部、下端部の一部

右；近位部、骨体中央部

3）推定性別

遺残する四肢骨は全般的に細く、きゃしゃで、筋粗面の発達も弱い。

遺残歯牙の歯冠径も小さいことから、本屍骨は女性と推定する。

4）推定年齢

遺残歯牙の切歯の咬耗度はブロカーの１度であるので、本屍の年齢は壮年期位と推定される。

5）推定身長

遺残右上腕骨長から、本屍の生前の身長は、ピアソン法[1]で152.0cm、藤井法[2]で150.3cmであった。

## 2．２号人骨

２号人骨は１号人骨よりも遺残骨数はやや多く、太く頑健であった。

1）骨の遺残性

遺残骨数は１号人骨よりも若干多いが、全般的に骨の遺残性はやや不良であった。

2）遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭　骨：前頭骨（左右の眼窩上縁部～前頭部）、頭骨片 若干

歯　牙：遊離歯牙 11ヶ

| | |
|---|---|
| △<br>1 | |
| ８７６<br>△△△ | １　３４５６７８<br>△　△△△△△△<br>（？） |

△：遊離歯牙

上肢骨

上腕部：左；骨体中央部

右；近位部～骨体下部

下肢骨

寛　骨：左；腸骨片

右；寛骨臼窩部と腸骨の一部

大腿骨：左；ほぼ完形、骨長430mm

右；骨頭部、骨体～下端部

脛　骨：左；ほぼ完形、骨長352mm

右；近位部～骨体下部

腓　骨：左；骨体中央部

右；骨体中央部

3）推定性別

遺残頭骨の眉弓の隆起、上下肢骨は太く、頑健で筋粗面部の発達も良好であることから、本屍骨は男性骨と推定する。

4）推定年齢

遺残する上下肢骨は成人域、遺残歯牙の切歯の歯冠は破損の為咬耗度は不祥、臼歯の咬耗度はブロカーの１度で咬頭のエナメル質が水平化しているので、本屍の年齢は壮年期位と推定する。

5）推定身長

遺残する大腿骨長から、ピアソン法で162.1cm、藤井法で161.1cmであった。左脛骨長から、ピアソン法で162.4cm、藤井法で160.6cmであった。

## Ⅲ．４号横穴

玄室内には、やや右側壁に沿って石棺が安置されていた。

石棺内には、集骨状になった人骨と歯牙が若干遺残していた。

被葬者は１体で、骨の遺残性は不良であった。

1）骨の遺残性

遺残骨は若干で破損骨のみ、歯牙は一部歯冠欠や歯根部の欠損が多く、骨の遺残性は不良であった。

2）遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭　骨：骨片化

右眼窩上縁～前頭部の一部、右側頭部（乳様突起、錐体部）、後頭骨片

下顎骨：正中付近で大きく破損

左下顎体～下顎枝

右臼歯部の下顎体

歯　牙：

| | |
|---|---|
| | （？） |
| △△ | △△△ |
| ７６ | ６７８ |
| ７６５４３ | ∬２３４５６７８ |
| △○○ｒ× | ××△△○○○̇ |
| （？） | （？） |

○：釘植歯牙　　Ó：埋 伏 歯
△：遊離歯牙　　×：死後欠（歯槽開放）
ｒ：歯根のみ　　∬：破損部位

上肢骨

上肢骨：右；骨体中央部

下肢骨

大腿骨：左；骨体中央部

右；骨体中央部

脛　骨：不明；骨体中央部の一部

3）推定性別

遺残頭骨の形態学的特徴（乳様突起の突隆、眉弓の隆起）と上下肢骨は太く、頑健で筋粗面の発達が良好なことから、本屍骨は男性骨と推定する。

4）推定年齢

遺残頭骨と上下肢骨で年齢を推定する部位は遺残していない。

歯牙の咬耗度は全般的にブロカーの２～３度であるので、本屍の年齢は熟年期位が推定される。

5）推定身長

遺残する上下肢骨は近位部と遠位部を欠き、骨体中央部のみで最大骨長を推定しえないので、本屍の生前の身長は不祥である。

# Ⅳ．考　　察

## １．２号横穴の人骨

被葬者２体の頭位は確定できたが、男女２体の上下肢骨の遺残骨は撹乱状態で、埋葬時の姿態をとどめていない。

全般的に、上下肢骨の近位部と遠位部が逆転しているもの、上下肢骨の後面が上になっているものがあり、極めて不自然である。

これらは、いずれも白骨化後、後世の撹乱によるものと推察される。

## ２．４号横穴の人骨

遺残骨は石棺の片隅に集骨状に遺残していた。

仮に、本石棺内で埋葬され、白骨化後に骨を集骨状に集めたとしても、歯牙、骨片らが石棺内の他所に遺残する可能性があるが、まったくその痕跡を認めなかった。

これは、恐らく他の場所で一時埋葬が行われ、白骨化後改めて本石棺内に二次埋葬されたと推察される。

後日追葬の予定があり、石棺の片隅に集骨状に埋葬されたと思量する。

しかし、後日追葬の痕跡は認めなかった。

## V. まとめ

島根県加茂町地内の湯後遺跡横穴群の２号と４号横穴内の石棺から、人骨が出土した。

骨の遺残性は全般的に不良であった。

２号横穴の被葬者は成人男女２体であった。

２体の頭位は埋葬時のままであったが、上下肢骨は撹乱状を呈していた。

１号人骨は女性、年齢は壮年期で、身長はピアソン法で152.0cm、藤井法で150.3cmであった。

２号人骨は男性、年齢は壮年期で身長はピアソン法で162.1cm、藤井法で161.1cmであった。

４号横穴の被葬者は成人男性１体であった。人骨は石棺内の片隅に集骨状に遺残していた。被葬者は男性、年齢は熟年期で、身長は不祥であった。

## VI. 文　献


(1) Pearson, K. (1899) : Mathematical contributions to the theory of evolution, V. On the reconstruction of the stature of prehistoric races, Phil. Trans. Roy. Soc. London. ser. A., 192, 169-244.

(2) 藤井明（1960）：四肢長骨の長さと身長との関係に就いて、順天大保健体育紀、3, 49－61.


付表　加茂町湯後遺跡横穴群出土人骨一覧

| 横穴NO. | 被葬者数 | | 遺残骨の配置 | 推定性別 | 推定年齢 | 推　定　身　長 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ２号横穴 | 2 | １号人骨 | 撹乱状 | ♀ | 壮 年 | ピアソン法：１５２．０cm<br>藤　井　法：１５０．３cm |
| | | ２号人骨 | 撹乱状 | ♂ | 壮 年 | ピアソン法：１６２．１cm<br>藤　井　法：１６１．１cm |
| ４号横穴 | 1 | | 集骨状 | ♂ | 熟 年 | 不　　祥 |

# 第８章　土井・砂古墳群の位置付け

## １．土井・砂古墳群の位置付け

ここでは、土井・砂古墳群の調査事実から、当古墳群が立地する赤川中流域の弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡群（神原正面（北）遺跡群・神原神社古墳）[註1]との関係を検討し、若干の考察と問題点を提示したい。遺跡の位置関係は、土井・砂古墳群が神原神社古墳の南西約600ｍの丘陵上、神原正面（北）遺跡群は神原神社古墳の南東約600ｍの丘陵上に立地する。土井・砂古墳群と神原正面（北）遺跡群は丘陵尾根を別にし、両遺跡間の距離は約800ｍある。

### （１）神原神社古墳との先後関係－土器の様相－

先述した土器の様相に限定して、土井・砂古墳群と神原神社古墳の時間的な関係を整理する。

松山智弘氏は、小谷式の最古型式は神原神社古墳の土器型式より古相を示し、畿内との併行関係は布留０式併行に相当すると位置付けている（松山2000a）。１・２号墳出土の土器は、大木式～小谷１式（布留０式併行期）に相当することから、神原神社古墳（布留Ｉ式併行・小谷２式）に先行する。これは、１・２号墳出土の甕や壺の口縁端部が、神原神社古墳土器埋納壙出土の甕や壺の口縁部端ほど平坦に整形されていないこと、（第84図－11）の痕跡的な底部を持つ甕に対して、神原神社古墳土器埋納壙出土の土師器甕の底部が丸底化していることを根拠としている[註2]。

４・５号墳出土の土器も１・２号墳のそれと同じ様相であることから、神原神社古墳に先行している可能性が考えられる。また、３号墳は、墳丘西側周溝内埋土の最下層から口縁部端等の形骸化が進んだ丸底化段階以降の甕（第100図－５）が出土しており、小谷３式に相当することから、土井・砂古墳群の中で最も新しく、神原神社古墳よりも新しくなる可能性が考えられる[註3]。

あくまでも土器からだけの様相ではあるが、土井・砂古墳群は神原神社古墳築造前後に営まれ、神原神社古墳と併行している古墳が含まれると捉えた方が妥当と考える。

以下は、副葬品・木棺の形態や規模を中心に当地域の遺跡との比較を検討し、土井・砂古墳群の位置付けを考えたい。

### （２）破鏡の副葬と古墳属性

全国的な鏡片出土遺跡の集成検討を行った正岡睦夫氏は、鏡片副葬古墳に関して、「鏡片を副葬した遺構は完形鏡を出土する古墳の主体部と比較して差があり、弥生時代後期以来の箱式石棺・木棺直葬・土器棺などが用いられていることが多い」と指摘している。そして、墳長81ｍの前方後円墳に隣接して所在する愛媛県相の谷９号墓例や、墳長30.5ｍの前方後方墳に接した方墳の愛媛県雉之尾２号墓例を挙げ、鏡片副葬古墳の被葬者像に「地域の首長とは異なった位置にある」、「鏡片の所有者は首長の周辺に位置する人物」、「首長が行う祭祀と異り、弥生時代以来行われてきた呪術的な分野にたずさわった人物」と想定している。さらに、「首長層の墓である大型古墳等に付随して存在する被葬者は、鏡片の摩滅が著しい点なども考慮して、首長が行う祭祀と異り、呪術的な行為を行う人物に比定することができるであろう」としている。また、鏡片副葬が弥生時代後期から古墳時代前期に集中し、鏡片の鏡式には後漢代の舶載鏡が多いこと[註4]、鏡片は摩滅・研磨がなされたり１～２個の穿孔が確認できるものが多く、垂飾品としての可能性を指摘している（正岡1979）[註5]。

畿内政権による中国鏡（近畿型鏡種）の分与の発動をもって古墳時代の開始とする立場をとる川西宏幸氏は、完形中国鏡の鏡種の分布型から「近畿型」（鏡種：斜縁神獣鏡・画文帯神獣鏡・三角縁神獣鏡・龍虎鏡）と「非近畿型」（鏡種：方格規矩鏡・内行花文鏡・獣文鏡・夔鳳鏡）に分かれることを提示している。そして、破鏡は「非近畿型」の鏡種と結びつき、「近畿型」の鏡種には破鏡の例はほとんどないとする「整然とした対応関係」を指摘し、出土遺跡の時期を「ほぼ弥生時代後期後半から古墳時代前期前半に至る間にあり、わけても両時代の交に集中する」と指摘している（川西1989）。

出雲地方では、共通編年１期に相当する前方後円（方）墳が確実には確認されておらず(註6)、竪穴式石槨を有する古墳も確実には確認されていない(註7)。神原神社古墳や大成古墳、造山１・３号墳など畿内型の長大な竪穴式石槨を有する中・大型の方墳が、土器や鏡をはじめとする副葬品の様相から、共通編年２～３期に相当するもの考えられている（近藤1991、渡邊・金山1999）。すなわち、完形中国鏡「畿内型鏡種」の副葬はこの段階に開始されることになる。

共通編年１期併行と考えられる土井・砂１号墳から「非近畿型」鏡種の破鏡が出土したことは、当地域及び出雲地方における古墳時代開始期の様相を考える上で重要である。

ここで、出雲地方における共通編年１期併行の古墳属性をいま少し考えてみたい。松山氏は、出雲地方における共通編年１期併行（大木式～小谷１式期・布留０式期）の古墳属性として、「墳丘は方墳で、葺石などの外表施設はない」・「鏡の副葬が開始される。鏡種は後漢鏡を中心とし、破鏡や破砕副葬されている場合がある」・「棺に刳り抜きの木棺を使用するものがあり、比較的長大になる」「農工具の副葬が見られ、多種セットで副葬するものも見られる」などを挙げ、これらの要素を有する中小規模墳を、弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓のそれとは断絶するものと捉え、「時間的には、四隅突出型墳丘墓終焉後に出現し、箸墓などの最古の定型化古墳と併行する」と評価している。ただし、これらの中小規模墳には、「定型化した前方後円墳を特徴付ける、長大な竪穴式石槨・三角縁神獣鏡・副葬品の多量化といった要素がまったくない」という事実から、全国的な事例に則した上で、出雲地方における共通編年１期を評価する必要性を指摘している（松山2000b）。土井・砂１号墳の古墳属性としては「外表施設のない一辺10mの方墳」・「後漢代の破鏡を副葬する」・「小規模な刳り抜き式木棺を埋葬施設とする」が挙げられ、これらは、松山氏の指摘する共通編年１期併行の古墳属性の範疇に含まれることになる。

土井・砂１号墳第２主体部に破鏡（舶載内行花文鏡）、神原神社古墳に完鏡（舶載三角縁神獣鏡）が副葬される事実と、古墳属性の格差に加えて、両古墳が時間的・空間的に近しい関係にあることを考えると、これらは正岡氏が指摘するような被葬者像を想起させることのみならず、当地域の古墳時代開始期の様相に対する示唆的な現象に写ることは間違いないであろう。今後の実証的検討に委ねたい。

### （３）鉄器の副葬

神原神社古墳の鉄製農工具の副葬形態と、４～６号墳に副葬された鉄製農工具のそれを比較する。神原神社古墳の鉄製農工具は棺内足位に副葬されている。これに対して土井・砂古墳群では、６号墳が鉇を棺内足位に副葬するのを除くと、４・５号墳の鉄器は墓壙内埋土より出土している。４号墳の袋状鉄斧は主体部埋土に刃を下にして突き刺さった状態で出土し、５号墳第２主体部の鉇や不

明鉄器も主体部埋土から出土した。共に頭位の直上付近に相当する位置であった。４・５号墳の鉄器副葬形態は、神原神社古墳のそれとは相違がある。在地的な副葬形態との相違や階層差に起因する可能性が考えられ、今後の検討が必要である。

### （４）木棺の形態と規模

出雲地方における、共通編年１期併行の古墳属性の１つである「刳り抜き式木棺」について若干の検討を行いたい。埋葬施設から見た場合、土井・砂古墳群で刳り抜き式木棺が採用されるのは、１号墳第２主体部の築造段階からである。また、詳細は不明であるが、神原正面（北）遺跡群のＥ区の古墳群には箱形木棺の他に刳り抜き式木棺が採用されている(註8)。

当地域の墓制に関してこの刳り抜き式木棺を新しい要素と捉えた場合、これは当地域外からもたらされた木棺形態と考えられる。土井・砂古墳群以外で、刳り抜き式木棺が採用されている当地域の古墳の一つである神原神社古墳は、5.28mの長大な割竹形木棺を採用している。少なくとも、刳り抜き式木棺を埋葬施設にする土井・砂１号墳第２主体部築造段階前後には、畿内の定形化した長大な割竹形木棺の要素が当地域に導入されていた可能性が考えられる。

土井・砂１号墳第２主体部の木棺は棺底の長軸規模が2.05mと小規模なことから、これが神原神社古墳に先行あるいは後出して当地域で採用されたのか、神原神社古墳規模の木棺と平行して当地域に導入・採用されたのか、また、棺の大小は神原神社古墳との階層差の表れとして創出されたのか、検討を要さねばならない。土器の様相から、１・２号墳や神原神社古墳以後に営まれると考えられる、３号墳の刳り抜き式木棺も同じく1.95mと小規模なことを考えれば、小規模な刳り抜き式木棺は神原神社古墳に先行する時期か平行する時期に、当地域に導入されたと見るのが妥当であると考えられる。

土井・砂古墳群では、箱形木棺の採用が大半を占めているが、１号墳第２主体部・３号墳主体部の刳り抜き式木棺の規模を上回る、棺底長が2.7mの箱式木棺が５号墳第１主体部から検出されている。墓壙の形態や埋葬施設の違いが古墳群内での被葬者の階層性、性別の相違等によるものかも今後検討すべき課題である。

なお、出雲地方では共通編年１～２期に、２m前後の刳り抜き式木棺や３m前後の刳り抜き式木棺を採用する古墳の出現が確認されており、今後、刳り抜き式木棺導入の背景を検討する必要があろう(註9)。

### （５）まとめ

神原神社古墳は、畿内型の竪穴式石槨と割竹形木棺を埋葬施設とし、出雲地方最古の完形中国鏡「畿内型鏡種」や豊富な鉄製品を副葬するなど、畿内勢力との直接的な関係が認められる方墳として評価できる。神原神社古墳は斐伊川中流域の盟主的な首長墳と考えられるが、土井・砂古墳群も神原神社古墳の被葬者と同一地域を領有する首長層の墓域であった可能性を考えたい。また、当然のことながら、神原神社古墳の墳丘規模、主体部、埋葬施設、副葬品、埋葬儀礼に歴然とした格差が認められることから、時間差や首長層内の階層差の表れとして土井・砂古墳群を捉えることができる。これは、先述した土器の様相や古墳属性、破鏡副葬の被葬者像、木棺の形態と規模からも読みとれる可能性がある。

神原神社古墳の南東約600mには、弥生時代後期～古墳時代初頭の墳墓群が営まれている神原正面（北）遺跡群が存在する。蓮岡法暲氏は、ここを「当地方の小首長の伝統的な墓所」と考え、「神原神社古墳の被葬者も出自はこの小首長層であった」とする評価を与えている(註10)。

神原正面（北）遺跡群の古墳群（Ｅ区）と土井・砂古墳群を比較したとき、両者は土器の様相や木棺形態、鉄器の副葬など、墓制の面で共通性があり、ほぼ同時期の古墳群と考えられる。

両者の古墳群の大きな差異は、神原正面（北）遺跡群の古墳群（Ｅ区）が弥生時代後期の墳墓群と同じ丘陵上に営まれるのに対し、土井・砂古墳群は古墳時代になって初めて営まれる古墳群である。当地域を領有する異なる首長層の墓域である可能性と、首長層の墓域が拡散あるいは移動した可能性が考えられる。墓域の拡散・移動があった場合、神原正面（北）遺跡群の古墳群（Ｅ区）から、主体部主軸方向に顕著な統一性が認められる土井・砂古墳群への拡散・移動が考えられる(註11)。

土井・砂古墳群の出現は、神原神社古墳築造前後に伴う当地域の首長層の社会変革の一端を示すものとして、評価することができる。

以上、土井・砂古墳群について若干の検討を加えたが、古墳属性の一部に焦点を絞った検討となっているため、今後、当地域を含めた出雲地方の古墳時代開始前後に関する問題は、神原正面遺跡群との詳細な比較分析を必要としなければならないであろうし、集落動態や出雲地方及び、山陰地方の出現期古墳の諸属性も視野に入れた検討を行わなければならないと考える。

**〔参考文献〕**

松山智弘2000年ａ「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」『島根考古学会誌』第17号島根考古学会

松山智弘2000年ｂ「社日古墳群の位置づけとその評価」大庭俊次編『社日古墳－一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12－』島根県教育委員会・参考文献松山2000年）

渡邊貞幸・金山尚志編1999年「島根県安来市大成古墳第４・５次発掘調査報告書」『荒島古墳群発掘調査報告書』島根大学考古学研究室・安来市教育委員会

出雲考古学研究会1991年『古代の出雲を考える７　松本古墳群－斐伊川流域の前期古墳をめぐって－』

近藤義郎編1991年『前方後円墳集成』中国・四国編　山川出版

正岡睦夫1979年「鏡片副葬について」『古代学研究』第90号古代学研究会

川西宏幸1989年「古墳時代前史考－原畿内政権の提唱－」『古文化談叢』21集九州古文化研究会

森岡秀人1994年「鏡片の東伝と弥生時代の終焉」『第３５回埋蔵文化財研究集会　倭人と鏡－日本出土中国鏡の諸問題－別冊発表要旨、追加資料』

**〔註〕**

1．神原神社古墳に関する記述は、（前島己基・松本岩雄1976年「島根県神原神社古墳出土の土器」『考古学雑誌』62巻第３号、蓮岡法暲1984年「加茂町の古代　弥生時代～古墳時代」『加茂町誌』、蓮岡法暲1998年「島根県神原神社古墳」『季刊考古学』第65号雄山閣）に依った。

神原正面（北）遺跡に関する記述は、（蓮岡法暲1984年「加茂町の古代　弥生時代～古墳時代」『加茂町誌』、杉原清一1988年「神原地区遺跡分布調査」『神原地区遺跡分布調査報告』加茂町教育委員会）に依った。

加えて、調査を指導された蓮岡法暲氏・杉原清一氏のご教示、加茂町教育委員会吾郷和宏氏の配慮による調査資料（遺構図面・実測図・写真・出土遺物）の実見に依った。土器の観察については、実見を同じくした島根県教育庁埋蔵文化財調査センターの松本岩雄氏・松山智弘氏にご教示頂いた。

2．神原神社古墳出土の土器群は、土器埋納壙より出土している。土器の中には赤色顔料が詰まっており、埋納壙内の埋土中からも赤色顔料の塊が出土している。土井・砂古墳群の土器出土状況と比べて、特殊な出土状況である。その他、神原神社古墳では、竪穴式石槨の天井蓋石の上面の墓壙内埋土から壺や円筒土器の破片が出土しており、墓壙上や墓壙内埋土で土器の破片が検出された土井・砂古墳群の１・４・５号墳や神原正面（北）遺跡Ｅ区５号墳の祭祀との類似性も考えられる。

3．岸本道昭氏は「墳丘出土の土器は後代に及ぶ継続祭祀や混入を考慮すべきである。古墳祭祀の下限ということで理解する。」という立場をとっており、当報告書でも、基本的にこの立場をとる。ただ、土井・砂３号墳の築造に関しては、小谷３式期の様相を示す土師器が周溝の最下層から出土していることから、層位を優先させて、１・２号墳築造と時間差があるものと認識した。（岸本道昭1994「播磨の成立期古墳と庄内式」『庄内式土器研究』Ⅷ）

4．土井・砂１号墳例も後漢の舶載内行花文鏡である。川西宏幸氏は、破鏡集成112例の大半が舶載鏡で、鏡種の６割が方格規矩鏡・内行花文鏡が占めること指摘している。（川西1989）

5．破鏡の使用に関しては、穿孔されているものが多く、「首飾り」などの懸垂機能が推定されている出土例が見られる。土井・砂１号墳例は、穿孔は無いが、顕著な研磨が認められる。森岡秀人氏は研磨された鏡片を「鏡体を割り砕き、周縁部をよく研磨することによって独立体としての機能を具備した」ものと認識し、「権威や権力を誇示するための宝器、儀礼的な呪具などの用途」を想定している。また、穿孔されている破鏡を「北部九州を中心にして墓に単品副葬される例が多いことから、小形彷製鏡とともに個人帰属性の高い着装垂飾品であった」と推定している（森岡1994）。

また、土井・砂古墳例にはベンガラの付着が認められたが、埋葬時に付着したのか、埋葬以前から付着していたのかは不明である。

6．出雲地方で、共通編年１期の可能性がある前方後円墳としては、松江市所在の廻田古墳（大谷晃二「風土記の丘周辺の古墳５　廻田古墳（真名井古墳）」『八雲立つ風土記の丘』）№145）、同じく前方後方墳としては、三刀屋町所在の松本３号墳（出雲考古学研究会1991）や鹿島町所在の名分丸山古墳（近藤義郎編1991）等が挙げられる。

7．安来市所在の塩津山１号墳には、未調査ではあるが、小規模な竪穴式石槨が存在する。塩津山１号墳を共通編年１期に位置付けるか否かは、研究者によって評価が異なる。例えば、渡邊貞幸氏は、外部施設に弥生墳丘墓の伝統を残存させている点から共通編年１期に遡る可能性を指摘し（渡邊・金山1999）、松山智弘氏は中心主体の供献土器が小谷式末期的な特徴を示すこと、主体部に寺床１号墳と同様な礫床があることから共通編年３期に位置付けている（松山2000b）。

8．神原正面（北）遺跡Ｅ区の４号墳から検出された二つ主体部は、主軸をほぼ東西（尾根筋平行）に向け並列しており、刳り抜き式木棺を採用している。平面図からおこした規模は、棺長が1.3mと2.4mであった。また、中央部に位置する12m×17mの方墳である５号墳からは、大小７つの土壙が検出されており、最大の土壙は二段墓壙で、箱形木棺（2.83m）を埋葬施設とする。主体部主軸方向（尾根筋直交）は北方向で、棺内からは赤色顔料、布巻きの鉄剣１つ、鉄鏃が出土しており、墓壙上面からは供献土器が多数検出されている。４・５号墳は土器の様相は、土井・砂１・２号墳と同じく、松山編年の大木式～小谷１式に相当する。また、二段墓壙・赤色顔料・供献土器など、土井・砂古墳群の様相と共通する面がある。

残念ながら、神原正面（北）遺跡群における、弥生墳墓群の木棺形態は確認できなかった。しかし、当地域においては、土井・砂１号墳第２主体部・神原正面（北）遺跡群Ｅ区４号墳段階に、刳り抜き式木棺が存在していたことは確実である。

9．現在、出雲地方に於ける小谷１式～小谷２式（古墳時代初頭～前葉）のＵ字状の棺底を有する刳り抜き式木棺を埋葬施設とする遺構（竪穴式石槨を有する古墳を除く）に、松江市社日１号墳第１主体部（棺

長3.0m）、同第３主体部（棺長2.1m）、松江市道仙３号墳（棺長2.2m）、松江市大佐遺跡ＳＫ－０３（棺長1.7m）、同ＳＫ－０１（棺長2.5m）、同ＳＫ－０２（棺長2.6m）、松江市柴尾２号墳第１主体部（棺長約2.2m）、同第２主体部（棺長約2.5m）、松江市柴尾３号墳第１主体部（棺長2.6m）、同第２主体部（棺長2.85m）が挙げられる。

社日古墳（註17の大庭2000年に同じ。）

道仙３号墳（岡崎雄二郎1982年「２．松江市道仙古墳群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第10集　島根県教育委員会）

大佐遺跡（第６章註４の石川崇他編に同じ。）

柴尾２号墳（江川幸子編1994年『（財）松江市教育文化振興事業団　文化財調査報告書第５集　柴尾遺跡発掘調査報告書（Ⅰ）』松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団）

柴尾３号墳（飯塚康行編1995年『松江市文化財調査報告書　第63集　柴尾遺跡他発掘調査報告書（Ⅱ）』松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団）

10. 註１蓮岡1998年に同じ

11. 神原正面（北）遺跡群の古墳群（Ｅ区）に関しては、４・５号墳のみが古墳として認識される。Ｅ区の４・５号墳に松山編年の大木式～小谷１式の土師器が出土しているのを除けば、他の墳墓からは弥生時代後期（松本編年のＶ－２様式）に相当する土器、中世土師器しか検出されていない。丘陵の最高所に立地する４・５号墳のみが、古墳時代の墳墓で、他は弥生時代の墳墓群と中世の土壙墓で構成されているものと考えられる。また、庄内式併行の土器が検出されておらず、墳墓の空白期間が認められる。

主体部主軸方向は、４号墳の二つの主体部が尾根筋に平行して、東西方向に並列し、５号墳の主体部が尾根筋に直交（ほぼ北方向）している。４・５号墳を除く弥生墳墓の主体部主軸方向には、統一性を見ない。

当地域の古墳群において、主体部主軸方向の統一がなされる点は、墓制における画期の一側面と考えられる。

なお、草原孝典氏は小型古墳群の墳丘主体部の埋葬頭位（主軸方向）に関して、尾根筋に直交する主体部と尾根筋に平行する主体部が存在する古墳群の事例から、被葬者間の階層性、親縁性の存在を指摘している。特に岡山県総社市所在の殿山墳墓群・古墳群では、埋葬施設の差異に加えて、主体部主軸方向が弥生時代と古墳時代で異なる点が指摘され、弥生時代と古墳時代の画期の一つとして考えられ、興味深い。（草原孝典1999『長坂古墳群』岡山市教育委員会）

ところで、神原正面北遺跡群Ｅ区では、古墳時代中期の土師器が幾つか５号墳裾から検出されており、古墳時代中期にも調査区外に古墳などが営まれていた可能性も考えられる。

**第31表　土井・砂古墳群墳丘規模一覧表**

| 遺構名 | 墳形 | 規　　模（m） | | |
|---|---|---|---|---|
| | | 南　北 | 東　西 | 現　存　高 |
| １号墳 | 方墳 | １０．０ | １０．０ | ０．８ |
| ２号墳 | 方墳 | ９．０ | ７．５ | ０．８ |
| ３号墳 | 方墳 | ８．６ | ８．０ | ０．８ |
| ４号墳 | 方墳 | ８．６ | ８．６ | １．３ |
| ５号墳 | 長方墳 | ８．０ | １３．０ | ０．６ |
| ６号墳 | 方墳 | １１．０ | １０．０ | ０．３～０．７ |

（現存高は周溝底部より計測）

## 第32表　土井・砂古墳群主体部計測表

（木棺規模は、各土層よりみた棺底部の計測値）（単位m）
（頭位は第Ⅲ系国土座標X軸に基づく）

| 遺構名 | | 埋葬施設 | 規模 | 長軸 | 短軸 | 深さ | 頭位 | 出土遺物 | 特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1号墳 | 第1主体部 | 木棺 | 墓壙一段目 | 3.4以上 | 1.8以上 | 0.4 | N-15°-E | | 側板溝あり<br>箱形木棺 |
| | | | 墓壙二段目 | 3.1 | 1.0 | 0.37 | | | |
| | | | 木棺 | 1.8 | 0.37 | — | | | |
| | 第2主体部 | 木棺 | 墓壙一段目 | 4.2以上 | 3.2 | 0.6 | N-14°-E | 赤色顔料検出<br>破鏡（ベンガラ付着）<br>微細な鉄錆（不明） | 刳り抜き式<br>木棺 |
| | | | 墓壙二段目 | 3.3 | 1.3 | 0.47 | | | |
| | | | 木棺 | 2.05 | 0.4 | — | | | |
| | 北裾周溝内土器棺 | 土器棺 | | 東西 | 南北 | | S-83°-E | | |
| | | | 墓壙 | 1.45 | 1.3 | 0.7 | | | |
| | | | 土器棺 | 0.9 | 0.95 | 0.6 | | | |
| 2号墳 | 主体部 | 木棺 | 墓壙一段目 | 2.8以上 | 2.15 | 0.7 | N- 7°-E | | 箱形木棺 |
| | | | 墓壙二段目 | 2.5以上 | 1.2 | 0.7 | | | |
| | | | 木棺 | 1.6 | 0.6 | — | | | |
| 3号墳 | 主体部 | 木棺 | 墓壙一段目 | 3.75 | 2.8 | 0.65 | N- 2°-E | | 刳り抜き式<br>木棺 |
| | | | 墓壙二段目 | 2.75 | 1.0 | 0.3 | | | |
| | | | 木棺 | 1.95 | 0.35 | — | | | |
| | 西側周溝内土器蓋石棺 | 土器<br>蓋石棺 | 墓壙 | 2.75 | 2.2 | 0.5 | N-20°-E | | |
| | | | 石棺 | 2.6 | 2.2 | 1.2 | | | |
| | | | 内法 | 1.6 | 0.9 | | | | |
| 4号墳 | 主体部 | 木棺 | 墓壙一段目 | 3.6 | 2.75 | 0.5 | N-20°-W | 袋状鉄斧　鼓形器台<br>低脚坏　高坏　他<br>（主体部埋土より） | 箱形木棺 |
| | | | 墓壙二段目 | 2.85 | 1.6 | 0.55 | | | |
| | | | 木棺 | 1.6 | 0.5 | — | | | |
| 5号墳 | 第1主体部 | 木棺 | 墓壙 | 4.55 | 2.4 | 1.4 | N-33°-W | 赤色顔料検出　鉇2本<br>不明鉄器（刀子？） | 箱形木棺<br>墓壙入口あり |
| | | | 木棺 | 2.7 | 0.7 | — | | | |
| | 第2主体部 | 木棺 | 墓壙 | 3.2 | 2.38 | 0.85 | N-33°-W | 赤色顔料検出<br>鉄錆検出 | 箱形木棺 |
| | | | 木棺 | 1.35 | 0.6 | — | | | |
| | 北西裾土器棺 | 土器棺 | 墓壙 | 0.5 | 0.5 | — | N-55°-E | | |
| | | | 土器棺 | — | — | 0.25 | | | |
| 6号墳 | 主体部 | 木棺 | 墓壙一段目 | 2.9以上 | 1.55 | 0.65 | S-74°-E | 鉇 | 箱形木棺 |
| | | | 墓壙二段目 | 2.6以上 | 1.1 | 0.3 | | | |
| | | | 木棺 | 2.0 | 0.4 | — | | | |